

文化庁委託事業報告書

危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る
取組等の実態に関する調査研究
(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)

2015 年 3 月

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所

はじめに

木部 暢子

本書は、平成 26 年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」の報告書である。「危機的な状況にある言語・方言」に関する文化庁の事業は、これまで 3 回実施されており、本事業は 4 回目に当たる。過去 3 回の事業では、以下のような報告書が刊行されている。

1. 『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』（平成 23 年 2 月，国立国語研究所）
2. 『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』（平成 25 年 3 月，琉球大学国際沖縄研究所）
3. 『文化庁委託事業報告書 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）』（平成 26 年 3 月，琉球大学国際沖縄研究所）

報告書のタイトルから分かるように、過去 3 回の事業は「言語・方言の実態」に関する調査研究であったが、今回の事業は「保存・継承に係る取組等の実態」に関する調査研究である。

2009 年 2 月のユネスコの世界消滅危機言語地図（Atlas of the World's Languages in Danger）の発表以来、8 つの地域（アイヌ、八丈、奄美、国頭、沖縄、宮古、八重山、与那国）では、言語・方言が消滅するという危機感と同時に保存・継承の気運が高まった。今回の事業は、その取組の実態に関するものである。

本書の構成は 2 部立てになっている。第 1 部には、言語・方言の継承の取組に関する調査の報告を地点ごとに掲載した。その際、成果が上がっている取組、他の地域にとって参考になるような取組に焦点を当てることにした。各地は地理的、歴史的、社会的状況を異にしており、危機に至った要因はそれぞれ違っているが、他の地域の優れた取組は、かならず何らかの参考になるに違いない。

第 2 部には、平成 26 年 12 月 13・14 日に開催された「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」（八丈町主催，文化庁・国立国語研究所共催）の報告を掲載した。「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」とは、ユネスコに指定された 8 つの地域の代表が八丈島に集まり、言語・方言の継承について意見交換を行う大会である。当日は 8 つの地域に加え、青森県八戸市からの参加があった。8 つの言語・方言の代表が一堂に会すること自体、画期的なことであるが、それに加えて、2011 年の東日本大震災で大きな被害を受けた東北東部地域からの参加があったことは、大変、意義のあることだった。震災により、東北地方

の方言の危機が急速に増したからである。さらに言うならば、消滅の危機にある言語・方言は全国、全世界に無数に存在している。

今回、「日本の危機言語・方言サミット」を開催することができたのは、ひとえに八丈町の御尽力によるものである。八丈町には深く感謝を申し上げます。また、1日目には、伊奈かつぺい氏を講師に招き、記念講演をしていただいた。伊奈氏は青森県弘前市生まれで、方言で生活することの大切さと楽しさを存分に語ってくださった。

本報告書を利用してくださる方のために、本事業の目的、計画を以下に掲載しておく。本報告書が何らかの参考になれば幸いである。

1. 業務の目的

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成21年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）報告書」（平成26年3月・琉球大学）を踏まえ、消滅の危機にある言語・方言のうち、当該言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究を行う。

- ・過去に行われた消滅の危機にある言語・方言の保存・継承に係る様々な取組等に関する調査及び分析
- ・過去に行われた消滅の危機にある言語・方言の方言話者や地域住民、自治体職員を対象とした、方言に関する意識調査
- ・消滅の危機にある言語・方言の保存・継承に係る取組等で使用されている教材に関する調査及び分析
- ・消滅の危機にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の効果及び課題に関する調査及び分析
- ・調査結果を周知するための報告会等の実施
- ・その他、我が国における消滅の危機にある言語・方言の保存・継承等の実態把握のために必要な調査及び分析

2. 当該年度における業務実施計画

- (1) 東京都の八丈島（八丈方言）、鹿児島県の沖永良部島・与論島及び沖縄県の名護市（国頭方言）、沖縄県的那覇市・南城市・久米島（沖縄方言）、及び沖縄県の石垣島・黒島（八重山方言）において、言語・方言の保存・継承に係る以下の取組等に関する調査、資料の収集、分析を行う。

- ①過去に行われた当該地域の言語・方言の保存・継承に係る様々な取組等に関する調査及び分析。主な調査事項として、過去における方言大会の開催、方言劇の上演、それらの記録・保存の状況、小中学校における地域学習・方言学習の状況、方言学習への地域の人の協力の状況、方言の読み聞かせ活動の

状況等がある。

- ②過去に行われた当該地域の言語・方言の方言話者や地域住民，自治体職員等を対象とした，方言に関する意識調査に関する調査及び分析。主な調査事項として，市町村が行った意識調査，大学（研究室を含む）が行った意識調査，その他官民が行った意識調査等の有無とその状況等がある。
- ③当該地域の言語・方言の保存・継承に係る取組等で使用されている教材（テキストや音声資料等）に関する調査及び分析。主な調査事項として，個人または団体による方言辞典・方言集，方言の文法書・文例集の類，地域や方言に関する回顧録，方言の録音の作成と利用状況等がある。与論島のよう
に，個人によるレベルの高い辞書と文法書の類が作成され，活用されている地域もある。
- ④当該地域の言語・方言の保存・継承に係る取組等の効果及び課題に関する調査及び分析。主な調査事項として，学校教育における方言学習の成果と課題，方言を通じた地域活性化の試み，高齢者の医療現場への方言の応用，それらの取り組みの効果と課題等がある。

以上の調査を，当該地域の教育委員会，小中学校，図書館・資料館，地域の方言保存活動家等の協力を得て行う。

（２）調査結果を周知するための報告会等の実施

調査結果を関係者及び広く一般に周知するために，平成 26 年 12 月に東京都八丈町において，文化庁・八丈町・国立国語研究所の共催による一般向けの報告会（シンポジウム）を開催する。報告会の内容（予定）は，以下の通りである。

①基調講演

②各地域の取組の現状と課題に関する報告

アイヌ語，八丈語，奄美語，国頭語，沖縄語，宮古語，八重山語，与那国語における取組の現状と課題について報告する。

③パネルディスカッション

基調講演及び各地域の報告を受けて，言語・方言の保存・継承に係る取組等の成果と課題，解決策についてディスカッションを行う。

以上を通じて，危機的な状況にある言語・方言の保存・継承の取組に携わる人々のネットワークを構築する。

（３）その他，我が国における消滅の危機にある言語・方言の保存・継承等の実態把握のために必要な調査及び分析。

八丈語を例として，他の地域に応用可能な，言語・方言の保存・継承のモデ

ルを作成する。モデルの種類としては、以下のようなものを考えている。

- ①学校教育における方言学習のモデルーカリキュラムの立て方，学習教材の作成方法，学校・家庭・地域住民の３者の協力体制の構築のしかた等。
- ②地域コミュニティーにおける言語・方言の保存・継承活動のモデルー方言劇の上演，方言音声の録音，映像資料の作成等。
- ③言語・方言を地域の活性化に応用するためのモデルー方言大会の開催や方言学習の成果発表会の開催，地域医療の現場に方言を活かす試み等。
- ④これらの活動をサポートする官民の体制の構築等のモデル。

危機的な状況にある言語。方言の保存。継承に係る取組等の実態に関する
調査研究（八丈方言。国頭方言。沖縄方言。八重山方言）

報告書 目次

はじめに	木部暢子
------	------

第1部 危機的な状況にある言語。方言の保存・継承に係る取組等の実態

八丈町の「八丈方言」継承の取り組み	茂手木清	1
鹿児島県沖永良部方言	木部暢子	11
鹿児島県与論方言	木部暢子・乙武香里	17
沖縄県における取組	石原昌英	27
沖縄県名護市幸喜方言	かりまたしげひさ	41
沖縄県首里方言	當山奈那	47
沖縄県南城市奥武方言	中本 謙	65
沖縄県久米島方言	仲原 穰	75
沖縄県竹富町黒島方言	荻野千砂子	87

第2部 公開シンポジウム「日本の危機言語。方言サミット in 八丈島」

開会挨拶	95
講演「方言で遊ぶ・方言を遊ぶー少し訛って、ずうーっと訛って」	
伊奈かつぺい	101
各地域の現状と今後の活動	
与那国島	121
八重山（石垣島）	131
宮古島	135
沖縄本島	145
国頭（与論島）	151
奄美大島	157
アイヌ	163
八丈島	169
八戸	177
パネルディスカッション	183
開会挨拶	199

第 1 部

危機的な状況にある言語・方言の保存・
継承に係る取組等の実態

八丈町の「八丈方言」継承の取り組み

茂手木 清

『八丈語？消滅危機言語』のリストに加わる」と2009年2月の朝日新聞に掲載された記事は、八丈島に住む島民にとっては、少なからず驚きだった。記事では「ユネスコの調査によれば、日本では沖縄の言葉など8言語が消滅危機言語リストに挙がった」と報じた。これは、昔から話されてきた故郷の言葉が、何もしなければ近い将来、消滅してしまうということを意味している。

この記事を受けて、八丈町教育委員会が中心になって「八丈方言を知り、伝える活動」を始めたのは、2009（平成21）年度からである。以下4年間の取り組みを記す。

1 学校教育での取り組み

①実態調査（全小・中・高校生）

ユネスコのリストに挙がった理由のひとつが「子どもが話さない」ということであったので、島の子どもたちの実態を知る必要があると思い、アンケート調査を行った。島の全小中高校生（2010年9月758人）を対象に、八丈方言語彙調査を実施した。12の比較的良好に使われる名詞、形容詞、動詞などの言葉を選び「知っているか」「使っているか」を問うた。この調査は、2013年10月にも同様な調査を行い、比較とともに、その後の活動の参考にした。

次ページがその結果の表とグラフである。人数は2010年（758人）2012年（748人）である。調査の「知っている」の項では、2010年の調査より、2012年の方が数値はどの言葉も増えている。これは取り組みの反映である。特に比較的低かった「あっぱめ」（赤ん坊）「たこうな」（竹の子）が、2012年の調査では、それぞれ+38%、+23%と増えている。この二つの言葉は「島ことばカルタ」の中の言葉にでてくる言葉であり、学校や家庭等で取り組み始めた成果といえる。

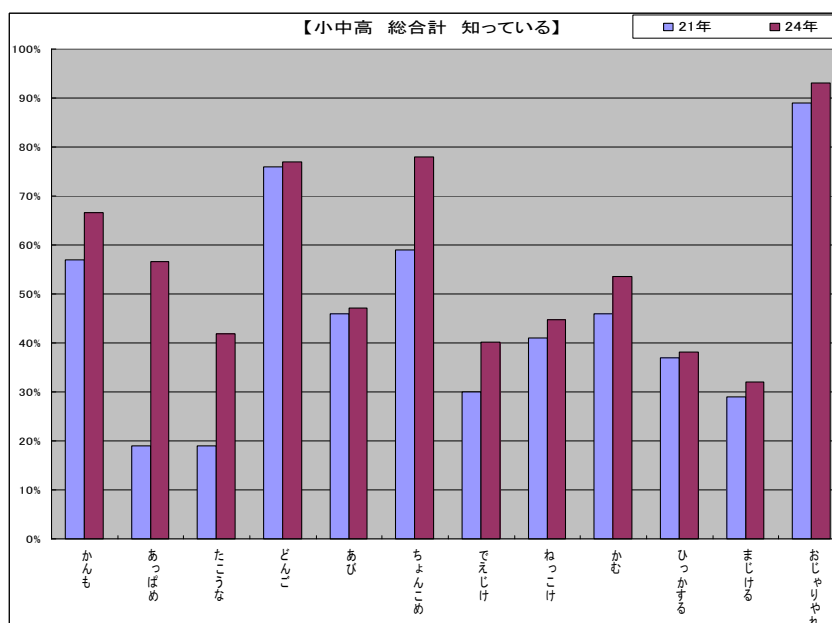
逆に、「ねっこけ」（小さい）や「まじける」（なくす）などの形容詞や動詞については、伸びが少ない。この結果、カルタに書かれた言葉は認知度が高くなるが、そうでない言葉については、相変わらず低いのである。

次に「使っている」（3ページ）の項では、どの言葉も2010年次の調査でも低く、10%台の言葉がたくさんある。これは、八丈方言は知っていても、実際の生活の場（家庭・地域・学校）では使っていないことを意味している。このままでは、次の世代に継承していくことは、不可能であり、ユネスコの指摘の通り、八丈方言は「危険」というランクになっているのはうなずける。

また、取り組みを始めてからの、2012年の調査でも「使っている」については、数値は上がっていない。特に、動詞、形容詞の類は死語に近いと考えられ、「でえじけ」などは、マイナスの数値になってしまっている。

小中高 総合計 比較 「知っている」748名			
調査八丈語	21年	24年	増減
かんも	57%	67%	10%
あっぱめ	19%	57%	38%
たこうな	19%	42%	23%
どんご	76%	77%	1%
あび	46%	47%	1%
ちょんこめ	59%	78%	19%
でえじけ	30%	40%	10%
ねっこけ	41%	45%	4%
かむ	46%	53%	7%
ひっかする	37%	38%	1%
まじける	29%	32%	3%
おじゃりやれ	89%	93%	4%

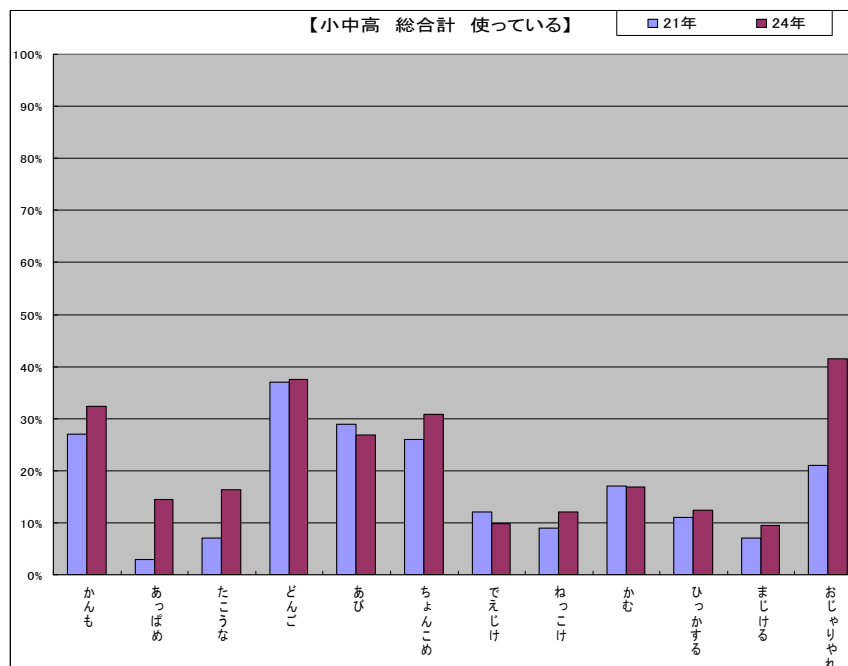
(図表1 「知っている」比較)



(グラフ1 「知っている」比較)

小中高 総合計 比較 「使っている」748名			
調査八丈語	21年	24年	増減
かんも	27%	32%	5%
あっぱめ	3%	14%	11%
たこうな	7%	16%	9%
どんご	37%	38%	1%
あび	29%	27%	-2%
ちょんこめ	26%	31%	5%
でえじけ	12%	10%	-2%
ねっこけ	9%	12%	3%
かむ	17%	17%	0%
ひっかする	11%	12%	1%
まじける	7%	9%	2%
おじゃりやれ	21%	42%	21%

(図表2「使っている」比較)



(グラフ2「使っている」比較)

以上の分析から「八丈方言を伝える活動」の前途は、相当厳しいものが予想される。特に、30歳代～40歳代の子どもをもつ親世代への継承がない現状では、一層厳しいと感じざるをえない。

②「八丈・島ことばカルタ」の作成

方言を次世代に継承する方法として、「方言カルタ」が有効であるとの考えから、2010年に手製の「八丈・島ことばカルタ」を作成した。絵札は、島在住の人に描いてもらった。2011年には、小学校の全家庭に無料で配布した。家庭の中で、カルタ遊びをしながら、自然に覚えることをめざすとともに、方言を知っている高齢者との交流をめざした。また、当初作成したカルタの読み札は、島の一地域の言葉を載せたのだが、別の地域の人から「自分の地域の言葉が載っていない」との指摘があり、島の五地域のすべての言葉を載せて、改訂版のカルタを作成した。読み札の表には、共通語と三根、大賀郷の2地域の言葉、裏には檜立、中之郷、末吉の言葉を載せたのである。そして、島内の本屋・みやげ屋などで販売を始めた。ちなみに、1セット850円（＋消費税）である。下の写真が五地域の言葉が載っているカルタである。各学校や保育園や家庭でカルタで遊ぶ姿が見られ、カルタ遊びの中から、言葉を覚えるという子どもたちが増えてきている。



③「八丈方言100」を作成し、覚える取り組み

方言を覚えるにはゲーム感覚で、覚えるのが、良いとのことで「八丈方言100」を作成した。10級から1級まで級を設け、各級10の言葉を選んで、作成し、学校等に提示し遊びながら覚えることをめざした。10級は比較的によく使われる八丈方言にし、だんだん級が上がるにつれ、今はあまり使われなくなってしまう言葉をのせている。各級の言葉には、名詞や動詞、形容詞、文を級ごとに10個配して作った。

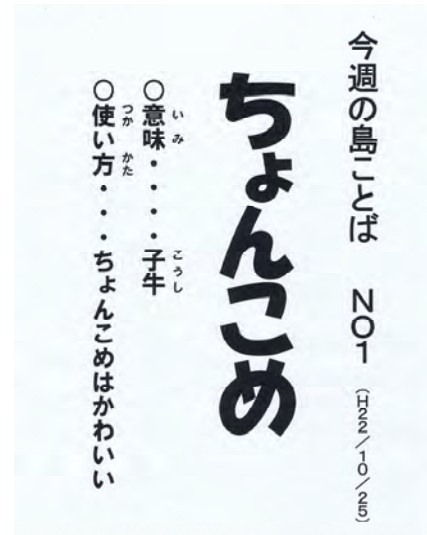
八丈方言100を覚えよう(改訂版)()内の言葉は地域によって違う言葉H24.5改訂 八丈町教育委員会 NO1

級	10級	9級	8級	7級	6級	
八 丈 方 言	1	・めならべ	・ちょんこめ (おしょこめ)	・かぶめ	・ほうべえ (ほーびゃー)	・とんめて
	2	・あっぱめ	・あび	・くに	・はんけ (ひょーげ)	・ばんま (ばっぱ)
	3	・おやこ	・どんご	・でーこ (じゃーこ)	・まぐさ (まくさ)	・かんじょ
	4	・たこーな	・えーたば (やたば)	・けー (けえ・きー)	・しんべた (しっべた)	・あぶき
	5	・こっこめ	・げっすり	・にやっとりめ (とうとうめ)	・づにん	・まん (まに)
	6	・われ・わが ・あが・わい	・こごん (こがん)	・へんどうこと	・あっちゃん こっちゃん	・じょーる
	7	・でえじきや (じゅーじきや)	・ねっこきや	・えずきや	・はじがましきや	・しゃしゃきや
	8	・ぼーきや	・しょくない	・あてがり (ぞら)	・かまる	・ごらごら
	9	・かむ	・やろごん (やろがん)	・ひっかする	・おもうわよい	・まじける
	10	・おじやりやれ	・あに したろ	・どうもよい	・そご(が)ん だーの	・このかんも(さ つまいも)は うんまきや

④「今週の島ことば」の作成、掲示・・・日常的な取り組み

八丈方言を日常的に意識化するために、各小中学校と町役場などに一週に一言ずつ作成し、掲示してもらっている。2010 年 10 月からスタートして、2013 年 3 月末現在 98 の言葉を掲示している。

各学校では、廊下等で掲示にし、児童・生徒・教職員が日常的に目に触れる機会をふやすとともに、学校を訪れる保護者、地域の人にも見ってもらう場として活用されている。



⑤方言劇（小学校の学芸会での発表）

八丈方言を声に出して覚えるには、八丈方言を使った劇が良いと考え、小学校の学芸会で取り組んだ。小学校の地域の話者に協力してもらい、台詞を方言に直した。また、台詞のイントロネーションなどを祖父母に聞いたりして、方言劇をなかちとする交流が図れた。学芸会当日は、方言劇に観客から、笑いとともに「懐かしい！」の言葉が聞かれ、八丈方言の入った劇に、会場はなごやかな雰囲気になるばかりでなく、出演した子どもたち教員も貴重な体験を積んでいる。



この写真は、2013 年 2 月に行われた三原小学校での学芸会の一シーンである。台詞の言い回しは、担任の教員ではできないので、保護者や祖父母に聴いてもらい、児童は練習に励んできた。この劇は八丈民話からヒントを得た「桃次郎」である。すべてが、八丈方言の台詞で演じられ、観客にとって好評であった。2009 年度から今までに、島内の小学校で 4 本の方言劇を行ってきた。

⑥八丈町教育研究指定校制度の導入で行った八丈町立三原小学校の研究

八丈町の教育課題に取り組む制度として、教育研究指定校制度を設け、2012 年度から発足した。その制度の第一に取り上げたのが「八丈方言」の指導カリキュラム化である。2012 年度は、八丈町立三原小学校が 1 年かけて研究を行い、その成果を 2013 年 2 月 27 日発表した。島内の教員、保護者、地域の人に呼びかけ、約 130 人ほどが出席し、公開研究発表会を開いた。講師に国立国語研究所の木部副所長を招請して、示唆の富んだ助言をいただき、密度のこい研究発表会ができた。町教育委員会も全面的支援して成果は多かった。この成果を受けて、2013 年度は小学校の全校で 1 学年年間 3 時間ほど八丈方言の学習を行うことになる。



左の写真は、当日のパネルディスカッションの様子で、パネラーには、地域のゲストティーチャーや保護者も入って、学校側だけでない立場からの意見も出されて、三原小学校の成果や課題も確認できた。

小学校なので、難しい理論より「島ことばを楽しみ」という遊び感覚で方言を学習するという研究姿勢が成果をあげていた。また、研究テーマに「八丈方言の学習を通して、島や地域に関心をもつ子供の育成」を設定したので、三原小学校では、この研究を深めるにつれて学校と地

域の距離が近づき、その敷居が低くなっていった。当初、八丈方言を話せない、理解できない教員の意識にも変化が生じてきた。地域の人と一緒に学んでいくことが大切であることをつかんだようであった。

2013 年度には、中学校の一角が教育研究指定を受けて、中学校での方言学習の可能性を研究し、2014 年度以降は島の全小中学校で、各学年 3 時間程度、実施することになる。島の小中学生は、9 年間で合計 27 時間学習するということである。

⑦教職員研修会

島に赴任するほとんどの教員が、東京や本土からなので、八丈方言については全く知ら

ない状態である。そこで、教職員対象に、都の教育庁八丈出張所と共催して、毎年夏に希望者向けの研修会を行っている。内容は、理論編と実施編を設け、講師には、方言話者を招いて、実際に声に出して学ぶ研修内容である。

2 社会教育（生涯学習）での取り組み

①八丈方言講座（4年間に6回実施）

八丈方言の貴重さを知り、広めるために、島民向けに「八丈方言講座」を開催してきた。講師には八丈方言研究者金田章宏千葉大学教授をはじめ、専門的な人とともに、島の方言話者にも話してもらった。第4回には、同じ消滅危機言語地域の与論島から講師を招いた。毎回、島の方言話者にも話をしてもらったことが、講座の参加者にとって身近であり、親しみやすい雰囲気をつくっている。島民の関心も高く、毎回平均100人～150人程度受講している。しかし、地元出身の若者層（30歳代～40歳代）の参加者が少ないのが課題である。

尚、下の写真は、講座の時の写真である。



②八丈・島ことばカルタ大会（2年間に2回実施）

島ことばカルタを作成したので、家庭や小学校、保育園で遊び感覚でカルタを楽しむ子どもたちの姿がみられた。そこで、小学生から高齢者を交えたカルタ大会を企画した。当日は、小学生の参加者が多かったが、保育園生、中学生、大人、高齢者も入り、なごやかに実施された。ルールは八丈島ルールで、絵札だけでなく読み札も並べ、絵札とともに取れるルールで、年齢別の部と交流の部と行っている。読み手には、各地域の人を呼び、その言葉で詠んでいる。小学生から高齢者まで同じ会場に集まり、楽しめるカルタ大会になっている。

高齢者の参加者からは「小学生と一緒にカルタができて、楽しかった」という感想がよせられている。2回目からは、参加賞や賞品を用意した。



カルタ会の様子

③島ことば教室

実際の八丈方言を声に出して体験しようという企画で、方言話者を講師として招き、2012年度に3回連続で実施した。各回ともに20人ほどの参加者があった。特に、島外から来て島に住みついた人たちにとっては、初めての体験ができ、好評であった。

2013年度には、30歳代～40歳の親と子どもとの「親子島ことば教室」を企画している。



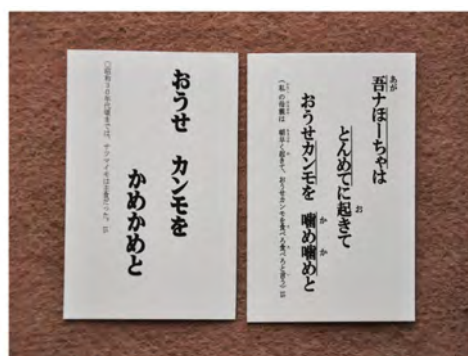
④八丈方言文法講座

八丈方言研究者の金田章宏氏（千葉大学教授）に、島民のために八丈方言の特徴である文法について、2回にわたり講座を開講していただいた。島の人向けに平易に解説していただき、2日間6時間の講義であったが、のべ30人ほどの参加者があった。

⑤八丈島の代表的な民謡「ショメ節」の歌詞100句の収集、作成

八丈島に昔から伝わる代表的な民謡「ショメ節」には、たくさんの八丈方言が入っている。この民謡は、かつては宴会の席上や盆踊りなどには、必ず歌われていたものであるが、最近はカラオケの普及等で歌われなくなってしまっている。そこで、八丈方言が入っている歌詞を収集して、100句にまとめた。「ショメ節」

は7・7、7・5形式の歌詞なので、上の7・7、下の7・5の言葉に分けて詠むゲームとして考えた。いわゆる百人一首のルールである。老人会などで何回か開催したが、懐かしさのあまり一緒に歌いだす高齢者もいた。



⑥広がりをもせる取り組み

2009年度からスタートした八丈方言を知り・広める活動であったが、島民に少しずつ知ら

れようになり、理解者が増えてくると共に、島民の間に八丈方言を話すことが恥ずかしいという意識はなくなってきたことを感じる。

・高齢者劇団「かぶつ」(八丈方言 ダイダイの意)の方言劇の上演

高齢者の芝居好きの素人の人達が集まり、八丈方言による芝居を上演している。高齢者演芸会や保育園・小・中学校で上演してきた。中でも、八丈民話の「ベニ皿(じゃら)・カケ皿(じゃら)」は、東京での公演を実現した。2013年6月には、山梨県の交流発表大会で演じる予定である。

・マスコミが注目して取り上げてくれる機会が増えて、島民外にも活動が

知られるようになった。活動を始めて4年経過するが、この間、数多くのマスコミが注目してくれて、メディアで八丈方言のことを取り上げてくれた。活動の様子を島だけでなく、島外にも知られるようになった。NHK、朝日新聞、東京新聞、ラジオ、雑誌などで紹介された。また、島の週刊ミニコミ紙「南海タイムス」にも、度々ニュースとして取り上げて、島民に取り組みを知らせてもらっている。



「中日新聞」記事



劇団「かぶつ」公演

3 これからの取り組みと課題

①「消滅危機言語サミット」(仮称)の実施 2014年度予定

日本の8地域の言語が消滅の危機にあるということで。その地域の人たちが集まり、その地域の実態を知り、これからの活動をお互いに支援しながら、横の連携とりあいながら、継承運動を進めていこうという会を2014年に八丈島で開こうと考えている。これまで、活動が八丈島という点であったのを、日本全体の面に広げるという発想である。その際には、文化庁、国立国語研究所、沖縄県、鹿児島県、北海道の関係者、各方言の研究者とともに開催できることを願っている。

＊開催予定時期 2014 年 11 月～12 月

＊場所 八丈島

＊招請する地域 消滅危機言語の認定を受けた 8 地域

＊招請する予定者 1 地域 3 人程度，各方言研究者（1 人）

＊2013 年度は，準備，広報活動。2014 年度は，実施に向けての具体的な活動を行う。

②「島ことば（八丈方言）冊子」作成，島民に全戸配布 2013 年度

八丈方言の価値を全島民に知ってもらい，その文化を後世に伝えるために「島ことば（八丈方言）冊子」を作成，配布し，全島民の意識の向上を図る。

③課 題

＊次世代に八丈方言を継承するための取り組み

「子ども世代が話さない」ということが，消滅にいたる道であるが，現状では，若い人（30 歳代～40 歳代の親世代）の意識がそんなに高くない。これらの世代が方言継承に関心を持ち，積極的に継承する担い手になっていく必要がある。そのためには，

1. 親世代への関心と呼び起こす活動の提起
2. 現在八丈方言を話せる祖父母世代から，若い人や子どもたちへの継承
3. 子ども世代が，学校で習ってきたことを，家庭・地域に広める。

＊島民への意識の向上

「こんなことをするのは，懐古趣味である」「なくなってしまうのは，どうしようもない」という意見をもっている人に，八丈方言の価値と活動の意味を伝える活動を展開する必要がある。

おわりに

八丈町の学校教育において，小学校では 2013 年度より 1 学年年間 3 時間，中学校では 2014 年度より 1 学年 3 時間 方言学習を始める予定である。八丈島で学んだ児童・生徒は合計 27 時間，学習することになる。学校から，家庭や地域に発信する体制ができるので，大いに期待するところである。家庭と学校と地域の中で，学校の役割が果たす役割は大きい。学校で学んできた八丈方言（島ことば）を子どもたちが父母に話し，分からない言葉などは，祖父母に聞く。そこで，祖父母の力を借りて，また子どもに環流させる。そのような循環が実現することは，可能であると思う。学校で学んだことを，家庭や地域で交流することにより，八丈方言のみならず，郷土を愛する児童・生徒に育っていくことを願っている。

最後に，八丈方言を知り・伝える活動のめざすことは，単に，方言の知識を増やすのではなく，愛することにつながり，島に誇りをもつきっかけになると考えている。

鹿児島県沖永良部方言

木部 暢子

1 沖永良部島の概要

沖永良部島は奄美群島の南部に位置し、鹿児島本土から南へ536km、沖縄本島から北へ約60km、面積93.65km²の島である(図1)。沖永良部島には、和泊町と知名町の2町がある。集落の数は、和泊町が21(和泊、和、皆川、杏里、与論浜、玉城、内城、後蘭、谷山、仁志、内喜名浜、半崎、畦布、伊延、出花、西原、国頭、美瀬浜、喜美留、手々知名、長浜)、知名町が21(知名、屋子母、大津勘、徳時、住吉、正名、田皆、下城、上城、新城、久志検、赤嶺、竿津、余多、上平川、下平川、屋者、芦清良、黒貫、瀬利覚、小米)(図2)、人口は、和泊町が6,836人、知名町が6,407人、合計13,243人である(2014年1月現在)。

温暖な気候を利用して、ジャガイモやサトウキビなどの農作物の他、テッポウユリ(エラブユリ)や菊などの花の栽培、牛の飼育が盛んである。

島への交通手段は、飛行機が鹿児島空港から1日3便、奄美大島空港から2日に1便、与論空港から2日に1便、那覇空港から1便運航している。フェリーは、鹿児島港から和泊港へ1日1便、那覇港から和泊港へ1日1便、鹿児島港から知名港へ月9便ほど運行している。



図1 沖永良部島の位置



図2 沖永良部島の集落図

2 沖永良部方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

(1) 和泊町

和泊町では、1994年に和泊町文化協会の企画により第1回「島ムニ大会」が開催された。「島ムニ」は「島ことば」の意で、当初は子どもたちによる方言劇の上演が大会の中心だった。「島ムニ大会」は第5回（1998年度）まで開催されたが、1999年度以降は方言に限定せず、島唄や島の伝統文化・芸能を対象とする発表会に形を変えることとなり、1999・2000年度は「島唄大会」が開催された。その後、さらに趣旨と名称が変更され、2001～2003年度は「なちかしやぬ島あそび」、2004～2006年度は「えらぶ芸能あしび」が開催された。2007年度からは「子ども芸能発表会」となり、現在に至っている（写真1）。2014年度の「子ども芸能発表会」は2015年2月15日に和泊町民体育館で開催された。



写真1 2010年「子ども芸能発表会」
（和泊町立大城小学校ホームページより）

この一連の大会で注目されるのは、畦布の島ムニ劇である。畦布地区では、第1回の「島ムニ大会」から現在の「子ども芸能発表会」に至るまで、一貫してオリジナルの島ムニ劇を上演してきた（1999・2000年度の「島唄大会」は欠場）。劇の内容は、地元の歴史や風俗、昔の遊び等に題材を得たもので、第1回から第3回までは三島秀俊氏が台本を作成し、第4回以降は中村スエ氏が台本を作成している（図3）。現在までに作成された台本は17本で、現在も中村氏により新作の島ムニ劇が作成されている。

湾川ぬ クッカル 第1場

直 樹	いや な 戻らー。	おい、もう 帰ろう。
隆 幸	今日わ クリナンカでいどー。	今日はクリナンカだというぞ。
貴 裕	にい ぬんぎ物ぬ 出じゆぬ 日どや。	そうだ。怖いものが出る日だぞ。
なぎさ	ぬんぎゃ 早さ 戻ら。	恐いね。早く帰ろ！
淳 暉	エイサンクミヤガリ シーがちゃな 戻ら。	エイサンクミヤガリやりながら、帰ろ！
みんな	がんしら がんしら。	そうしよう そうしよう。

図3 畦布の島ムニ劇の台本

(2) 知名町

知名町では、平成 8 年から毎年 1 回、「島唄・島ムニ大会」を開催している。内容は、子どもたちによる島ムニ劇や島唄、地域の紹介等の発表で、学校単位でその練習や準備に取り組んでいる。2014 年度の「島唄大会・島ムニ大会」(第 18 回)は、2015 年 3 月 1 日(日)に、おきえらぶ文化ホールあしびの郷・ちなで開催され、小学校、中学校、学童クラブ、老人クラブなど 11 団体が方言劇や地域文化の紹介を行った(写真 2)。



写真 2 第 18 回島唄・島ムニ大会
(南海日日新聞ホームページより)

2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

(1) 和泊町

和泊町では、各小学校で総合的な学習の時間を使って「郷土で育てる^{ちむぐくる}肝心の教室」を実施している。これは「方言カルタ」を活用した方言学習で、地元のゲストティーチャーを外部講師として招き、年間 6 時間の学習時間を確保して行われている。

(2) 知名町

知名町では、授業に方言学習を組み込むことはしていないが、年 1 回開催される「島唄・島ムニ大会」の発表のために、地域の人の協力を得ながら、方言劇の練習や方言の指導を学校で行なっている。

知名町の取り組みで注目されるのは、学童保育「ていだっ子」の活動である。「ていだっ子」は、幼稚園児から小学 1～4 年生までの児童を放課後あずかり、保育を行なうクラブで、2013 年に知名町の委託を受けて下川平に開設された。一般的な学童保育(宿題、絵本、紙芝居、年間行事など)に加え、島の文化を学習するための取り組みとして、島ムニの学習を実施している。島ムニの指導にあたるのは学童保育の指導員で、2013 年度は島内出身者 6 名(うち島ムニを自在に話せる者 2 名)、島外出身者 3 名という構成である。年齢的にも若い人が多いが、プログラムはよく工夫されている。例えば、次のとおりである。

ステップ 1 : 6 月初旬 数の数え方、色、体の部位、日常使う言葉(あいさつなど)

ステップ 2 : 6 月中旬 遊びの中に島唄、踊りを取り入れる

読み聞かせの中に民話、伝説などを取り入れる

ステップ 3 : 9 月 単語をつないで簡単な文章を話す(自己紹介など)

ステップ 4 : 11 月 民話を島ムニで朗読する(ロシア民話「おおきな かぶ」)

ステップ 5 : 1 月～3 月 島ムニ大会の練習と出演

(清村美代子「島むに伝承活動について～子どもクラブ「ていだっ子」の取り組み～」より)

指導員の一人、松村雪枝さんによると、子どもに方言学習の無理強いせず、自主性に任せているが、幼稚園児は島ムニ保育が大好きで、楽しみにしている。覚えも早い。幼稚園のときから島ムニに親しんでもらい、小学校の「島唄・島ムニ大会」につながればいい、という。

2.3 地域の人の協力の状況

和泊町では、地域の人がゲストティーチャーとして、年間6時間の方言学習に協力している。知名町では、「島唄、島ムニ大会」に出場するために、島ムニ劇の練習に地域の人が協力している。しかし、地域の人が方言学習に関わる時間は決して多くない。また、「島唄、島ムニ大会」といったイベントのための協力に止まっている感がある。子どもたちが日常的に方言を使う環境を作るという視点が必要ではないかと思う。この点、先にあげた子どもクラブ「ていだっ子」の活動は、年間を通して方言を学習するプログラムになっていて、子どもたちが日常的に方言に触れることができる。また、幼稚園児という早い時期から方言に触れさせる点でも、優れた取り組みである。

3 沖永良部方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

和泊町、知名町いずれも、方言に関する意識調査が過去に行われたことはない。

4 沖永良部方言の保存・伝承のための教材

4.1 沖永良部方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等

語彙集、文法書、テキストには、次のようなものがある。

語彙集

永吉敏人編(2005)『いらぶぬくとうば』(トモエ)

甲東哲編著・先田光演編集(2011)『分類沖永良部島民族語彙集』(南方新社)

語彙の研究

中本正智(1982)「沖永良部島方言の語彙」『琉球の方言(7)』法政大学沖縄文化研究所

高橋ゼミグループ(1984)「沖永良部方言調査報告一言語地理学的研究」『沖縄言語研究センター資料50』沖縄言語研究センター

言語地理学定例研究会(1990)『奄美諸方言の言語地理学的研究—徳之島・沖永良部島に関する言語地理学的調査の報告—』沖縄言語研究センター

久野マリ子(1986)「語彙記述の意味の史的変遷—沖永良部・徳之島方言の人体語彙を中心として—」『國學院大学日本文化研究所(57)』國學院大学日本文化研究所

文法書

中本正智(1982)「沖永良部島方言の動詞活用」『琉球の方言(7)』法政大学沖縄文化研

究所

- 野原三義(1982)「沖永良部島方言の文例」『琉球の方言(7)』法政大学沖縄文化研究所
サラ・アン・ニシエ(1995)「沖永良部島芦清良村の方言の研究」『琉球の方言(20)』
法政大学沖縄文化研究所
杉村孝夫(2009)「沖永良部島方言動詞の形態音韻論」『福岡教育大学紀要 第1分冊
文科編』58, 福岡教育大学
徳永晶子(2012)「沖永良部・国頭方言の動詞の構造(中間報告)」『若手研究者育成セ
ミナー: 消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的』琉球大学国際沖縄研究
所, 沖縄言語研究センター

テキスト

- 岩倉市郎(1984)『沖永良部島昔話』知名町教育委員会

アクセント

- 久野マリ子(1989)「沖永良部島和泊町のアクセント資料 体言・用言・助数詞その他
国学院大学日本文化研究所紀要」64, 国学院大学日本文化研究所
久野マリ子(1991)「沖永良部島和泊方言のアクセント—長さがアクセントの型を示す
方言—」『日本語論考』桜楓社
上野善道「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(1)~(8)」法政大学沖縄文化研究所
『琉球の方言』, 東京外国語大学『アジア・アフリカ文法研究』, 『東京大学言語学
論集』等
松森晶子(2000)「琉球の多型アクセント体系についての一考察 琉球祖語における類
別語彙3 拍語の合流の仕方」『国語学』201(51-1), 国語学会
松森晶子(2000)「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 沖永良部島の調査か
ら」『音声研究』4-1, 日本音声学会

4.2 沖永良部方言の教材

上記の語彙集や文法書の多くは研究者向けのものであって、子どもの方言学習に使えるような教材はほとんど作られていない。ただし、近年は松村雪枝氏により、子どもたちに読み聞かせるための、知名町上平川言葉訳の民話が作られている。「月の中の一本足の娘」「神様と女」は沖永良部に伝わる民話の方言訳、「大きな かぶ(うまーぎさぬ うでい)」はロシア民話の方言訳である。

4.3 録音資料の作成, 利用状況

録音資料はほとんどないが、近年は、松村雪枝氏の民話の朗読を徳永晶子氏(一橋大学大学院生)が録画し、少しずつ公開している。

5 保存・継承の取組の効果と課題

学校の総合学習の時間を使った方言学習や島ムニ劇の練習を通して、子どもたちに方言を継承するという意識が少しずつ高まっている。しかし、島ムニ劇や島ムニ大会に出場するために方言を練習するという感覚が子どもにも地域の大人にもある。日常的に方言を使用するという視点に立った方言学習の導入が今後の課題である。

方言学習を推進する人材の育成も必須である。沖永良部では、60歳以上の人はまだ、方言を自在に話すことができるので、そのような人を方言教育にもっと取り込む工夫をすれば、継承活動がさらに盛んになると思われる。

近年は、松村雪枝氏のように、比較的若い人で方言の継承活動に取り組む人が出てきた。また、子どもクラブ「ていだっ子」のように、就学前の幼稚園児を対象とする方言学習も実施されている。このような活動を他の地域へ広げることにより、方言学習を広めることが可能なのではないかと思う。

引用文献

清村美代子「島むに伝承活動について～子どもクラブ「ていだっ子」の取り組み～」

南海日日新聞ホームページ <http://www.nankainn.com/culture/%E7%9F%A5%E5%90%8D%E7%94%BA%E3%81%A7%E5%B3%B6%E5%94%84%E3%83%BB%E5%B3%B6%E3%83%A0%E3%83%8B%E5%A4%A7%E4%BC%9A> (2015. 03. 10)

和泊町立大城小学校ホームページ <http://ohjiroes.ti-da.net/d2010-02.html>
(2015. 03. 14)

鹿児島県与論方言

木部暢子・乙武香里

1 与論島の概要

与論島は奄美群島の最南端に位置する、周囲 23.65km、面積 20.49 km²、隆起珊瑚礁で形成された平坦な島である。鹿児島新港からは 594km、沖縄本島の本部港からは 85km、沖縄本島北端の辺戸岬からは北へ 28km のところにある。集落の数は 9 つ（茶花、立長、城、朝戸、麦屋西区、麦屋東区、古里、叶、那間）、人口は 5,443 人（2015 年 3 月 3 日現在、与論町ホームページ）で、行政上は島全体が一つの与論町となっている。

島への交通手段は、飛行機で与論空港へ入る方法と、船で与論港へ渡る方法がある。飛行機は、鹿児島空港から 1 日 1 便、那覇空港から 1 日 1 便、奄美大島空港から 1 日 1 便の運航があり、フェリーは鹿児島港から 1 日 1 便、那覇港から 1 日 1 便が運航している。

主な産業は農業と観光で、サトウキビ、野菜、花き栽培、畜産などが営まれている。島のいたるところにビーチがあり、年間 4 万人の観光客が訪れる。

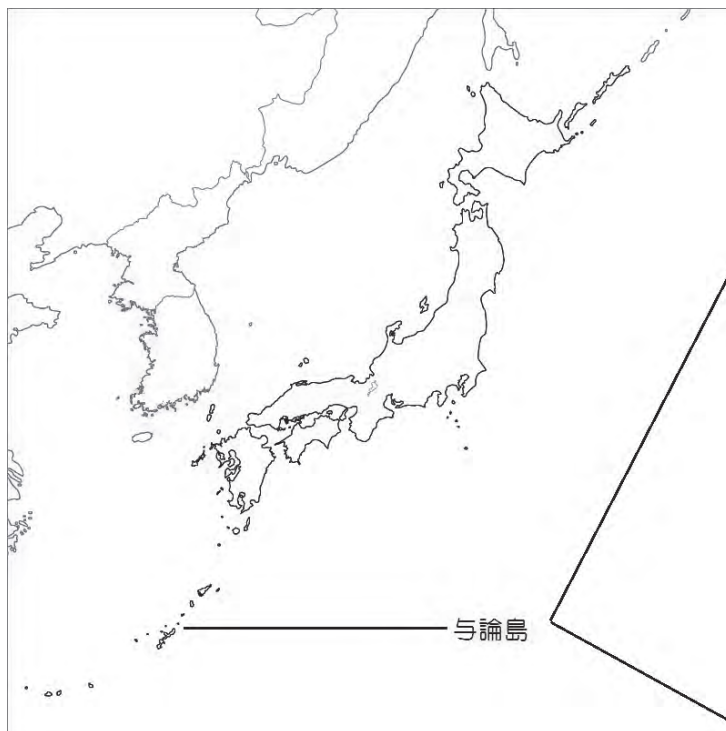


図 1 与論島の位置

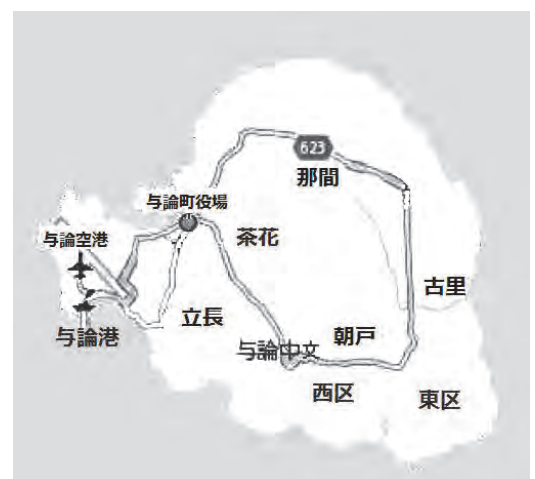


図 2 与論島の集落図

2 与論方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

方言の継承活動には、家庭、学校、地域コミュニティー、行政の4つの役割がある。ここでは、主に行政が主催する取組を取り上げる。

与論町では、平成2008年から毎年1回、教育委員会の主催でユンヌカルタ大会を開催している。「ユンヌ」とは「与論」のことで、ユンヌカルタ大会ではユンヌフトゥバ（与論言葉）で書かれたカルタを取り合う。毎年2月18日の「ユンヌフトゥバの日」¹の近隣の日曜日に砂美地来館で開催されている。

第7回ユンヌカルタ大会は、2014年2月16日（日）に開催され、各子ども会から上学年の部18チーム、下学年の部12チーム、合計30チームが参加した（図3）。この大会では、新たに「カルタ賞」が設けられ、優勝、カルタ賞をめざして戦いが繰り広げられた。大会運営は、中学生が中心となるジュニアリーダーが司会・審判・読み手を務め、子どもたち主体の大会となっている。（与論町教育委員会ホームページより）



図3 第7回ユンヌカルタ大会の様子
（与論町教育委員会ホームページより）

次に、町企画の行事に「十九の春」世界大会²がある。この催しは、「十九の春」の歌詞の替え歌を披露し、競うというもので、歌詞は与論方言に限らず共通語、英語などのこともある。子どもから大人まで参加し、三味線、踊りなども披露される（図4）。

与論では、他の島で行われているような方言大会、方言劇が開催されていない。ただし、地区単位では、那間こども園や与論小学校で方言劇が行われている。



図4 2011年「十九の春」世界大会の様子
（与論町ホームページより）

1. 与論町文化協会では2006年、2月18日を「ユンヌフトゥバの日」と定めた。2月18日が選ばれた理由は、与論方言で「言葉」を「フトゥバ」と言うためである。
2. 田端義夫が歌ってヒットした「十九の春」が「与論小唄」から派生したと言われている（小川2006）ことから始まった。

2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

与論町には、茶花小学校、与論小学校、那間小学校の3つの小学校がある。ここでは方言学習の取組が最も進んでいる与論小学校を取り上げる。

与論小学校の取組は、次の四つの段階に分けることができる。

第一段階：平成11（1999）年「創意の時間」を使った方言学習

第二段階：平成14（2002）年「総合的な学習の時間」の時間を使った方言学習

第三段階：平成19（2007）年「郷土の文化を生かした教育活動の展開～ユンヌフトゥバ学習を中心に～」（鹿児島県へき地・小規模研究連盟の研究指定）による方言学習

第四段階：平成24（2012）年 学習教材のデジタル化

第一段階は、与論民俗村主宰の菊秀史（きくひでのり）氏の働きかけにより、初めて方言学習が導入された段階である。菊氏はこれに先立つ1998年ごろから、このままでは方言が消滅してしまうという危機感から、町政懇談会等で「学校が方言の授業に取り組むべきだ」という発言を行ってきた。しかし、当時の町は「学校は方言を教えるところではない」という姿勢だった。

学年	方言学習の時間	創意の時間
1年生	2	8
2年生	2	8
3年生	2	11
4年生	2	14
5年生	2	20
6年生	2	19

表1 創意の時間に占める方言学習の時間

そこで、菊氏は自分が居住する地区の与論小学校に働きかけ、与論小学校で方言学習が始まった。ただ、当初は、各学年とも年間を通じて2時間という大変少ない時間であった（表1）。

第二段階は2002年に始まる「総合的な学習の時間」を使った方言学習の段階である。これは、各学年、年間10時間を方言学習の時間に当てるというもので、それまでの年間2時間に比べて大幅な学習時間の増になった。そのきっかけは、2001年に菊氏が与論小学校のPTA副会長に就任したことである。これにより菊氏と与論小学校の教員が協力して、方言学習を進める体制が整えられた（図5）。

第三段階は「郷土の文化を生かした教育活動の展開～ユンヌフトゥバ学習を中心に～」が鹿児島県へき地・小規模研究連盟の研究指定を受け、これによる方言学習を推進した段階である。各学年、年間10時間という学習時間に変化はなかったが、年間指導計画の改善が行われた。改善の内容は、10時間の指導内容の重点を学習の各段階に応じて「単語



図5 菊氏によるユンヌフトゥバ指導
（『日本の方言の多様性を守るために』より）

から会話へ」シフトさせた点である。図 6 に示すように、第 1 時では挨拶や単語を中心とする学習、学習が進むにつれて、だんだんと会話の練習時間を増やし、第 10 時では会話を中心とする学習という構成になっている。

1 時間の過程	第 1 時	～	第 4 時	～	第 7 時	～	第 10 時
導入	1 始めの挨拶 2 挨拶の単語や言葉の学習		1 挨拶の練習 2 前時の復習		1 本時の確認 1 期習事項を確認		1 本時の確認 2 会話する場面状況を設定
展開	1 友達や先生と単語の練習		1 新しく習う言葉の確認 2 状況を設定した会話の練習		2 状況を設定した会話の練習 3 相互発表		3 必要な会話を練習 4 相互発表
終末	1 習った単語や言葉の確認		1 次時の確認		1 次時の確認		5 相互評価

図 6 「郷土を学び、郷土を愛し、郷土を伝えるユンヌフトゥバ学習～話者の育成とバイリンガルを目指して」（与論小学校提供資料より）

第三段階には同時に PTA や地域の人たちの協力体制を築くべく、いろいろな試みが行なわれた。例えば、2010 年には、日常使う会話例を保護者に募集し、応募のあった 80 の例文をユンヌフトゥバに訳し、ユンヌフトゥバカルタを作成した（図 7）。

第四段階は、教材のデジタル化による方言学習の実施の段階である。学習時間が年間 10 時間、確保されているといっても、月にしてみれば 1 時間である。学習時間の不足を補うために教材をデジタル化し、パソコンで事前に学習したり授業後の復習に用いたりすることができるようにしたのがこの時期の取組の特徴である。

デジタル機器の優れている点は、画像と音声を同時に見聞きすることができる点にある。与論小学校でもこの点を生かし、ボランティアのかたにユンヌフトゥバを発音してもらい、それを録音して画像の文字や絵とリンクさせ、画面のマークをクリックするとユンヌフトゥバの音声が出てくるようなシステムを作成した



図 7 ユンヌフトゥバカルタ（与論小学校提供資料より）

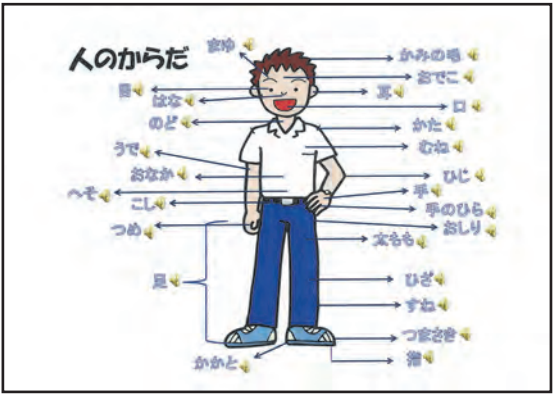


図 8 デジタル教材（与論小学校提供資料より）

(図8)。その内容は、日常よく使われる単語、例えば、身体の名称、家族の名称、数の数え方といった単語の他に、あいさつのしかた、「与論のことわざ」といった文レベルのものも含まれている。「与論のことわざ」というのは、例えば次のようなものである。

「^ム思イ^{ヌサリ}ドウ^{フイ}運命^{ウブン} 請ドウ 幸運」(思い願うことがその人の運命となり 請い願うことがその人の幸運につながる)

以上の四段階のそれぞれにおいて、与論小学校ではさまざまな工夫を行なっている。以下に優れた工夫の例をあげておく。

①体系的なカリキュラム

学習時間は、各学年とも年間10時間、月1回だが、図6のように年間指導計画が体系的に作成されている。また、低学年は日常生活に身近な単語を中心に学習し、中学年は4つの基本文型(「何がどうする」、「何がある・ある」、「何がどんなだ」、「何が何だ」)を中心に、高学年はユンヌフトゥバ劇とユンヌフトゥバで夢を語るといった方言スピーチを中心に学習するというように児童の発達段階に応じた授業計画となっている。

②日常的な方言の使用

方言学習の時間以外にも、学校生活の中に日常的に方言が取り入れられている。例えば、毎時間の授業の初めにユンヌフトゥバカルタの朗唱と「与論のことわざ」の朗唱を行なったり、給食時間にユンヌフトゥバカルタの朗読CD³を流したりしている。また、ユンヌフトゥバで挨拶を行なったり、廊下や階段に方言が貼られていたりして、「方言が当たり前」の環境を作っている。



図9 与論小学校の玄関前の階段
(与論小学校提供資料より)

③デジタル教材の活用

上記のようにデジタル教材の整備と活用が進んでいる。

④家庭や地域へ広げる工夫

方言学習を学校だけで終わらせずに、家庭や地域に広げる工夫をしている。その一つに「ユンヌフトゥバ音読カード」がある。これは、生徒が毎月1回の方言学習の日に学校で

3. 保護者がユンヌフトゥバカルタを方言で読み上げ、それを編集してCDを作成した。保護者が読むことで、子どもたちが方言を身近に感じることができるという(岩下2014)。

習ったユンヌフトゥバの文を家庭に持ち帰り、保護者の前でそれを音読する。保護者はそれを聞いてカードに感想を書き、担任に提出するというものである。このカードは、学校と家庭の橋渡しの役割だけでなく、家庭で方言を使う雰囲気を作るという役割を果たしている。実際、「ユンヌフトゥバ音読カード」の実施により、それまで方言の教育にあまり積極的でなかった祖父の意識が変化したという事例が報告されている。

本年度の新しい取組として、「バイリンガル認定証」(図 10)の発行がある。これは、児童がユンヌフトゥバと共通語を見事に使いこなしているバイリンガルの人を家族や親戚、近所の大人の中から探して校長に推薦し、与論小学校が「バイリンガル認定証」を贈呈するという活動である。子どもたちが島の大人たちをバイリンガルとして尊敬することで、ユンヌフトゥバに対する大人の意識が変わり、「自分もバイリンガルに認定されたい」という大人が増えたという。現在、約 300 人に「バイリンガル認定証」を贈呈し、今後もリストアップを続けるという。



図 10 バイリンガル認定証
(「与論の大切な宝者」より)

⑤誰でも使える教材の開発

学校における方言教育の最も大きな問題点は、その地域出身の教員がいない、または少ないということである。鹿児島県の場合、3年ないし5年で教員が異動するため、本土出身の教員が島に赴任することが多くなる。方言が分からない本土出身の教員たちは、「自分たちは方言教育に携われないと」考えがちであるが、与論出身でない教員にも負担のないかたちで方言学習が担当できるよう、体制を整える必要がある。そうでなければ、特定の教員に方言教育の仕事が集中したり、与論出身でない教員が精神的負担感を感じてしまうことになる。そのためには、地域の人との協力関係の構築と、誰でも使える教材の開発が不可欠である。

与論小学校の場合、2012年に与論出身の岩下朝恵教諭が赴任し、「学校」「保護者」「地域の協力者」の協力体制を築くと同時に、指導計画・方法の改善やテキスト・デジタル教材の作成を行い、方言学習が非常にうまくいっている。現校長の中園照洋校長も島外の出身であるが、与論方言の積極的な推進者である。

2.3 地域の人の協力の状況

与論小学校の方言学習は、菊氏によってその土台が築かれ、その後、さまざまな工夫を重ねた結果、保護者と地域を巻き込んだ活動に発展しつつある。しかし、やはりまだ、菊氏に依存している部分が多い。今後、いかにして指導者を増やしていくかが課題である。

近年、茶花小学校、那間小学校でも、方言学習を「総合的な学習の時間」に取り入れる動きがある。与論小学校の活動が他の地域に波及した結果だが、同じ島でも地域が違えば方言が違うので、今後、これらの地域では、その地域の方言が指導できる人を育成しなければならない。その際、与論小学校の活動がモデルとなるだろう。

2.4 保存・伝承の取組に関する地域の特徴

与論小学校の取組が成功した背景には、次のような地域の特徴がある。

第1に、与論島では、40代（保護者の世代）でも方言をかなり流暢に話す人が多く、20代でも方言の聞き取りが十分できる人が多い。方言を伝承する素地がもともと整っていたことが、取組の成功の大きな要因としてあげられる。

第2に、菊氏という熱心な推進者がいたことである。先に述べたように、菊氏の活動は最初からうまくいったわけではない。当初は「学校は方言を教えるところではない」というのが町の姿勢だった。それに対し、粘り強く方言教育の必要を説いた菊氏の存在なくしては、与論小学校の取組も存在しなかった。

第3に与論小学校が継続的に方言学習に取り組んできたことがあげられる。先に述べたように、校長も含めて、教員は3～5年で異動するのが普通である。そのため、1つの学校が継続的に方言学習を行うのは、じつは、かなり難しい。与論小学校の場合、代々の校長とそこに在籍した教諭の意識の高さ、及び行動力により方言学習が継続的に行われた。

与論小学校では、この3つが揃うことにより、「学校」「家庭」「地域社会」が児童を介してうまく結びつき、方言使用の循環の輪を作ることができた。しかし、普通はこのようにはいかない。多くの地域では、親の世代（40代）がすでに方言を話せなくなっている。そのような地域においては、家庭をどう取り込むかが大きな課題である。

3 与論方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

与論島では、南山大学（1973）、沖縄国際大学（1996）、琉球大学（2013）等により、民俗調査、社会学調査が行われているが、方言に関する意識調査は行われていない。

3.2 意識調査の結果の分析

方言に関する意識を伺い知ることができるものに、国立国語研究所『日本の方言の多様性を守るために』の菊秀史氏発言がある。

現在、与論では「方言は共通語より劣ったことば」、「方言で話すことは恥ずかしいこと」と考える人はほとんどいません。「方言は大切である」、「できればユンヌフトゥバを残したい」とだいたいの方は考えています。

無関心な人も、よくよく話を聞くと、「方言は要らない。方言はないほうがよい」と思っているわけではなくて、「今さら復興は無理であろう」という半分は諦めにも似た気持ちからそう思っているだけで、「残ったほうがよいか、残らないほうがよいか」と聞くと、「それは残ったほうがよい」と答えてくれます。（p. 20）

また高齢者を中心に「方言を使うなと教育されたのに、今さら」とか、「集落によってことばが違うではないか」とか、「敬語の使い方が難しいから子どもたちには無理だ」とか、そういうことを理由にして継承行動に移らない傾向があります。（p. 20）

この指摘から、与論の人々は方言や方言を残すことに対して概ね肯定的ではあるが、積極的に行動するまでには至っていないということがわかる。また、方言使用禁止教育の時代を生きた世代には、諦めの気持ちが強いことがうかがえる。

ただし、与論小学校のように、子どもたちが地域の大人たちを巻き込みながら方言を学ぶことにより地域の大人の方言の伝承に対する意識に変化がもたらされている。

4 与論方言の保存・伝承のための教材

4.1 与論方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等

与論方言の資料として、以下のようなものがある。

菊千代(1985)『与論方言集』与論民俗村

菊千代(1985)『与論のしまがたり』はる書房

菊千代・高橋俊三(2005)『与論方言辞典』武蔵野書院

菊秀史(2006)『与論の言葉で話そう(1)挨拶・名詞・こそあど言葉・性格・感動詞・副詞』
与論民俗村

菊秀史(2007)『与論の言葉で話そう(2)動詞を覚えよう(文法・文型編)』与論民俗村

菊秀史(2009)『与論の言葉で話そう(3)動詞を覚えよう(単語編)』与論民俗村

菊秀史(近刊)『与論の言葉で話そう(4)形容詞・助詞・表現意図』与論民俗村

この他に、与論方言に関するアクセント、語彙、文法に関する研究論文が多数存在する。

4.2 与論方言の教材

上記の『与論の言葉で話そう(1)～(4)』は、子どもたちに与論方言を教えるために作成された文法書で、与論小学校の方言学習でも使用されている。

他に方言学習で使用されている資料として、以下の者がある。

『ユンヌフトゥバカルタ』(与論小学校 PTA 研修部)

全 80 首。日常会話や親・祖先の教え、駄洒落など、ユンヌフトゥバを通して学びたいものや、残したいものが、バランスよく盛り込まれている。本年度は 50 首を選定し、上の句と下の句に分け、本格的なカルタ遊びができるものにバージョンアップした。作成委員会の会議の中で、委員の保護者たちがユンヌフトゥバへの思いを深めていくことにもつながっているという。

『ゆんぬフトゥバカルタの朗読 CD』

『^{ユンヌ}与論カルタ』(与論カルタを創る会)

『小学校・中学校の・道徳内容に関する与論のことわざ』(与論町教育委員会「小学校・中学校の道徳内容に関する与論のことわざ」編集委員会)

『与論のことわざカレンダー』(与論町教育委員会)

4.3 録音資料の作成、利用状況

与論小学校では、ポイントをクリックすると方言音声が出るデジタル教材がある。内容は、日常よく使われる単語、例えば、身体の名称、家族の名称、数の数え方の他、あいさつのしかた、与論のことわざ等。2012年から2013年までは民間財団助成金により、タブレット上で利用されていたが、助成期間の終了に伴い、タブレット上では使えなくなり、現在は、教室に設置されたパソコンで利用している。

また、音声資料として「ユンヌフトゥバカルタの朗読CD」がある。

5 保存・継承の取組の効果と課題

学校とは別に、高齢者医療に携わる看護師、介護士に医療現場における方言の使用と問題点についてインタビューを行った。以前の調査で、看護師、介護士のかたが方言で患者に接するようにしていると聞いたからである。医療現場における方言の使用は、学校における方言継承活動と直接には結びつかないかもしれないが、方言を若い看護師、介護士に伝えるという点では共通している。今回のインタビューの回答を以下にあげておく。

Aさん（与論出身）看護師

◆患者さんとのやりとりで困ることはないか。

→患者さんは方言で話すことが多い。40代の人でも方言で語りかけてくる。自分（Aさん）は方言はしゃべらないが、聞き取りはできるので困ることはない。分からない方言があるときは、先輩の看護師や周りの人に聞く。また、介添えの人が通訳してくれる。

◆医師と患者さんとのやりとりはどうか。

→医師はほとんど島外出身者なので、方言が分からない人が多い。患者さんは医師との会話では共通語を使っている。医師が分からないときは、介添えの人や方言が分かる看護師が通訳する。しかし、共通語で病状を説明するのは難しい。医師の中には、積極的に方言を習いに行く人もいる。

◆医療現場で方言を使うことの長所は何か。

→方言をまぜると、患者とのコミュニケーションがうまくいく。自分（Aさん）が方言が分かると知ると、患者さんも方言で話しかけてくる。分からない方言を患者さんに尋ねることによって、コミュニケーションが弾むこともある。コミュニケーションが取りやすくなるので、皆が方言を使えばよいと思う。

◆方言で困ったことはないか。

→患者さんが方言で病状を訴えると、理解するのが難しいことがある。患者さんにとって、共通語で病状を訴えるのは難しいのではないかなと思う。

◆医療現場に必要な方言を理解するための手引き書があったらよいと思うか？

→特に必要ない。それよりも、先輩看護師に聞いたり、周りの人に聞いたりする方がよい。

Bさん（島外出身）介護士

◆患者さんとのやりとりで困ることはないか。

→自分は島外出身なので、方言が分からないことが多い。分からないときは、周囲の人に尋ねる。また、その日の反省会の中で周囲の人に聞く。

◆医療現場で方言を使うことの長所は何か。

→方言の意味を患者さんに尋ねることによって、患者さんとコミュニケーションを行うことができる。デイサービスの中に、与論の島うたを取り入れている。島うたが流れると、患者さんの体が自然に動いてくる。

◆方言で困ったことはないか。

→カルテに患者さんが言ったことを方言で記入することがある。そのときに、どう書けばよいか（表記のしかたに）困ることがある。そのようなときには、周囲の人に聞いている。

◆医療現場に必要な方言を理解するための手引き書があったらよいと思うか？

→あったらいいと思うが、3年間勤務していれば、必要な単語はだいたい聞き取れるようになる。

◆その他

→介護をする上で重要なことば、使用頻度が高いことばは、身体を表すことばや距離を表すことばである。たとえば「ここに座って」「そこに座って」などと言うことが多い。方言で言われると、この距離感を理解するのが難しい。

引用文献

岩下朝恵（2014）「与論の大切な宝者～ユンヌフトゥバ学習～」 「危機言語・方言サミット in 八丈島」 発表資料

小川学夫（2006）「九州、奄美、沖縄における「ラップ節の流れー沖縄の「十九の春」が生まれるまでー」 『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』 36, 121-234.

国立国語研究所（2011）第3回国際学術フォーラム報告書『日本の方言の多様性を守るために』

中園照洋（2015）「郷土を学び、郷土を愛し、郷土を伝えるユンヌフトゥバ学習～話者の育成とバイリンガルを目指して～」 部門Ⅱ指導 20 郷土教育

与論町教育委員会ホームページ「第7回ユンヌカルタ大会」

http://www.yoron.jp/kyouiku/kiji/pub/detail.aspx?c_id=73&id=497&pg=1

与論町ホームページ「まちの話題」「十九の春」世界大会開催

http://www.yoron.jp/imgkiji/pub/detail.aspx?c_id=51&id=186&q=%e5%8d%81%e4%b9%9d%e3%81%ae%e6%98%a5&radiobutton=4&now_P=1&show_num=20&type=search&sc_id=

67

沖縄県における取組

石原 昌英

1 沖縄県における取組について¹

本稿では、特定の地域集落に焦点をあてることはしないで、沖縄県における危機的な状況にあるしまくとうば（地域言語）を復活させることを目的とした取組について述べる。筆者は、2012年度に実施された文化庁委託事業の研究代表を務めたが、事業報告書では、復興活動に関する調査で明らかになったことを述べた²。本稿は同報告をベースにして、多少重複するところはあるが、新聞報道、インターネット、及び筆者の聞き取り調査（電話・メールを含む）に基づいて2013年度・2014年度に実施された取組について紹介したい。

2 行政機関等の取組

最初に、行政機関等の取組として四つ紹介したい。一つめの取組は、2013年に沖縄県（文化観光スポーツ部文化振興課が担当部署）が「しまくとうば県民運動」を実施し、9月18日に県内初の「しまくとうば県民大会」を開催したことである。同大会で、高良倉吉沖縄県副知事（当時）は「各地に受け継がれてきたしまくとうばは沖縄文化の基礎だ。沖縄のアイデンティティーの一つである言葉を継承し、文化をつないでいこう」との仲井真弘多知事（当時）のメッセージを代読した（『琉球新報』2013年9月19日）。喜納昌春沖縄県議会議長（当時）は、2006年に県議会で「しまくとうばの日」を制定した経緯を振り返り、「緩やかに機運が高まり、きょうを迎えたことは意義深い。身近にできる家庭から始めてみてほしい」としまくとうばで挨拶した（『琉球新報』前掲）。沖縄県では、2006年3月の沖縄県議会での可決に基づき「しまくとうばの日に関する条例」が制定され、9月18日が「しまくとうばの日」と定められた。2006年9月に記念シンポジウムが開催されたり、「うちな一芝居」が上演されたりするなどした。2007年以降も様々の取り組みはあったが、沖縄県が主導するものではなかった。喜納議長が「緩やかに機運が高まった」と述べたように、条例制定から県民大会が開催されるまでには7年という短くはない時間を要したのである。さらに、沖縄県は国頭村から与那国町にわたる全市町村の住民を対象に、また、対象地域人口の年齢別割合も考慮して、「しまくとうば県民運動推進事業・県民意識調査」を実施した（このようなしまくとうばに特化した調査も初めてのことであった）³。沖縄県は、調査結果を公表するとともに、「しまくとうば普及推進計画」を策定した。推進計画は詳細なものではないが、10年後のしまくとうばの将来を描いている。

また、沖縄県の文化観光スポーツ部は、2014年に初めての取組として、「（沖縄の黄金言葉を集めた）しまくとうばカレンダー」（資料1参照）と『語てい んーだな しまく

¹ 『月刊琉球』の編集者からの依頼を受けて、同誌の2015年3月号にも沖縄県における取組について記した。同稿の内容は、本報告の内容と重なる部分がある。

² 琉球大学国際沖縄文化研究所が文化庁の委託を受けて、奄美方言、宮古方言、与那国方言に加えて国頭方言、沖縄方言及び八丈方言が話されている市町村の教育委員会、学校（幼稚園・小学校・中学校・高校）、NPO団体等を対象にアンケート調査を実施し、注目される取組を実施している教育委員会・学校等を訪ねインタビュー調査を実施した。

³ 調査報告書は文化振興課のウェブページよりダウンロードできる。

とうば』(語ってみようしまくとうば)というガイドブックを発行した(資料2参照)⁴。なお、ガイドブックは、文化振興課のウェブページ(<http://shimakutuba.okinawa.jp/>)からダウンロードできる。



資料 1



資料 2

⁴ 資料1・資料2は沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課の許可を得て掲載する。撮影は筆者。

「しまくとうばカレンダー」は、1日から31日までの日捲り式で、沖縄島北部、沖縄島中南部、宮古、八重山、与那国のしまくとうばの黄金くとうば（格言）が記されている。ハンドブックは、那覇市真和志、宮古島市平良及び石垣市石垣のことばで「自己紹介」「挨拶」「道案内」「電話対応」などの表現が紹介されている。本ガイドブックが、多くの市販本に見られるような首里・那覇の方言のみの表現を紹介するのではなく、三つの島（沖縄、宮古、石垣）のしまくとうばを紹介していることは、沖縄県が言語多様性を認識し、それを重視していることを表していると言える。

二つ目の取組は、那覇市教育委員会が、『ちかていあしはなしまくとうば（使って遊ぼうしまくとうば）』という副読本を、低学年用と高学年用に分けて発刊し、市内の全ての小中学校に在籍する児童生徒に配布したことである（資料3参照）⁵。



資料3

それまでは、管見のかぎりでは、市町村の教育委員会が、独自のしまくとうば教材を作成したことはなかった。同委員会の取組は、子ども達が父母や祖父母としまくとうばで会話をする機会をつくることができるようにしたという点で画期的である。監修のかりまたしげひさは、同副読本の目的について、「おわりに—しまくとうばを学ぶことを通して—」（p70）で、次のように述べている。少し長めではあるが、引用する。なお、ルビは省略した。

わたしたちは、ことばを使って、見たり聞いたりしたこと、自分の考えや感じたことを伝えます。考えを深め、知識を得るためにもことばが必要です。遠い過去のことも未来のこともことばによって表したり伝えたりすることができます。ことばは、人間にとって大切なものです。

中略

⁵ 資料3は那覇市教育委員会学校教育課の許可を得て掲載する。撮影は筆者。左端の二つのパンチ穴は、筆者が保管用にあけたものである。

沖縄県の中でも、沖縄と宮古と八重山とではことばがちがいます。さらに沖縄の中でも島ごと、地域ごとにことばのちがひがあります。沖縄の南部と北部でことばがちがうだけでなく、那覇市の中でも首里と那覇と小禄と真和志とではことばが少しずつ違います。

この本で使っている“しまくとうば”の“しま”には、「故郷」という意味があります。ですから、“しまくとうば”はふるさとのことばです。“しま”ごとにいろいろな“しまくとうば”が使われているのです。

中略

方言は、標準語よりもおとったことばだからといって、使うことを禁止した時代がありました。そのために、各地のしまくとうばを話せる人が少なくなっています。しかし、今ではしまくとうばが大切なことばであることを認め、しまくとうばを使うことをすすめています。

“しまくとうば”を学びながら、地域の文化や歴史を学び、身近な自然についての理解を深めることができます。地域ごとにちがう“しまくとうば”の学習は、多文化理解、多言語教育の基礎をつくります。しまくとうばの学習を通して、ことなる価値観をもった人を尊重し、グローバルな視点をもった子どもたちをそだてるために、この本を役立ててください。

この低学年用では、小学3年生の「たーけー」を中心に姉の「みーきー」、父母、父方の祖父母、及びペットの猫と犬が登場人物である⁶。一方、高学年用では中学2年生の「みーきー」が中心になっている。両編とも、「家族」「気持ちを表す言葉」「一日の生活」「遊び」「行事」「おもしろい言葉」で章立てされている。

三つ目の取組として、西原町中央公民館の活動を紹介する。同公民館は表1の通り2014年度に四件のしまくとうば関連の講座を開設した。なお、表は西原町のウェブページを基に作成した。

	事業名	回数	定員	対象	目的
1	しまくとうば 講師養成講座	10回	15人	一般町民・しまくとうばに関心のある方	しまくとうばを推進・継承していく為、地域で活躍する講師を養成する
2	指導者対象 しまくとうば 講座	3回	15人	学校教師 教育関係者 指導者	学校の先生にも知ってほしい西原の歴史や日常のあいさつ・わらべ歌・手遊びからしまくとうばを学ぶ
3	しまくとうば 講座 ならて い ちかてい しまくとうば	5回	20人	5歳～12歳の児童生徒	あいさつや自己紹介、手遊び、わらべ歌や民謡などから、しまくとうばを楽しく学ぶ
4	ウチナー芝居 講座	10回	30人	小学生～一般（町内 在住者、在勤・在学 者）	「しまくとうば」の普及・推進を図る為、うちなー芝居の練習から成果発表まで仲間と取り組む

表 1

⁶ 「たーけー」「みーきー」は沖縄での愛称。名前から2モラをとり、それぞれを伸ばすなどして4モラにする。例えば、筆者の愛称は「ひーでー」であるが、これは「まさひで」の「ひで」から形成されている。

同公民館の講座は、それぞれ1回2時間なので、総時間数からすると多いとは言えないが、一般向け、教育関係者向け、児童生徒向けにレベル・目的に応じてしまくとうばの講座を開設したことは評価される。また、これらの講座の成果発表の場として、2015年2月1日に、中央公民館主催で「しまくとうば継承・推進事業 あびてい ちかていんーだな しまくとうば」(話して 使ってみよう しまくとうば)を開催した(資料4参照)。上記のように、沖縄県のしまくとうばは地域によって特色があるので、その維持・継承には地域の取組が必要とされる。西原町の活動は一つの先行事例となるであろう。

しまくとうば継承・推進事業
あびてい ちかていんーだな しまくとうば
入場無料

第1部 子どもしまくとうば講座・うちなー芝居講座 成果発表会

うたあそび・お話 意見発表など	歌劇 仲直り三良小	喜劇 奉る(年の夜)
--------------------	--------------	---------------

第2部 劇団花道 原作:津波盛廣
あむとうぬしちや
～輝け老人パワー～

●日時:平成27年2月1日(日) ●開場:13時30分 開演:14時～
●場所:さわふじ未来ホール ●入場無料※入場整理券が必要です。
入場整理券配布日:H27/1/19(月)9時～なくなり次第終了。西原町中央公民館大ホール ※お一人様2枚まで。
主催:西原町教育委員会 問合せ先:西原町中央公民館(098-945-3657)
この事業は沖縄振興特別推進交付金を用いています。

資料4 (西原町のウェブページより)

行政等の取組の最後に、公益財団法人博報児童教育振興会の助成を得て、東京外国語大学国際日本研究センターと鹿児島県瀬戸内町立図書館・郷土館が事業を実施し、その成果として2013年3月に編集発行された『瀬戸内のシマグチ』(「瀬戸内のシマグチ」編集委員会)を紹介したい。編集委員会の前田達朗は次のように述べている。少し長くなるが、引用する。

奄美の歴史的背景とシマグチ

(前略) 学校教育が始まってからは方言が禁じられました。学校から始まった、時には罰を受けることもあった「方言矯正」は、シマの社会にもひろがりました。

薩摩時代に植民地的な産業構造にされた奄美からは、多くの人が阪神間や東京周辺に仕事を求めて移り住むのですが、シマグチは笑われ、馬鹿にされました。この経験はシマでの方言禁止をさらに進めることになりました。このことはシマグチを話せる人が少なくなった原因のひとつだと、地元では考えられています。この「瀬戸内のシマグチ」の存在は、かつて禁止されてものであったシマグチに対する人々の意識がかわるきっかけになると考えています。

瀬戸内町のシマグチ

奄美大島南部と三つの有人島からなる瀬戸内町は、1955年に三つの村とひとつの町が合併してできました。それぞれのシマに伝統と歴史がありますが、1980年代から子どもたちがシマグチを話さなくなったことに危機感が持たれていました。地域での伝承活動もこの頃から始まったと言われていますが、1996年から開かれている「子ども島口大会」をきっかけに、校区はシマの公民館活動として、こども向けの伝承活動が本格的に行われるようになりました。しかし、先生役のシマの人々は、個人の努力と手作りに教材で、子どもたちを指導してきました。こうした地域社会でのシマグチ伝承活動に役立ててもらうために、「瀬戸内のシマグチ」は企画されました。（後略）

「瀬戸内のシマグチ」は冊子と2枚組のDVDがペアになっているので（資料5）⁷、文字表記されたシマグチを読んで覚えるだけでなく音声を聴き、映像を見ることによって、実際の使用場面を確認しながら、シマグチを覚えることができる。なお、ビデオクリップに登場するのは地元の人々である。



資料 5

⁷ 編集委員会の前田達朗の許可を得て掲載する。撮影は筆者。

なお、前田が述べるように、瀬戸内町の各地区を含め、奄美群島の各地で話されている島口は、沖縄県各地で話されるしまくとうばと同様に、多様性に富んでいる。奄美・沖縄地区では、このような多様性を維持するために、行政機関が積極的な活動を実施することが求められている。

3 NPO等の民間の取組

沖縄県におけるしまくとうばの復興については、NPO団体を始めとして、民間でも様々な取り組みがされている。本節では、沖縄県における最近の動向について述べたい。注目される動きとして、「しまくとうば連絡協議会」の設立がある。沖縄語普及協議会、うちなあぐち会、トピアプロジェクト等の、それまで別々に活動をしていた、しまくとうば復興活動に取り組む団体がまとまり協議会を立ち上げた。これにより、バラバラに展開されていた活動に一つの核ができたと言える。なお、同協議会では、2014年10月に、八重瀬町の小中学校生（3年～6年）・中学校の生徒（1年～3年）、教員（管理職を含む）、保護者を対象にしまくとうばに関する意識調査を実施し、現在その結果を分析中である。管見によれば、沖縄県において、このような目的・対象でアンケート調査が行われたことは初めてなので、集計結果・分析の公表が待たれる。

近年の取組の特徴として、インターネットが活用されていることは注目すべきだろう。筆者が活用しているインターネット上の取組を幾つか紹介したい、最初に、沖縄タイムス社の取組がある。同社は、毎週日曜日に『しまくとうば新聞 うちなあタイムス』発行しているが、一部の記事は、インターネット上のポッドキャストで配信されている。例えば、資料6に示した記事は、沖縄県で最近人気が出てきた若手芸人じゅん選手が書いた「じゅん選手のしまくとうば日記」の第4回「わらば一たや島の宝」（子ども達は島の宝）である⁸。この日記は、じゅん選手のしまくとうばで音声記録されていてポッドキャストで聞くことができる。

⁸ 担当記者の許可を得て、掲載する。



資料6 (「うちなあタイムス」(2015年2月15日))

また、同紙はしまくとうば復興に関する記事を掲載することがある。第84号(2015年2月15日)では、沖縄で祝われる旧正月にむけてしまくとうばで年賀状を書くワークショップが紹介されている。

二番目に、『方言日記(まかびむにー)』というブログ(<http://yugurihaikarah.ti-da.net/>)がある。糸満市真壁出身の米国在住の女性が日々の暮らしなどについて、出身地のしまくとうばと日本語の二言語併記で綴ったものである。三番目に『いめんせえびり うちなあぐち賛歌』というブログ(<http://www.haisai.co.jp/>)がある。書くことを通してしまくとうばを学ぶことを奨励し、如何に書くのかを示した手引き書的なページも提供している。また、管理者の比嘉清が、自ら書き上げたしまくとうば小説を音声化したものを聞くこともできる。筆者も頻繁に訪れるブログであるが、かなり実践的である。

四番目にフェイスブックのグループがある。筆者も幾つかに参加して学ばせてもらっている。代表的なものが、「Facebook うちなーぐち講座」であると思われるが、2015年2月28日現在の参加者数は約7300人である。参加者は沖縄県出身者(県外在住者を含む)、県外出身者(県内在住者を含む)、そして少数ではあるが海外在住のウチナーンチュである。また、参加者のしまくとうば能力は様々で、沖縄のこと深く知りたいので参加した県外出身の初心者、沖縄出身なのに沖縄のことばをまったく知らないの参加し

た初心者もいる。このような参加者の多くが若者で、かなり熱心である。他には、県外に出て、うちなーぐちを忘れていたが、この講座で故郷のことばを取り戻しつつあるという参加者もいる。沖縄県出身、県外出身の50・60歳代の参加者にはしまくとうばにかなり堪能な者がいて、初心者の質問に丁寧に答えている。講座でのやりとりを見ていると、この講座は一過性のものではなく、持続性のあるかなり効果の高い取組であると思われる。同様な活動をしているFBグループには「初めてのうちなーぐち講座」「【しまぐち】しまくとうばっし かたやびら！～うちなーぐちや永遠に～」などがある。

五番目に、コミュニティFMラジオ局の取組があるFMニライ、FMやんばる、FMコザなどが、地域の話題などをしまくとうばで語る番組を放送しているが、Ustreamで配信されているので、番組終了後もインターネットでアクセスができる。これらのFM番組に加えて、2014年9月に株式会社クレストがインターネット・ラジオの「沖縄しまくとうば放送局」を開設した。従来の地上波ではなく、パソコンやスマホで視聴ができるようになったので、電波の届かない地域でもシマクトゥバ放送が聞けるようになったのである。同放送局では、独自に取材・作成した番組も含めて1日24時間・365日、しまくとうばによる放送を行うと宣言している。(詳しくは巻末に掲載した放送時間表と同放送局のホームページ(<http://www.crest-ryukyu.co.jp/uchina/>)を参照のこと)。

4 学校における地域学習・方言学習の状況

次に、沖縄県におけるしまくとうば教育について述べたい。現在の指導要領の枠組みでは、正式な科目として教えることはできない。沖縄語普及協議会、うちなーぐち会、宜野湾うちなーぐち会などのNPO法人から派遣された講師が、総合学習や課外活動で教えている学校もある。また、小学校や中学校での学習発表会などで、しまくとうば芝居が上演されることもある。

まず、幼稚園での取組として、与那原町文化協会のしまくとうば劇団「おばあQ」の活動をあげたい。同協会の児童文化部の60歳代から80歳代の女性会員が、子どもたちが幼いころからしまくとうばに親しんでもらおうと同劇団をたちあげ、保育園、幼稚園、小学校等で活動している(『琉球新報』2014年1月24日)。2014年1月17日には、与那原幼稚園で鬼ムーチーについて自作の紙芝居と寸劇を演じたようである。

小学校における効果的な取組としても、沖縄芝居をあげたい。沖縄県糸満市の広報(<http://www.city.itoman.lg.jp/docs/2014071100017>)によると、同市の真壁小学校で、沖縄県俳優協会による沖縄芝居「なかなおりサンラー小」の紙芝居公演および舞台公演が開催された。まず紙芝居で見せ、その後で俳優による実演が行われた。内容は、夫婦げんかをした父(すー)と母(あんまー)の仲を息子のサンラーが知恵をしばって取り持つというものである。沖縄県で人気のある同芝居はユーモアに富んだアップテンポな歌劇で子どもたちにも受け入れられやすいだろう。なお、同広報によると、俳優協会の取組は、沖縄文化活性化・創造発信事業の一環として、沖縄芝居の伝承やしまくとうばの継承・普及などを目的に県内の各学校で行われているようである。

中学校での取組については、宮古島市での活動が注目される。宮古地区中学校総合文化祭の一貫として、方言お話パフォーマンス大会が開催されている。『宮古毎日新聞』(2015年1月25日)によると、同大会は、「時代を担う中学生が、各地区に残る方言を

誇りを持って積極的に継承していこうとする意欲を育てることを目的」に開催されている。今大会が4回目で、多良間中学校の生徒も初参加した。このような取組は、中学生が自身の祖父母も含め、地域のしまくとうば話者と交流し、地域文化の継承の機会を与えることになるので、県内各地区に広まって欲しいものである。また、全県大会も可能であろう。さらに、沖縄県高校総合文化祭でも、郷土芸能に加えて、このような取組が実施されると、地域やしまくとうばに興味を持つ生徒が増えるのではないだろうか。

高校での取組として、宮古工業高校の5人の生徒によるスマートフォン用辞書アプリの開発がある。『琉球新報』（2015年1月30日）によると、生徒達は、課題研究の授業の一環として、父母などへのインタビューも行い、親族関係、身体、食材・料理の名前、感情を表すことばなど、よく使用されるみゃーくふつ（宮古語）の120単語を辞書に収録した。4コマ漫画を用いるなど若者が使いたくなるような工夫をしている。生徒達は、作成過程でそれまで知らなかったみゃーくふつを学んだようである。この成果は、アプリ開発というICT技術に関する活動とみゃーくふつ辞典作成という文化的な活動が結びついたおもしろい取組である。

民間の取組では、NPO法人沖縄ハンズオンの取組が注目される。同法人がコーディネート・派遣した講師が、北谷町教育委員会と連携を取り、しまくとうば子ども教室で小学生にしまくとうばオペレッタ芝居を指導している。また、ハンズオンユース倶楽部（小学校高学年～高校生）が、しまくとうばオペレッタ芝居（郷土劇）を上演している。なお、同法人は、沖縄の歴史文化、しまくとうばを通じた人材育成のあり方が高く評価され、平成25年文部科学大臣賞と第7回住友生命『未来を強くする子育てプロジェクト』大賞を受賞している。同法人の活動に参加することで、児童生徒やその保護者が地域の文化や自分たちのルーツにより関心を持つようになっているので、その活動が拡大継続されることが期待される。まさに、地域一丸となったしまくとうば教育の実践が行われていると言える。

5 しまくとうばに関する意識調査とその分析

しまくとうばに関する意識調査としては、琉球新報社が2001年より5年ごとに実施している「沖縄県民意識調査」、琉球大学法文学部が2010・11年に大学生及び琉球芸能実演家を対象とした調査、及び沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課が2013年に実施した「しまくとうば県民運動推進事業県民意識調査」がある⁹。琉球新報の調査は、しまくとうばに特化したものではないが、全県規模で20歳代以上の県民（回答者は約1000人）に「方言に親しみがあるか」「方言が話せるか」「子ども達に方言を話せるようになってほしいか」を訊いている。琉球大学法文学部の調査は筆者が中心となった実施したが、しまくとうばに関する意識と実際の活動について訊いた。一般的に、三線・島唄及び琉球舞踊を教えたり学んだりしている者はしまくとうばに関する肯定的な意識があり、日常的に使用しているとのイメージがあるので、その意識と言語活動の実態を調べるために実演者を対象に調査した（回答者は約600名）。また、沖縄県立南風原高校郷土文化コースの生徒と琉

⁹ その他には、島袋倫が筆者の指導の下で2008年に修士論文研究として実施した調査がある。

琉球大学及び沖縄国際大学の学生にも同じアンケートを実施し（回答者は約 470 名），若者のしまくとうば意識と言語活動について調べた。なお，その結果は石原（2014）及び Ishihara(2014)で公表されている。沖縄県が実施した県民意識調査は，沖縄県の全地域の 20 歳代から 70 歳代の県民（回答者は約 1500 人）と児童生徒（小 5，中 2，高 2：回答者約 1000 人）を対象に実施し，統計的な処理を実施し，分析した。

これらの調査から，沖縄県民の多くがしまくとうばに親しみをもち，子どもや孫がしまくとうばを話せるようになって欲しいと思っていることが分かる。また，しまくとうばの必要性を認識し，維持継承を支持してもいる。しかし，そのような意識が言語能力と言語活動に結びついているわけではなく，意識と行動の解離があると言える。すべての調査で，しまくとうばを話せるのは高齢者が中心で，年代が下がるほど人口に占める話者の割合が低くなり，10・20 歳代で話せるのは 10%以下となるということが示されている。また，40・50 歳代には聞けるが話せないいわゆる受動的母語話者が増加する。なお，話す能力については，40 歳代と 50 歳代で開きがでる。40 歳代までは子育て世代と言えるので，子どもにしまくとうばで話ができる親が少ないことは明らかである。また，60 歳代・70 歳代で話せる者も子どもや孫としまくとうばで会話をする機会は少ない。若い世代に話せるようになって欲しいと思っても，家庭等でそのような機会を提供していないのである。また，沖縄県が実施した県民意識調査では，学校で教えることが重要であると答えた県民が多かった。

6 保存・継承の取組の効果と課題

第 5 節で述べたように，沖縄県のアンケート調査で，県民の多くがしまくとうばの保存継承には学校での教育が重要であると考えていることがわかった。しかし，様々な課題がある。沖縄県文化協会が 2012 年度に，学校での取組に関して小学校 274 校・中学校 154 校を対象に調査を行った。その結果によると，授業や課外活動などでしまくとうばを教えているのは小学校で 80 校，中学校で 32 校であった（『琉球新報』2013 年 10 月 15 日）。多くの学校が無回答であったようであるが，その殆どが教えていない可能性が高い。琉球大学国際沖縄研究所では，文化庁の委託を受けて 2012 年に奄美・沖縄地区の小中高校を対象に同様な調査を実施したが，しまくとうば・シマグチの教育を行っている学校は少なかった（註 2 を参照）。教えない（教えられない）理由は，ほぼ共通していて，先生が話せないので教えることができない，教科書がない，時間がないなどであった。筆者は，2014 年に僻地校である国頭村立奥小学校の校長にインタビューしたが，同じようなことを述べていた。まず，教員のほとんどが他地区の出身で奥のしまくとうばを話せないので，教えることができない。また，指導要領で決められた時間数の授業をしないといけないので，しまくとうば指導を入れるのは難しいということであった。さらに，教員の情熱に任せていると，他校への異動があるので継続性の問題がでてくるとも指摘した。

学校教育も含めて，しまくとうば教育には講師養成と教材開発という課題がある。まず，しまくとうばに関しては，英語や国語のような免許はないので，現在しまくとうば

を教えている講師のほとんどが、大学の英語や日本語を専門とする学科で言語教育法や指導案作成・教材開発について体系的に学んではいない。講師養成講座などで何をどのように教えるのかを学んで、現場に立っているのである。英語教育・日本語教育や応用言語学など母語以外の言語の教授法を専門とする大学教員（または同等な資格を有する者）との連携が必要であるが、管見によれば現在のところはそのような連携はない。また、講師に関しては、高齢者が多いという課題がある。現状では、ごく一部の例外を除いて地域の高齢者がボランティアでしまくとうばを教えているのである。50 歳代までのいわゆる「現役世代」は、専任的にしまくとうば教育に関わる時間がとれないし、収入源としては不安定であろう。

最後に、2014 年に提起されたしまくとうば復興の一つの課題について述べたい。すなわち、しまくとうば標準語が必要かどうかである。作家の佐藤優氏（『琉球新報』2014 年 6 月 14 日）や大城立裕氏（『沖縄タイムス』2014 年 8 月 10 日）は、しまくとうばが生き残り、琉球が自立し、脱植民地化を図るには、「琉球語標準語」が必要であると論じている。筆者は、「標準語」に賛成する県民が少なくないことを知っている。標準語がないと、しまくとうばが全滅してしまうのではという危惧もある。

標準語として想定されているのが、首里・那覇方言か「沖縄芝居言葉」である。かりまた（2015）が述べているように、標準語が普及するようになると、地域で受け継がれてきた「弱小」しまくとうばを駆逐し、沖縄県の言語多様性を維持できなくなる可能性が高い。日本語の普及によりしまくとうばが衰退した歴史的事実を考えると、しまくとうば標準語を選定普及させることについては、疑問がある。

引用文献

- 石原昌英（2014）「しまくとうば意識と活動に見られる男女差」喜納育江編『沖縄ジェンダー学 第1巻 「伝統」へのアプローチ』p143-p165 大月書店。
- Ishihara, Masahide (2014) Language Vitality and Endangerment in the Ryukyus. In. Mark Anderson and Patrick Heinrich (eds.) *Language Crisis in the Ryukyus*. p140-p168. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- 沖縄県（2014a）「しまくとうば県民運動推進事業県民意識調査＜報告書＞」
- 沖縄県（2014b）「しまくとうばハンドブック 語てい んーだな しまくとうば」
- かりまたしげひさ（2015）「琉球列島の諸方言」『月刊琉球』（3月号）p13-p18。
- 島袋倫（2008）『琉球語に関する意識調査と琉球語復興の可能性』琉球大学大学院人文社会科学研究所修士論文。
- 「瀬戸内のシマグチ」編集委員会（2013）『瀬戸内のシマグチ』東京外国語大学国際日本研究センター。
- 那覇市（2013）「ちかてい あしばな しまくとうば（つかって あそぼう しまくとうば）」（低学年用）。

那覇市（2013）「ちかてい あしばな しまくとうば（使って 遊ぼう しまくとうば）」
（高学年用）。

琉球大学国際沖縄研究所（2013）『文化庁委託事業報告書 危機的に状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』

琉球新報（2002）『2001 沖縄県民意識調査』

琉球新報（2007）『2006 沖縄県民意識調査』

琉球新報（2012）『2011 沖縄県民意識調査』

※新聞記事は除いた。



24時間365日しまくとうば
沖縄しまくとうば放送局
放送時間表

〒904-0203
 沖縄県中頭郡嘉手納町嘉手納56-1
 株式会社クレスト 放送事業部
 TEL 098-957-1119
 FAX 098-957-1099



2015年1月～

時間	月	火	水	木	金	土	日
0 時 と 12 時	北谷町 老人クラブ (島言葉の継承)	うるま市 琉舞うるま会 (琉球舞踊)	豊見城市 小中学校 (島言葉の作文)	うるま市平敷屋 エイサー保存会 (エイサー)	西原町 西原むに一会 (沖縄の大綱挽)	那覇大綱挽 保存会 (那覇大綱挽)	東村老人会 (故郷の話)
1 時 と 13 時	沖縄市 知花老人会 (黄金言葉)	宜野湾市 老人クラブ (故里の民話)	うるま市文化財 保護委員会 (故里の民話)	嘉手納町 千原郷友会 (島言葉の継承)	嘉手納町 野国郷友会 (野国総管)	沖縄角力協会 (沖縄角力)	首里久場川 空手道場 (沖縄空手)
2 時 と 14 時	宜野湾市 うちなーぐち会 (故里の民話)	うるま市 老人クラブ (島言葉の継承)	島幸子 民謡グループ (故郷の話)	豊見城市 組踊保存会 (組踊)	名護市 久志老人会 (久志の行事)	沖縄伝統組踊 子の会 (組踊)	民謡ステージ 歌姫 (沖縄民謡)
3 時 と 15 時	豊見城市 琉球民謡研究会 (島言葉の継承)	北中城 ゆんたく会 (健康沖縄)	沖縄市琉舞 踊い華 (島言葉の継承)	今帰仁村島言葉 で遊ぼう会 (黄金言葉)	宜野湾野村流 サークル (沖縄民謡)	玉城流 寿宜玉草の会 (琉球舞踊)	宮城流 豊舞会 (琉球舞踊)
4 時 と 16 時	久米島郷友会 (郷友会)	壺屋陶器 事業協同組合 (壺屋焼き)	本部町 町民の皆様 (島言葉の継承)	在沖八重山 郷友会 (郷友会)	知花花織 事業協同組合 (知花花織)	久高島郷友会 (郷友会)	読谷村 文化協会 (芸能文化)
5 時 と 17 時	嘉手納町老人会 (故郷の話)	沖縄ブラジル 協会 (国際交流)	与那国郷友会 (郷友会)	中部保護区 保護司会 (黄金言葉)	勝連わらべの会 (島言葉の継承)	名護市 しまことば部会 (琉歌)	沖縄戦を 語り継ぐ会 (戦世の話)
6 時 と 18 時	恩納村老人会 (故郷の話)	沖縄ハワイ 協会 (国際交流)	沖縄県 闘牛組合 (沖縄の闘牛)	うるま市 みどり町自治会 (故里の民話)	伊是名郷友会 (郷友会)	大宜味村老人会 (故郷の話)	名護市 老人会事務局 (心のラジオ体操)
7 時 と 19 時	琉球びんがた 事業協同組合 (琉球紅型)	名護市老人会 (故郷の話)	読谷歴史 民俗資料館 (歴史民俗)	浦添市流舞 サークル (琉球舞踊)	北谷かりゆし 三線の会 (琉球古典音楽)	石垣於茂登会 (郷友会)	読谷村 楚辺老人会 (故里の話)
8 時 と 20 時	NPO沖縄県 沖縄語普及協会 (故里の民話)	野村流音楽 協会・師範 (黄金言葉)	沖縄市琉歌 やしま歌会 (琉歌)	読谷村老人会 (故郷の話)	国頭村 辺土名老人会 (故郷の話)	世界若者 リターン連合会 (国際交流)	北谷長老酒造 (琉球泡盛)
9 時 と 21 時	宜野湾市 上大謝名婦人会 (島言葉の継承)	嘉手納町 民話の会 (故里の民話)	NPO沖縄県 沖縄語普及協会 (黄金言葉)	与那原大綱曳 実行委員会 (与那原大綱曳)	嘉手納 商工会 (地域振興)	琉球ガラス生産 販売共同組合 (琉球ガラス)	沖縄県三線制作 事業協同組合 (三線制作)
10 時 と 22 時	沖縄市ハモニカ サークル (沖縄民謡)	沖縄市 うちなーぐち会 (島言葉の継承)	沖縄市銀天街 振興組合 (島言葉の継承)	平良新助翁記念 碑建立期成会 (ハワイ移民)	豊見城 龍船協会 (ハーリー)	那覇市 観光協会 (沖縄観光)	沖縄俳優協会 (沖縄芝居)
11 時 と 23 時	宜野湾市 自治会連合 (故里の民話)	沖縄宮古 郷友連合会 (郷友会)	劇団 美ら芝居 (沖縄芝居)	守礼之邦 民謡協会 (沖縄民謡)	国指定・ 伝統組踊保存会 (組踊)	角萬漆器 (琉球漆器)	松本料理学院 (琉球料理)

沖縄しまくとうば放送局は、1日24時間365日コマーシャルを含め全てが島言葉と島唄の放送局です。島言葉の継承と沖縄文化の発展を担って、日々活動している団体が毎週一回担当しています。夜は再放送されます。

<http://www.crest-ryukyu.co.jp/uchina/>

当番組では、以下の各社の御好意により楽曲を使用しています。
 有限会社キャンパス様／普久原音楽事務所(マルフルコード)様／
 有限会社照屋楽器様／株式会社普久原楽器様／Ruon社様

沖縄県名護市幸喜方言

かりまた しげひさ

1 沖縄県名護市幸喜の概要

名護市幸喜集落は、名護市の東シナ海側の集落で、名護市の南側に位置する集落である。恩納村の境界近くには喜瀬集落があり、その喜瀬集落の北隣の集落である。幸喜川が集落内を流れる水に恵まれた土地で、かつては水田が多く、コメ作りが盛んであったが、ほとんどの田んぼは砂糖黍畑に変わっている。集落の人口は、2013年12月末現在291人、男161人、女131人。世帯数は132世帯である。

2 名護市幸喜方言の概要

名護市幸喜集落の方言（以下、幸喜方言）は、北琉球方言の大きな下位グループである沖縄島北部方言のうちの中央山原方言に属する下位方言である¹。北部方言と一口にいつても、今帰仁村与那嶺方言や伊江島方言のように本格的な辞典と豊富な談話資料と文法記述を有する下位方言があるいっぽうで、方言母語話者は存在するが、隣接する中南部方言の圧倒的な影響をうけて変容し、伝統的方言の固有の言語的特徴を失いつつある恩納村恩納方言や話者人口が激減して集落の維持そのものが困難になりつつある国頭村内の下位方言もあって、その下位方言のおかれている状況は下位方言ごとに異なる。

名護市幸喜方言は、他の中央山原方言と同じく、日本祖語の*pを保持する。pa: (葉), pudi (筆) など。広母音*a, 半狭母音*oと結合する*kをhに変化させている。hadʒi (風), humi (米) など。語中bをwに変化させたり、脱落させたりする音韻変化がみられる。nawi (鍋), kui (首) など。両唇破裂音bの接近音wへの変化は、他の沖縄方言に見られない幸喜方言の特徴である。中央山原方言は、喉頭音化した無声破裂音と喉頭音化しない無声破裂音が音韻的に対立することを特徴とするといわれるが、幸喜方言のばあい、かつては子音の喉頭・非喉頭の対立を有していたが、現在は喉頭音化した子音も喉頭音化しない子音に統合され、その音韻的対立を失っている。語頭の母音と結合する喉頭破裂音も失われている。

3 地域コミュニティにおける方言保存活動

幸喜集落では1999年の区民総会で『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行を決定し、2000年4月から狩俣繁久（琉球大学・教授）と仲間恵子（琉球大学・非常勤講師）が刊行

¹ 沖縄北部方言の下位区分については、かりまたしげひさ(2006)「第1章 山原方言の概観」『名護市史言語編』pp3～29を参照。

のための聞き取り調査と原稿整理を行なっている。

『名護市幸喜方言辞典（仮称）』は、幸喜集落の宮城萬勇（1916～1985）さんが税務職員を定年退職したのち、集落のために何か貢献したいとかんがえて方言語彙を収集したものである。宮城萬勇さんは、1万6千語の方言語彙を収集し、B5サイズのバインダーに書き残していた。大学ノート形式の頁が縦に三つにわかれ、かな表記された単語が五十音順に並んだ532ページの方言辞典の草稿である。宮城萬勇さんのノートに記された見出し語は16052語であった。

幸喜集落在住、幸喜生まれ育ちで、両親も配偶者も幸喜出身のM.Y.氏（1916年～2012年）、M.H.氏（1920年生）、O.E.氏（1917年）の三人の伝統的幸喜方言話者から聞き取り調査をおこなっている。毎週火曜日の朝9時から2時間半、幸喜区公民館で行ない、2015年3月3日現在で539回の調査を実施している。ノートに記載された単語の音声と意味と品詞の確認、用例の検討と追加をおこなっている。確認作業の過程でえられた単語を追加し、意味記述、対応する日本語、用例を追加している。重複する単語や見出し語になっていた動詞や形容詞の活用形を整理し、見出し語になっていた慣用句を単語の下位項目にしたりして2000語近くが減ったが、新しく追加した単語は2000語近くになり、現在の収録予定の語数は17,218語で、最終的には18,000語前後になる予定である。なお、聞き取り調査に際してはSONYのデジタル録音機DIGITAL AUDIO TAPE-CORDER TCD-D10を使用し、90分テープの10DT-90RAに録音している。

これまでに琉球大学学生の宮里貴子さん、宮平涼子さん、中西朝子さん、佐藤友美さん、高橋ユキさん、田代達也さん、神山小百合さんなどが補助として同行した。

4 方言資料の収集と記録保存

2000年4月から2009年12月1日までは草稿のかな表記にみられた不統一を実際の音声で確認して手直しし、意味記述を確認する作業を行なった。2009年12月8日から2010年10月5日までは植物図鑑などで和名を確認しながら植物方言名の調査を行ない、2010年10月5日から2011年7月5日までは擬声擬態語の意味の確認と例文を追加するための聞き取りを行った。2011年7月19日から2011年9月21日までは意味記述を保留していた単語の確認を行なった。2011年9月27日から2012年7月31日までは形容詞の例文を充実させながら意味記述の確認を行なった。2012年8月7日からは、組み合わせる名詞の格形式を確認しながら、動詞の例文を追加した。あわせて多義語や類義語の記述にも注意をはらって聞き取り調査を行なっている。

辞典刊行にむけた確認作業の過程でえられたデータをもとに書かれた以下の論考がある。1～3は、形容詞と擬声擬態語の語彙的な意味記述を行なったもので、4～7は名詞の格形式と可能表現と擬声擬態語の文法記述を行なったものである。

1. かりまたしげひさ(2015)「語構成からみた沖縄県名護市幸喜方言の形容詞」『琉球の方言』39号、法政大学沖縄文化研究所
2. かりまたしげひさ・仲間恵子。宮城萬勇(2014)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語一和琉辞典のこころみ」『琉球の方言』38号、法政大学沖縄文化研究所。

3. かりまたしげひさ・仲間恵子(2013)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『琉球の方言』37号, 法政大学沖縄文化研究所。
4. かりまたしげひさ(2014)「名護市幸喜方言の可能表現の文」琉球大学法文学部紀要『日本東洋文化論集』第20号。
5. かりまたしげひさ(2013)「沖縄北部名護市幸喜方言の格形式」琉球大学国際沖縄研究所『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成研究推進成果報告書』第2号。
6. かりまたしげひさ(2012)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『日本東洋文化論集』第18号。
7. かりまたしげひさ(2008)「名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて－ga格, nu格, ハダカ格, jaのとりたて形－」『日本東洋文化論集』第14号。
8. かりまたしげひさ(2014)「沖縄県幸喜方言」『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業(八丈方言・国頭方言・沖縄方言, 八重山方言)』
9. かりまたしげひさ(2008)「幸喜方言－私のフィールドノートから」『月刊言語』10月号

5 意味記述

3の「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」では、語彙的な意味のニュアンスや感覚を理解するのが難しい擬声擬態語に例文を付すことで、ある程度の解決をはかった。同時に、例文は多義的な意味の理解もたすける。

ガーガー【副詞】 (1)ががあ。カラスなど鳥が騒がしく鳴くさま。クーン ガラサー ヤ ガーガー ナキ ヤガマハヌ (今日のカラスはががああ鳴いてうるさい)。(2)がやがや。騒がしいようす。チュー アチマティ ガーガー ムゲイスガ, ヌー エガヤー (人が集まってがやがや騒いでいるが, 何だろう)。(3)ぺちやくちゃ。おしゃべりなさま。ガーガー ムヌンカ ユムン (ぺちやくちゃおしゃべりばかりする)。

ソーロソーロ【副】 (1)さらさら。よどみなく流れるさま。ミジヌ ソーロソーロ ナガリン (水がさらさら流れる)。(2)するする。なめらかに移動, 進行するさま。パウヌ ソーロソーロ ピニギティ イクン (蛇がするする逃げて行く)。(3)すらすら。なめらかに出るさま。アンチ パナシヌ ソーロソーロ イジティ クン ムヌヤー。(そんなに話がすらすらと出て来るものだねえ)。

これまでの方言辞典が琉球方言を見出し語にした琉和形式のものであったのに対して, 2の「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語－和琉辞典のこころみ」は, 方言を知らない世代でも利用できるよう日本語を見出しにして, 日本語からひける和琉の擬声擬態語辞典である。これは本格的な和琉辞典編纂のための予備的なものである。なお, 和琉にしたことに

よって、一部の見出し語の内部で類義語を対照できるようになっているものがある。

むずむず【副】ハガハガ。やりたくてたまらず落ち着かないさま。チューガ スース ミチ ドゥーマディ シーブサヌ ハガハガ スン（人がしているのを見て自分までやりたくてむずむずする）。⇒うずうず。／ **プトゥプトゥ。**（1）歯がゆく、もどかしがるさま。クワーガ スース プトゥプトゥシ ミッチュン（子どもがするのをむずむずして見ている）。（2）何かやりたくてたまらないさま。欲しがるさま。カミブサヌ プトゥプトゥスン（食べたくてむずむずしている）。⇒うずうず。ぶるぶる。がたがた。／ **ムジュムジュ。**（1）やりたくてたまらず落ち着かないさま。チューガ スース ミチ ドゥーマディ シーブサヌ ムジュムジュ スン（人がしているのを見て自分までやりたくてむずむずする）。イナグヌ シーバイ シーブサヌ ムジュムジュ シー タッチュン（女が小便をしたくてもぞもぞして立っている）。（2）もぞもぞ。小さな虫が着物の下などでうごくさま。⇒うずうず。もぞもぞ。／ **ムサムサ。**小さな虫が着物の下などでうごくさま。キヌヌ ナハニ ヌーガ イッチュラムサムサ イジュクン（服の中に何が入ったかむずむず動く）。⇒もぞもぞ。

がやがや【副】ガーガー。騒がしいようす。チュー アチマティ ガーガー ムゲイスガ、ヌー エガヤー（人が集まってがやがや騒いでいるが、何だろう）。⇒ががあ。ぺちやくちゃ。／ **ガヤガヤ。**騒がしいようす。大勢の人々が口々に何かをいうようす。チューガ ウポホヌ ガヤガヤシ ヤガマハン（人が多くて、がやがやとうるさい）。イッタガ ガヤガヤ アウィトゥ、ムヌン キカラン（おまえたちががやがや騒ぐので、何も聞こえない）。／ **グッサグッサ。**大勢の人が集まってそうぞうしいさま。大勢の人がそうぞうしく出入りするさま。どやどや。グッサグッサ チューヌ アチマトゥン（がやがやと人が集まっている）。シバヤーラ グッサグッサ チューヌ イジティ クン（芝居からどやどや人が出て来る）。⇒うようよ。うじゃうじゃ。ごちゃごちゃ。／ **グッサナイ。**大勢の人が集まってそうぞうしいさま。大勢の人がそうぞうしく出入りするさま。どやどや。チューヌ グッサナイ イッチ クン（人がどやどや入ってくる）。⇒うようよ。うじゃうじゃ。わんさと。どっさり。ごちゃごちゃ。／ **ムタナイ。**大勢でさわがしいさま。わいわい。ケッサヌ チューガ ムタナイ サワグン（大勢の人ががやがやと騒いでいる）。／ **ムタムタ。**大勢でさわがしいさま。わいわい。ケッサヌ チューガ ムタムタ サワジュン（大勢の人ががやがや騒いでいる）。／ **ワサナイ。**大勢で騒がしいさま。ざわざわ。ワライタガ ドゥク ワサナイ サワジュトゥ ニンバラン（子ども達があまりにがやがや騒いでいるので眠れない）。／ **ワサワサ。**大勢で騒がしいさま。ざわざわ。ワライタガ ワサワサ サワジ ニンバラン（子供たちががやがや騒いで眠れない）。⇒そわそわ。

方言を話せない世代にとってその類義語間の意味のちがいの記述も重要なので、適切な例文をあげて記述するようつとめている。

形容詞は、人や物の特徴や状態を表す単語で、その意味の中に人々の感覚や感情が刻印されている。形容詞の表す意味は標準語と幸喜方言で大きく違うものがあるし、多義語も

おおい。たとえば、**アヤハン**は、形のうえでは「あやしい」からきているが、危ない、危なっかしいの意味を表し「あやしい」とは意味が異なる。同じ形容詞でも物の特性を表すときと人の特性を表すときとは意味が異なり、多義語になる。

アヤハン ajahaN【形容詞】(1)あぶない。危険だ。マンザモーヌ パンタヤ アヤハトゥ キー シキリヨー (万座毛の崖は危ないから気を付けろよ)。(2)あぶなっかしい。見るからに危なげである。ワライヌ ポーチャ シカイスヤ アヤハン (子供が包丁を使うのは危なっかしい)。

アパハン apahaN【形容詞】(1)味が薄い。薄味の。クーヌ ミスジルヤ アパハヌ ヌマラン (今日の味噌汁は薄くて飲めない)。(2) (話などの内容が) 単調な。空疎な。アヌ チューヌ パナシヤ アパハヌ ウソク ネン (あの人の話は単調でおもしろくない)。(3)人の性格が控えめな。淡泊な。あっさりした。アリヤ ムヌー ヤーヌ アパハヌ チュー エン (彼は物を言わず、控えめな人だ)。

パゴホン pagohoN【形容詞】(1)汚い。汚れていて不潔なさま。ピサ ドルブッタ ナレイ パゴホタン (泥だらけになって足が汚かった)。(2)くすぐったい。ワーキンチャ グチュマリネヤ パゴホン (脇の下をくすぐられると、くすぐったい)。

形容詞をふくむ慣用句も例文付きで詳しく意味や使い方を説明する必要がある。パーパゴホンは、直訳すると、歯が汚い、あるいは歯が痒い^{かゆ}だが、ワライヌ スースヤ パーパゴホヌ マーラン (子どものするのはもどかしくて見ていられない) の文では、もどかしい、じれったいの意味を表す慣用句だ。ピサ パゴホンも直訳すると足が痒い^{かゆ}となるが、マーヤ パウ ウイギサヌ ピサ パゴホン (そこはハブが居そうで二の足を踏む) の文では草むらなどにハブが居そうで二の足を踏む、あるいは、足を踏み出すのに躊躇^{ちゅうちよ}するときなどに使用する慣用句だ。幸喜方言らしさは慣用句にもあらわれる。

動詞の「見分ける」にはミーワカスンとミーワキンがあり、「混ぜる」にはマンキンとマンジンとハカスンがあるが、それぞれの意味を実現するための格支配がわかるような例文をあげる工夫をしている。

ミーワカスン mi:wakasuN【動詞】(1)違いをみつけて区別すること。弁別する。識別する。並列助辞-トゥでならべた名詞をしたがえる。チュートゥ ウヤ ミーワカスン (他人と親を見分ける)。(2)違いによって区別すること。差別する。格助辞のつかないハダカ格の名詞だけをしたがえる。チュー ミワカスン (人を差別する)。
ミーワキン mi:wakiN【動詞】見分ける。違いをみつけて区別すること。弁別する。識別する。並列助辞-トゥでならべた名詞をしたがえる。チュートゥ ウヤ ミーワキン (他人と親を見分ける)。

mi:wakasuN (見分ける) は、mi:wakiN (見分ける、区別する) の語幹に他動詞や使役動詞をつくる接尾辞-asuN (-せる) をつけた他動詞だ。見分ける、区別するの意味を実現するときは、どちらも格助辞-tu を後接させて、tʃu:tu ʔuja mi:wakiN (他人と親を見分ける)

のようにいう。そして、mi:wakasuN は格助辞のつかないハダカ格の名詞だけをしたがえ、tʃu: mi:wakasuN（人を差別する）のように、差別するという意味を実現させる。

マンキン maNkiN【動詞】 混ぜる。多くのものに少しのものを混ぜる。混ぜ入れる。格助辞-ニを後接させた名詞をしたがえる。ムギヌフーニ サータ マンキン（麦粉に砂糖を混ぜる）。

マンジン maNdʒiN【動詞】 混ぜる。二つ以上のものを混ぜる。混ぜ合わせる。並列助辞-トゥでならべた名詞をしたがえる。サクムヌトゥ ムチムヌ マンジン（粳と糯を混ぜる）。

ハカスン hakasuN【動詞】 掻き混ぜる。かきまわして混ぜあわせる。ハダカ格の直接対象だけをしたがえる。サータ イッティ サジチ コーヒー ハカスン（砂糖を入れて、匙でコーヒーを混ぜる／掻き混ぜる）。

maNkiN（混ぜる）と maNdʒiN（混ぜる）はよく似るが、したがえる名詞の格形式がちがう。maNkiN は、格助辞-ni を後接させた名詞をしたがえ muginuhu:ni sa:ta maNkiN（麦粉に砂糖を混ぜる）のようにつかわれ、「多くのものに少しのものを混ぜいれる」の意味を実現する。maNdʒiN は格助辞-tu を後接させた名詞をしたがえて、sakumunutu mutʃimunu maNdʒiN（粳と糯を混ぜる）のようにつかわれ、「同量のものを混ぜあわせる」の意味を実現する。hakuN（混ぜる、かき混ぜる）はハダカ格の直接対象だけをしたがえる他動詞だ。

6 まとめ

中年層、若年層の伝統的幸喜方言の保有度と優勢な中南部方言の浸透をかんがえると、伝統的幸喜方言の危機的な状況は深刻である。しかし、幸喜区民が『名護市幸喜方言辞典（仮称）』の刊行を支持、期待していること、それに付随して刊行されるであろう記述文法、辞典編集作業の過程で残される録音資料などを考慮すると、幸喜方言は良質な資料がのこされた継承可能な方言とみることができる。伝統的幸喜方言の継承は、辞典と文法書を刊行したのちの取り組みにかかっている。

7 引用文献

かりまたしげひさ(2006)「第1章 山原方言の概観」『名護市史言語編』

沖縄県首里方言

當山 奈那

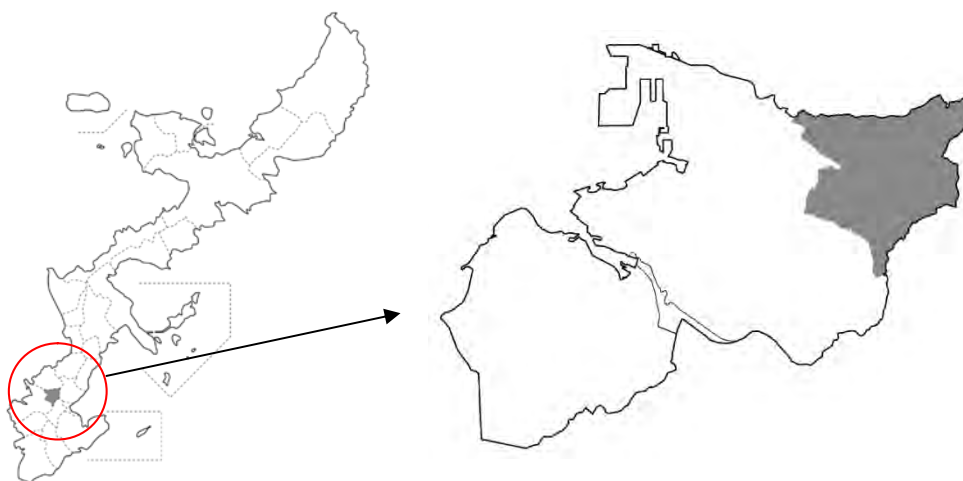
1 首里の概要

「首里」は沖縄島の一地域であり、那覇市の北東に位置し、西原町、南風原町、浦添市と隣接している。沖縄島は、14 世紀まで「按司」「世の主」と称された群雄の割拠の時代がつづき、14 世紀から 15 世紀のはじめにかけて北山、中山、南山の王が対立する三山対立時代となった。1406 年に中山に属する佐敷按司、尚巴志が首里に攻め入って中山をのっとり、1416 年に北山、1429 年に南山を滅ぼして沖縄島を統一した。以後、首里は琉球列島全体の政治と文化の中心地となった。尚真王（1477～1526 年）の時代に中央集権制がととのい、首里は名実ともに琉球王府の首都となった。

1609 年に島津の琉球入りがおこり、琉球は事実上、島津の属国となった。明治維新により、1829 年に那覇に置かれた内務省出張所が県庁となることにより、1879 年に沖縄県がもうけられ、那覇が首里にとってかわり政治の中心地となった。首里は、首里市や首里区という行政区として存在していたが、1954 年（昭和 29 年）に那覇市の一部となった。

現在の首里の町には、真和志町、池端町、山川町、寒川町、金城町、汀良町、赤平町、儀保町、久場川町、桃原町、大中町、当蔵町、赤田町、崎山町、鳥堀町、平良町、大名町、末吉町、石嶺町が存在するが、このうち、平良町、大名町、末吉町、石嶺町は旧西原村に属していた。1906 年（明治 39 年）に平良町が、1934 年（大正 9 年）に字石嶺、字末吉、字大名が当時の首里区に編入され、現在に至っている。

【図 1】沖縄島における首里の位置と、那覇市における首里の位置¹



¹ 白地図専門店（<http://www.freemap.jp/>），ちずびと（<http://chizubito.com>）より加工して掲載。

首里は、現在までに人の出入りが激しく、人口における年輩の方の割合と首里方言話者の割合はかならずしも一致しない。首里各地域出身の 75 歳以上の方であれば首里方言を使用できると思われる。しかし、75 歳以上でも、年齢の差によって敬語を使い分けなければならないという考えが話者らにあり、この区別が難しいため、標準語を日常的に使用することのほうが多いという方もいる。また 50 代後半から 60 代以上なら方言を聞いておおむねその内容を理解することができる。2010 年国勢調査結果を参考にして、首里の地域別の人口と 75 歳以上の人口、および人口総数における 75 歳以上の割合を表に示す。旧西原村と三箇に属する地域はわけた。上述したように、表における 75 歳以上の方すべてが首里各地域の出身とはいえないし、それぞれの地域出身の方が戦後、別の首里の地域や那覇市、他の市町村に移住した可能性もある。

【表】首里地区における人口（2010 年国勢調査結果を参考に作成）

町名	総数 (人)	75 歳以上 (人)	75 歳以上の割合		町名	総数 (人)	75 歳以上 (人)	75 歳以上の割合
赤平町	1134	127	11.19%	旧 西 原 村	石嶺町	18759	1565	8.34%
池端町	182	36	19.78%		大名町	4556	474	10.40%
大中町	720	98	13.61%		末吉町	4048	329	8.12%
金城町	2178	235	10.78%		平良町	1384	120	8.60%
儀保町	1388	181	13.04%	三 箇	赤田町	956	104	10.87%
久場川町	3321	340	10.23%		崎山町	1885	213	11.29%
寒川町	1448	134	9.25%		鳥堀町	4558	408	8.95%
汀良町	2070	222	10.72%					
当蔵町	1280	149	11.64%					
桃原町	825	92	11.15%					
真和志町	313	54	17.25%					
山川町	2434	265	10.88%					

「首里方言」について、首里の地域で話されている士族階級や貴族階級の人のことば、あるいはその子孫のことばであると定義されることが多い。このように、限られたごく一部の人間が話すことばについて、一方では、沖縄の「共通語的存在」「標準語」としてよく定義される。例えば、宮良（2000）は、「首里方言は王朝文化の薫り高いことばであり、士族のことばであり、琉球圏内では書きことばとして標準語の役割を果たしたことばである²」と述べ、柴田（1987）は、「首里は長く琉球の政治文化の中心であったために、その方言は琉球諸島における共通語として広く通用した³」，「このような階級に基づく言

² 宮良信詳（2000）はしがき

³ 柴田武（1987）pp47.

語の使い分けがあるだけでなく、言語使用全体にわたって厳格な敬語の規範がある⁴」と述べる。「階級性」と「共通性」、首里方言とはどんなことばかをみていくとき、先行研究におけるこのふたつの定義は一見矛盾しているようにみえる。

本報告では、「首里方言」のことを述べるにあたって、まず「首里方言」という用語を定義することにする。首里方言には地域方言と社会方言（一部、階級方言）が存在している。この観点から、「首里方言」は、「首里階層方言」「首里地域方言」「首里那覇社会方言」の3つに分けることができる。報告者は社会言語学を専門としておらず、特に社会言語学用語には見直しが必要であるが、このような概念を与え、3つを区別することで、これまで「首里方言」とひとくくりにされていた方言の実態をより把握しやすくなると考える。

（1）首里階層方言

「首里階層方言」とは、いわゆる「首里士族語」の後継語であり、階層方言である。

上村幸雄（1963）によれば、尚真王時代にしかれた中央集権制によって、首里には「大名（デーミョー）」、「侍（サムレー）」あるいは「ユカッチュ」とよばれる貴族階級、士族階級と「百姓（ヒャクショー）」とよばれる平民階級が存在するようになった。この階級の区別は厳重であり、「言語も階級ごとに違いがあり、ことに士族と平民との間には目立った差異があった⁵」。上村は、士族の男子は成年になると、音素体系や親族呼称（名称）、敬語表現を獲得したとのべている。また、加治工晋市（1983）では、「首里方言は平民語の音韻体系を基盤として、それに意図的に学習して獲得された士族語の音韻が乗りかかり、音の張りあい関係が統一されていたのである⁶」とのべる⁷。

『言語学大辞典』では、「方言」は「一般に地域差を伴っているので、単に方言といえは通常は「地域方言（regional dialect）」をさす⁸」と定義されている。また、「言語学においては、「方言」をある地域の言語体系ととらえ⁹」ることによって、「地域語（regional speech）」、「地方語（vernacular）」という用語を用いることもあるとしている。この定義にしたがって、方言の定義を地域的なことばの違いであるにとらえた場合、加治工（1983）のいう首里方言の「士族語」は「地域方言（regional dialect）」にはあてはまらない。通常の「方言」ではないのである。

一方で、「階層方言（class dialect）」という用語が存在する。「地域差ではなく、社会階級ないし社会階層による言語差にも方言という用語を拡張して用いたときに、階層方言とよぶ。社会方言（social dialect）ともよぶが、後者は性差や世代差なども含めたよ

⁴ 同上。

⁵ pp.19

⁶ pp.33

⁷ 『那覇市史 那覇の民俗』（pp.849）では、首里方言を「上流語」「中流語」「庶民語」の3つに分けることができるとし、それぞれの親族名称のちがいや、敬語表現のちがいについて例をあげている。上流語は尚家（琉球王家の子孫）とその一族や、中流は士族、庶民語は一般の平民が話すことばであるという。

⁸ pp.1268

⁹ 同上。

り広い概念で用いられ¹⁰⁾る。すなわち、「階層方言」は、社会的に明確に分けられ、身分的に固定している「階層」による差に限定して用いるのに対し、「社会方言」とは、「もっと連続的で流動的な「階層」による差や男女差など、さまざまな成員差をも含めていうときは社会方言という¹¹⁾」と定義されている。この定義から検討すると、尚真王時代にしかれた階級制度にもとづき、個人の成長過程において訓練をうけ、一般の人々や士族の女性とは異なる発音を自らの階級の目印として習得することで他の身分に属する人々と区別する首里の士族語は、「階層方言(class dialect)」の特徴を備えているといえよう。服部四郎(1955)によれば、(音韻的)区別は長ずるに及んで後から習得するものであるために、高齢になってその区別を失ってしまい、幼児期に習得した平民と同じタイプにもどっている人もいるという。このことは、発音や親族名称など、一定の知識さえあればある程度の士族語を習得することが可能であることと、「士族語」が「地域方言」ではないことを示している。

首里階層方言は、具体的には、「サムレー」「ユカッチュ」の成人男性が用いた士族方言のほかに、「デーミョー」すなわち、首里王家や地方から集められた按司とその家族たちが用いた貴族方言がある。また、士族や貴族の女性が用いた方言もここに分類される。

中松竹雄(2004)、比嘉成子(1987)、伊豆山敦子編(2006)の談話資料が首里階層方言にあてはまる。

首里階層方言は、音韻上、語彙上の特徴をもっている。また、社会上、重要な特徴は次の3点である。①支配者階級の言語として明治時代の廃藩置県までは有力な位置をしめていたこと、②宮廷芸能である組踊りや琉歌は首里階層方言が用いられた(用いられている)こと、③『沖縄語辞典』という辞書の刊行が、現在にわたって「あるべき姿」の言語をつくりあげていった。ある発話が正しいかどうかは、文脈によって判断されるのではなく、辞書にのっているからであるとか、琉歌や組踊りという「本物」の言語のなかで使用されるからというような事実によって決められるようになる。そこからずれた言語変種の発話は、例えば、新聞や雑誌のなかで上の事実を根拠に間違いだと非難されることがある。

さらに、首里階層方言のバラエティ(変種)としての屋取方言がみとめられる。これらの首里階層方言は、沖縄本島において優勢言語としてはたらいっている可能性がある。

首里階層方言は、音韻上の特徴や、「ウンチョービ(髪)」のような特有の語彙が用いられなくなっているなど、一見、衰退しつつあるようにみえる。しかし、首里階層方言は少しずつ変化しながら、現在もなお都会部の威信的な方言として脈々と受け継がれて使用されている。言語が体系として存在しているならば、今後形成されていく首里方言が階層方言の名残を残した威信方言であることは変わらない。首里階層方言は、これからも形を変えながら受け継がれていくと予想する。

(2) 首里那覇社会方言

「共通語」として語られる「首里方言」について整理する。上でみたような士族対平民の対立ではなく、都会対地方の社会階級の差によって「リングフランカ」として生まれた

¹⁰⁾ 『言語学大辞典』(pp.179)

¹¹⁾ 同上。

社会方言である。「首里方言」は沖縄島方言、あるいは琉球諸語において「共通語的」「標準語的」な存在であり、「規範性」をもつとされる（加治工（1983）、中松（2010）、比嘉（1987）、津波古（1997））。このような表現は首里方言が語られる際にはよくみられる。まず、ここでは「標準語」と「共通語」とを区別することにする。

『現代言語学辞典』では、「標準語」を次のように定義している。少し長くなるが引用する。

「ある国において全国的に用いられ、洗練された規範的なものとして広く認められる言語。一般に方言に対すると考えられ、その国の政治、経済、文化の中心で使われる言語変種（variety）であることが多い。標準語は、主に書きことばとして法令・公文書・教科書・新聞などに用いられるが、ラジオやテレビのニュース、公式の場における講演などにおいても使われ、いわゆる「正しい」または「よい」言語と考えられている。」

「共通語」は、次のように定義される。

「言語を異にする人たちの間で、互いの意思疎通のために共通に用いられる言語のこと。一つの言語内でも、方言（dialect）の話し手の間で意志疎通のできることを、方言に対して共通語という。」

このように、「標準語」と「共通語」は異なる概念をあらわしている。日本語標準語は沖縄県内においても「標準語」であるが、首里方言や那覇方言は「標準語」ではない。かりまた（2013）は、沖縄地方において通用する共通はなしことばとしての共通語を「リングフランカとしての共通語」とよぶ。戦前から戦後にかけて、都市化の進んだ首里那覇の方言は他の地域方言に対して高い威信をもっていた。周辺の地域方言の話し手らが就職や進学のために都会の那覇に移住した場合、彼らの方言は首里那覇方言の話し手にとって「変わっていることば」とみなされた。あるいは、大都市に対して小都市出身である周辺方言の話し手たちが「自分たちの方言は変だ」という認識をもたされた。一方で、首里那覇方言の話し手は自分たちの話すことばを「変」と思うことはない。劣等感をかかえた周辺方言の話し手は自分たちの話すことばを「首里那覇方言」に修正しようと努力する。沖縄島北部方言に属する奥方言の話者、島田隆久さんは次のように述べている。「高校から村外に出た。奥の方言は独特で恥ずかしいと思って、また共通性が低いから使わなくなった。かといって完全な那覇の言葉も使えない。奥の言葉の様子が入った混合の言語を使っていた。奥の人が那覇で使う言葉を「シマナカー」といった（沖縄タイムス 2013年9月8日掲載）」。奥方言なまりの那覇方言のことを、奥の人々は「シマナカー」と呼ぶ。「シマナカー」は、奥方言の話者が那覇方言を目標言語（target language）にした言語習得過程に生じた中間言語とみなすことができる。「シマナカー」もリングフランカとしての「共通語」のバラエティ（変種）のひとつである。

このような首里方言や那覇方言を目標言語にした中間言語は、「シマナカー」だけではなく、戦前から戦後にかけて数多く存在したと考える。これは定められた階級によるものではなく、経済的にも教育的にもアドバンテージをもつ先住民の都市エリートと、教育や

職の機会を得るために上京してきた地方住民との新たな階層化のなかで生まれた。これが先行研究のいう「共通語」、すなわちリングフランカとしての「首里方言」の実態であろう。

このようなリングフランカは、各地の地域方言に対する威信的な地域の方言の不均衡な関係から生じてきた。共通語的な方言の存在とは、諸方言のなかにおいても、マジョリティの方言とマイノリティの方言が存在し、マジョリティの方言が威信的にはたらくことを示している。個人や個性がみえない「共通語」は、首里の地域方言や那覇の地域方言を土台として作り出されたものであったとしても、もはや地域方言とはみなせず、「社会方言」というべきである。「共通語」の「規範性をもつ」という表現は奥方言のような地域方言との関係のなかから構築された方言間の権力関係をまさにあらわすものと思われる。

首里と隣接する那覇の方言は、アクセントと一部音韻、語いなどをのぞけば首里方言とよく似ている。このことと相まって、首里を吸収合併し、今日では都市化がもっとも進んだ那覇市を中心に「沖縄方言」「沖縄語」や「うちなーぐち」とよばれるどこの集落のことばともいいがたい、言い換えると、地域方言の特徴をうしなった首里那覇共通語というべき方言が形成された。以降、このような首里方言を「首里那覇社会方言」とよび、首里階層方言とも首里地域方言とも区別する。また、いわゆる那覇四町（東、西、若狭、泉崎）の「那覇社会方言」とも区別している。

（３）首里地域方言

首里における「地域方言（regional dialect）」は、「ヒャクショー」とよばれる平民階級が使用していた言語の後継である。しかし、報告者の調べによると、首里の「地域方言」の研究はこれまでほとんどなされていない。上述した 19 の町によって地域差も存在している（していた）可能性もあるが、これまでの研究からは方言差をうかがいしることはできない。王府から泡盛の製造を許された赤田・崎山・鳥堀の三箇と称される地域の方言が他の地域の方言とどのように違っているのかも不明である。もとは西原村に属していた平良・石嶺・末吉・大名は、首里の他の地域とはかなり異なっていると聞くが、どのように異なっているのか先行研究からはみえてこない。これらの方言は、「美しい」「純粋な」「標準的な」「共通語的な」「規範的な」方言であると研究者に語られてきた首里階層方言によって、地域的な差異も「平民語」「平民方言」「庶民語」の名称のもとにくぐられ、おおいかくされてきた「地域方言」ととらえられる。このような首里のことばを以降「首里地域方言」とよぶことにする。

なお、本報告をまとめるにあたって、首里地域方言といえる資料を探したが見つけることができなかった。

以下、「首里階層方言」「首里那覇社会方言」「首里地域方言」を区別して用いる。この 3 つ（あるいは「首里階層方言」「首里那覇社会方言」の 2 つ）の総称として、「首里方言」という用語は用いることにする。

2 首里方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

首里振興会主催の「かたやびらしまくとうば大会」が2014年9月27日、那覇市首里の石嶺公民館で開かれている。首里地区の小中学生に、古里に誇りを持ってほしいと同会が毎年開催している。2014年の大会では、2中学校、6小学校の13組・計63人が出場した。学校紹介や祖父母から聞いた戦争体験、習い事に挑戦する姿勢などを、方言で発表している。

2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

平成26年度9月26日(土)に石嶺公民館で催された方言大会に、大名小学校、石嶺小学校、城西小学校、城東小学校、城南小学校、城北小学校、首里中学校の児童生徒が参加している。各学校が、具体的にどのような方言学習を行っているのかは未調査である。行政側の取り組みとして、市立の小中学校では那覇方言のテキスト『使って遊ぼうしまくとうば』が配布されている。

2.3 地域の人の協力の状況

石原昌英(2013)によれば、方言の保存継承を目的としたNPO団体が存在している。沖縄普及協議会(元、沖縄方言普及協議会)、NPO法人うちなあぐち会である。沖縄語普及協議会は、会員向けに「うちなあぐち新聞」の発行をしている他、『はじみらな、うちなあぐち初級用』『沖縄ぬ暮らしとう昔話』のような教材の出版も行っている。また、「かたやびらしまくとうば大会・首里」の協賛者でもあるなど、首里地区の方言普及活動に貢献している。NPO法人うちなあぐち会は、会誌『ゆんたくひんたく』を発行している他、沖縄市や宜野湾市を中心に講座を開いている。その実践に基づいた「うちなあぐち教本」と「うちなあぐち指導書」を作成している。うちなあぐち会の本部は沖縄市にあり、中部地区で広く通じる方言を教材に用いているとあるが、音韻や文法に首里方言らしい特徴がみられるため、首里那覇社会方言とよんでもいいのかもしれない。教本を見てみると、「それぞれの家庭でどのように言うか聞いてみよう」というような地域ごとの方言の違いをふまえた上での設問の工夫がみられる。

沖縄県立博物館・美術館の指定管理者である文化の杜共同企業体は、「しまくとうばプロジェクト」という自主企業をたちあげて、月に2回、3回の企画を実施している。他に講座も実施しており、県内大学の研究者や識者を講師として呼んでいる。2014年は12回の講座が実施された。内容は、首里階層方言、首里那覇社会方言に関する音韻、文法、敬語表現に関することが主であった。

2.4 保存・伝承の取組に関する地域の特徴

首里那覇社会方言によるラジオやテレビ番組がいくつか存在している。例えばラジオ沖縄で放送されている「方言ニュース」は代表的なものである。琉球新報の記事をもとに沖縄県内のニュースや話題についてキャスターが方言で語るものである。2004年からはインターネット上の配信がはじまり、ポッドキャスト配信もはじまっている。最近ではテレビ番組で方言を積極的にとり入れる試みもみられる。「うちなあぐちあそぼう」

(NHK 沖縄放送局) は代表的である(脚本は比嘉光龍, 高良勉による)。また, バラエティ番組でも方言をとりいれようとする企画が散見された。

新聞では, 沖縄タイムスによる方言新聞「うちなぁタイムス」がある。モノレールの改札フロアや JTA の機内では, 日本語のアナウンスと併用して首里那覇社会方言のアナウンスを流すという試みもなされている。

行政側の取り組みとしては, 今年度, 那覇市内の小学校では読本として那覇方言のテキスト『使って遊ぼうしまくとうば』が配布された。

特にテレビ番組に関して言えば, その性格上の問題か, 首里那覇社会方言の比重が大きく, 他の方言が取り上げられにくいという印象がある。

3 首里方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

首里地区を対象にした言語・方言に関する市町村, 大学(研究室を含む), あるいは, 研究者グループが行った意識調査の報告は, 管見の限りみつけることができなかった。

ただし, 参考になる資料としては, 沖縄県文化観光スポーツ部が沖縄県内在住者に対して行った「しまくとうば」に関する意識調査の報告書¹²(平成 26 年 2 月)があり, 「南部地区」としての報告がある。首里地区は南部地区に含まれる。以下, この調査の報告内容をまとめる。

20 歳から 79 歳の成人男女を対象にした一般県民調査と, 小学校 5 年生, 中学校 2 年生, 高校 2 年生を対象にした児童生徒調査がある。一般県民調査は, 訪問面接調査(調査員が一般世帯を直接訪問)によって調査がなされており, 児童生徒調査はアンケート調査によるものである。調査内容は一般県民調査も児童生徒調査も一部を除き同一である。

調査内容

- 1) 属性 性別, 年代, 居住地, 出身
- 2) 設問
 - ① しまくとうばへの親しみ
 - ② しまくとうばの使用の度合い
 - ③ しまくとうばの理解度
 - ④ しまくとうばを使う相手
 - ⑤ しまくとうばの日常生活での必要性
 - ⑥ 子供達に対する意向
 - ⑦ 普及させるための方法
 - ⑧ 自由意見

¹² 報告書は 2015 年 2 月現在, web 上で公開されている。

(<http://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/documents/kennminnisikityousa.pdf>)

データの回収結果について、一般県民調査の南部地区の回収件数は627件、このうち那覇市在住者の回収件数は361件であり、これは南部地区の57%、県内全体からみても23%を占めている。児童生徒調査は南部地区で397件、県内全体で35%である¹³。

3.2 意識調査の結果の分析

報告書の性格上、他の地区（北部地区、中部地区、宮古地区、石垣地区）との比較にみる南部地区としての特徴をみていくのみになる。①しまくとうばに対する親しみについては、南部地区では「親しみを持っている」が46.2%であり、宮古地区、北部地区に続いて高い。②しまくとうばの使用頻度については、南部地区は「しまくとうばを主に使う」9.4%と「共通語と同じくらい使う」が22.8%であわせて32.2%である。これは、沖縄島内では最も低い。③しまくとうばの理解度についても、「よくわかる」22.7%、「ある程度わかる」が43.9%で、沖縄島内では一番低い理解度である。④しまくとうばを使うと回答した方に、しまくとうばを使う相手をたずねたところ、最も多かったのは「友達」で60.2%である。次いで、「父母」が49.1%となっている。「友達」がトップなのは全地区で共通している。⑤日常生活にしまくとうばが必要かどうかについては、「非常に必要だと思う」と回答したのが20.2%であった。これは、北部地区、宮古地区に続いて高い。⑥子供達にしまくとうばを使えるようになってほしいかという質問に対しては、37.7%が「是非、使えるようになって欲しい」と回答している。これも、宮古地区、北部地区に続いて高い。⑦普及させるための方法としては、「学校の総合学習などでの実施が」最多で72.6%であった。

このように、南部地区のみみていくと、方言を残したいという住民の意識は高いように見える。ただし、「しまくとうばを残す必要は全くない」や「あまり必要でない」と回答した人も年齢や性別に相関なく散見される点に留意しなければならない。特に「自由意見」をみて、しまくとうばの普及継承について問題点とその背景にあるものが一部みえた。特徴的なことを以下（1）～（3）にまとめる。

（以下、アンケートの自由意志の回答を引用した箇所には、最後に性別と年代を（）内に記す。基本的に南部地区の意見であるが、別の地区の意見を引用する場合は地区も付す）

（1）「しまくとうば（方言）がわからない」のではなく、「しまくとうば（方言）のこと自体がわからない」

（2）「地域差」と「規範性」に関する問題

（3）「方言よりも標準語（日本語）教育や、英語教育を充実させるべきである」という

¹³ この割合の高さは、「沖縄県民全体の縮図になるように、対象調査地区人口及び年齢構成比に応じ、調査件数を比例配分し、市町村ごとの件数を決定」（報告書 p.1）しているため。

意見の背景にある学校現場における言語教育の意義

(1) は児童生徒調査の意見によくあらわれていた。「しまくとうばのいみがよくわからない。なんでこんなアンケートしたんですか？(中学2年生・女性)」「「しまくとうばって何？」というクラスメイトがいた。しまくとうば＝方言というのがわからない人たちもたくさんいる。(中学2年生・女性)」「しまくとうばは、どう意味ですか。(小学校5年生・男性)」と回答している児童生徒がいた。

一般県民調査のなかでも、「「しまくとうば」の使い方が、いまいちよくわからない(石垣島・20代・女性)」という意見がある。

特に県内でも都会部である首里地区や那覇地区では、方言に変種(バラエティ)が数多くあることもあまり知られていない。また、「～くとうば」「～ふつ」「～ゆんた」「～ぐち」「～方言」のように、地域ごとに地域方言にはすでに馴染んだ言い方があるため、「しまくとうば」という用語自体に居心地の悪さを覚えることは仕方がない。「”しまくとうば”の”しま”には、「故郷」という意味があります。ですから、”しまくとうば”はふるさとのことばです¹⁴」と説明がなされているように、「しまくとうば」は琉球の諸地域の方言も、日本の諸地域の方言をもさすことができる用語としてこのアンケートでは用いているのだが、まだまだ定着しておらず、誤解を招いたということだろう。移住者の児童生徒の場合、「ふるさと」という概念自体が希薄であるのかもしれない。

また、「なんで方言を使う必要があるか知らん。(中学2年生・男性)」「「ぼくは、「しまくとうば」とゆうことは、何で必要だろうと思っている(小学校5年生・男性)」「なぜ、使わないといけないんですか？(北部地区・中学校2年生・女性)」「県外に出たときに、方言は意味が通じないし全国共通の言葉ではないから必要はないと思う。(中学2年生・男性)」というように、「方言を使う必要性がわからない」あるいは「方言がなぜ必要かわからない」という意見もあった。「方言はある程度必要だと思う」答えた人のなかにも、「昔と今では、どちらの時代の方が、「しまくとうば」(方言)を使っていますか？・方言はいつから使われていますか？・方言の授業もやってみたい。(中部地区・小学校5年生・女性)」との意見がある。

方言のこと自体をよく知らないまま、概念としては難しい「しまくとうば」という用語をはじめに与えてしまったことによって、特に児童生徒が混乱している様子がアンケートをとおしてみられた。県外から移住してきた児童生徒なら、「しまくとうば」の必要性が一層わからないだろう。方言が琉球のみならず日本においても多様であること、そして、それぞれの地域の方言を尊重すること、自分や、友達のことばがちがうことを理解し、自分のことばも友達のことばも尊重すること、このような「方言」に関する学習を行った上で、「しまくとうば」という用語を与えるべきだと考える。ただし、「しまくとうば」が全ての方言変種を包括するような性質をもつ用語であるなら、使用の際には慎重にならなければいけないだろう。「包括」は「排除」と表裏関係にある。特に威信方言である首里地区において、用語に無頓着なまま「しまくとうば」を使えば、「誰かのことば」を用語の元に同化させ、はじめからなかったことにしてしまうという危険性がある。この点で、最初にあげ

¹⁴ 『使って遊ぼうしまくとうば』 pp.70

た生徒児童の意見は的を射ているといえる。

(2) は、まず、方言が地域によって異なるという事実をふまえて、普及について慎重になるべきという意見がみられた。「地域によっても違うし、よくわからない方言の共通化を図らないといけなくなってもまたおもしろくないし、地域の特色を出していくのはよいと思う(20代・女性)」「沖縄では島々によって言葉違いますのでどこの言葉教えるか?(石垣島・60代・男性)」「幼稚園、小学校と地域が提携して取り組んだ方がよい前は、言葉のアクセントで、その人がどこの人かが理解出来たが、今は、しまくとうばを使わなくなっているのが難しい。地域のしまくとうばも大切に残したいのだが、無理だと思う(70代・男性)」

また、その一方で、普及継承の実現の難しさについて、「敬語」に関する意見が寄せられているのが目立った。これは特に60、70代にみられた。

「敬語がむづかしい(70代・女性)」「地域によって違いがある。返事の「うー」は、大山「おー」はマシキ。また、マーカ イガーは、友人、マーカイメンセーガーは敬語あまり、敬語ばかり使うと、「年寄りあつかいしてる」と怒られたこともある。方言は、はばがひろく、むづかしいと思う。(中部地区・女性・70代)」「沖縄の方言は、地域により、違うし、敬語の使い方がむづかしく、自分も話せない時がある。下手に使って、かえって失礼になる時もある。学校でも教えて、家庭でも使うことが一番いいと思うが、お年寄りのいない家庭では、むづかしいと思う(中部地区・60代・男性)」「方言を使うと親しみがわく。幼なじみとは全て方言をつかう。親にいわせれば、私たちでも本当の方言ではないという。敬語はむづかしい。(中部地区・女性・70代)」

さらに、次のような意見もある。

「きれいな言葉を使えないよりは、使わない方がよいとおもう(中部地区・30代・女性)」「純粋な島くとうばはよくわからないので使えない。教えるのもむづかしいと思う(中部地区・30代・女性)」「方言はあらい(地域によって)・方言の育成は後々にも残してほしい(60代・女性)」「きちんとした方言を使える人が少ない。まちがった言葉を使う人が多いからみっともない。(北部地区・50代・女性)」

若い世代の間における方言のスラング的な使用に関する意見ともとれるが、最後の意見の「まちがった言葉を使う人が多いからみっともない」のように、その人の考える方言の「規範性」からずれた方言変種の使用は「みっともない」「それよりはいつそ使わないほうがいい」と思われるようになる、という問題がある。若い世代が地域方言を学ぼうと勉強をはじめても、「間違っている」と指摘されたり、敬語表現のことで「年輩にこのようにいうのは失礼だ」と叱られることで勉強意欲を削がれてしまう、ということはよく聞かれる。

(3) については、次のような意見がみられた。

「世界共通の言葉を覚えた方がよい(60代・男性)」「あまり必要ないと思う。共通語で充分、それより英語教育をもっと充実して力を入れてほしい(30代・女性)」「しまくとうばより英語を教えたほうがあつとうてきに、ぜったい、とくします。(北部地区・中学2年生・男性)」「方言の必要性があまりわからない沖縄の今後の為には標準語を強化するほうがよいと思う。(中部地区・40代・男性)」

このような「方言よりも標準語（日本語）教育や、英語教育を充実させるべきである」という意見は少なくなかった。この背景には、方言教育のみならず、学校現場における日本語教育や英語教育のような言語教育の問題が複雑に絡んでいるように思われる。母語教育としての日本語の授業、外国語としての英語の授業を学校現場で行うことの意義を吟味するのと同様に、方言教育を学校現場で行うことの意義を吟味する必要がある。もし、方言教育が地域理解や多文化理解のために留まらず、母語教育としての国語の授業や外国語としての英語の授業にも役立つようなものであれば、その意義は強まるだろう。

4 首里方言の保存・伝承のための教材

大きく土族語の後継である「首里階層方言」と、沖縄芝居のような「首里那覇社会方言」とに分けて整理することにする。「首里地域方言」とよべる資料は見つけられなかった。資料はひとつずつ確認するようにしたが、中には「首里那覇社会方言」というより、那覇のかつての西、東、泉崎、若狭の那覇四町で話された「那覇社会方言」というべき方言資料もあった。具体的には、野原三義（2006）『沖縄語辞典－那覇方言を中心に－』や、2013年に出版された那覇市の読本『使って遊ぼうしまくとうば』で用いられている方言である。このような方言は「那覇方言」であるためここでは省いた。

なお、タイトルに「沖縄語」や「うちなーぐち」、「沖縄方言」が含まれる書籍は多く、全てを確認し、ここにあげることはできなかった。把握できた一部のみであるが以下にまとめる。

4.1 首里方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等

（1）首里階級方言

◆辞典、辞書、語彙集

- ・『沖縄語辞典』国立国語研究所編（1963）

約1万5000語の語彙が収録されている。アクセント記号も付されている。解説編、本文編、索引編からなり、解説編は、首里方言の音声・音韻・文法について記述がなされている。解説や本文の例は、首里階級方言を主としているが、丁寧によみこむと首里地域方言の輪郭もみえる。

- ・「首里那覇方言音声データベース」

『沖縄語辞典』のすべての語いと例文が首里方言話者の音声とともに琉球大学附属図書館HP上で公開されている。

- ・『琉球語辞典』半田一郎（1999）
- ・『医学沖縄語辞典』稲福盛輝（1992）
- ・『琉球語便覧』伊波普猷（1917）
- ・『南島方言資料』東條操（1930）

◆研究書

・ '*Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchian Language*' Chamberlain, B.H. (1895) (『琉球語の文法と辞典 日琉語比較の試み』山口栄哲編訳・解説 (2005))

- ・ 「首里方言入門」加治工真市『月刊言語』12巻4号 (1983)
- ・ 『沖縄語の文法』中松竹雄 (1973)
- ・ 「琉球語」服部四郎・金城朝永『世界言語概説』下巻 (1955)
約 6200 語の医学語彙が収録されている。
- ・ 「首里方言のいいきりの形」鈴木重幸『国語学』41 (1960)
- ・ 『沖縄口さびらー沖縄語を話しましょう』中松竹雄 (2010)
- ・ 『うちなーぐち講座, 首里ことばのしくみ』宮良信詳 (2000)
- ・ 「首里方言にみる法接尾辞と疑問文イントネーション」永野マドセン泰子『琉球の方言』35号 (2011)
- ・ 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティー」工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美『大阪大学大学院文学研究科紀要』47 (2007)
- ・ 「不完成相につきまとう臨場性ー首里方言のばあいー」津波古敏子『ことばの科学』2 (1989)
- ・ 「琉球列島の言語 (沖縄中南部方言)」津波古敏子『言語学大辞典』4 (1992)
- ・ 「首里方言のイントネーション」永野マドセン泰子・狩俣繁久『琉球の方言』34 (2010)
- ・ 「首里方言アクセントの音声学的実態」永野マドセン泰子・狩俣繁久『琉球の方言』33 (2009)
- ・ 「言語における地域と階級ー首里方言の場合ー」中松竹雄『沖縄語の世界』 (1980)
- ・ '*Suri Okinawan grammar*' Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji(Eds.) '*HANDBOOK OF THE RYUKYUAN LANGUAGES HISTORY, STRUCTURE, AND USE*' Shinsho Miyara (2015)
- ・ 「endangered language と killer language」かりまたしげひさ『時の眼ー沖縄 批評紙 N27』 (2013)

◆テキスト, 資料

- ・ 『沖縄語の入門ーたのしいウチナーグチー』西岡敏, 仲原穰 (2006)
- ・ 『沖縄口さびら-沖縄語を話しましょう-』中松竹雄 (2010)
- ・ 『美しい沖縄の方言①』船津好明 (1988)
- ・ 「沖縄・那覇市首里 (旧首里市)」『全国方言資料 10 琉球方言編 I』柴田武 (1970)

(2) 首里那覇社会方言

◆語彙集

- ・ 『沖縄おもしろ方言辞典』沖縄雑学倶楽部編 (1985)
- ・ 『沖縄, ことば絵ブック』下川祐治 (2008)
- ・ 『ウチナーグチ入門』沖縄文化社 (2014)

◆テキスト, 資料, 他

- ・『実践うちなあぐち教本』吉屋松金（1999）
- ・「琉球語初級会話」野原三義『月刊言語』12巻4号（1983）
- ・『CDブック，声に出して読みたい方言』齋藤孝（2004）
- ・『4コマ漫画で学ぶ沖縄語』玉城雅巳（2004）
- ・『はじみらな，うちなーぐち初級用』沖縄方言普及協議会（2001）
- ・『楽しいウチナーグチ』儀間進（2009）
- ・『沖縄ぬ暮らしとう昔話』沖縄語普及協議会（2006）
- ・「琉球児童の早言遊び」金城朝永『金城朝永全集』上巻（1932）
- ・「沖縄のことば遊び」儀間進『月刊言語』12巻4号（1983）
早口ことば，なぞなぞなど。
- ・『楽しいウチナーグチ』儀間進（2009）
- ・「沖縄中南部方言の仮名表記の問題点－「沖縄語仮名遣い」に向けて－」仲原譲『南島文化』（2013）

（3）内容未確認のもの，その他

- ・「沖縄口と翻訳－蜻蛉日記の訳を試みて－」儀間進『月刊言語』12巻4号（1983）
- ・「首里・那覇方言に於ける親族関係の語に就いて」金城朝永『方言』4巻1号（1934）
那覇四町（西・東・泉崎・若狭町），久米，首里階層方言

4.2 首里方言の教材

（1）首里階層方言

◆教材（テキストや語彙集）

- ・『沖縄語の入門－たのしいウチナーグチー』西岡敏・仲原譲（2000）
- ・『トラベル沖縄語会話』中松竹雄（2005）
- ・『沖縄口さびら-沖縄語を話しましょう-』中松竹雄（2010）
- ・『美しい沖縄の方言①』船津好明（1988）

◆方言辞典，方言集

- ・『沖縄語辞典』国立国語研究所編（1963）
- ・「首里那覇方言音声データベース」琉球大学附属図書館 HP
- ・『琉球語辞典』半田一郎（1999）
- ・『医学沖縄語辞典』稲福盛輝（1992）
- ・『琉球語便覧』伊波普猷（1917）
- ・『南島方言資料』東條操（1930）

◆談話資料

- ・『沖縄県首里のことば』中松竹雄（2004）
- ・「＜資料紹介＞首里方言自由会話「旧正月と大晦日の思い出」」比嘉成子『琉球方言論叢
琉球方言研究クラブ 30 周年記念』（1987）

- ・『放送記録テープによる琉球・首里方言：服部四郎博士遺品』伊豆山敦子編（2006）
- ・「沖縄・那覇市首里（旧首里市）『全国方言資料 10 琉球方言編 I』柴田武（1970）

◆方言でかかれた民話、物語など

- ・『沖縄首里の昔話』伊芸弘子編（1992）

（2）首里那覇社会方言

◆語彙集

- ・『沖縄おもしろ方言辞典』沖縄雑学倶楽部編（1985）
- ・『沖縄，ことば絵ブック』下川祐治（2008）
- ・『ウチナーグチ入門』沖縄文化社（2014）

◆ことわざ

- ・『沖縄ことわざの窓』儀間進（2011）

（3）その他

- ・「現代首里方言訳『沖縄対話』（2）－「第一章 四季の部（秋・冬）」「第二章 学校の部－」仲原譲・比嘉恒明・仲里政子・新垣恒成・国吉朝政『沖縄芸術の科学』25（2013）
訳者に士族の後継の方と平民の後継の方がいる。

4.3 録音資料の作成，利用状況

（1）首里階層方言

- ・「首里那覇方言音声データベース」琉球大学附属図書館 HP
- ・

（2）首里那覇社会方言

- ・『CDブック，声に出して読みたい方言』齋藤孝（2004）
- ・「うちなーぐちラーニング初級編，中級編，上級編」八木政男（CD教材・芝居言葉）

5 保存・継承の取組の効果と課題

2節～4節でみてきたように，行政上の取り組みについても，地域の取り組みについても首里階層方言，あるいは首里那覇社会方言の普及継承活動は沖縄県内のなかでは比較的進んでおり，一定の効果をあげているといえる。これは，研究書や教材等の多さに起因しているが，その背景には，「かつての支配者層の言語」であることが大きい。このことが普及継承を後押する一方で，琉球方言内の多様性を保持したまま保存や継承の取り組みを行う動きに対して逆方向に働いているという大きな問題がある。

例えば，首里地区以外の幼稚園や小中学校で，児童生徒達に首里階層方言を教えているという報告がある。他の地域では研究自体がなされていなかったり教材もないため，資料が豊富な首里地区や那覇地区の方言を教えざるを得ないのである。しかし，ここには，首里地区や那覇地区の居住者の意識上の問題も絡んでいる。首里出身の報告者の観

察の限りだが、多様な方言を全て残すというのは現実的に不可能だから、首里階層方言（あるいは、首里階層方言の広義としての首里那覇社会方言）だけが残ればよいと考えている方は少なくない。首里階層方言だけが「本物の首里方言」「本物の琉球語」で、他は違うと述べる方も実際にいらっしゃる。

このような考えをもっているのは、なにも首里出身者だけではない。琉球語のなかで標準語をつくるべきだという意見が 2014 年は新聞などでみられた(佐藤優, 大城立裕¹⁵⁾)。この時、どの方言を標準語にするのかといえば、首里階層方言であり、その根拠として、支配者階級の言語であること、宮廷芸能である組踊りや琉歌に用いられた（用いられている）言語であることが重視されている。佐藤は正書法の確立について述べ、「規範性」を作ることを強調している。正書法や規範的な「日本語標準語」が、過去に多くの日本語や琉球方言、また、かつて日本の植民地とされた地域のことばを危機に追い込み、駆逐したことは事実である。かりまた（2013）は、琉球方言内の威信方言について‘endangered language’であると同時に‘killer language’であると指摘しているが、首里階層方言は‘killer language’であるという懸念が現実になる／なっている可能性がある。

引用文献

- 沖縄県文化観光スポーツ部 文化振興課（2014）「しまくとうば県民運動推進事業県民意識調査〈報告書〉」
- 石原昌英（2013）「行政機関，NPO 法人，マスコミ等での取組」『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業（奄美方言・宮古方言・与那国方言）』 p87-p140
- 伊豆山敦子編（2006）『放送記録テープによる琉球・首里方言：服部四郎博士遺品』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 p65-p89
- 上村幸雄（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 上村幸雄（1997）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典セクション日本列島の言語』 p311-p354
- 加治工真市（1983）「首里方言入門」『月刊言語（第 12 巻 4 号）』 p33-p42
- 亀井孝・他編（1996）『言語学大辞典第 6 巻術語編』三省堂
- かりまたしげひさ（2013）「琉球方言とその記録，再生の試みー学校教育における宮古方言教育の可能性ー」『琉球列島の言語と文化ーその記録と継承ー』 p21-p44
- かりまたしげひさ（2013）「endangered language と killer language」『時の眼ー沖縄批評紙 N27』 94-97
- 柴田武（1970）「琉球方言の特徴」『全国方言資料 10ー琉球方言編(Ⅰ)ー』日本放送協会
- 田中春美他編（1988）『現代言語学辞典』成美堂
- 津波古敏子（1997）「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」『言語学大辞典セクション日本列島の言語』 p369-p388

¹⁵ 2014 年 8 月 10 日沖縄タイムス，2014 年 6 月 7 日，14 日琉球新報

- 當山奈那（2015）「首里方言のなかの地域方言と社会方言」『琉球方言研究 4』（印刷中）
中松竹雄（2010）『沖縄口さびら－沖縄語を話しましょう』琉球新報社
中松竹雄（2004）『沖縄県首里のことば』沖縄言語文化研究所
那覇市企画部市史編集室（1979）『那覇市史資料篇 2 中の 7 那覇の民俗』
那覇市教育委員会学校教育課（2013）『使って遊ぼうしまくとうば』那覇市
野原三義（2006）『沖縄語辞典－那覇方言を中心に－』研究社
服部四郎（1955）「琉球語」『世界言語概説下巻』p307-p356
宮良信詳（2000）『うちなーぐち講座，首里ことばのしくみ』
比嘉成子（1987）「＜資料紹介＞首里方言自由会話「旧正月と大晦日の思い出」」『琉球方言論叢 琉球方言研究クラブ 30 周年記念』p73-p91 琉球方言論叢刊行委員会

沖縄県南城市奥武方言

中本 謙

1 奥武島の概要¹

南城市奥武島は、沖縄本島南部、志堅原の沖合 150 メートルに位置する亀甲型の風光明媚な小さな島である。琉球石灰岩からなる島の面積は 0.25 平方キロメートル、周囲 1.7 キロメートル、幅 500 メートル、最高標高は約 16 メートルである。人口は平成 26 年現在で約 850 人である。

奥武島に人間が居住するようになったのは、今から 650 年ほど前とされている。玉城若按司兼松金の長男玉城大屋子（玉城門中の始祖）と次男新垣大屋子（大屋門中の始祖）が奥武島に移り住んだことによるとの伝承があるとのことである。

本島との交通手段は、1936 年に初代の奥武橋(木造)が架かるまでは、渡し船が利用されていた。このよう

な離島であったが故に、沖縄本島中南部の中でも周辺方言とは、やや異なった方言として独自に発達したものと考えられる。

架橋されてからは、車両の出入りも可能となり、陸続き同様となった。そして、これまでの半農、半漁の生活から、次第に第2次、第3次産業へと移っていった。結果として、本来の奥武方言の特徴は、近隣方言の影響などによって失われていく傾向にある。例えば、本来、奥武方言では、促音直後を除き形容詞語尾は[takahaN]（高い）のように[-haN]であるが、70代（1930年代生）以下では、多くの沖縄中南部方言と同様に形容詞語尾が[takasaN]のように[-saN]に変化している。

本来漁業が盛んである奥武島の主な祭祀は、旧暦の 5 月 4 日に行われる海神祭（ハーリー）である。この日は豊漁を祈願するとともに、爬竜船競漕が開催され、多くの来島者で賑わいをみせる。また、島の中央に位置する観音堂には今から約 400 年前に遭難した唐船を助けた謝礼として、唐より送られた観音像が祀られており、5 年に 1 度、観音堂祭が行

南城市玉城奥武島の位置



¹ 字誌編集委員会(2011)『奥武島誌』を参考にした。

われる。

2 奥武方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

奥武島では、平成24年に初めて「奥武くとうばお話大会」が、敬老会・新生児の出生祝いと同時開催で行われた。主催は奥武区、『奥武くとうば』編集委員会、共催は、玉城小学校PTA奥武支部、玉城中学校PTA奥武支部、奥武子ども育成会、奥武青年会、奥武女性会、奥武寿会である。そして大会の目的は以下のように設定されている。

昔から奥武区民に慣れ親しまれた独特の「奥武くとうば」を、次世代を担う青少年への普及と継承を図り、併せて現在進めている「奥武くとうば」の編纂事業に寄与することを目的とし、更に、敬老会・新生児の出生祝いと同時開催することにより、敬老の心と「奥武くとうば」への愛着心を育む一助とする。

その他、大会の要項は以下のとおりである。

日時： 平成24年11月18日（日）午後4時

場所： 奥武公民館1階ホール

出場対象： 奥武出身の小・中・高校生・一般（奥武寿会含む）

参加賞： 発表者には、図書券又は粗品を贈呈する。

発表内容と時間： 発表は民話、童話又はその他の出来事、将来の夢などをできるだけ「奥武くとうば」で5分以内とする。

当日は、敬老会、新生児の出生祝いと同時開催ということもあり、多くの人々が集まり盛り上がりを見せた。小学生4名がカーミヌクー（亀の甲羅）等の沖縄に伝わる民話を発表した。



亀の甲羅 (カーミーぬクー)					
わんねー	やーんなー	ぬ	なーや	やいびーん。	
私は	やごう	の	名前は	です。	
ちゅうや	かーみーぬくーぬ	んかしばなし	せーやーんじ	うむーいびーん	
今日は	亀の甲らの	むかし話を	しようと	思っています。	
んかし、	りゅうぐうぬ	うかみがなしが	ちゅう	やんめーかかてい、	とうんじやくぬ
むかし、	りゅうぐうの	神様が	重い	病気にかかり、	だんだんしん
やんめーや	たった	ちじるないるびけーい	やいびーたん。	うんなうち	フドゥンがみぬ
病気は	ますます	重くなるばかり	でした。	そんなとき	便所の神の
カーハグーが	いーぬ	むのー、	さーぬ	なまじむかましーぬ	のーいん
かわはぎが	言うには、	サル	の	なまの肝どう食べさせたら	治る
					とのこと。

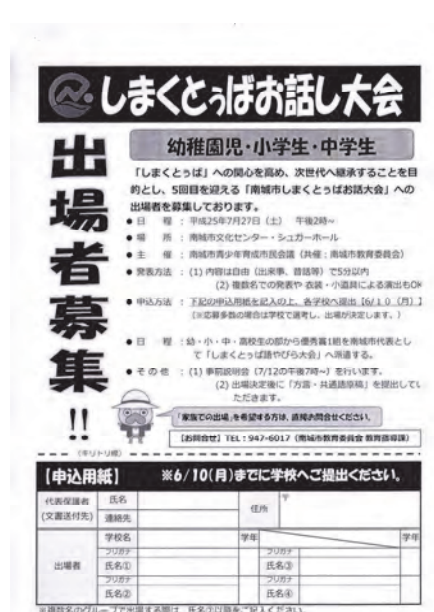
(奥武くとうばお話し大会の原稿・一部抜粋)

2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

奥武島内に、小中学校はない。ここでは、奥武区の児童が通う南城市立玉城小学校の取組²を取り上げることとする。

(1) しまくとうばお話し大会に向けての取組

玉城小学校では、年1回、「しまくとうば校内お話し大会」が開催され、10名ほどが発表する。子ども達は、祖父母から方言の指導を受けるとのことであるが、学習支援ボランティア「ミントンの会」も方言指導に協力している。この大会での優秀者(2名程度)は、南城市によって開催される「しまくとうばお話し大会」に玉城小学校代表として出場する。



(2) カデナミドルスクールとの学習交流会

玉城小学校では、本年度からカデナミドルスクールとの学習交流会が始まった。国際交流を通じて協力することのすばらしさや、アイデンティティーの発見、共通の価値観の認識につなげることを目的としている。対象は6年生(約50名)で第1回目は2014年12月19日に玉城小学校で開催され、第2回目は、2015年1月15日にカデナミドルスクールで開催された。

第1回目の交流会では、琉球方言のクイズを行っている。内容としては、写真を見せて、カデナミドルスクールの子ども達に方言で答えてもらうというものである。例えば、苦瓜(ゴーヤー)や首里城(グスク)等の写真を見せて方言で答えられるか、というクイズである。中には「ゴーヤー」と答えられたアメリカ人の子ども達もいて、大いに盛り上がったとのことである。玉城小学校の子ども達は、積極的にボディランゲージを用いて一生懸命、琉球の文化、方言を伝えようとしていたとのことである。

本年度は、一語一語の名詞を教えさせたが、今回は、挨拶等の文を用意して教えさせ

² 2015年2月に玉城小学校の調査を行い、教頭の城間修司先生からお話をうかがった。

たいと、担当された先生方も意欲的である。子ども達は、自主的に琉球の文化や方言を伝えようとしていたとのことであり、アメリカ人の子ども達に教えることで、さらに自らの地域のことばを見つめるきっかけにもなったようである。



(クイズに用いた写真)

(3) 方言の読み聞かせ

玉城小学校では、全学年を対象に週1回のペースで朝の読み聞かせを実施している。その中で地域ボランティアの方による方言での絵本の読み聞かせが行なわれている。子ども達は、毎週楽しみにしているとのことである。

2.3 地域の人の協力の状況

2.2でも述べたように玉城小学校では、朝の読み聞かせで、方言での絵本の読み聞かせが実施されている。語り手である地域ボランティアの方は、保護者を中心に組織されており、とても協力的である。また、退職教員によって組織されている学習支援ボランティア「ミントンの会」も絵本の読み聞かせに協力している。

読み聞かせ以外でも「しまくとうばお話大会」の原稿作成など、様々な行事にも協力的である。

2.4 保存・伝承の取組に関する地域の特徴

奥武方言ついで言えば、保存・伝承の取組が盛んになり始めたのは、2012年からである。

きっかけは、本来の伝統的な奥武方言を後世に残したいという思いから、『奥武方言』編集委員会が組織されたことによる。メンバーは『奥武島誌』の編集にも携わった奥武島出身者を中心に、言語研究者も含め7人から構成される。月に1回、高齢の生え抜き話者からの聞き取り調査が公民館で実施されている。

2012年以前は、具体的に方言の保存・伝承の取組がなされていたわけではないが、奥武島には、奥武青年会や奥武女性会（旧婦人会）が組織されており、青年会主催のエイサーやハーリー、観音堂祭等で親睦を深めており、地元の文化を盛り上げるという意識は、昔から高い。

3 奥武方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

2013年度に、文化庁による「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」の調査で奥武方言が取り上げられている。この調査は、主に奥武方言の特徴や話者数などの実態を明らかにしたものであるが、その中で方言に対する意識についても簡単に言及されている。その他には奥武島を対象とした意識調査は特になされていないようである。

3.2 意識調査の結果の分析

奥武区民の多くは、奥武方言が継承されていくことを支持している。しかし、40代以下は方言を話すことができず、老年層は若年層に対して基本的には共通語を用いているという現状がある。つまり、方言を残したいという意識は持っているが、実際に継承していくことは難しいという現実がある。

このような状況があり、奥武島では、方言を保存し後世に残したいという機運が高まった。そして、2012年4月に区評議員会の決議のもと、『奥武方言』編集委員会が組織され、現在、老年層から奥武方言の聞き取り調査が行われている。

4 奥武島方言の保存・伝承のための教材

4.1 奥武方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等

- (1) 中本正智(1958)「奥武方言の動詞の活用」『琉球方言』創刊号、琉大方言研究クラブ
奥武方言の動詞の活用形を明らかにし、それに従い、動詞の分類を行っている。
- (2) 中本正智(1960)「沖縄南部の1・2音節語のアクセント」『国語学』41号、国語学会
奥武方言のアクセントの体系を示し、現代東京語とのアクセント対応について明らかにしている。また準一音節語について沖縄南部215の部落を調査し、その類型を明らかにし、分布図を示している。調査語彙は第一類（柄・血・帆・実）、第二類（名・葉・日・藻）、第三類（木・田・手・火・目）である。

- (3) 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院
本書は、主に北琉球方言全域の概観を明らかにしたものである。「第2編音韻」,「第3編アクセント」,「第4編文法」の各編の中でそれぞれ奥武方言を取り上げ、その体系を明らかにしている。文法については、主に動詞、形容詞について記述されている。
- (4) 中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
本書の「Ⅲ. 音韻実態の記述的研究」の中で、奥武方言の音韻体系、共通語との音韻対応、音韻の特徴が詳細に明らかにされている。
- (5) 中本正智(1983)『琉球語彙史の研究』三一書房
本書は琉球全域を視野に入れた語彙の研究である。その中の「身体・心」,「人間関係」,「代名詞」,「地名・方位・時」,「生物」で奥武方言の語彙を取り上げ、語彙の構造、語彙の歴史、語彙と文化の関連について明らかにしている。
- (6) 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
本書の第4章では、「文法の実態と分布と歴史」について記述されているが、その中の「第1節 文法構造の記述」は奥武島方言の文法を取り上げたものであり、その内容は次のとおりである。1. 代名詞, 2. 性差の表現とていねい態, 3. 感動詞, 4. 応答詞, 5. 動詞の活用, 6. 形容詞の活用, 7. 助詞, 8. 表現の諸相, 9. アスペクトの表現, 10. 待遇の表現。
- (7) 中本謙(1997)「沖縄奥武方言の音韻 一世代別調査から一」『沖縄文化』沖縄文化協会, 第33巻第1号通巻87号
奥武方言について、老年層、中年層別々に、臨地調査を行い記述的研究としてそれぞれの音韻体系、音韻対応を明らかにした。さらに世代間の通時の研究を行い、奥武方言のどのような部分がどのように変化するのか明らかにした。
- (8) 中本謙(1998)「沖縄奥武方言の親族語彙と人称代名詞一世代別調査から一」『言葉を通してみた本土・沖縄・中国の文化一代名詞と親族語彙一』, 千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書第1集
奥武方言について老年層、中年層別々に親族語彙の臨地調査を行い、世代別に親族語彙の体系、及び人称代名詞を明らかにした。さらに、世代間の比較研究を行い、親族語彙体系、人称代名詞にどのような変化がみられるのか具体的に明示した。
- (9) 中本謙(2007)「沖縄奥武方言の助詞〔ガ〕〔ヌ〕と〔ガー〕〔ノー〕」『琉球の方言』31号法政大学沖縄文化研究所
奥武方言の助詞〔ガ〕と〔ヌ〕の意味用法を示し、主格用法において新たな弁別機能がみられることを明らかにした。さらに沖縄方言独自の用法である「がは」〔ガー〕, 「のは」〔ノー〕の要因について、日本語の助詞「が」「は」との比較等から言及した。

4.2 奥武方言の教材

特に教材という形で作られたものはないが、2011年3月に刊行された『字誌』編集委員会による『奥武島誌』は、部分的に教材となり得る。本書は、10年以上に及ぶ月日をかけて作られた大著であり、自然、歴史、文化、産業等、奥武島に関するあらゆる分野が網羅的にまとめられている。

方言については、親族語彙をはじめ、ウミンチュ（海人）の集落らしく魚名や漁業関連

の語彙等がカタカナを工夫した表記で記載されている。また本書は、奥武島の昔の子供の遊びや口承文芸、民俗芸能なども豊富に記載されている。



No	奥武島方言	標準語
35	イユ	魚。古語では「イサ」という。
36	イマイユ	縁れたての新鮮な魚
37	アジシルー	アジ(まら)が白くなった魚。すなわち、鮮度が落ち倒った魚
38	ヤバ	鰻(きめ)
39	トビイチャー	トビイカ。センボーイチャーともいう
40	オチュー	鰻(かつお)
41	シメイユ	鰻(まぐろ)
42	シビダラー	鰻(いそまぐろ)
43	マンビキ	シイラ。フーメイユともいう。熊本などではマンビキと呼ぶ
44	カニ	鰻
45	ダルタン	タカヤブ。沖縄県の鰻魚である
46	シムイ	シロダイ、ササミダイ、メイサダイ、サガメイサなど
47	チンイ	ミナミサロダイ
48	ゴウラ	カスミアジ、ロウニンアジ
49	クサナジ	イソフエフキ
50	ゴチン	メアジ
51	トウブ	トビウオ
52	イラダキ	グサイ
53	ゴンゼー(イラダキ)	チンボウブダイ
54	ママン	ハマフエフキ
55	アウミーパー	サヒトハタ
56	アカジミーパー	スジアラ
57	イシミーパー	カンモンハタ、イシギキハタ
58	シメユ	クロコショウダイ。金魚ではシチューという
59	チリマン	チンダハタ
60	アカマダ	ハマダイ
61	シジャー	ダマ
62	マーンジター	ササミダイ、ササミではなく、ダラの仲間
63	ハイイユ	ササミ
64	ミジユ	ミズン(イサシの一種)
65	ハダラー	ササミイワシ
66	ササバー	ペラ
67	アファ	おこぜ
68	チチュー	みのかき
69	イラダグ	ゴンズイ
70	アンジャー	オニヒトデ
71	チチダ	マダモイ。金魚ではディラジャー、キラジャーなどという

4.3 録音資料の作成、利用状況

録音資料については、これまで作成されていない。2012年に編集委員会が組織され、『奥武方言』の作成にむけて、現在調査、編集がすすめられている。本書には、録音資料も付属させる予定となっている。

5 保存・継承の取組の効果と課題

5.1 学校の取組の課題

玉城小学校では、年に1回「しまくとうば校内お話大会」が開催されている。自らの地域のことばを知るという意味では、ある程度の効果はあるようであるが、一過性のものであり、その場限りで終わってしまうというのが課題のようである。また、「お話大会」は一方的な語りであるため、方言を用いたコミュニケーションには繋がらないという課題もある。これまで調査を行った他の小学校や中学校でも方言大会や方言劇の取組がなされているが、ほとんどがその場の暗記で終わってしまっているとのことであった。方言大会や方言劇で覚えた方言語彙を仲間と遊ぶ時などに積極的に用いなければ、なかなか定着は難しいと考えられる。

玉城小学校では、新たな取組としてカデナミドルスクールとの学習交流会が始まった。この交流会では、お互いの文化やことばについて、クイズを通じて教え合っており、子

ども達は、大きな刺激を受けている。玉城小の子ども達は、海外に琉球文化を発信するためにも方言についてもっと知りたいという欲求が高まったとのことである。

また、この取組には、子ども達が自主的に行動し、楽しむ姿勢が見られたということなので、方言に対する意識を高め、多文化理解の心を育むという意味でも効果的であると考えられる。

この取組をもっと増やして欲しいという声が、保護者や子ども達からあがっているが、基地とのスケジュール調整がとても難しいとのことである。

今回の玉城小学校の城間教頭先生からの調査で見えてきた課題は次の二つである。一つは、子ども達に対して「なぜ方言を学ぶのか」という目的をもっと示した方が良いということ。子ども達に方言の良さを伝えきれていないとのことである。

二つ目は、教材がほとんどないということ。読み聞かせで方言の絵本を用いている程度である。また、ゲストも一時的であるので、誰でも使えるような教材が必要とのことである。

今回、調査した玉城小学校は、玉城字奥武以外にも玉城字中山、玉城字志堅原等の地域が校区となっており、方言も地域によっては異なりをみせる。しかし、玉城小学校では、これまで、方言の地域差が問題になったことは特にないとのことである。

5.2 地域の取組の課題

奥武方言は、離島であるということもあり、近隣方言とは異なった特徴を有している。すでに述べたように奥武区では、本来の伝統的な奥武方言を保存、継承したいという思いから、『奥武方言』を編集している。話者が高齢なこともあり、現在、保存のための資料収集を早急に進めている。継承の側面から言えば、島内の行事などは、司会も含め方言を交えながら行われており、耳にする機会も多い。また、方言大会を敬老会、新生児の出生祝いと同時開催にするなどの工夫もなされている。ただ『奥武方言』編集委員によれば、方言大会は、一過性のものになりがちで継承に繋げるためには、さらなる工夫が必要とのことである。また島内の行事も多く、時間的な問題もあるようである。

しかし、継承に繋がらない大きな原因は、やはり日常生活で使われる機会が少ないことにあると考えられる。実際に家庭の中では、子や孫に対して方言が使われる機会は少ないため、なかなか継承は難しい状況にある。これは奥武島に限ったことではなく、多くの地域にあてはまる。

引用文献

字誌編集委員会(2011)『奥武島誌』奥武区自治会

平山輝男他(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院

中本謙(1997)「沖縄奥武方言の音韻 一世代別調査から」『沖縄文化』第33巻第1号
通巻87号沖縄文化協会 p21-p41

- 中本謙(1998)「沖縄奥武方言の親族語彙と人称代名詞一世代別調査から一」『言葉を通して見た本土・沖縄・中国の文化一代名詞と親族語彙一』千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書第1集 p35-p43
- 中本謙(2007)「沖縄奥武方言の助詞〔ガ〕〔ヌ〕と〔ガー〕〔ノー〕」『琉球の方言』31号 法政大学沖縄文化研究所 p177-p187
- 中本謙(2014)「奥武島方言の実態」『平成25年度文化庁委託事業危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)報告書』琉球大学国際沖縄研究所 p71-p82
- 中本正智(1958)「奥武方言の動詞の活用」『琉球方言』創刊号琉大方言研究クラブ p1-p39
- 中本正智(1960)「沖縄南部の1・2音節語のアクセント」『国語学』41号国語学会 p39-p50
- 中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
- 中本正智(1983)『琉球語彙史の研究』三一書房
- 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店

沖縄県久米島方言

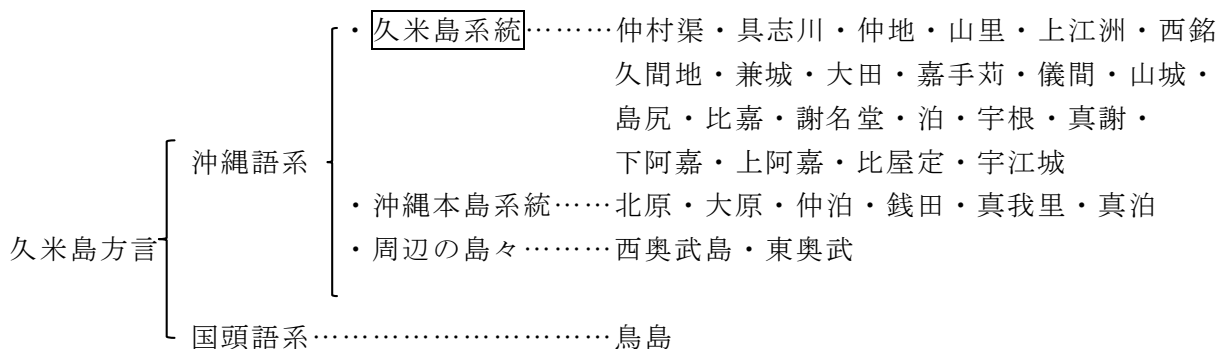
仲原 穰

1 沖縄県島尻郡久米島町の概要

久米島は那覇から西へ約 100km、周囲 53.31 キロメートル、面積 55.69 平方キロメートルの島で、その経度は東経 126 度 48 分 18.2 秒、緯度は北緯 26 度 20 分 22.9 秒である（久米島町公式HP より）。沖縄本島の県庁所在地である那覇市の西方には、座間味島、慶良間諸島、阿嘉島、栗国島、渡名喜島などの島々が連なっており、その西端に久米島が位置している。

久米島の主要産業は農業（おもにサトウキビ）、織物（久米島紬）、水産業（クルマエビの養殖）、観光業などである。このほか、海洋深層水の利用（飲料、製塩、保養施設）が活用されるが、2013 年 4 月からは「海洋温度差発電プラント」による温度差発電の実証実験が行われている¹。2002 年 4 月に 2 村が合併して久米島町となったが、かつては島の東側半分が仲里村、西側半分が具志川村であった。

久米島の人口は 8,263 人（男性 4,380 人、女性 3,916。外国人を含む）、世帯数は 3,950 世帯（2015 年 1 月 31 日現在：久米島町役場 HP）である。このうち、伝統的な言語を継承しているのは久米島で生まれ育った 75 歳以上の老年層である²。



久米島方言は「久米島系統」と「その他」（鳥島、銭田、真我里、仲泊、大原、北原、真泊、西奥武、東奥武）に大別できる。「その他」のうち、鳥島方言は奄美諸島の硫黄島か

¹ 久米島町真謝の沖縄県海洋深層水研究所にできた発電プラントで、海水温度の温度差（水深 600m と海面温度）によって発電するシステムで出力 50 キロワットである。沖縄県が行っている実証実験で 2013 年 6 月から 24 時間発電の試験運行を行っている。

² たとえば、久米島で 4 番目の人口規模である「真謝」では、中年層までは老年層のことばをある程度理解することができ、日常会話もある程度は可能であるが、老年層に比べると語彙が少ないため、会話中にいわゆる「共通語」にスイッチしてしまったり、共通語と伝統的なことばを混ぜて使用したりすることも多い。

ら移住してきた集落であるため、系統的には北琉球諸語「奄美語」の徳之島方言に近いとされる。しかし、現在は鳥島方言の伝統的な話者は限られており、継承が危ぶまれている。銭田・真我里・仲泊は沖縄本島南部（那覇市など）からの移住であり、大原・北原は沖縄本島各地からの移住、真泊は糸満からの移住、西奥武・東奥武は渡名喜島・栗国島からの移住によって形成された集落である。

2 久米島方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

久米島町の方言大会は、久米島町文化協会が主催で「しまくとうばの普及・継承」を目的とした「久米島しまくとうば大会」がこれまで計3回開催されている。

第1回 2009年8月16日（日）（於：久米島町具志川改善センター）

第2回 2010年8月15日（日）（於：久米島町具志川改善センター）

第3回 2013年7月28日（日）（於：久米島町具志川改善センター）

この大会で選ばれた人は沖縄県文化協会主催「しまくとうば語やびら大会」へも参加したことがある。この大会には大人（一般・お年寄り・ファミリーの部）と小学生や中学生の児童・生徒が参加しており、第1回は平良恵理奈さん（小学6年生）と宮里真次さん、第2回は惣慶長吉さんが久米島の代表として「しまくとうば語やびら大会」へ出場している³。なお、第3回には中学1年生の宇江城海風君と与那嶺彩さん、小学校4年生の新城蒼君なども発表している。

ただし、この大会の音声や映像などの記録・保存は行われていない（以下は久米島町・刊行物「広報くめじま」から転載した写真である）。

2009 年度



2010 年度



2013 年度

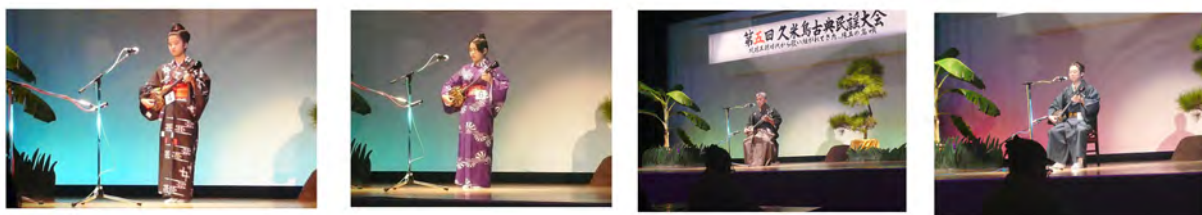


この久米島しまくとうば大会が今年度開催されなかった理由を主催者である久米島町文化協会会長、宮田勇氏に尋ねたところ、小学校や中学校へ毎年出場をお願いしているが、今年度は出場者が集まらなかったという。また、これまで開催されなかった2011～2012年度も子どもたちの出場希望が少なかったことや出場する予定の児童の体調不良などもあったという。

³ 2013年度（第3回）に「しまくとうば語やびら大会」へ参加したのかは未確認である。

久米島方言の大会の開催が主催側の意図に反して毎年安定して開催されないのに対し、久米島古典民謡大会は途切れることなく開催され、毎年、中学生や高校生の参加が途絶えない。久米島古典民謡大会は今年度で第5回を迎えた。久米島の小学生2人、中学生4人、高校生2人が参加し、その保護者らも含め、約250人の観客で盛り上がった。

この久米島古典民謡大会は、久米島の古典民謡である「木綿花節」「久米阿嘉節」「黒石森城節」のうち、1曲を選択して披露するものであり、沖縄語の歌詞を覚えて歌わねばならないなど、方言の継承の入り口にはなっている。ただし、韻文の歌詞に含まれる僅かな歌詞の中に、久米島方言特有のことばはほとんどないので、久米島方言の習得に直接影響する大会とはいえない（以下の写真は報告者撮影の2014年度のものである）。



このほか、久米島町の取り組みとして「久米島現代版組踊 月光の按司 笠末若茶良（がさしわかちやら）」の開催がある。この劇は久米島町教育委員会の主催で2014年2月23日（日）に久米島で初公演を行った「現代版組踊シリーズ」の一つである。久米島町の中学生・高校生が中心のキャストに名を連ねている。

この「現代版組踊シリーズ」は、「組踊」という名称になってはいるものの、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に選ばれた「組踊」とは全く異なるもので、いわば沖縄の史劇（ミュージカル）である。そのため、セリフは共通語（現代日本語）であり、地域言語をセリフに取り入れてはいない。ただし、「久米島現代版組踊」では、久米島の「登武那覇太鼓」や「兼城伝統芸能保存会」の舞踊や唄・三線などを劇の一部に取り入れており、演奏の一部に方言が謡われることは間違いない。

同劇は、2014年3月28日（金）に那覇市民会館に於いて那覇公演が行われ、今年2月22日（日）に久米島でも再上演されている（今年度のパンフレットを資料としてあげる）。



2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

今回、久米島町立美崎小学校校長，宇江城淳一先生，沖縄県立久米島高等学校校長，半嶺通男先生へインタビューすることができた。

美崎小学校では、年に1回、地域の行事である「真泊のハーリー」（爬龍船というボートによる競漕や航海の安全や豊漁を祈願する神事）への参加，真謝の天后宮で開催されるシマ（沖縄式相撲）への参加（いずれも児童全員で参加する），真謝の老人会と一緒に行うグランドゴルフ大会などにより，地域の方々との交流のなかで地域の文化や言語に自然に興味を持ってもらいたい，と願っているが，美崎小学校から久米島しまくとうば大会へ参加した児童は1人もいないという。なお，教育課程のなかでは，学習発表会のなかで，6年生が方言劇を行うこともあるが，久米島方言ではなく，沖縄島中南部方言で記された台本を使用するのだという。

久米島高等学校では，選択クラスではあるものの週2時間，地域学習の時間があるが，「郷土の歴史」が中心であり，方言を取り上げることはないという。

その他学校のカリキュラムでも地域言語に関する取り組みは現在行われていないが，今年度は上に述べた「久米島現代版組踊」（久米島高校の生徒が主演）を高校1年生全員が参加する教育課程の「総合学習」に取り入れ，2グループに分かれて練習し，12月20日に久米島町具志川農村環境改善センターで発表させるという試みを行った⁴。このほか，2年生はインターンシップ，3年生は自分たちで企画したプログラムを久米島町具志川改善センターでプレゼンテーションさせるなど，地域の人々とのつながりを意識した取り組みがなされており，そこで「しまくとうば」に自然に興味を抱いてもらえれば，ということであった。

2.3 地域の人の協力の状況

美崎小学校では，毎週金曜日早朝に開催される教職員会議の時間を利用し，美崎小学校PTAのボランティアによる読み聞かせが行われている。

その活動の中心となっているAN氏によると，普段の読み聞かせは通常の絵本が中心だが，沖縄の昔話なども紹介することもあり，その際，いくつかのセリフについて児童へ話しかけながら，沖縄語（しまくとうば）を教えることもあるという。また，時には沖縄のことわざのなかの沖縄語について，「これ，わかる」などと児童に問いかけることもあるという。

また，特筆すべき事柄として，過去（2010年頃）に「三匹のこぶた」を美崎小学校校区の中心集落である真謝のこば（＝真謝方言）に翻訳し，それを小学校の読み聞かせで披露したことがあるという。その際，老年層に協力を依頼して翻訳してもらった

⁴ 来年度以降に，久米島高等学校の魅力化のための一環として「地域学」という科目を導入する予定だが，そのなかに「久米島現代版組踊」を含めるか，現在検討中だという。

という。この取り組みが評判を呼び、その後、真謝の敬老会で披露したという。

また、AN氏らの読み聞かせのグループで、週に1回、久米島のミニFMのFM久米島で、日曜日の朝に「絵本の森 ふくぎのくくる」という番組で沖縄の民話や由来話を共通語で読み聞かせるなどの活動も行っている。ただし、共通語で書かれた文献を使用しているため、読み聞かせは共通語で行っているという。

なお、FM久米島では、最近久米島の民話を地の文は共通語で読み、セリフは久米島方言で読む「久米島あやかし物語」という番組をME氏が週1回行っているというが、今回は詳しい調査を行えなかった。

2.4 保存・伝承の取組に関する地域の特徴

結論から述べると、久米島における方言の保存・伝承の取り組みはあまり進んでおらず、小学校や中学校において、地域学習や方言学習はほとんど行われていない。沖縄本島のいくつかの小学校などにみられるようなクラブ活動といった動きもみられず、学校はもちろん、学年やクラス単位でも地域学習を取り入れる様子もみられない。

教育に携わる教員らはその多くが沖縄本島から転勤してきており、任期は3年である。よって、教員が中心となり、児童・生徒へ方言の伝承を行うことは非常に難しい。

また、久米島内の小学校（清水小・大岳小・久米島小・仲里小・美崎小・比屋定小）や中学校（久米島西中、球美中⁵）を指導する久米島町教育委員会では、各校の方言の伝承の取り組みについて、詳しく把握していない。

また、久米島の「しまくとうば大会」を主催する久米島町文化協会も地域とのつながりが弱いため、大会への出場者が途絶えがちになっている。久米島町教育委員会が文化協会を積極的にサポートし、久米島内の各集落の老人会や各小中学校の父母会、子ども会などとの協力体制がより強固にならなければ、現状を改善していくのは難しいであろう。

久米島では、与論島のように個人レベルの取り組みがあまりみられない。老年層や中年層の一部に地域の方言が失われることの危機感はあるものの、どのような取り組みをしてよいのかわからず、手をこまねいているといった様子である。久米島の島民の多くがこのような意識だからであろうか、久米島の行政も真剣に取り組もうとしていない状況である。

3 久米島方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

久米島では、これまで久米島方言に関する意識調査は実施されていない。

3.2 意識調査の結果の分析

上記の通り、過去の調査結果が得られていないため、島民の意識をすべて反映したものではないが、これまで行ったインタビューによると、個人レベルでは久米島方言へある程

度愛着を感じている者もみられる。しかしながら、久米島方言と沖縄本島の方言との言語差が、その他の諸言語（国頭語、宮古語、八重山語、与那国語など）に比べると大きくないこともあり、「久米島方言を何が何でも保存・伝承していこう」という熱い情熱はあまり感じられない。きつい表現であるが、久米島方言の保存・継承は「島民は行政まかせ、行政はもっと優先すべきものがある」といった具合である。

久米島の人口は年々減少し、小中が校の統廃合が進み、幼稚園も近い将来の統合が話し合われている。若者たちが進学のため島を離れ、その後島へと戻ってこない、というのが主な要因であるが、それはどの島にも言えることである。それどころか、沖縄県の多くの島々に比べ、久米島には高等学校があるおかげで、島内に若者が多くいる島といえるのである。それなのに、与論島や伊江島などの行政や個人の活動と温度差を感じるのは、言語がその地域の文化の基盤であり、その基盤の上に文化が成り立っていることや地域の魅力の大きな要因になっていることを認識する必要がある。行政や個人の意識を変えていくために、さらに努力していく必要があるだろう。今後の大きな課題といえるだろう。

4 久米島方言の保存・伝承のための教材

4.1 久米島方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等

(1) 辞書・語彙集など

久米島方言の辞典・語彙集に関する文献として、波平憲一郎『しまくとうば辞典』（自家版、2004年）、中本正智「鳥島方言の語彙」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』（法政大学沖縄文化研究所、1981年A）中本正智『図説琉球語辞典』（力富書房金鶏社、1981年B）、中松竹雄『琉球方言辞典』（那覇出版社、1987年）、沖縄言語研究センター『久米島方言全集落調査』（沖縄言語研究センター資料、1985年）、高橋俊三ゼミナール『沖縄方言研究 第11号—久米島方言の言語地理学的研究—』（沖縄国際大学文学部国文学科高橋俊三ゼミナール調査報告書、1991年）、西岡敏・仲原穰「久米島の言語地図にみる地域性—中間報告—」『久米島調査報告書(2)—地域研究シリーズ No. 37』（沖縄国際大学南島文化研究所、2010年）、平飛鳥「久米島紬と方言」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言（琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室、2011年）などがある。

このうち、波平（2004）は「儀間」単独、中本（1981A）は「鳥島」の語彙集である。一方、中本（1981B）は「宇江城」「比嘉」「鳥島」、中松（1987）は「山里」「比嘉」の語形が紹介されているが、琉球全域の辞書・語彙集である。沖縄言語研究センター（1985）はレジュメ資料であるため、一般には出回っていない。

なお、高橋ゼミ（1991）と西岡・仲原（2010）は言語地図に関する報告書と論文であり、収載された語彙はあまり多くない。宮平（2011）は久米島紬限定の語彙を多く収載した論文である。

⁵ 今年度の4月に旧久米島中と旧仲里中が合併し、球美中が誕生した。

(2) 文法書・テキスト・研究論文

久米島方言の文法書やテキストはこれまで刊行されていない。

しかし、文法研究として、仲宗根政善「沖縄方言の動詞の活用」(『琉球方言の研究』, 新泉社, 1987[1960]年), 平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』(明治書院, 1966年), 武永睦子「沖縄久米島真謝方言の程度副詞」『方言研究年報』第9号, 広島大学方言研究会, 1966年), 内間直仁「久米島鳥島方言の文法」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所, 1981年A), 内間直仁「久米島仲里村儀間方言の文法」『琉球の方言6号—久米島鳥島—』(法政大学沖縄文化研究所, 1981年B), 屋比久浩「久米島方言の動詞・形容詞の構造について」『沖縄久米島』(弘文堂, 1982年), 野原三義「久米島方言の助詞」『沖縄久米島』(弘文堂, 1982年), 内間直仁「ハ行・ラ行四段動詞の活用—久米島具志川村鳥島方言を中心に—」『沖縄久米島』(弘文堂, 1982年), 名嘉真三成「久米島西銘方言の形容詞」『沖縄久米島』(弘文堂, 1982年), 野原三義「久米島仲里村真謝方言の助詞・助動詞」(『琉球の方言』第9号, 法政大学沖縄文化研究所, 1985年), 中本正智『日本列島言語史の研究』(大修館書店, 1990年), 仲原穰「沖縄久米島真謝方言における親族語彙」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その1〉』(千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第2集, 1999年), 仲原穰「久米島真謝方言の助詞」『琉球方言音韻・文法・語彙の研究—周辺諸方言との比較研究も含めて〈その2〉』(千葉大学大学院社会文化科学研究科プロジェクト報告書 第3集, 2001年), 仲原穰「久米島真謝方言動詞の活用」『琉球の方言』28号(法政大学沖縄文化研究所, 2004), 津波古敏子「硫黄鳥島方言の諸相—硫黄鳥島方言はどの方言圏に属するか」(『鳥島移住百周年記念誌』字鳥島移住百周年記念事業実行委員会, 2009年), 池間恵理子・前田舟子・岡田奈央美「島尻方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言(琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室, 2011年), 平良美由紀・當山奈那「山城方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言(琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室, 2011年), 高橋ユキ・砂辺祥子・山川麻里「比屋定方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言(琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室, 2011年), 知念桃子・當銘千怜・松岡美里「嘉手苅方言の動詞」『琉球方言研究』創刊号特集 久米島方言(琉球大学法文学部国際言語文化学科琉球方言研究室, 2011年)などがある。動詞の研究が多く, 形容詞, 助詞, 代名詞, 副詞の研究は数が少ないがわずかにみられる。

このほか, 音声や音韻に関する研究論文には, 以下のものがある。

平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』(明治書院, 1966年), 内間直仁「沖縄久米島仲里村儀間方言の音韻体系」『都立大論集』第8号(東京都立大学国語国文学会, 1969年), 嘉味田宗栄「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として—(その1)」『沖縄文化』第6号(沖縄文化協会, 1962年), 嘉味田宗栄「真謝・首里方言と標準日本語—比較考察の地ならしの一例として—(その2)」『沖縄文化』第7号(沖縄文化協会, 1962年), 名嘉真三成「久米島真謝方言の音韻」『沖縄久米島における言語・文化・社会の総合的研究〈中間報告〉』(法政大学沖縄文化研究所, 1980年), 藤原敬治「久米島方言の音韻—西銘方言を中心に—」『沖縄久米島』(弘文堂, 1982年),

名嘉真三成「音韻の記述的研究 9. 具志川村西銘方言」『琉球方言の古層』（第一書房，1992 年），仲原穰「沖縄久米島真謝方言の音韻研究」『沖縄文化』通巻 90 号（沖縄文化協会，1999 年），津波古敏子「硫黄島方言の音韻—久米島具志川村島島の方—」真田信治[編]『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』（A4-001）（文科省特定領域研究，2001 年），仲原穰「沖縄久米島嘉手苅方言の音韻」『社会文化科学研究』6 号（千葉大学大学院社会文化科学研究科，2002 年），仲原穰「久米島方言の音韻—真謝方言と嘉手苅方言を中心に—」『国文学 解釈と鑑賞（至文堂）』平成 14 年 7 月号，2002 年），仲原穰「久米島真謝方言の音韻対応」『日中両言語における代名詞及び親族語彙の対照研究—琉球方言との比較研究も含めて—』（千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書，2003 年），仲原穰「久米島真謝方言の名詞のアクセント—「類別語彙」1・2 音節名詞を中心に—」『琉球の方言』30 号（法政大学沖縄文化研究所，2006 年）

これらは音韻体系や日本語との対応が中心であり，アクセント研究は 1 本しかみられない。

（3）談話資料・民話集・語り

久米島方言の自然談話としては日本放送協会[編]「3 具志川村仲泊（久米島）」『全国方言資料』第 11 巻琉球編Ⅱ（日本放送出版協会，1972 年）がある。これは，旧具志川村仲泊の自然会話の資料である。収載された分量としてはあまり多くないが，久米島の自然談話が IPA で表記されたものであり，さらに音源付属のもののため，40 年以上前の言語資料として特に貴重なものである。

民話集としては，遠藤庄司[編]，仲里村史編集委員会[監修]『仲里村史 第四巻 資料編 3 仲里の民話』（仲里村役場，1995 年）があるほか，仲里村誌編集委員会[編]『仲里村誌』（仲里村役場，1975 年）の「第二章 伝説・歌謡」に収められた伝説や昔話がある。

（4）概説

久米島方言の概説としては，生塩睦子「沖縄諸島（属島）の方言」『講座方言学 10 — 沖縄・奄美地方の方言 —』（国書刊行会，1984 年）や仲原穰「沖縄県久米島方言」（『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）』（国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所，2014 年）などがある。

（5）その他

久米島の音声的な特徴について概説し，国語教育との関わりについて述べたのが中本正智「沖縄久米島における国語教育」『沖縄久米島』（弘文堂，1982 年）である。

4.2 久米島方言の教材

当該方言の保存・継承に関わる取り組みは進んでおらず，上述した文献のうち，今回の調査で確認した限りでは，これらを教材として利用している取り組みは見られなかった。

上述した通り，「FM 久米島」で最近始まった番組で久米島の民話を取り扱っているよう

だが、遠藤（1995）などを参照している可能性もあるが、今回は未調査である。

ちなみに、遠藤（1995）はほとんどが共通語で記述されているが、凡例に「語りの良い方言の話については共通語の対訳文で掲載し、その後ろに『方言語り』として掲載した」とあるように、わずかに久米島方言の言語資料が掲載されている。例えば p.148 には「真謝方言」の「鳥島と鼻切り美女」という民話の真謝方言版が以下のように記されている。

堂^{どー}の方^{ほー}によ、うま、城^{ぐしく}のあん^{とくろ}所^{とくろ}から美人ぬうまりと一たんでい。人^{ちゅ}ね、見いらん
たんでい、うぬ美人や。あんしすしが、男とぬ関^{くわんくまー}係ね一んば一て一や。あ、うまな
け一、うがたんかいや、干瀬^{ひしぐわー}小ぬあしえ一や、うま、今^{なま}、アメリカ^{とくろ}が演習すん所
やさ。うぬ、干瀬^{ひしぐわー}小^ひんかい、逃^ひんぎていめんそ一ちよ、ぬ一んち逃^ひんぎたがるやね一、
ウマチ一なかい、着^{ちん}物縫^{のー}たい、裁^たちやいするむのお、あらんりる、昔話ぬあしえ。う
ん、自分^{どうーくろ}自身^ろさ一なかいよ、鼻切^{はなち}つちね一んなや一によ。鼻切^{はなち}つちやぐとう、
「な一、我^{わー}が、世間^{しきん}の一ならん。」
りちよ、あんさ一にあまんかい、うん人^{ちゅ}おめんそ一ちゃんり。
めんそ一ちゃくとう。ある海^{うみんちゅ}人がいっぺ一望^{ぬじゅ}りよ、くじ舟^{ぶにぐわー}小からまた、乗^ぬて一、
またうり女^{いながしぬ}忍^ちび一が来^ち、来いしよ、後^{あと}からな一、男^{ういきが}な一、相手にせ一るば一て一
や。うぬふ一じーがあんりちよ、今^{なま}ちきてい、くまぬ人^{ちよ}お着^{ちん}物裁^たちやい、縫^{のー}たいし
みらんど一、ウマチ一ね一。うん、うぬ人^{ちゅ}が伝^{ちてー}ぬあんり言ち。

昭和五一年一月二八日聴取 T57A14

表記の不統一やルビに読みが振られていない箇所が何カ所もある点や句読点の打ち方ミス、久米島方言にすべき箇所に共通語が用いられている点など、疑問点も多くみられ、話者に直接確認してみたいが、現実的には困難である。

この民話を現在の「真謝」の 75 歳以上のお年寄りに見てもらい、現在の「真謝方言」に変換してもらってそれを音読してもらう、という作業を行うべきである。今回示した資料は小学生に剥かないかもしれないが、内容のよい民話は各小学校の読み聞かせに使用してもよいであろう。また、年度末の学習発表会の方言劇などに利用するのもよいだろう。

民話のほかに利用しやすいのは辞典・語彙集のうち、波平（2004）、中松（1987）である。しかし、これらをそのまま利用するのではなく、使い勝手のよいものに作り直す必要がある。

「儀間」集落の人々は、波平（2004）をそのまま利用するのもよいが、これを基にし、それぞれの単語に例文や慣用表現などを付ける、アクセント記号を付す、共通語引きを作成する、などをすれば、かなり使いやすい辞書になるであろう。

「山里」「比嘉」の集落の人々は、中松（1987）を「かな表記」にし、共通語で単語の意味を補充する必要がある。現在は「身体」や「衣服」などの分野別に配置されているが、必要なグループに組み直す、方言引きの五十音順に並べ直す、共通語の五十音引きにする、などし、例文や慣用表現などを付すとよいだろう。

「儀間」「山里」「比嘉」以外の集落の人々は、自分の集落に近い語彙集を基にし、各地の単語を入れていけば、各集落の辞書がすぐに完成する。その際、上記のように辞書に必要な項目を備えていけば、本格的な方言辞典が1冊もない島から一気に抜け出せるであろう。

このほか、大山須美『久米島謝名堂の神祭り』（沖縄国際平和研究所、2014年）には、「謝名堂」「宇根」「真謝」の民俗語彙のほか、「ナンザゾー」の祭りの祈願のことばなどもあり、直接使用することができないが、このような祈願のことばやまじないのことばなども各集落で聞き取りを行う必要があるだろう。

4.3 録音資料の作成、利用状況

久米島方言の録音資料は十分であるとは言い難いが、以下のように限られた集落の限られたデータは残されている。

談話資料の日本放送協会（1972）には附録として音声資料が付されており、そのまま利用できる。

談話資料以外の録音資料で、録音の際に話者の承諾を得た資料としては、国立国語研究所が2013年12月1日～5日におこなった「国立国語研究所『危機方言』プロジェクト久米島方言調査」がある。この調査は久米島内の4集落「儀間」「比嘉」「真謝」「西銘」の語彙・文法・アクセント（一部の集落では「談話」資料もある）の録音資料である。報告書が作成された後に何らかの形で久米島町へ還元されることを期待している。

なお、民話の遠藤（1995）には音声が付されていないが、遠藤庄司氏が民話を調査した際のカセットテープが何十本もあり、その音声資料のコピーが旧仲里村教育委員会へ渡された可能性もあるのだが、旧具志川村との合併も経たせいか、その所在がわからないという。もし、このテープが見つければ、非常によい資料になるのであるが、残念である。ただし、亡くなった遠藤庄司氏の教え子らがNPO法人としてその音声テープの保存や民話の継承に携わっているのも、もしかするとマスターテープが保存されているかもしれない。

5 保存・継承の取組の効果と課題

これまでみたように、久米島方言の保存や継承に関する取り組みはあまり効果をあげていない。それは方言大会が継続できないこととも無関係ではない。久米島でも老年層と中年層、若年層とのふれあいを重視している。しかし、美崎小学校の宇江城淳一校長の「もっと地域の行事に子どもたちを積極的に参加させるべきだ」ということばが示すようにもう少し積極的に児童や生徒へ働きかけてもよいのではないだろうか。その積み重ねが久米島をよく識ることにつながっていくのである。

「久米島しまくとうば大会」の安定した開催は、早急に取り組むべき課題である。現在行われているような児童・生徒への直接的なアプローチに加え、各集落の老人会にも協力を促し、孫やひ孫へ久米島方言で話しかける機会を増やし、伝統的なことばにより多く触れあわせることで、共通語と久米島方言との「言語差」や即座にコードスイッチを行う老年層の言語能力に対する憧れを抱かせることができれば、久米島方言の保存・継承への意欲も高まっていくことであろう。

また、美崎小学校 PTA のAN氏らが行った試み（幼い子から大人までよく知っている話を真謝方言に翻訳して読み聞かせる）も効果的である。「桃太郎」の翻訳は研究者にとってメジャーな方法であるが、通常の昔話だけでなく、怪談やとんち話、地元の英雄譚など児童・生徒が興味を引く作品の翻訳を増やす作業をすべきである。

引用文献

遠藤庄司[編], 仲里村史編集委員会[監修](1995)『仲里村史第四巻資料編3 仲里の民話』
(仲里村役場)

沖縄県竹富町黒島方言

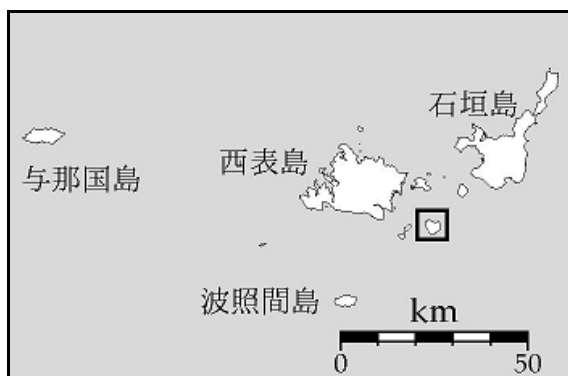
荻野 千砂子

1 黒島の概要

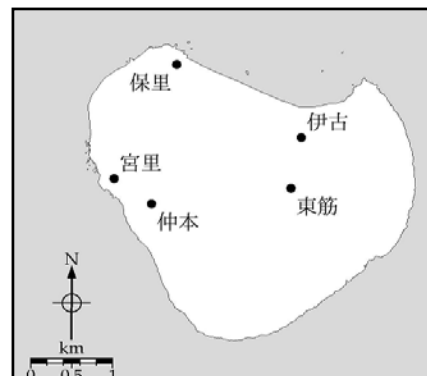
黒島は八重山郡竹富町の島の一つである。竹富町は石垣島から南西方向に大小 16 の島からなる。八重山郡の中心は石垣島であり、竹富町役場は石垣島にある。各離島の住民は石垣島を中心にして行き来をしている。黒島は石垣島から南南西に約 17 km、東経約 124 度、北緯約 24 度の位置にあり、高速船に乗って片道 30 分ほどで着く。黒島の面積¹は 10.02 km²、島の形はハート型をしており、地形としては平坦な島である。島内の中央に、黒島小中学校と黒島保育所があり、東筋集落に郵便局と医師常駐の診療所がある。黒島の人口は 209 名で²、島内には東筋（あがりすじ）、宮里（みやざと）、仲本（なかもと）、保里（ほり）、伊古（いこ）の 5 つの集落がある。この中で現在宮里集落には黒島出身の人は住んでいない。従って黒島方言が使用されているのは、東筋・仲本・保里の 3 集落である。集落の規模では東筋集落が最も大きい。そのため、東筋集落が黒島方言の代表とされることが多いが、黒島方言を考える場合に、東筋集落と仲本集落・宮里集落・保里集落（仲本集落と宮里集落は方言が似ている。また仲本・宮里集落と保里集落は方言がやや似ているという）とで異なることがあり、注意が必要である。また、伊古は糸満からの漁業従事者が居住していた集落であり、昔から伊古は言葉が違うと認識されている。

黒島はサンゴが隆起して出来たとされる地形のため、岩が多く表土が薄い。川がなく、土壌の保水能力も弱いため、稲作に適していない。井戸水には塩分が混ざるので、1975（昭和 50）年に西表からの海底送水が行われるようになるまで、人々は雨水をためて生活していた。かつては、農業生産としてサトウキビ、甘藷、タマネギなどの栽培が行われたが、現在の主要産業は畜産である。

地図 1 八重山諸島の黒島の位置



地図 2 黒島の集落の位置³



¹ 国土地理院 HP より

² 竹富町役場からの提供資料 竹富町地区別人口動態表（平成 27 年 1 月末）より

³ 地図 1、2 はトマ・ペラール氏の作成による

2 黒島方言の保存・継承に係る取組

2.1 方言大会や方言劇等の上演とその記録

過去に方言大会が行われたことがあったそうだが、その記録は残っておらず、詳細がわからない。また、2013年度に黒島小中学校の学習発表会にて、教員が『野底マーペー』の話を手本化し、それを老人会の協力により黒島方言に翻訳して方言劇の台本を完成させた実績がある。

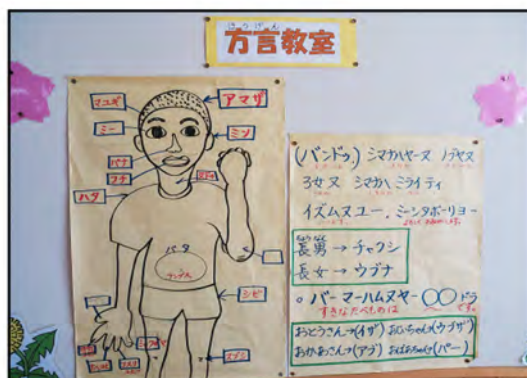
2.2 小中学校における地域学習・方言学習の状況

黒島小中学校では、2013年度から引き続き、2014年度も「放課後子ども教室」を実施している。「放課後子ども教室」は文部科学省・厚生労働省連携支援の事業である。今年度の対象者は小学校1、2年生3名で、内容としては方言教室と三線教室を5月末から週一回のペースで開いている（2014年度の小学校の全校児童は6名）。15:00～16:00までの約1時間の時間を割り当て、地域の年配者に指導の依頼している。実質45分程度の方言教室を子ども達が床に座って学習できるホールで行っている。方言教室の始まりと終わりは、起立して方言で挨拶する（写真1参照）。毎回方言で挨拶をするので、子ども達は挨拶言葉を暗記している。



（写真1）

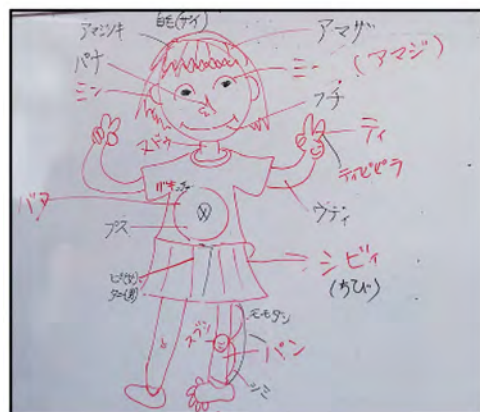
方言教室の今年度の内容としては、自己紹介、身体語彙、桃太郎の黒島方言版の話の暗誦、桃太郎の黒島方言版の歌、うさぎとカメの黒島方言版の歌、昔の遊びと遊び歌、数詞、敬老会で発表する孝行口説の練習などを行った。



（写真2）

現在、黒島では親世代が黒島方言を話さないため、子どもの側から見ると黒島方言は母語とはならない。子どもにとっては、知らない単語を一つ一つ覚えることになる。その意味で黒島方言は「外国語」の勉強に近い。

そこで、自己紹介文を作り、その文章を模造紙に書いて教室に掲示することで、子ども達が日頃から練習できるようにしたという。最初は短い挨拶で「わたしは〇〇家の（長男等）の〇〇というものです。お見知りおきください。」程度のものであった（写真3参照）。だんだん挨拶文を長くして「私は黒島小中学校の1年生です。名前は〇〇〇〇です。お父さん



（写真3）

の名前は〇〇〇〇です。お母さんの名前は〇〇〇〇です。好きな食べ物は〇〇です。よろしくお願いします」と言えるようになったという。また「放課後子ども教室」の時間は、小学校低学年対象のため毎回担任の教員が付き添って進行の補助をしている。例えば、身体語彙のときには（写真3）のように教員が絵を描きながら話者のサポートを行った。

教員が付き添わないと、方言教室の運営は難しい状況だという。確かに小学校1,2年生が対象であるため、子ども達だけで真面目に学習に取り組むのは難しい状況にある。そこで、歌や身体を動かす遊びを取り入れながら、「方言で遊ぶ環境」を取り入れた。今回、取り入れたのは「イーシヌ マーイヌ アンダーサー」と歌いながら数人で回る遊びである。遊び方は、全員座ってから、順番に片足をかけていき、歌いながらかけ声とともに一斉に片足で立ち、回りながら遊ぶという（写真4参照）。



（写真4）

このように「遊び」をキーワードに据え、単語を覚えるときには、教員がビンゴクイズ形式を考え出して実践している。例えば、数詞を覚えるときは、 3×3 の9マスに「1～10」までの数字を書いて準備をし、その後で話者が黒島方言で一つずつ数字を言っていく。例えば、話者が「フタツク」というと、子ども達は先生と一緒に「数字の何だっけ？」と考えて、「分かった！2だ！」と言いながらマス目に書いた数字を消す。マス目が3つ消えるとビンゴになる。ビンゴになっても終わらずに、縦、横、斜めといくつでもビンゴを作っていく。ビンゴが増えるたびに児童は喜ぶ。数詞は「一人、二人……」など人を数えるときと、「一個、二個……」と物を数えるときで異なるので、種類が異なるビンゴゲームができる。ゲームは、教員も一緒に楽しんでいて、教員と子ども達が共に方言を覚えていく環境作りをしている。

方言教室での学習だけでなく、吉濱徳子校長は小中学校において、伝統文化の継承に親しむ取り組みを実践している。その一つとして、豊年祭で出てくる五穀豊穰の五穀について調べ、地域の人から種をもらい、小学校で栽培をして収穫をした。粟や黍など実際の物を知らなければ、歌詞に出てきても、方言に出てきても、子ども達には実感がない。行事や実際の物への興味関心を育てながら、方言への関心を同時に高める工夫をしている（写真5は収穫した穀物である）。

また、伝統文化継承活動の一つとして、9月に行われる敬老会において、小学校の全児童で「孝行口説」の踊りと語りを一人一番ずつ発表した。「孝行口説」はすべてが黒島方言ではないが、沖縄の文化として定着しており、黒島でも年配者は全員口ずさむことができる。子供会としての敬老会への提供なので、全校児童が昼休みと放課後を使って一週間ほど練習を行った。



（写真5）

敬老会の当日、5, 6年生はすべて暗誦ができたが、低学年の子どもは歌詞が長くて言えない場合もあった。そのような場合は、懐から紙に書いた歌詞を取り出して続けて読んだ。そうやって、子ども達が最後まで方言で頑張ったことを年配者は喜んで、「孝行口説」は大変好評だったという（写真6参照）。「孝行口説」は9月の結願祭でも披露され、そのようなときは、年配者が飛び入り参加をして小学生と一緒に暗誦し、年配者との交流にもつながった。



（写真6）

2015年2月8日には、一年間の学習発表会を地域住民へ解放して行った。プログラムの一つとして、小学校の1日を紹介するものがあり、その中で1, 2年生の3名が「方言教室」の再現をし、自己紹介と桃太郎の黒島方言版の歌を披露した。吉濱校長は「放課後子ども教室」での2年間の方言教室を振り返り、子ども達の様子を見て「継続は力なり」という言葉を実感していると言う。

2.3 地域の人の協力の状況

方言教室に協力している主な話者は現在四名である（写真7参照）。日によって、一人だけのときもあれば、全員そろうときもある。黒島方言といっても、集落ごとの相違があったり、また個人に言い回しの相違があったりする。児童にとっての黒島方言は「外国語」の勉強に等しいので、一度覚えたものを訂正されると混乱をきたし、時に不平の声となる。それを話者や教員がなだめながら教えていくので、話者側にも児童側にも忍耐が必要なことがある。



（写真7）

2.4 保存・伝承の取組に関する地域の特徴

竹富町立黒島保育所においても、方言に対する取り組みを行っている。保育所と「ういぬやー」⁴との交流会が年に2回、またハートクラブ⁵との交流会が年に2回行われている。このように、園児と地域の高齢者との交流会が1年に合計4回行われていること

⁴「ういぬやー」はサテライト型ディサービスで、竹富町社会福祉協議会が指定管理を請け負っている。「ういぬやー」というのは「上の家」という意味である。介護認定を受けた人が週2回利用している。

⁵ハートクラブは、竹富町の介護福祉課管轄「竹富町ふれあいサロン事業」の一環として、月1回開かれている。地域住人は誰でも参加でき、原則ボランティアによって運営されている。元来、介護予防を目的とした事業で、現在は竹富町社会福祉協議会が委託を受けて支援をしている。

が乗船することが分かっていたので、事前に「アサクイ」の際の「船漕ぎユンタ」の歌を保育所で聴かせることにした。すると、豊年祭が終わった後に、子ども達から「船の中の歌がわかった」という感想が寄せられたという。また、9月は笠踊りを敬老会で踊ったので、その歌詞を壁に貼って覚えることにした（写真8参照）。主任保育士の宮良道子先生は、言葉の意味は分からなくても、何度もメロディーを耳にすることで伝統行事への親しみがわき、方言への興味が育つのではないかと考え、方言が自然に耳に入るような環境作りを志しているという。

3 黒島方言に関する意識調査とその分析

3.1 過去に行われた方言に関する意識調査

竹富町教育委員会によると、話者や地域住民や自治体職員等を対象として行われた黒島方言に関する意識調査は無いということである。

3.2 意識調査の結果の分析

黒島方言に関する意識調査はないが、黒島方言に関して話者にどのように思っているかを尋ねてみた。年配者は「島の言葉を忘れたら、故郷を忘れるということだよ」と話し、方言を大切に思っている。しかし、現実的にそれを伝承することは難しいことだと考えている。60才から70才の人たちが話せないため、80才前後の人は自分たちがいなくなったら黒島方言はなくなるだろうと話している。

4 黒島方言の保存・伝承のための教材

4.1 黒島方言の語彙集、辞典、文法書、テキスト等（10.5 ポゴチ）

黒島方言に関する主な研究論文をあげる。平山輝男（1967a）⁶（1967b）⁷（1967c）⁸では簡単な音韻と文法の解説があり、八重山地方の諸方言との対照が可能となっている。また、伊豆山敦子（1996）は、黒島方言に見られる母音調和的な現象について言及している⁹。伊豆山敦子（1997）は、黒島方言を大きく取り上げながら琉球語諸方言の形容詞の成立について論じている¹⁰。野原三義（2001）では、黒島方言の助詞に関して詳細な記述を行っ

⁶ 平山輝男（1967a）「竹富町のアクセントー竹富・西表祖納・古見・黒島・新城・波照間・小浜・鳩間ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

⁷ 平山輝男（1967b）「竹富町の音韻ー西表祖納・竹富・黒島・鳩間・小浜ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

⁸ 平山輝男（1967c）「竹富町の文法ー竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間ー」『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

⁹ 伊豆山敦子（1996）「琉球方言の母音調和的傾向」『獨協大学教養諸学研究』31巻1号

¹⁰ 伊豆山敦子（1997）「琉球方言形容詞成立の史的研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』54

ている¹¹。内間直仁(2004)において、内間直仁は黒島方言の音声・音韻と助詞、身体語彙についての報告があり、山口栄臣は黒島方言の動詞と形容詞の活用についての簡単な報告している¹²。原田走一郎(2014)では、黒島方言の形容詞分類に関して詳細な研究がなされた¹³。また、初めて黒島方言の集落間の相違について言及したのは狩俣繁久(2010)である¹⁴。東筋集落と仲本集落で音素が異なることを指摘した。荻野千砂子(2014)では、東筋集落と保里集落の動詞活用に相違が見られることを指摘した¹⁵。

4.2 黒島方言の教材

黒島方言において、保存・継承に関わる教材は特にない。2013年度に黒島小学校で作られた『野底マーペー』の台本は、共通語と黒島方言の両方で本文が書かれている。しかし、このような資料は少ない。黒島の文化を書き留めていると評価されているのが、幸地厚吉氏著の『さふじま 黒島の民話・謡・諺集』である。漢字とひらがな・カタカナ交じり表記で、黒島の謡や子守歌や諺などを黒島方言で記している。民話として、狩俣恵一・丸山顕徳編(2003)『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』が出されている。この中に黒島の民話も収録されているが、方言と共通語が対訳で載っている話は一話のみである。

4.3 録音資料の作成、利用状況

黒島方言の学習を目的とした録音資料はないが、芸能や民族誌を記録したDVDがある。国立歴史民俗博物館の民俗研究部が1992年と1993年に撮影したDVD「黒島民俗誌」の「島譜のなかの神々」は、神行事が記録されている。神行事であるために、黒島方言で挨拶をする場面が数分間記録されている。しかし、これが方言資料として利用されたことはなさそうである。

5 保存・継承の取組の効果と課題

2013年度と比較すると、小学校や保育所での黒島方言継承への取り組みが活発化した

¹¹ 野原三義(2001)「八重山竹富町黒島方言の助詞」『八重山、竹富町調査報告書』3 地域研究シリーズ No.29 沖縄国際大学南島文化研究所

¹² 内間直仁(2004)「沖縄県宮古・八重山方言の調査研究―宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に―」『平成14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書』

¹³ 原田走一郎(2014)「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ:接辞Kuが続く形式に注目して」『阪大日本語研究』26巻

¹⁴ 狩俣繁久(2010)「八重山黒島東筋方言と黒島仲本方言」『平成19・20・21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書 琉球八重山方言の言語地理学的な研究』(代表・高橋俊三)

¹⁵ 荻野千砂子(2014)「沖縄県黒島方言」『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究報告書』文化庁委託事業報告書

ことが感じられる。しかし、「放課後子ども教室」に実際に自分が参加して感じたことだが、子ども側から見れば、黒島方言は「外国語」に等しいものである。意味が分からない言葉を覚えなければならないのは大変である。子ども側の負担に関しては、今後の課題として検討する必要があるのではないかと考える。とはいえ、学校現場や保育所の現場で方言を使うことは、親世代の意識改革にも関わってくる。親世代が祖父母世代の文化を積極的に受け継ぐ努力をする動機付けにもなるだろう。その意味で、学校等公の機関での取り組みの重要性を感じている。

とはいえ、学校現場では通常の業務以上の負担が教職員にかかってくることになる。現在のところ、教員の熱意に支えられ運用されている状況にある。また、方言教室に協力する話者も固定化しており、現在「放課後子ども教室」に毎回来ている話者は一人である。方言は大切だと思っていても、いざ自分が教えるとなると、どう教えて良いか戸惑うようで、積極的に協力する体制はできていない。話者が積極的に参加するような動機付けも、今度の課題であると考ええる。

また、医療現場における方言に関する実態を記述する。黒島には医師常駐の診療所が東筋集落にある。現在の医師は、2014年3月に赴任し、現在まで約1年間島内に住居している。年配者とのコミュニケーションで困ったことがあるかと尋ねたところ、以前に勤務した沖縄本島の国頭村安田（あだ）よりも、島民が話す共通語は聞きやすく困ったことはないという。また、2009年から現在まで勤務している看護師も、不自由は感じていないという。ただ、年配の患者が「ミングル」と言う方言を使うことが多く、気をつけているようだ。「ミングル」という方言には「目が回る、頭がくらくらする」という意味があり、詳しく聞かないと、目の方の症状なのか、頭の方の症状なのか分からない。目が回ると、頭がふらふらするのでは、異なる病気の可能性が高い。また、方言で訴えられても分からないので、始めに看護師側から「どこが痛いのか」と共通語で質問したり、「しくしく痛いか」「きりきり痛いか」等、共通語の擬態語を用いて質問をしたりしているという。そうすると、患者の方から「あれでない」とか「あんな感じ」という「YES/NO」形式での答えが返ってくる。年配者が黒島方言と共通語のバイリンガルなので、診療所での方言の問題はなさそうである。

引用文献

- 宮良照子（1968）「黒島方言」『八重山文化』No.1 石垣中学校歴史クラブ
宮良當壮（1980）「八重山語彙」『宮良當壮全集』第8巻 第一書房
加治工真市（1983）「黒島の方言」『沖縄大百科事典』上巻 沖縄タイムス社
幸地厚吉（1987）『さふじま 黒島の民話・謡・諺集』（私家版）
狩俣恵一・丸山頭徳編（2003）『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』三弥井書店

第2部

公開シンポジウム

「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」

開会挨拶

(司会) 皆さんこんにちは。本日はご来場いただきまして、誠にありがとうございます。また、遠方よりご来場いただきました皆様、おじゃつてたもうて、おかげさま。お越しいただき、ありがとうございます。開会式の進行を務めさせていただきます八丈町教育委員会、関村優子と申します。よろしくお願いいたします。(拍手)

ただいまより八丈町町制施行 60 周年記念事業、「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」を開会いたします。初めに主催者を代表いたしまして、八丈町長山下奉也よりごあいさつ申し上げます。

(山下) 皆さんこんにちは。日本の危機言語・方言サミットの開催に当たりまして、八丈町を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。八丈島でも若い世代が八丈方言を使わないようになり、方言を耳にする機会が少なくなっていることは、八丈に住む人の多くが感じているところでございます。そのような中、ユネスコによる消滅危機言語の発表があり、言語の多様性を守るという新鮮な問題提起がありました。私も八丈方言、八丈語を話す人間の 1 人として、普段何げなくて使っている自分たちの言葉が、重要な存在意義を持ったものだとは再認識したわけでございます。

一方で日本国内における標準語、共通語という考え方があり、国際社会においても英語が世界の共通語であるといった認識がございます。もちろんコミュニケーションだけを考えれば、そちらの方が都合がいいわけですが、このような言語の多様化とは相いれない状況が当たり前になっている中で、消滅の危機にある言語と、どのように向き合っていけばいいのか、私自身、今日と明日、非常に楽しみにしています。

結びになりますけれども、日本の危機言語・方言サミットの開催に当たりまして、文化庁をはじめ国立国語研究所、多くの機関の皆様にご尽力をいただきました。あらためまして厚く御礼を申し上げ、簡単ではございますが、私の開催のあいさつとさせていただきます。今日、明日、2 日間よろしくお願いいたします。(拍手)

(司会) 続きまして共催をしていただきました文化庁より、文化庁国語課課長、岸本織江様にごあいさつをいただきたいと思います。岸本様、お願いいたします。

(岸本) ただいまご紹介いただきました、文化庁国語課長の岸本と申します。本日はお忙しい中、この「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。共催者として、一言ごあいさつ申し上げます。まず始めに、この催しの開催に向けましてご尽力をいただきました八丈町の皆様、それから国立国語研究所の皆様、また各地域において日ごろより地域の言葉、言語、方言の調査研究、また保存継承活動に取り組んでおられる皆様のご努力に、心より敬意を表しますとともに御礼を申し上げます。

さて国語に関する施策におきましては約 20 年前、今の文化審議会の前の国語審議会の時代から、地域の言語生活を生き生きとさせる美しく豊かな言葉として方言を位置付けまして、その尊重をうたってまいりました。方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うかけがえのない価値を持つものであり、これを尊重するということは、人々が全国の方言それぞれの価値を対等なものとして認識するというにほかなりません。

近年方言は地域の魅力を高める、あるいは自分の個性を際立たせるものとして活用するという動きがあり、またそれが注目されているところでございますけれども、全国的なコミュニケーションの基本である共通語と方言がそれぞれ役割を分担しつつ、共存していくことが望ましい姿ではないかと考えております。平成 21 年、ユネスコによって日本国内の 8 つの言語、方言が消滅の危機にあると認定されて以来、文化庁ではまずそれぞれの言葉がどのような状況にあるのか、把握することに努めてまいりました。

今年度は、これまで行ってきた調査を中心とした実態の把握が一区切りとなりますことから、次の段階を模索するための 1 年と位置付けております。その一貫として八丈町が企画なさった、この「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」に参画できましたことは、今後の取り組みを考えていく上で非常に有意義であり、うれしく思っております。また東日本大震災の被災地における方言にも消滅の危機に直面しているものがあり、文化庁として現状の調査を行うとともに、保存、継承のための地域の活動を支援しております。

本日この場にも、被災地で方言の伝承に携わっている方が参加なさっていると伺っております。この 2 日間で今後全国の危機になる言語、方言を抱える自治体や関係者のネットワークを構築していく上にあたっての、重要なきっかけとなるものと期待しております。また来年度以降、文化庁としてどのような取り組みや支援をしていくことができるのか、しっかりと考えてまいりたいと思っております。

以上、簡単ではございますが、この「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」が、国内の消滅の危機にある言語や方言に関する各地域での取り組みをつなぎ、さらに活発な活動への道筋を照らしだすものとなることを祈念いたしまして、簡単ではございますが私のごあいさつとさせていただきます。本日、明日の 2 日間、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。（拍手）

（司会） ありがとうございます。同じく共催をしていただきました国立国語研究所より、国立国語研究所副所長、木部暢子様にごあいさつをいただきたいと思います。木部様、お願いいたします。

（木部） こんにちは。国立国語研究所の木部と申します。私どもは 2010 年から日本の中にある、消滅の危機にある言語、方言をできるだけたくさん記録しよう、保存しようという研究プロジェクトを始めました。そして 2012 年に八丈島にまいりまして、5 つの集落の方々に方言をお伺いしました。そのときに八丈方言を教えてくださいました方が、今日はたくさんいらっしゃると思います。それからまた、毎年奄美や沖縄に行っておりますので、そのときにお世話になった奄美の方、沖縄の方もたくさんいらっしゃっています。どうも

ありがとうございます。お世話になりました。

今回のこの催し物は、2012年に八丈町に国立国語研究所が調査にまいりましたときに、最初に教育委員会の教育長さん、それから教育委員会の方々にお話を伺いました。とにかく全国の危機言語方言サミットを開きたいと、それがこの企画を伺った最初でございます。

そのときは、そういうことができたらいいいですねと、まるで夢のようなお話で、教育長さんともお話をしたことを思い出しますが、こういう形で本当に実現するとは。本当に感動しております。どうもありがとうございました。そして同時に八丈町の熱意と、そういうことを実行する活動力と申しますか、そういうものに本当に感激しております。

私どもにできることは、できるだけ方言、言語を記録すること、今は、録音を取ったりビデオを撮ったりすることができますから、それも合わせて記録することぐらいです。実際に話し言葉で言語や方言を伝えていくというのは、そこに生活していらっしゃる方にしかできないことなんです。ただ、私たちは私たちなりに、せめて何かお手伝いができればと思って、録音を取ったり録画を撮ったり、それを文字にしたりしております。今日、私どものような研究をしている人間と、それから実際に地元で使って生活をしている方、それから保存活動に携わっておられる方々が一緒になって、こういう会を開くことができ、本当に感激しております。

2日間、今日と明日と、たぶん実りの多い2日間になると思います。できれば、このような催しは今年で終わらせたくない、来年も何らかの形で継続できればなと思っております。その第一歩を開いてくださって、八丈町に深く感謝申し上げます。これからも、私ども、できる限りのことをいたしますので、一緒に歩んでまいりたいと思います。では、2日間、どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

(司会) ありがとうございました。続きましてご来賓の方々より、ご祝辞をたまわりたいと思います。初めに八丈町議会議長、土屋博様、お願いいたします。

(土屋) 歓迎あいさつをする前に、私も島で育って島育ち、一度も外へ出たことはございませんので、一言、島言葉でしゃべってみたいと思います。けいは朝早くとんめていに起きたら、ちょっとこげいとおて、こら今日のサミットがうまくいくのかなと、こう心配しようが、天気になって、朝ちょっとぼつぼつ雨が降ってきとるとがね、まあ、よかったなと、まあ、そういうことでございます。

私、今日初めて何年かぶりで着物を着ました。昨日の夜、嫁と夕飯をかみながら、酒を飲みながら、明日はサミットがあるよと話したら、72年前に戦争で死んだおやじの服、和服があって、それならば、これをがんばこ入れる前に1回着てあいさつしとこんと。じゃあ、どうだろうということで、嫁が夜中にたんすから引き出して、朝初めて見ました。亡くなった父のにおいは、全然残っていないですけど、今日はおやじの和服で、あいさついたします。それではただいまから、歓迎のあいさつを申し上げます。

「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」開催に当たりまして、八丈島議会を代表いたしますして、一言ごあいさつを申し上げます。本日はご多忙の折り、北は北海道、南は沖縄という大変遠方より東京都が中間地点になりますけれども、東京からさらに「鳥も通わぬ八丈島」という歌がございますが、この遠方までいらっしやいまして、本当にありがと

うございました。このような素晴らしい大会が開催されますことは、誠に八丈島といたしましても、光栄でございます。

また八丈島、今年は町制 60 周年記念を実施しているところでございます。この記念すべき年に長きにわたり切望しておりました八丈島での方言サミットが開催されることにつきまして、町民一同、大変喜んでいるところでございます。ご来場の皆様方、そして関係者の皆様方、厚く御礼を申し上げる次第でございます。方言消滅の危機が叫ばれている中、片一方では若者の言葉が、新語がどんどん出ておりまして、我々は理解に苦しむような時代となっております。

若者の言葉は、はやり言葉といいますか、流行ですか、消えては出て、出ては消えて、そういうふうな繰り返しをしておりますが、方言となりますと、地域に根ざした歴史深き、文化高き言葉だと私は思っております。本日はお互いの友好関係を築く第一歩となるよう、どうか各地区の方々の方言を永遠に残すために、有意義なサミットであることをご祈念申し上げ、あるいは切望いたしまして、はなはだ簡単ではございますが、八丈町会議長のあいさつとさせていただきます。本日はありがとうございました。（拍手）

（司会） ありがとうございました。続きましてご後援をしていただきました東京都教育委員会より、教育庁八丈出張所長、和田慎一様、お願いいたします。

（和田） ご紹介いただきました、東京都教育庁八丈出張所長の和田でございます。本日は「日本の危機言語・方言サミット in 八丈町の開催」、誠にありがとうございます。日本各地に残る、危機に瀕している貴重な方言を後世に伝えていこうとする、ここにお集まりの皆様方の懸命な取り組みに対して、深く敬意を表します。皆様方が今回の行事を通じて参集し、交流することは、ほかの地域での取り組みを参考としながら、今後も方言を後世に伝えていく活動を、よりいっそう進めていくことができる大変貴重な機会だと思います。これまで受け継がれてきた地域の方言の話すということは、その地域の伝統や文化を後世に継承していくことにもつながるものです。

東京都教育委員会では学校教育の現場において、日本の伝統文化を理解する教育を推進しております。島内にございます都立八丈高等学校では、郷土文化実習の授業において、生徒たちは八丈方言について学んでおります。また、八丈島にある東京都の行政機関全体で作成しております総合計画では、その計画の基本理念を、八丈方言を用いて定めております。それは「おじゃりやれ、住みよけ島、で一じけ島」、標準語では「いらっしやい、住みよい島、美しい島」という意味です。都が描く島の理想の姿を方言で表現することにより、島民の皆様に分かりやすく、また親しみを持っていただくための取り組みです。

今後とも東京都では八丈方言を上手に行政の取り組みに生かし、八丈町や地域の皆様とともに貴重な島の財産である方言を含めた伝統、文化の継承を進めてまいります。結びに、本日この行事を企画していただきました、八丈町教育委員会の皆様のご苦勞に感謝申し上げますとともに、来島されました日本各地の皆様のますますのご活躍を祈念、お祝いのあいさついたします。本日は誠にありがとうございます。（拍手）

（司会） ありがとうございました。同じくご後援をしていただきました沖縄県より、沖

縄県生活振興課副参事，安里康仁様，お願いいたします。

(安里) ハイサイ グスーヨー チュー ウガミアブラ。沖縄の方言で、「皆さんこんにちは。ごきげんいかがですか」というあいさつでございます。沖縄では知事を先頭にあいさつの冒頭と最後，必ず島言葉を入れようという指示が出て，今は徹底されようとております。ご承知の通り，平成 21 年にユネスコがアイヌ語，八丈語，奄美語，国頭語，沖縄語，宮古語，八重山語，それから与那国語，8つの言葉を消滅の危機にある言語として指定しました。8つのうち5つが沖縄の言葉で，奄美も同じ文化圏ととらえますと，8つのうち6つが琉球文化圏ということになり，沖縄でも言葉をどうやって継承していくのかという危機感がかなり強まってきております。

ユネスコの指定の前に，平成 18 年 3 月に議員立法であります，9 月 18 日を「しまくとうば（島言葉）の日」とする条例が制定されました。それから沖縄の言語に関する取り組みが始まったわけでございますけれども，最初のころは，島言葉は言語なのか方言なのかという議論があったりとか，また表記をどうするかという議論があったり，なかなか前に進めない状況があったわけです。

私たち行政として何をすべきか再度考えたときに，みんなで使っていきたいという運動をやるのが一番だということで，昨年，しまくとうば普及推進県民大会，第 1 回目の県民大会を開催しました。そうしたら，マスコミで年末に 10 大ニュースとして発表してくれました。海外，国内，県内の 10 大ニュース，それぞれが新聞に載るんですけども，しまくとうば普及推進県民大会が，ある新聞社では 9 位ということで，かなり大きな反響を呼びました。マスコミの方も島言葉の取り組みを取り上げてくれることが，最近多くなっております。

ですけれど，やっております，なかなか言葉を普及して推進していくことは難しいなというのが実感でございます。本当に一人一人が危機感を持って，取り組んでいかなければいけないのかな，と思っています。

沖縄では，最近，県知事が変わりました，新しい知事が 12 月 10 日に初登庁されました。この翁長新知事は，那覇市長時代にハイサイ運動といって，島言葉の普及に関してものすごい取り組みをやった方です。知事が初登庁しましたらすぐ，部局長を集めて会議が開かれるんですけど，登庁前に知事の指示が飛びまして，この会議のときには各部局長は島言葉で自己紹介をするようにという指示が飛びました。また，会議の後に職員に対して訓示をするんですが，1 階のロビーに 2,000 人ぐらい職員が集まってきたようです。その職員に対して，基地問題，経済問題，そういったことの最後に，「私は島言葉を絶対に普及推進するんだ」と，決意を込めて語っておられました。知事が言うには，島言葉は沖縄の文化の基礎だと，これをなくしたら沖縄の文化そのものがなくなるんだということを強く訴えておりました。

ということで，トップが変わり，また力を入れ直して頑張っていかなければいけないと思っております。今日はここに全国各地の言葉の普及に取り組んでいる方々が集まっております。この方々と連携をして，私たち沖縄県も頑張っていきたいと思っております。サミットを企画してくださいました八丈島の皆さん，八丈島教育委員会の皆さんはじめ，関係者の皆様に深く感謝を申し上げまして，あいさつとさせていただきます。どうもあり

ありがとうございました。(拍手)

(司会) ありがとうございました。本日は大変お忙しいところ、ご臨席いただきましてご来賓の皆様、厚く御礼申し上げます。なお、パンフレットにも記載させていただいておりますが、さまざまな団体様にご後援をしていただいております。厚く御礼申し上げます。以上を持ちまして開会式を終了いたします。

講演

「方言で遊ぶ・方言を遊ぶー少し訛って、ずーッと訛って」

伊奈 かつぺい

(茂手木) 皆さん、こんにちは。教育委員会の茂手木と申します。よろしくお願いします。(拍手)

伊奈さんの経歴をご紹介します。経歴はお手元のパンフレットに書いてありますので、お読みください。私はちょっと経歴と違うことをお話しします。聞いてください。伊奈かつぺいという名前、すてきな名前だなと前々から思っていました。それで先ほどお話を聞いたら、40年ぐらい前にこの名前を付けたんだということをおっしゃっていました。40年前から都会じゃなく、中央でなく、田舎をアピールする、そういう心があったのかなと思います。今、皆さんが集まっているのは八丈島の田舎かつぺいかもしれませんけど、そういうことですから地方を大事にする、そういう方です。

私も伊奈さんのCDとかDVDを見ました。本当に笑いがたくさんあるんです。でも笑っているうちに、少し目頭が厚くなったりする、そういうようなCDとかDVDでした。今日もそのような話が聞けることを期待しております。1時間20分ぐらいですけれども、皆さんご清聴よろしくお願いします。それでは、伊奈さんに登場してもらいます。伊奈かつぺいさん、よろしくお願いします。(拍手)

(伊奈) こんにちは。伊奈かつぺいでございます。ありがとうございます。今、脇でお話を聞いていて、名前だけで呼んでいただいたんだと、良い名前を付けておいてよかったなと今、つくづく思っております。これが都はるみだったら、呼んでいただけなかったんですよ。田舎っぺでよかったなと思っておりますけれども、八丈町町制60周年だそうで、おめでとうございます。そして、そのおめでたい中に「日本の危機言語サミット」を合わせて開くというので、日本中たぶん検索をしたら、田舎者という名前を付けているやつは、そういなかったんでしょうね。

去年の春だったですか、来ていただけませんか、八丈に来ませんかという。去年の12月は、だめだったんです。12月はだめですよと言ったら、いえ、来年ですよという。えらい前から準備をなさっていたんだと分かったのであります。私は青森県弘前市というところで生まれて、誰から何と言われても「都」という名前は付かない人間です。伊奈かつぺいという名前を付けたのは、20歳のときであります。

青森放送という放送局に臨時職員のような形で入社しまして、そのときに青森市に津軽弁でもってミュージカルをやるという劇団があったんです。これは面白そうだなと思いました。津軽弁でミュージカルをするという。昭和30何年にスタートした劇団ですから、相当古いんですね。そのころ方言でミュージカルをやる劇団というのは、日本中でどこに

もなかったらしいです。そこに、面白そうだからと入れてもらう。ところが青森放送に入社してすぐですので、その劇団で芝居を手伝うということが非常に心苦しかったのであります。青森放送に入社したのであれば、青森放送の仕事を覚えなければいけないのに、脇の方で芝居をやりたいというのは、これは何としても会社に隠さなければいけなかったのであります。ですから、会社には本名で出掛け、芝居で遊ぶときは別な名前にしようと。そこで 20 歳のときにいろいろ考えて、2 つ名前をその当時思い付きました。その 1 つが伊奈かつぺいなんです。伊奈かつぺい、あるいは井の中蛙という名前はどうかと、意味合いとしては同じですね。

井の中蛙と伊奈かつぺいと、どっちが人名らしいだろうか、人の名前に近いのはどちらだろうと思ったら、井の中蛙はちょっと名前としては奇をてらいすぎている。伊奈かつぺいにしようというので、そこからずっと 20 歳からこの年まで、67 歳になりましたが、40 年はとくに過ぎていきます。ずっと伊奈かつぺいでやってきたのであります。

弘前に生まれて育って青森に移り住んで就職して、会社には内緒で付けた名前ですから、よく変わった芸名ですねとか、面白いペンネームですねと言われたりしますが、芸名でもなければペンネームでもないんです。さっきお話ししたように、会社には内緒で遊ぶために付けた名前ですから、私は自分の名前のことを偽名と思っています。これが一番正しい日本語でしょうね。偽名でもって、ずっと生きてきたのであります。

今回は方言ということでございますので、日本の危機言語、方言と言われて、こちらに最初に連絡があったときに、もしかしたら、これまで思いもしませんでした。津軽弁が危機言語なのかなと本気で思いました。朝から晩まで毎日津軽弁しかしゃべっていない人間が、危機言語というふうにユネスコから言われた、これは大変な問題ですから、そんなはずはないだろうと思ったら、ただ単に伊奈かつぺいという名前で呼ばれたというのが後で分かって、とてもうれしい思いをしました。津軽弁は今、生きています。結構遊んでいます。

今日のタイトルにいただきました「方言で遊ぶ・方言を遊ぶ」は、まさに私の場合はそうやって遊んでいるのであります。世界中には 6,000 か 8,000 の言語があって、そのうちの 2,500 が危ないという。ほかの言語のことなんか知りやしないのでございまして、私個人的には、いわゆる母語、母国語が津軽弁なのであります。そこで育ったんですから。ですから標準語、共通語と言われる言葉は、私にしてみれば第 1 外国語に当たります。

両親は津軽弁、ご近所も全員津軽弁、学校に行く同級生全員津軽弁、学校の先生も津軽弁、校長先生も津軽弁、周り全部津軽弁の中で育ったので、母語が津軽弁。小学校の 4 年生、5 年生ぐらいに、これだけでない言葉があるらしいぞというのを、うわさに聞いて、別な言葉もあるらしい、へえなんて、珍しい言葉があるらしいよという。

中学校の 1 年生ぐらいのときですか、学校の先生に言われたことがあります。津軽弁になります。気を付けて聞いていてくださいね。「おめだち、津軽弁だっきゃ汚ね言葉だんだはで、しゃべればマネんだや」。さあ、分かりませんね。翻訳します。もう 1 回言います。「おめだち、津軽弁だっきゃ汚ね言葉だんだはで、しゃべればマネんだや」。つまり、なあ、お前たち、津軽弁という方言は汚い言葉なのだから、使ってはいけないのだぞというのを、

先生が今のように言ったのです。

今はなくなりましたが、昔は教壇というのがありましたね。ちょっと高いところに先生がいたものです。今はだめですね。教壇がなくなってから先生と子供が友達同士みたいになって、上下関係がだめになりました。ぜひ文科省の方でも、教壇をもう一度採用するようにしていただいて、先生は上の人間なんだぞというのを教えた方が、私はよろしいかと津軽の僻地で思っているのです。もう1回言いますね。「おめだち、津軽弁だっきゃ汚ね言葉だんだはで、しゃべればマネんだや」、津軽弁は汚い言葉だから使ってはいけないんだぞと教える学校の先生が、これしか言えないのです。どうします、これ。

あのとき子供だったですから、ああ、そうかというふうに思いましたが、当時からあんまり素直な子供ではなかったんで、じゃあ、どう言えばいいのと聞いたら、先生がそれ以上踏み込めないのです。つまり津軽弁は汚い言葉だから使ってはいけないと言っている先生自身が、標準語も共通語も話せないのです。それで注意されたって、禁止をされたって、どうしますか。「じゃあ、どう言えばいいの」「うん、分からんでや、津軽弁でねえば、何でもいいんだべ」みたいな、そういうことしかできない先生に習ったものですから、非常にあいまいです。中学生のころから津軽弁という方言は人前では使ってはいけない言葉なんだ、汚い言葉だから使ってはいけない。ラジオから流れてくるような——まだテレビはありませんから、小学生のころは——ラジオから聞こえてくる、いわゆるNHKというところのアナウンサーが話している言葉、標準語、共通語というのはきれいな言葉なんだろうと、子供心に理解しました。

いつも使っている津軽弁が汚い言葉なんだと言われたのであれば、汚くない言葉というものもあるはずで、それはきれいな言葉、それは使ってもいい言葉、それが標準語、共通語なんだと、子供としてはそのように理解するのが当たり前だと思います。それがあって反面、後でだんだん大きくなっていくに従って、知るのでございます。日本にはあちこちに方言がたくさんあるということを。青森の方言だって簡単に言うと、大きく3つに分かれるのであります。せっかくこういうの(ホワイトボード)を用意していただきましたから、こんな感じですね、青森県。青森県は、こういう感じです。

この辺にあるのは、十和田湖でありまして、青森市がここ、県庁所在地であります。これが津軽半島、下北半島、これは夏泊半島、陸奥湾、ここに流れているのが津軽海峡で、この上に北海道があるわけで、この下がくっくつと分かれていって、東北6県がこれにつながっていくんですが、津軽というのは、この青森の左側半分、西側半分と言えばよろしいでしょうか。このあたりで使われている方言が、津軽弁という方言です。

ここからこっちは南部地方という言い方をしますが、この辺で使われているのが南部弁と言います。さらにこの下北、下北の鉾のあたり、この辺が下北弁と大きく分けて、あの小さな青森県の方言が3つに分かれているんです。私はこの弘前生まれで、ここは「汚ねえ言葉だぞ」と言われて、汚ねえのはこの辺なんですね。なるほどねと、こっちはきれいなのかなと思ったりもしました。ここだけ汚いのか、方言は全部汚いのかは、先生は教えてくれませんでした。

関西弁という言葉話す人は、方言だと思っていないみたいですね。関西の人は、あれが標準語だと思っている。むっとしますね。何とも思わないんでしょうかね、全国放送で、あれだけ大阪弁をしゃべって。

大阪弁という言い方をすると、関西弁という言い方をすると、関西の人がむっとしたような顔をするんです。何でしょうか、関西弁。私は関西弁と覚えましたが、違うんだそうですね。私は京都だから大阪と一緒にしないでほしいと。京都でも大阪でもいい、僕は奈良ですからとか、そういう言い方をするんですね。私は京都も奈良も大阪もみんな一緒くたでございますから、あの辺をまとめて関西弁という言い方をすると、関西の方が、東京の方も含めてですが、ズーズー弁とか東北弁という言い方を平気でするのを、私は許せません。関西弁を許さなくて、どうしてズーズー弁が許せるのか。

国語の辞書を見たことがありますか。先生方はもう見ているでしょうけど、ズーズー弁というのは大方の辞書に出ております。大方の出版社で出ておりますが、どう書いてあるか、疑い深い方は、後で調べてください、ズーズー弁。

ズーズー弁というのは「い」と「え」、「し」と「す」がはっきりしない言葉、東北弁。(まる)」これだけなの。辞書まで、認めているんですよ、ズーズー弁というのを。津軽弁をしゃべる人間はズーズー弁だと思っております。津軽弁は津軽弁で、ズーズー弁とは違うものです。私に言わせると、ズーズー弁は、福島県のなまりがズーズー弁であって、あそこから上に来ると、ズーズー弁ではないという解釈をするのであります。

標準語、共通語を勉強する先生方はたくさんいらっしゃいますが、方言を勉強する学者先生がいないうふに、中学生のあたりまで思っておりますが、大きくなってきたら方言を研究している先生がたくさんいるんだということが分かって、とてもうれしくなりました。人間きれいなものにだけ近寄るかと思ったら、汚いものを研究する先生もいるんだな。これは尊敬に値するのでございまして、今日もたぶん客席の半分以上は専門家と称する言葉の先生でしょうから、今日の会場の半分ぐらいは汚いものが好きな人なんだと、尊敬に値するなと。

その汚いもの、ある程度の年になったとき、日本中にはたくさんの方言があるんだけど、津軽弁というのは鹿児島弁と並んで、難解な方言であるというのを聞いたときは、うれしかったですね。難解ですか。どういうことですか、分かりにくい、そうらしいです。

辞書の説明によると「い」と「え」、「し」と「す」、そんなものじゃないですから、津軽弁は。とても難しい方言だということを中学生の後半になって、高校生ぐらいになって知ったときはうれしかったですね。なぜうれしかったか。この後に出てくる島の方たちの言葉を話す方も、同じ意見をお持ちだと思いますが、そんなに難しくて、日本中で通じないような難解な言語を、学ぼうと思ひもしないうちにマスターしたんですよ。

こんな得なことはない。一生懸命勉強をしたって覚えられない英語やフランス語がある中で、何の勉強をする意識もないのに、はっと気が付いたら一番難しい言語を話せるようになったこの幸せといったら、ないんじゃないでしょうか。習った方はいますか。沖縄に生まれて沖縄弁を習って勉強をして、予習をして復習してマスターをした人っていますか。いませんよね。はっと気が付いたら、うちなーぐちを話せるわけですよ。こんな得ことはない、私は津軽にいてそう思いました。

学ぼうとも思わないのにマスターできたこの幸せ、これを駆使して生きるに越したことはない、そう思ってそこから方言で遊ぶ、方言と遊ぶ、共通語、標準語と言われるもの

で、日本中でコミュニケーションが取れるのであれば、その地域でしかつながらない方言で遊んで何が悪いかという、ここまでどこも間違っていないですね。

国に対して大きなことを言う気はまったくございませんけれども、標準語、共通語を勉強しろ、方言撲滅運動というのがありました。明治時代から大きいもので3回ぐらいあったと人から聞きました。方言はだめ、汚いから全部だめ、富国強兵だそうです。日本が戦争で戦うときに各地の兵隊が、みんな方言が違ふと統率が取れないという話を読んだことがあります、それはそうでしょうね。大將が青森の人で兵隊が九州の人で、言葉が通じないわけです。青森の隊長が「進め」って言っているのに、九州の人には「休め」って聞こえたみたいな、全然違ふ。勝つ戦争も負けてしまいますからね。

だから言語を統一して、「休め」と「進め」は違ふぞというのをみんな覚えてやうというのが、方言撲滅につながったに違いないと、私は思っているのです。そんなことを書いた本は一度も読んだことはありませんし、本なんかまず読みませんから分かりませんが、こんなものはいいいんです。自分の思いだけでしゃべっていいわけですから。名前だけで呼ばれた人の話なんかどうでもいいわけで、立派な話を聞こうなんて思っている人は1人もいないので、いるとしたらそれはずうずうしいぐらいなもので。

話はどこまでいきましたか？しゃべっているうちに、だんだん分からなくなってくるんですよ。

ズーズー弁、繰り返しますよ。ズーズー弁というのは「「い」と「え」、「し」と「す」、「ぢ」と「づ」がはっきりしないもの。東北弁。(まる)」。(まる)が打ってあります。たいがいの辞書が。(まる)をしてあります。ところがその辞書は間違っているということに、後々、1人で勉強をして気が付くんですね。「東北弁。(まる)」これで終わるとだめなの。なぜかという、20歳過ぎからですか、30歳を過ぎてからですか、島根県の出雲というところに、テレビの番組の取材で行きましたが、あそこもズーズー弁なんですね。安来節なんていう、何だか分かりませんでした、(まる)、「ずうり、にずうり離れた先に」って、「ずうり、にずうり」って言うんです。何だろうと思ったら、「10里、20里」のことだったんですね。10里、20里。それがあっちの言葉で、「ずうり、にずうり」って言う。すごい言葉だなと思っていたら、出雲のかたが、松江を中心に40キロぐらいですか、みんなこういうなまり方をして、「わたすたちはズーズー弁だから」というのを、島根の人の口から聞いたんです。

島根県でもズーズー弁をしゃべる。ということは、大方の日本で出ている辞書が間違っている。そこですよ。話は、そこに行きます。ズーズー弁というのは、「「い」「え」、「し」と「す」、「ぢ」と「づ」がはっきりしない言葉、東北弁。(まる)」。(まる)と断定してはいけないんです。出雲もズーズー弁をしゃべるとなったら、鉛筆の芯を細く削ってこうやって、「など」と入れていただくと、「ああ、そうか、東北だけではないのだな、出雲でもしゃべるんだな」と、こうするといいいんです。

話が飛びますが、辞書がみんな立派だと思ったら大きな間違いですね。子供のころはずっと辞書は信じていましたが、辞書だって間違っている、というか、正しくない。『広辞苑』、

ご存じですね。あれは立派な辞書だと子供のころに教わりました。『広辞苑』はうちにも何冊かあります。

話がまた飛んで、私は子供が4人もいるんです、今の時代に。大きなお世話ですけどね。子供が次々いろいろな質問をしてくるんで、「お父さん！」と聞かれたときに、いつでも答えられるようにしようと思って、『広辞苑』が新しく出るたびに買っていたんですが、待っているんですが出ませんね。

見たことありますか。『広辞苑』に「広辞苑」という項目がないんですよ。見たことありますか、やってみてください。「こ、こ、こ、う、う、う、じ…」、ないんです。『広辞苑』に「広辞苑」という項目がないんですよ。知っていましたか。

こんなに分厚いくせして、書けばいいでしょう？ 『広辞苑』に「広辞苑」って。一言で済むでしょう？ 『広辞苑』に「広辞苑」とあって、「この本」。それだけでいいですよ。何でそれが書けないんですか、こんな分厚いくせして（こういう話を作っていくの、好きです）。だったら、こんなに分厚いんだったら、『広辞苑』に「大辞林」も載せてやればいいじゃないですかね。ついでですから、こんな分厚いんだから。『広辞苑』に「大辞林」という項目があって、説明だって一言でいいわけでしょう？ 「似た本」。それでいいですよ。

どうしてそれができないんだみたいな。そういう言葉でどんどん遊ぶようになって、だから言語といいましょうか言葉、方言も含めて、学問として考えたことは一度もないのであります。常に遊び道具であるのでありまして、だからこれからなまるんだったら「い」と「え」が混同すると言われた、それだけで1週間ぐらい遊べると思いませんか。「い」と「え」ですよ。

本当に「い」と「え」は、青森の方に行くと混同します。だから、エンフルインザって言います。誰かマスクして「どうしたのっ」て、エンフルインザ、誰も直しませんよ。「い」と「え」の混同ですね」と言う人は、1人もいません。言われた方は、「ああ、エンフルインザね」って、これで話はずっと何も問題なく進むのであります。これはとても素晴らしいことでしょう。「い」と「え」、エロインピツですよ。「い」と「え」の混同というのは、そういうことですから。

じゃあ、「い」と「え」を混同したらどれぐらい面白い言葉が並ぶだろうか、それをずっと調べていつているだけで、1週間ぐらいすぐたちます。だから余計なお金を掛けなくても、「い」と「え」の混同、じゃあ、「ぢ」と「づ」が違うものは何があるだろうと思ったら、紙と鉛筆だけでとても毎日が楽しいんです。

話が飛びますが、この年になると眠れないんですよ。朝早く目が覚めてトイレに行って帰ってくると、もう眠れない。うなずいている方がたくさんいて、うれしいですね、似たような年代の方、そうだと思います。朝方トイレに行って4時半とか5時に、実は今日もここのホテルで朝5時に目が覚めて、それ以後眠れなくなって、いつものことですから、そのままずっと腹ばいになるんです。

朝、目が覚めて腹ばいになって、必ず枕元に白い紙とボールペンを用意しておいて、眠

れなくなったら枕を胸の下に置いて、腹ばいになって何でもいいんですが、思い付いたことを書きます。「い」と「え」の混同、ほかに何があるだろうかみたいな、そうやっているんです。やっているうちに何だろう、眠れないから起きているわけですね。いろいろなこと、くだらないことをメモっているうちに、眠くなったら眠ればいいんです。幸せでしょう。

ところが、面白いことを思い付くと、かえって目がさえてきて、ますますうーんと起き出して、バッグから新しい紙を持ってきたりなんかして、そういうこともあります。くだらないなと自分でふと思った瞬間に眠くなるので、ぜひ朝、目が覚めて眠れないという方は、お試しください。お金は掛かりません。広告のチラシがあればいいんです。

広告のチラシも、いいチラシと悪いとチラシがありますね。分かりますね、何が言いたいか。裏表に印刷をしているのは、悪いチラシですね。ほかに使い道がない、あんなものは。必ずチラシは、裏は真っ白にしておいていただくと、我々には助かるんですね。その裏が白いチラシをたくさん用意しておいて、目が覚めたら思い付いたことを書く。眠なくなったら眠ればいい、目がさえてきたら、そのまま起きていればいい。誰にも迷惑はかけない。枕元の電気スタンドだけでいいんです。これを私は長年、眠くなったら眠る、眠れないときは起きている、これを「腹ばいのララバイ」と言う。こういうことをして、ずっとこれを長年続けてきています。

今日はどういうお話をしたらいいか、昨日実はこちらの方に寄せていただいて、島の方たちのお話をいろいろ聞いたんですが、分かりませんね。もうなまりとは、ずいぶん違う島の言葉は。

8つの危機言語のうち、6つが琉球の地域といいましょうか、あそこだという。あともう1つはアイヌの言葉ですから、北海道です。まさか東京が1つ入るとは思いませんでしたね。これが素晴らしいですね。東京が1つ入っているということで、文化庁も動いたんでしょうね。これは東京が入っていなければ動きませんよ、ああいう立派な役所がね。たぶんそうですよ。手をたたくところです。(拍手)

何でも東京が絡んでいないと予算も下りない。

ズーズー弁のことはおいといて、東北弁は濁るというイメージがありませんか。何かみんな濁る。何でも鼻にかかる。うまい言い方をすると「フランス語みたいです」と言ってくれたりもしますが、そんなことはないでしょう。フランス語はよく分かりませんが…。東北弁は点々が付く。じゃあ、日本語の中で点々が付く言葉はいくつあるのだろうか、眠れない夜に数えるほどのものじゃないですね。

私は、「かさたば」と覚えました。50音のうち、この4つ、4行だけは点々を付けてもいいと、文化庁でも通産省でも認めているんですね。「かきくけこ」が「がぎぐげご」、「さしすせそ」が「ざじずぜぞ」、「たちつてと」が「だぢづでど」、「はひふへほ」が「ばびぶべぼ」。4行しかありません、50音で。1行は5つです。4×5=20です。

ひらがなで書いた場合に、20音だけは点々を付けてもいいというふうになっている、これが素晴らしい。あっ、「う」に点々はこの後に話しますからね。取りあえず、これしかない

いんですよ。これだけ。濁る言葉が 20 しかないとなったら、朝方眠れないときに、チラシの裏があれば、さあ、この言葉だけでどれくらい長い文章が作れるだろうか。何の役にも立たないでしょう。それができたからといって、誰からも褒められもしませんし、感謝状をもらったりもしないんですよ。でも、考えるんです。

つまり何が言いたいかと、問題を考えるんです。誰かから問題をいただいて答えを考えるのは、誰でもやります。そうじゃなくて、問題を自分で考える。問題を考えて、自分で作った問題に答えを入れていくと、そういうようなことをやると、お金が掛からなくて眠気覚ましにもなるし、子守歌の足しにもなるということ。20 文字、これには方言がとても役立ってきたりするんです。

「だぶ、だぶ、だぶだぶで」、これは共通語、標準語でも大丈夫ですね。「だぶだぶで、でぶだ」。これも大丈夫ですよ、まだ日本語。「だぶだぶで、でぶだ」って何だと思います。これは、「豚（ぶた）」しかありませんよね。ここですよ、「ぶだ」。「ぶた」が正しいんです。ところが東北、津軽弁はこれに点々が付くんです。これが正しい「ぶた」なんです。「ぶた」と言うと、きれいすぎるんですよ。「今日はカレーにするからぶたにく（豚肉）買ってきて」と言うお母さんはいません。「今日はカレーにするから、ぶだにぐ買ってきて」、「だ」が正しい。

同じようにすると牛もそうです。牛はいやなんです。なぜ牛がいやかと言うと、両方に点々が付かないからです。東北の人は点々が好きなんです。「牛」というと両方に点々が付かないから、なんかいやなの。だからご存じですよ、吉幾三の歌で「べごを飼う、銀座でべご飼うだ」。牛は、「べご」なんです。なぜ「べご」がいいかと言うと、同じひらがな 2 つなのに両方に点々が付くから好きなんです。

牛は「べご」、豚は「ぶだ」というのが正しい。というところで、「だぶだぶででぶだぶだ」と、こういうのができたときに朝の目覚めがいいんです。面白いのができた。できた後、起きがけにもう 1 回ふっと振り返ってみると、こっちから読んでも、「だぶだぶででぶだぶだ」、同じのができる。ああ、うれしいなと。(拍手)

いやいや、手をたたくほどのものじゃないんですよ。そんなもので手をたたかれると、赤面が真っ赤になりますね。あと手をたたく暇があったら、現金を投げてくださいたいですね。温かい拍手と温かいまなざし、というのは、何の足しにもなりやせん。今、一番分かりやすいのは現金ですからね。こういうふうにして、何度も言います。問題を自分で作って、自分で答えを出して遊ぶ、誰にもご迷惑はお掛けしていません。腹ばいになって、メモをしているだけですからというようなことをやると。

「じじ、ばば」というのもあります。「じじ」と「ばば」も使う。それに「だぐ」「だく」じゃありません、「だぐ」です。牛は「べご」でしょう。「ばか」じゃありません、「ばが」というのが正しいんです。とにかくいろいろなものに点々が付くんです、津軽弁は。

「じじだち」、「たち」じゃありませんからね。複数形ですから、「じじだち」。「を」が「ば」になります。ですから、津軽弁で文章を作っていくと、「ばばだちばだぐじじだち、ばがでばがで、ばばばだぐんだば、べごのどんじだぐ」って、もうずっと付いていくんです。つ

まり「おばあさんたちを抱くおじいさんたち、ばかだね、どうせおばあさんを抱くんだったら牛のメスを抱いていた方がいい」というのを「ばばだちばだぐじじだち、ばがでばがで、ばばだぐんだば、べごのどんじだぐ」。素晴らしいなっ。中身は、いろいろ気にしないでください。この言葉でどれくらい遊べるか、寝不足と寝足らずをどうするか、こういうことができるぞということ。これが、点々が付くということでもあります。

あとは「°（まる）」が付くのがあります。丸は全国的にありま有名じゃないそうです。琉球の方でも使わないんですかね。「かきくけこ」、50音図の2番目ですね。「かきくけこ」、これに「まる」が付きます。「かきくけこ」が「か°き°く°け°こ°」、1つ丸が付きます。「まる」丸が付くのは、「ぱぴぷぺぽ」だけだと私もずっと思っていたのですが、「かきくけこ」にも「まる」が付くのがあるんです。見たことありませんか。「ぱぴぷぺぽ」はありますよね。「はひふへほ」、「ぱぴぷぺぽ」。

「か°き°く°け°こ°」は東京の人でもみんながみんなは知らないらしいんですが、関東から北の方に行くと、この言葉をごく普通に使うというのを聞いたときはうれしかったですね。東京の人の半分は知らないと聞いたときは、うれしかった。

読んでみましょう。何も付かないのは「かきくけこ」。点々が付くのが「がぎぐげご」。「°（まる）」が付くのが「か°き°く°け°こ°」。この辺の人には難しいですかね。「かきくけこ」「がぎぐげご」「か°き°く°け°こ°」。これ、初めて聞くという方が、どこへ行ってもいます。青森の人は、これをはっきりと使い分けます。

これを鼻濁音といいます。「かきくけこ」が清音、点々が付いた「がぎぐげご」が濁音、「か°き°く°け°こ°」が鼻濁音、鼻が濁る音、あるいは半濁音といって、濁音が半分にしかならない。

石川さゆりさん、九州の熊本かどこかの出身だそうですが、「津軽海峡冬景色」という歌でヒットしました。あの歌、青森から火がついたというのでありますが、あの歌がどうして青森の人に認められて全国に広まっていったかと考えると、「がぎぐげご」と「か°き°く°け°こ°」、この違いを石川さゆりさんは九州の人だから知らなかった。誰かが教えたんですね。日本語には濁音と鼻濁音がある。東北の、青森の歌を歌うのであれば、それを覚えなければならない。この言葉を教えたから石川さゆりさんは、あの歌を正しく歌ってくれた。たがら青森の人が認めたんですね。

これですよ。「津軽海峡、冬け°えーしき」と、気が付かなかった方は、今度聴いてください。石川さゆりさんは正しく歌います。「つか°るかいきょう、ふゆけ°えーしきー」と歌います。

もし、東北の方、関東より北の方では鼻濁音といって「かきくけこ」が、「がぎぐげご」と「か°き°く°け°こ°」があるぞと教えなければ、石川さゆりさんは「がぎぐげご」で歌ったはず。すると、どうなるか。「つが一るかいきょう、ふゆげーしき」になるんですね。「つが一るかいきょう、ふゆげーしき」なんて歌、誰が歌いますか。あれは「つか°るかいきょう、ふゆけ°えーしきー」だから、「ああっ」と耳に優しく響いてきたんだと、私はそのように解釈しております。

美空ひばりさん、横浜の生まれだそうです。美空ひばりさんも誰かが教えたか、あの方は最初から覚えていますね。「リンゴ追分」、日本中で知られている歌かと思いますが、これです。「りんこ° 追分」、これが正しい。美空ひばりさんは「りんこ° おーの花びら」、「んこ° おー」と歌っています。これが使えなければ、こっちだと「りんご」。そんなの硬くて食えないみたいな、そんなイメージが。だから歌番組を聴くと、私はとても気になります。濁音、鼻濁音の違いが。歌はうまいんだけど、この人はどうして「か° き° く° け° こ° 」が歌えないんだろう、みたいなことが気になって。これも全部子供のころ、汚い言葉だと言われた津軽弁を努力しないで覚えた結果でしょうね。気持ちが全部そっちの方に行って、お前間違っているという、どんなに立派な歌手でも指をさす。テレビにですよ、生の人には指しませんけど、陰でこっそり「あいつはね」みたいな、後ろ指が大好きですから、こういうことをやって遊んでいます。

ズーズー弁の話に戻りましょうか。言いたいことはまだいっぱいあるんですけど、さっきのお話で今日が第1回であれば、第2回と続けてやっていきたいというお話があって、とてもうれしいんですが、二度と私には声が掛からないだろうから、今のうちに言っておかなきゃいけないことがたくさんあるんです。

これも眠れない朝にチラシの裏に書いて遊んだのでございますが、ズーズー弁で何かネタができないかなと思ったときに、辞書を見ると「い」と「え」、「し」と「す」、「じ」と「ず」がはっきりしないでしょう。「そうじゃないだろう」と。「ズーズーベン」って、数えると6つ、カタカナで6つだからね。6つだと多い。数が多いときにはどうすればいいかな。分けて考えればいいと学校で習ったので、2つずつ。1番目が「ズー」、2番目が「ズー」、それに「ベン」。1番目と2番目がまったく同じですから、1番目が理解できると2番目は同じですから、1番目（ズー）と3番目（ベン）が分かれば全部分かるわけね。じゃあ、「ズー」って何だ。動物園が2つあると、うちも多クたまるみたいな。それでも意味合いとして通じないことはないけど、そうじゃないだろう。ほかに特徴はないだろうか、

ここで点々ですね。6つのカタカナのうち、3つに点々があるズーズーベン、分母と分子を約分すると2分の1。2分の1に点々が付くのが、ズーズー弁。辞書に従ってズーズー弁が東北弁だとすると、東北弁というのは半分の言葉に点々が付く。これは多いのか少ないのか、これは何と比べればいいのか。

今、東北弁の話をしていますから、標準語、共通語ではどれくらい、20文字だけですよね、点々が付いていいのは。じゃあ、いろは48文字。いろは48文字の20文字しか点々を付けてはいけません。分母と分子を約分すると、これは2分の1に届かないのでございます。これが48分の24だとすると、東北弁と同じ値になるんですが、この値は大きいのか小さいのか、「あたいにはよく分からない」みたいな、そんなふうになるんですが、2分の1に点々が付くのが、ズーズー弁。点々が好きだ。ここでもって東北の人間は点々が好きだということに結論は達して、数字的にも証明されたわけですね。

言葉で言うと、豚が「ぶだ」になり、牛が「べご」になる。そして何にでも点々を付け

たくなる。点々というのは何かというと、濁る。濁るというのは、さんずいを書く。なぜさんずいを書くかというと、水が濁る、お湯が濁る、液体が濁るから、さんずいを書くんだらうね。日本は北海道、本州、九州、四国という「四」つの大きな島があります。それを包み込むようにして変な「虫」けらが生きていたりなんかすると、これが濁るんです。ということをお子に教えました。お子にはこういう教え方をしないと覚えませんか。

あと、これは「にごる」と読みますが、「にごる」だけではなくて、「だく」とも読みます。これも子供たちに聞かれて困りました。何で同じ字なのに違う読み方をするの？「だく」は「だく」でいいじゃん。「にごる」は「にごる」で別の字があればいいじゃないか、なぜ「にごる」と「だく」、同じ字なのに2つの読み方があるのと。小学校3年生ぐらいで音読みと訓読みを教えるのは、まだ早い。そういう子供を納得させるにはどうしたらいいかというと、日本は小さい国で資源が乏しい国なので、1つのものを大事にいろいろな形で使うと小学校3年生の息子に教えました。今は28歳になって、まだそれを信じているようであります。それはそれでいいのでありまして、「濁る」を「だく」と読むと。

このマイク、なかなかいい音で聞こえていますか。よく聞こえていますか。これ（ワイヤ）がないんです。普通ワイヤが付いているが、ワイヤが付いていないでしょう。このマイクのことをワイヤレスマイクというらしいです。今はカラオケなんかやりますから、マイクのことは皆さんも詳しいんですが、ワイヤがレス。つまりレスというのは、何々がないということだって知ったのは、高校生になってからですかね。

ワイヤがないからワイヤレス。どっちみち朝、眠れなくて考えているのは、このくらいのことですからね。だからプロレスというのは、プロじゃないんですよ。素人がやっているんです、あんなものは。打ち合わせ済みでやっているんですよ。まともにやるとけがをしますからね。

ワイヤレス、このマイクは便利です。ワイヤがレスでも普通の声でしゃべっても一番後ろの方にも聞こえる、これが素晴らしい。マイクがないと、**これくらいの声で**（大声で）お話をしないと後ろの方まで聞こえません。マイクがあると、すごく楽なんですよ。マイクがあると、ごく普通にささやくようにしゃべっても、後ろの人にも全部聞こえる。ないと、**これくらいの声で**お話をしなくてははいけない。いくら訓練した腹式呼吸で発声しても、長い時間これで話していると疲れます。腹が減ります。だからマイクがあると、小さい声でも遠くの人に聞こえる。

普段の生活に毎日マイクは持っていません。マイクがなくても、遠くにいる人に呼びかけなくてはいけないときってありますよね。マイクがあると、「おい何ていう」と聞こえる。「おい」って、マイクがないと大変でしょう。大きな声でどならないと、声が向こうに届かない。大きな声で、どなります。どなり続けると、のどに力が入って声というのは濁ってきます。分かりますね。こういうのを、ドナルドダックといいます。これだけが言いたくて、今まで……。

何時まででしたっけ、大丈夫ですよ。あと30分ぐらいありますよね、すみません。

何の中身もない話で。何も中身もないから聞いていられるんですよ。うっかり中身があると疲れますよ、聞いている方は。私は中身が何もないんですから、ここだけで生きてきた、くちだけで。できればここに保険をかけたいと思っているぐらいですからね。

なくなるかもしれない方言、ちょっとまじめな話をさせていただきます。さっきの話に戻りますと、中学校のときに、津軽弁は汚い言葉だから使ってはいけないという話をした、その中学校の図書室に、高木恭造さんという方の『まるめろ』という詩集が、その図書室にあったのであります。先生は使ってはいけない、汚いといわれる方言で詩を書いた、その詩集が中学校の図書室にあったわけです。何ていうんでしたっけ、カルチャーショックというんですか。その当時はその言葉は知りませんでしたけど、何だこれは、こっちではだめだと言いながら、こちらは大事に図書室に本が飾ってあるじゃないか。そのときから少し混乱が生じてくるのであります。

高木恭造さんという方は、昭和6年に『まるめろ』というまったくの方言詩、津軽弁の詩集を出しています。当時も世の中の人にいろいろ言われたらしいです。つまり津軽弁は汚い言葉だと、当時から言われていたんでしょうね。昭和6年、その前に詩を書いていますから、高木恭造さんは昭和になる前から汚い言葉、汚い言葉と言われる言葉で詩を書いていたんですね。今は、高木さんの詩は英訳もされてフランス語にもなって、世界中に翻訳されて、素晴らしい方言詩という評価を受けております。

その高木先生というのが、私が生まれた弘前の町内の隣の町で眼科のお医者さんでした。目医者さんだったんです。私は高等学校のときに、あの先生があの本を書いたんだって家族から聞きました。あるとき目が充血をして、目薬を買ったんですけど治らないんですよ。別に勉強をしすぎたわけでもないんですが。うちの姉がちゃんと眼科に行った方がいいっていうんで、高木先生のところに行ったんです。先生、「どうした」というから、「目が充血して赤くなっていたので目薬を買ってさしたんですが、治らないんです」という。患者としてごく普通の受け答えをしたつもり。そのときに高木先生から初めて言われた言葉が、「ばかもの」という。何でばかものかという、「買った目薬で目が治るんだったら、医者はいらねえっ」って言われたんですね。

それはそうかと思って、それで先生に治してもらって、その後2〜3年たってからかな、知り合いを通して高木先生とお付き合いをするようになって、その後もとずっとお付き合いがあったんですが、昭和62年に84歳で、今から28年前ですか、亡くなったんです。みんなで高木先生が書いた『まるめろ』とい詩集の中から、方言詩というのはこんなに素晴らしい、学校の先生はだめだと言ったけど、こんなに素晴らしい詩があるんだということがあって、そこから自分でも少しずつ、いたずらで書いてきた詩があるんです。どうせなら高木さんのような叙情的で生活を直接歌った詩を書きたいと思って、いろいろな人の本を読みました。

津軽弁の方言詩を書く方は何人もいます。それぞれ方言詩を書く人にもジャンルがある。叙情的な詩を書く人、非常に生活苦を一生懸命歌った人。中にはこれは現代詩ではないかと思うぐらいに、わけの分からない言葉が並んでいるような方言詩を書く人もいます。いろいろな人が、いろいろな形で書いているんだな、俺もやってみようかなと思ったけど、もうすでに先達がすごい人がいっぱいいる。残っていたジャンルは何か。オチのある詩で

す。つまり、笑い話しか残っていなかったんですよ。人の涙を誘う感動を呼ぶような詩は、もうたくさん先達が書いているので、私の役目は笑える詩しかない。でも津軽部で書くんだったら、津軽弁が分かる人にだけ分かればいいと日記を毎晩書いていました。

20歳のときに弘前から青森に移り住んで、ここからまったくの一人暮らし、37歳で結婚しました。引いてみます。17年間一人暮らし。20歳のときに青森に移り住んで最初にしたことは、嘱託アルバイトで給料が安い。給料が安くて、時間だけたくさんある。何をするか。毎日必ず日記を書く。日記を書くときに2つのことを決めました。毎日必ず書く。もう1つは、楽しいこと以外は書かない。この2つを20歳のときに決めたんです。1つはすぐだめになります。1つはいいんですよ。毎日必ず書く、書けばいいんですから。

決めたもう1つがだめだった。楽しいこと以外は書かない。楽しいことって3日続きません。それでも毎日書くと決めたらどうするか。作ってでも書く、うそでも書く。日記というのは誰に見せるものでもないから、作ってでもうそでも楽しければ、おもしろければいい。それを毎晩欠かさず10年間続けました。毎晩どんどん面白いことを書いているときに、高木恭造さんが常に頭の隅に思い浮かぶわけですよ。ああ、高木さんだったらどんなふうにくだらうな、感動的にくだらうな、私は書けないです。だからどうでもいい、自分が楽しければいい。今日の会場では、たぶん私が昔に書いたものを知っている人は1人もいないと思いますので、やってみます。

6畳一間のアパートに10年間いましたがね、ハエが1匹飛んでいるんです。殺さないんです。生きている友達、これしかいないと思えばね。ハエが飛んでいる、ハエに名前を付けて呼んでいたの。ヨシコ。オスかメスか分かりませんが、オスよりはメスの方がいいだろうと。どうせ6畳一間は私しかいませんのでね。ぶーんと飛んでいるハエに名前を付けて、ヨシコ、ヨシコ、次の日会社から帰ってくると、また1匹飛んでいる。ああ、昨日と同じハエだなと思うから、今日も声をかけて呼んでみる。ヨシコ。

相手がハエだから、3日もヨシコと呼ばれたら、やがて会話ができるようになるとは思わなくても、3日も続けて名前と呼ばれたら、ヨシコだという自覚ぐらい持てばいいでしょう。せめて呼ばれたら返事をするとか。ヨシコ、ハエ。そういう日記を10年間毎晩。そこに時々津軽弁も、ふっと入れていく。分からなきゃ分からなくていい。37歳まで結婚しないですから、女にもてるとか恋人だってまったく関係ありませんから、毎日書く日記。どうしたら女性にもてるだろうか、女性の立場になって物事を考えられるようになればいい。どうすればいいか、女性になっていた。

時々、女になって日記書いていたりしたの。それがあるとき10年ぐらいたまって、貯金が満期になるのではという話になって、本でも出そうかな……で、その日記に書いていた話をまとめて本に出した。それが今のすべての元ですね。暇で日記を書く、日記の端っこに方言詩みたいなものを書く。たまたま給料から天引きされる貯金が満期になるという知らせがあつて。30万円ですよ、昭和47～48年で。飲んでしまっちゃいけないなと思って、よし、このお金で何をしようか。日記が山ほどあった。よし、この中からよその人が見て聞いても面白そうな話を抜き出して1冊の本を作ってみようと思ったのが昭和47～48年。それで1冊の本ができました。

30 万円で 500 冊ができました。じゃまですよ、6 畳一間に 500 冊の本があると。もう踏んづけて歩いたりなんかして、鍋の上に積んだりして、毎日会社に持って行ってみんなにただであげて。いいんです、30 万円は。飲むよりはいいと思って。そうしたらお前が書いた、ちょっと津軽弁が混じっている本があるので、ラジオで全国放送をしませんかと、青森放送のラジオ制作から来たんです。やめた方がいいんじゃないですか、なまりがありますので、全国放送は向かないと思いますと。いい、分からなきや分からなくても。分からないのが津軽弁だというのが分かればいいんじゃないかと説得されて、朝の 8 時に全国放送。生。聞いた方はいないですよ。ここで読んだのが、女性になっていたという作品。今からやります。

このごろの痴漢は、顔を選ぶんだっての。おらあ、まだあ、いちども襲われたことねえのさ。何だかかなすいっきや。それでもさ、こないだ、妹と 2 人、自転車さのって、国道の裏通りはっけでらきや、男の人から声かけられたの。しかもマイクで、2 人乗りはやめください。

こういうのを 3 編ぐらい読みました。今、反応があつてすごくうれしかったです。日本中これくらいの反応があつたんでしょうかね。それをたまたま聞いていたコロムビアレコードの方が、何かなまって変だけどレコードを出しませんかって、次の日に青森に会いに来たの。

私は本を出すので 30 万円使っていますので、レコードか何か出すと、あとは首をくぐるしかねえやみたいなこと、いいです、本だけで 30 万円も使いましたからって。いや、本の場合は自費出版ですから、あなたはお金を使ったでしょうけれども、今度はレコード会社をお願いしますから、ぜひ吹き込みませんか。その当時、昭和 51～52 年のころ、日本中に方言を使った商業用レコードは、私が知る限りは 1 枚もありませんでした。まして、津軽弁のなまりがある詩の朗読を、LP レコードにしませんかって、裏表全部なまりです。それが全部分からなくてもいい、分からなきや分からなくてもいいけど、どの辺まで分かるかなという、それで書いたのが、どれがいいかな、これ分かるかな。読んでみます。6 畳一間にずっといたということを覚えておいてください。

リンゴの皮。「2 つで 50 円のリンゴ買って 晩にひとりコで皮あむいだきや おらもわりかし 器用であつたね むいだ皮 天井がら吊して計ってみだきや 1 メートル 35 センチ、2 つ目が 1 メートル 52 センチ 長々ど 実に長々ど めったにこらほど長く むげるもでね しかし 何んぼ長ぐむげだたて ポケットさ入れで あちこち 見へで歩くほどの物でねし わざわざ あちこち電話して 見て来てもらるほどの 物んでもね 誰が部屋さ遊びに来たら えばって見へでやるべど思て 天井がら吊して 1 週間 黒ぐしなべた長ェリンゴの皮 誰さも見へる前に 誰さもえばる前に 今朝わんつか触ったきや ぷつらと切れだもだあ」

笑っていますけど、これは本当のことですからね。本当に寂しかった、友達がいなくてね。25～26 歳まで、部屋に電話もなかったですからね。26 歳のときかな、初めて部屋に、

アパートに電話がついて、うれしくてね。うちの部屋に電話がついて、一晩中電話の前で待っていましたよ。誰からも、かかってこないんですよ。誰も知らないんだもんね、電話がついたのを。ご主人様は話し相手がなくて寂しいわけだ。電話があるんだ、こねえんだ。受話器を外して、自分の電話にかけましたよ。どうなると思います？ ツーツーって、ご主人様が話す相手がいないくて寂しいのに、電話が誰かと話しているんですよ。そのときのことを一晩でまた詩に書いて、そんなことをずっと。

これくらいのものを見つけて、これくらいの話を毎日毎日書いていって1冊の本になって、その本をラジオで読んで、それから面白いからレコードにしませんかって、名前のあるLPレコードがコロムビアから出たのが昭和52年です。そこそこ売れたんでしょうね。珍しかった。なまりがある朗読のレコードなんかない時代ですから。翌年にもう1枚出しませんかと。日記はまだ山ほどあるんです、くだらない話が。抜き出して2冊目の本を書いて、声に出しても伝わりそうなものを読んで、2枚目のLPができる。3冊目の本を書いて3枚目、4冊の本を書いて4枚目、それを繰り返していくんです。途中からLPレコードの時代ではなくなって、CDになったんですね。

偶然ですが、これが30枚目のCDです。これが31枚目のCDです。この後さらに出ていますので、今は33枚のCDが出ています。なまりがいっぱい、全部なまりと言ってもいいです。このCDの中にどんなものが入っているかという、まず本がある。こういう本を書きます。これは今年出た本です。これは去年出た本です。これは何年前でしょう、古くに出た本です。

このあと、皆さんの発表の中で、『桃太郎』が出てきます。探したら、33年前に『桃太郎』の話を書いていました。自分の本の中にありました。これは『でったらだ消しゴム』。「でったらだ」というのは、「大きい」という意味で、「大きい消しゴム」という意味のものです。一番最初に書いた本は『消しゴムでかいた落書き』という本、つまりマジックインキで書くとご迷惑を掛けますが、消しゴムで落書きをすると誰にもご迷惑を掛けない。それと同じ意味合いです。明け方チラシの裏にメモをするのと一緒です。

30年前に『桃太郎』をどのようにして遊んだかというのを、先に紹介させていただきますね。なぜ『桃太郎』なのか、それは日本中誰でも知っているお話だからでしょう。さらに方言だって若者が話す方言と、年配の方が30年、50年方言と付き合った方が話す津軽弁と、今の20歳の子供が話す津軽弁、当然違います。語彙が少ない。言葉だけじゃなくてイントネーションが、もうすでにちがう。

どこの方言もそうだと思いますが、例えば「むかしむかし あるところに おじいさんとおばあさんがおりました」これがいわゆる標準語、共通語のイントネーションですが、一番簡単なのは、まったく同じ文章がイントネーションだけで津軽弁になります。「むかしむかし あるところに おじいさんとおばあさんがおりました」。もう1回繰り返しますね。標準語、共通語です。「むかしむかし あるところに おじいさんとおばあさんがおりました。おじいさんは山にしばかりに、おばあさんは川にへせんたくに行きました」。これを松竹梅でいうと松、一番簡単ななまり、文字は全部標準語ですが、それでも津軽弁だぞという、読み方だけ変わります。「むかしむかし あるところに おじいさんとおばあさんがおりました。おじいさんは山にしばかりに、おばあさんは川へせんたくに行きまし

た。おばあさんが川でせんたくをしていると、かわかみから大きな桃が ドンブリコ、ドンブロコと、流れてきました。おばあさんは、その桃をひろって お家に帰りました。夕方になっておじいさんが山から帰ってきたので ふたりでまな板の上に桃を置いて切ろうとしたら、ももがぱっと割れて 中からかわいい男の子が出てきました。おじいさんと おばあさんはびっくりしましたが 大喜びで桃から生まれたので 桃太郎と名前をつけて大事にしました。」

イントネーションが違いますね。これが津軽弁のイントネーション。文章そのものは共通語、標準語と同じです。

じゃあ、松から竹に移ります。どうするかというと、単語でもって、違う単語のもの、なまることができるものは直します。でもどんなになまっても、桃はリンゴになりません。なるものだけ直すと、こうなります。

むかすむかす あるどごさ じさまとばさまがいだんだど じさまは山さ しばかりに ばさまは 川さ せんたくに行ったんだと。ばさまは 川でせんたくしてらっきゃかわかみから でたらだ桃っこ流れてきたんだと。ばさまは そのももっこば ふらって えさもどったど。ばんがたになって じさまは山から戻ってきたはんで 2人してその桃っこば くうきなって まな板の上さ 桃っこばおいて 切る気になったきゃ 桃っこはぱかっとないて、中からめんごい男わらすが出はたってきたんだと。じさまとばさまは どってんしたばって、桃がら生まれだんだはんで 桃太郎つつ名前っこばつけて 大事に大事に育てたんだと。

今聞いていて、おお、津軽弁は分かるじゃないかと思った方、いますよね。それは皆さん知っている話だからですよ。

さあ、松、竹、梅、一番難しい津軽弁になると、どうなるでしょうか。無理しないでください。津軽の人でも付いてこられません。私も心配です。そうそうしょっちゅう朗読しませんので、これは。じゃあ、『桃太郎』の一番難しいハードバージョン、松竹梅の梅です。

#&* ♪ ★ □ ▼ @ぶ○×@…&%\$&\$…△△◆□鶴だ th(?_?) (表記不可能)

と、こうなります。(拍手) これは津軽の人でも、よっぽどぐっと聞いていないと。擬音語、擬態語を入れていくと、『桃太郎』がこんなふうになります。「うんにゃあ、どこにそした」って、どこにそんなって言えばいいのに、「うんにゃあ」という余計な言葉を付けるから、これが分からない。だから方言を伝えようと思ったら、こういう遊び方もあるんです。だんだん難しく、どこまであんたついてこられますというやり方が面白い。つまりただ単に伝えればというもんじゃなくて、それをどういう遊びに変えるか。

これは去年出た本なんですけど、さっきの本もそうですけど、暇で本を出していますから、活字はひとつも使っていないんです。全部手書きです。こっち側にページ番号が打ってあります。こっち側にないんです。ここに 72 とあって、こっちに 73 は書いていないんです。ここに 58、こっちにないんですよ。なきゃだめだそうですよ、活字の本の世界では。

私は必要ないと思っています。右側が 58 だと左側が 59 だということも分からないようなやつが、本を読んだってしょうがないという、そういう考え方に基づいていますので、右側のページ番号しかついていない。

昔、2 冊目に出した本は、これを逆に付けたんです。256 ページから始まるんです。読むと、だんだんページが少なくなっていくでしょう。最後は 1 になって 0 になる。これは 30 年前から文部省に教科書に採用するべきだといっているんですね。教科書が、だんだん数字が少なくなっていくわけでしょう。あと 20 ページで終わる、あと 10 ページで終わる、学習意欲がわくじゃないですか。だんだん増えていくからだめなんだ。いつまでやるんだよ、みたいな。そういうのを研究してほしいなと思っています。

いいのが出てきました。小倉百人一首って何だかよく分からなくて、『広辞苑』に「広辞苑」が出ていなくても、『広辞苑』が好きなものですから、調べたんですね。『広辞苑』で小倉百人、小倉って何。そうしたら、「あんこのこと」って出てきたんですよ。小倉ってあんこ、小倉アイスという項目もありますよ、『広辞苑』には。じゃあ、小倉百人一首というのはそういうことなのかと思って、百人一首を買いに行ったんです。

読んでみたんです。2 回。1 つもあんこの話が出てきませんでした。おかしいじゃん、小倉百人一首といいながら 1 つもなぜ、あんこが出てこないのか。文句を付けには行きません。みんな昔の人みたいですから。出版社にも文句をつけませんでした。こういうときはどうするか。小倉百人一首にあんこが出てこないのはおかしいと思ったら、自分であんこをテーマにした短歌を 100 作ればいいわけだ。そう思いませんか。ねえんだば、自分で作ればいいんじゃないねえの。ちゃんと 100 作りました。5, 7, 5, 7, 7, テーマは全部あんこ。暇なんだから、朝、眠れなくてさ。朝に 10 個、20 個作ったって 1 カ月かかりませんからね。

その中の一番最初、100 やる時間はありませんので、一番最初だけご紹介します。これがあと 99 あると思ってください。「つぶあんを 入れ歯外して歯茎のみ かんでこすってこしあんにする」 どうですか。これが 100 並ぶわけですよ。全部テーマは、あんこですから。ないものは作ればいい。そして詰まったときは、津軽弁に頼ればいいという安心感がありますので、そんな苦労じゃないんですよ。何度も言います。問題は自分で作って、その問題に自分で答えを探す、これは誰にも迷惑を掛けない。間違ってもこの本を買った人が迷惑をしたかもしれませんが、それはそれでいい。何でもいい、方言に限らず言葉で遊ぶ、これをこれからもずっとみんなでしていきましょう。

学問でだけ考えないようにしましょうよというのが私の考えです。学者先生は、学問だけで考えてください。でも方言というのは日常語ですから、言葉というのは会話のためにあるんだと思う。活字になる前の状態をもっと大事にしてくださいということも言いたいです。会話ですから、2 人で話さなきゃならない。たった 1 人になったらだめでしょう。今朝かな、ふと思ったのは、電話機を発明したのは誰でしたっけ。電話機の 1 個目を作ったとき、あれは何の役にも立たなかったんですよ。言っていること、分かりますか。かける相手がいないと、電話は何の役にも立たない。会話も同じです。1 人だけしゃべる人がいてもだめ。相手がいるからいい。まして方言というのは、会話でもって生き生きしてく

る。人から借りてきたような標準語、共通語、学んだような言語でしゃべったって、言いたいことは言えないけど、小さいときから思ってきた言葉であれば会話が弾む、これがとてもいい。

こっちの本にあったかな、じいさまが 2 人でしゃべっている。「おめえ、コーヒー飲むとき、何かこだわりがある？」「おら、コーヒー飲むとき、こだわりがある。」「どういうこだわりがある？」「俺、コーヒーはブラックでしか飲まない。」「へえ、お前コーヒーはブラックでしか飲まないのか。」「そうよ、コーヒーはブラックに限る。だからね。これ、もう少し砂糖を入れてくれねえかな」みたいな、そういうのがこの中にあります。

外国語も遊び道具になりますね。カタカナの言葉が、本当に最近が多いです。テレビなんかを見ていると、こんなカタカナ知らないよというのがいっぱい出てきますが、あれも知らないと言っているからだめなので、知ればいいじゃないですかね。プロポリスって、本当に最近テレビに出てきませんか。最初は分かりませんでした。プロポリスって何、それ、子供のころなかったよって調べる気にもなりません。あれだけ朝から晩までカタカナが出てくると。

私、分かりましたもん、プロポリス。分かりますか、プロポリスって。プロポリスというのは本職のおまわりさん。だからそういう考え方をすると、難しい言葉であつてもたいしたことはない。ベストエイトって何ですかって、チョッキが 8 枚とか、分かりにくい人には分かりにくいですね。この種のものは、慣れていないと付いてこれないというのがよくありますから。

方言が今、なくなるといいますが、方言がなくなる、なくなるでしょう。話し相手がいなくなれば、1 人だけでは絶対無理ですから、だから必ず相手を作って残していきましょいうねということをやっていきたい。

結構、若いころから沖縄が好きで、遊びに時々来ていました。昨日もお名前にありました石垣にも行きました。与論にも行きました。沖縄も何度も行きました。とても好きな島たちです。北海道の話も、アイヌの方がお越しですが、アイヌの言葉も、青森県の津軽弁の中には、アイヌの言葉がたくさん入っています。子供のころ、ごく普通に使っていた言葉が、後でアイヌの言葉だと分かったことがたくさんあります。

例えば「ケリ」、靴のことを「ケリ」といいます。子供のころは「長ケリ」、長靴のことを「長ケリ」と言っていました。「短ケリ」「長ケリ」みたいに。「ケリ」というのは実はアイヌの言葉で靴のことなんだというのを、後で知ったときはうれしかったですね。あとは鉛筆を削っていた小刀、あれを「マギリ」と呼んでいました。「マギリ」で鉛筆を削るというのは、ごく普通に使っていました。小刀のことを「マギリ」というのも、後で北海道でアイヌの人とお話をして、これを知ったときはとてもうれしかったです。平気で使っていたんだと。

あと、津軽の方が猫を飼うとき、猫の名前が、たいがい「チャペ」だったんですよ。うちの猫は「チャペ」、猫の名前が「チャペ」、隣の家でも猫を飼って「チャペ」だったんですよ。何で「チャペ」か。まんまを食うときに、チャペチャペと音がするからだと思っていたら違いました。アイヌ語で猫のことを「チャペ」というんだというのを、お土産で買

った本で見てうれしかったですね。青森の人は「チャペ」というのは猫という意味を知らないで「チャペ」という名前を付けていたということを後で知ったわけです。知ってしまったえば面白いですね。猫に猫という名前を付けていたんですね。

そういうのがだんだん分かってくると、方言というか危機的言語なのかもしれないけど、こんなふうに遊びとして残していくと、いくらかは残るスピードが上がるんじゃないかなという気が、本当につくづくしています。ぜひ学問として活字として、それだけで残すのではなくて、あくまでも方言というのは日常語、会話で成立するんだぞ、そんなふうにしていくと少々ばかげたことでも知らない言葉が出てきたら、津軽弁で紹介する、説明するとか、その国の言葉で説明するというようなことの方が、はるかに面白いことになるんじゃないかなと思います。

それよりも、もっと今は気にしなくてはいけないことがある。方言も守らなくてはいけないんですが、生意気なことを言うようですが、グローバル化という言葉がしょっちゅう聞こえます。グローバル、国際化だって。英語を話す人がそんなに偉いですか。日本人が英語をしゃべると国際人なんですか。私は絶対にそうは思いません。何でも小学校から英語を学ばせて、日本語も分からないうちに、どうして英語を教えるんですか。

標準語を普及させるために、「進め」と「休め」を間違わないようにするために、軍国主義のために、方言を撲滅したのは間違いです。だから、方言は方言で生きていいじゃないか。もう1つ、標準語、共通語というのもみんなで子供うちから覚えておくと、日本中の人とお話ができるぞと。日本中の人とお話ができる言葉を覚えて、子供のころから使っていた言葉は、そのまま使っていこうじゃないかとやれば、今みたいなことはやらなくて済んだんです。

何度も何度も国をあげて方言を撲滅しようとして、方言札なんていうくだらないものを作ったり、汚ねえ言葉 だはんで使えばまねでって先生に言わせたりして、今になってなくなりかけてから、さあ、みんなで守りましょうと。これと同じことを標準語、共通語に重ねます。みんながグローバル、グローバル、国際語です、英語で話しましょう。みんな英語で話すようになると、今度は、日本語が危機的状態になると思います。ぜひ日本語を忘れないで、英語を学ぶ人は学んでください。学ばなきゃ学ばなくていいんですよ。これから外国に行く予定なんかねえんだ。日本人だ、日本語さえきちんと分かれればいいんだと。外国の方もいますけど、気にしないでください。本心はちゃんと言った方がいいわけですから。遊んで方言を残す、ということのために。

先ほどお話した高木恭造さんという方が亡くなったときに、「高木恭造記」というような言い方をすると、みんな忘れます。誰だ、高木さんって。だからその高木恭造さんが亡くなった10月23日を津軽弁の日と決めて、全国から作品を募集しております。

詩、俳句、短歌、体験談というようなものを募集して、毎年10月23日に青森でその作品を発表しています。津軽弁はこんなに面白いぞという言葉、笑いとともに残しておきたい。学問で残しておこうと思うと、学者だけのものになります。笑いとして日常会話として方言は残さないと。絶対に間違っています。英語を学ばないでください。日本語を学びましょう。日本語を学ぶ前に方言を分かりましょう、そういうことです。

津軽弁の日というのを東京でやりました。東京の人も津軽弁を楽しんでくれました。毎年やっている津軽弁の日を CD にして、青森で発売しています。CD だけだと分かりにくいかもしれませんが、DVD だとスーパーが出ますので、両方分かります。これは笑えます。さっき茂手木さんにお話ししていただきました、笑っているうちに泣けてくるということがありますが、それが日常語だと思います。

何度も言います。活字と学問では言葉は残りません。残るでしょう、残るけど生きた言葉ではないはずです。方言というのは日常語です。日常語を残すためには、楽しくなければ残りません。難しく堅苦しい論文だけでは、日常語は決して後世に残っていかないと思います。楽しく笑って、そしてみんなで笑いながら言葉を残していくのが、この危機的を挽回するためには一番いいんじゃないかと思っています。こういうことを言う人であれば、呼ぶんじゃないかと主催者は思っているかもしれませんが、すみません。

ただ、みんなが同じようなことを言うときに、自分も同じことを言うのはよくないから、みんながたぶんそんなことを言うだろうね、学者先生はそんなことを言うんだ、活字で勉強したんだから、学問として言語をやってきたんだから。我々は誰も学問として言語は扱っていない。日常の会話としてやってきたんだ、その辺が先生方と違うところです。みんなが右と言ったら私は左に行きます。みんなが左と言ったら、私は右に行きます。学者と違うことを考える一般人には、そういう人もいるぞと。人と違うことをやることによって、明日が見えてくる……ような気がしております。ありがとうございました。(拍手)

各地域の現状と今後の活動

与那国島

(茂手木) それではこれから始めますが、トップバッターは日本の一番西にある与那国島というところですよ。もう台湾が60キロ先と言っていました。私たちも行ってきたんですけど、とても素晴らしい島でした。

それでは与那国の発表ですが、ユネスコの発表では八丈よりもはるかに重大な危険ということで、消滅の危機にあるというような言葉です。それでは3人の方をご紹介します。はい。よろしくお願いします。(拍手)

どうぞお座りください。先ほどお会いしたときに、この衣装をちょっと見てください。与那国のものだそうで、私たちが黄八丈を着るようなフォーマルなやつだそうです。それでは与那国の方にバトンタッチをしますが、簡単な自己紹介等を進めていただきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

(崎原) はい。それではトップバッターで一番西南端の与那国から始めていきたいと思っています。それでは方言でごあいさつしますので、あとは先生の方が解説しますのでよろしくお願いします。

ない んだい にでいに わる うやんた すー うか° まり、 ふがらさ ゆー。あぬや うんなぬ ちまがら さんぬはんき なんかいてい ごひゃくきゅーじっきろ はなり ぶる うぶとうに うたいぶる、とうまーる にじゅーはちきろぬ ぐまーたていぬ ちま、 どうなんちまがらどう する。あぬや ウラサタぬ ヨーノーんでいどう んど う むぬ。また とうないや ムラマツ ミノルんでいどう ندوق。また うぬ とうないぬ ‘とうや キョートダイガクぬ ドウナンち、ほーげんぬ べんきょー きーぶる しんしーどう ない ぶる ヤマダ しんしーんでいどう んでい ぶる。どうーでいん みーとうみ とうらし わい たばたかやんでい うまりる。ばー ちまにやんかちがら 「ちまぬ くとうば ばちか° しや うや ばちるんすとう たぎか° い」 んでい ندوق くとうばか° あいどう ぶる。ちまぬ くとうばか° だんだん したり ひか° しや、ちまか° みぬんき なるんに きー、あらーぐ さびつあどう ある。

(今日は左、右にいらっしゃるみなさま、お会いできて大変うれしいです。私は、沖縄島から南西に向かって590km離れた大海原に浮かぶ、一周28kmの小さな島、与那国島から来ました。私はウラサタのヨーノーという者です。それから隣りは村松稔といいます。またその隣りの人は、京都大学の、方言の研究をしている先生の山田先生です。どうぞよろしくお願いします。私たちの島には昔から「島のことばを忘れたら親を忘れるのに等しい」という言葉があります。島の言葉がだんだん衰退していくと、島がなくなってしまうように、大変さびしいです。)

すや うがらていぬ しんしーんた まい なしてい どうなんほーげん ぬぐし
てい ぬぐし ひるかやーんでい かんがい ぶるたし、はちじょーじまに うんに き
ぬ もよーしか° あんでい んでいび、ばぬ ちまがら どうたいんとう とうんでい
てい、まどうん ないてい くぬ どうなんくとうば ぬがにぬかやーんでい かんがい
ていどう ぶる むぬ あたるていんや、 どうーでいん しんしーんた でいんぶん
いらみ とうらし わいび、 まどうん くぬ ちまぬ くとうば ぬぐ くとう かん
がい とうらし わたかやんでい うまりる。

（今日はこれだけの先生方を前にして、与那国のことばをどうやって残していくか考えて
いたところ、八丈島でこのような催しがあると聞き、私たち四名は島から出て、一緒にな
ってこの与那国のことばを残せないかなと考えているところです。先生方のお知恵をお貸
しいただき、一緒に島のことばを残すことを考えていただければ幸いです。）

はい。この解説は山田先生にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

すや あったる でいかん ‘かいび あつまい とうらし ぬーとうん たていらにぬ。
ふがらさ ゆー。

（今日は貴重なお時間を使って集まっていたいただき、何にも例えられません。本当にありが
とうございます。）

（山田） 最初は、1周 25 キロの小さい島から来ましたということで、僕らを紹介してい
ただいて、今、僕は急に振られたんですけども、その後ことわざのお話をされましたね。
島の言葉を忘れると親を忘れるという。「ちまくとうば ばちか° しや うや ばちるん」
という、八重山にも伝わっているいろいろな島の言葉で、普段何げなく使っている言葉を
忘れると、親とか大事なことを忘れてしまいますよと。なので、今与那国もだんだん話す
人が少なくなってきて、しまいにはなくなってしまうんじゃないかと考えているので、今
回ここに呼んでいただいて、皆さん一緒に考えましょうとか、そういうことでしたかね。
（拍手）

せっかくなので僕も習いたての与那国の言葉で。

あぬや きょーとがら する ダマダぬ マサヒロどう ない ぶる。僕は京都から来
た山田真寛です。

まりでいまや ほっかいどーんでい ちま あか°，にせんじゅーねんがら どうなん
ちまんき してい、あさんた あぶんたか° あぬんき どうなんくとうば ならし と
うらし わる ゆ。かな。生まれた島は北海道という島ですけども、2010 年から与那国
島に行っておじいさんおばあさんから与那国の言葉を習っています。

<スライド>

この後『桃太郎』の話をするんですけど、僕は言語学という学問をやっている、活字で
ばっかり学問をやってきた者ですけども、僕は好きでやっているのです大丈夫ですよ。人

間の言語、人間は何でしゃべれるのかというのを研究しています。それで流れ流れて与那国まで来たんですけれども、人間の言語に必ずあるもの、母音と子音があります。母音はよく聞こえる音。日本語だと、ア、イ、ウ、エ、オ、ですね。英語だともっと多くて、イー、エー、エ、エウ、エア、ア、オ、オウ、とか、そんなのがたくさんあるんですけれども、世界で一番母音が少ない言葉は何個あると思いますか。1つの言葉。実はそういう言葉はないんですね。1つ、アだけがあるという言語もないし、実は2つという言語もなかなか、あるよと言っている人もいますんですけど、ちょっと心配。

実は3個、よく知られている言語だとアラビア語ですね。エジプトの方からずっと話されている言語の標準語と呼ばれているものは3つといわれています。その3つは、アとイとウを持った言語といわれています。

何と与那国語は3つですよ。しかもア、イ、ウ。もっともっと勉強すると、実は世界で少ない母音を持っている言語はみんな、このアとイとウに似た、ほとんどアとイとウを持っている。そんな特徴を持っているのが与那国の言葉です。

これをよく見てみると、たまにエとかオもちょっと出てくるんですけどね。そういうのは教育長が書いていただいたので、場面によってちょっとこんなふうに言ったり、こんなふうに言ったりというのも書いてあるんですけれども、基本的にはアとイとウの3つしかない言葉です。

母音は少ないんですけれども、子音の方、それ以外の、チッ、とか、スッ、クッ、という音ですね。与那国語には日本語標準語にはない音がたくさんあって、特徴的なやつは、後で聴いてくださいね。どこですかね。2行目の「おばあさんが」のところの「アブンガー」と書いてあるやつ。あれを後でよく聴いてください。教育長が発音されるときは「あぶか°」と言います。さっきのを覚えていませんか。「か」に点々じゃなくて、「か」に丸がつくやつですね。「あぶか°」。「か°」「き°」「く°」があります。「け°」と「こ°」はないんですよ。「あぶか°」

それともう1つ、こっちの「フタツニ」というところ。ターガリンキ、と書いていますが、後でよく聴いてください。教育長は「‘たがりんき」というふうに。「‘たがりんき」。「‘た」とか「‘か」とか。「‘か、‘き、‘く」、「‘た、‘てい、‘とう」ですね。そんな音があります。ッター、とか、ッカーとか。ツカキク、ツダディドウ、ですね。そんな音があります。あとはお土産の方に、紙の方に敬語が難しいですというのを書いてあるので、それは帰ってから読んでください。

僕から1つだけメッセージを。最近僕も勉強していて、片言の5歳児のように話しているんですけれども、この間、農協の前で頑張っておばあさんに話し掛けてみたら、おばあさんに、そんな使い方をしたら怒られるよ、敬うような言葉をちゃんと使わないと失礼だよとすごく怒られて、僕はショックを受けてしまったんですけれども、きっと標準語でもいわれていることなんですけど、どこの島でも特別な敬語の使い方がありますよね。どこの島でも若い人は敬語がちゃんと使えない。そんなふうになっていっていますよね。僕も日本語でもあんまりちゃんと使えません。

だけどそういうときに、その農協の前の弁当屋のおばあさんみたいに頭ごなしに怒るの

は、ちょっと一呼吸置いて待ってください。若い人が間違っ使っていても、うんうん、偉い、偉い、ちゃんと使っている、だけど本当はこういうふうに使うんだよ、と優しく教えてください。これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。(拍手)

(司会) 紹介するのを忘れました。今話しているのは京都大学で与那国語を研究している山田真寛さんです。それからここにお座りになっていらっしゃる方は与那国の教育長の崎原さんです。それから教育委員会の村松さんです。3人です。よろしくお願いします。

それでは今の『桃太郎』がどんなふうになるか、じっくり聴いてみてください。1 ページ目にあります。それから 10 ページ目に山田さんのさっきの解説も書いてありますのでよろしくお願いします。それではお願いします。

(崎原) いや、うやんた、ないがら どうなんくとうばし ももたろうぬ はなしきるば しかーとう ‘ていー とうらし わたかやんでい うまりる ど。

(みなさん、今から与那国のことばで桃太郎の話をするので、よく聞いてください。)

んかち んかち あるどうぐるに、あさとう あぶか° きない たてい わたんとうな。あさや だまんき ていむぬ さいんでい、 あぶんや かーらんき んなに あらんでい わたんとうな。あぶんか° かーらに んなに あらい ぶるた かーらぬ かんがら ふーていんきいぬ とうーむんぶか° なむていーなむてい なか° り すたんとな。あぶや うぬ とうーむんぶ とうい ‘かん きてい だんき かいし わいす たんでい。あぶか° くぬ とうーむんぶ ‘たがりんき ばるんでい いし ぶるた、 とうーむんぶか° ‘たがりんき ばりてい なががら ふーていんきぬ びんがあがみか ° ま り す た ん と う な 。 あ さ とう あぶや うぬ あがみんき とうーむんぶたろうんでい なー きー わたんでい んどう はなし。

(むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へせんたくにいきました。おばあさんがせんたくをしていると、川上から大きなももがどんぶらこどんぶらことながれてきました。おばあさんはそのももをひろってうちへかえりました。おばあさんがももをきろうとするとももがふたつにわれて、中から大きな男の子がうまれました。おじいさんとおばあさんはその子にももたろうという名をつけました。)

はい。与那国では方言が危機だということで、教育委員会は村松さんを中心にして一生懸命いろいろな活動をしてきております。学校の子供たちも一緒にして、特に中学校では 20 年来、郷土学習ということで方言の時間を週 1 回取り入れて頑張っていますけど、先ほど伊奈かつぺい先生がおっしゃったみたいに、なかなか英語みたいにはいかない、国語みたいにはいかない。方言というのは知らず知らずのうちに覚えていくものだと思う。

私も誰が教えたわけでもないですけど、もう自然にしゃべれるようになっているのが現実です。ですから今、島の先輩方がだんだん少なくなっていく間に、たくさん与那国の方言で、子供たちに生の声で伝えていければと思っていますところです。

それでは委員会の取り組みを村松君から少しばかりご紹介させていただきたいと思います。

(村松) はい。皆さん、こんにちは。与那国町教育委員会の村松と言います。僕は名古屋出身で、与那国に何の縁もないです。もともとは与那国島、沖縄の島の魅力といえば、僕は小さいころから生き物が好きで、それで行ったんですけれども、今何ていうかひよんなきっかけでこの与那国の方言にかかわっています。今も連日のように新聞で消滅危機言語とかそういうことがあるんですけども、現在島はどんどん人口が減る一方で、僕が与那国に来てからはもうすでに 400 人とか減っているんですけども、もう勢いが止まらない。

島の人口 1,500 人のうち 4 分の 1、25% ぐらいが僕のような島外出身者で、また小学生ぐらいの子供たちの親はもうお母さんはほとんど本土の方で、家庭の環境でもずっと自然に知らないうちに方言を覚えていたような状況は今の状況では全然望めないで、もうじいちゃんと子供たち、もう本当に僕たち親の世代が丸々一代断絶してしまって、何とかその状況を少しでも改善して、自然に方言に触れる、与那国の言葉に触れるような環境をつくりたいということで、いろいろ今島の話者の方たちと相談をしてやっているところです。

よその地域の例に倣ってまずいろいろ準備してきていて、今年、与那国の言葉の方言のラジオ体操と、あとカルタ、島のことわざ。島のことわざには与那国独自の価値観とか自然現象のことをとらえたことわざとか、島の文化を学ぶにもすごくいっぱい与那国の情報が入っているものなので、それを使った読み札の CD も付けて、そういうものが間もなく完成します。

あとはわらべ歌。じいちゃんと子供たちが身近に常に、今、子守歌でも島の歌を歌うことはなかなかないんですけども、それを集めてまた CD にしたり工工四にして保存しようということをしていて、それがもう今年度に完成して、それらを活用してやっていきたいと思います。ちょうど今方言のラジオ体操ができたばかりなので、ここで初披露したいと思います。ぜひ皆さん聴いてください。

(司会) 聴くだけじゃなくて、立ってやってください。3 人頑張りますので。

(村松) はい。みんなでラジオ体操をやってみましょう。

(司会) 皆さんラジオ体操は知っていますよね。第一です。

<ラジオ体操音楽>

どうなんむぬい ラジオたいそー だいいち

(与那国語ラジオ体操第一)

なみなみ わる うやんた うとうだんた あがみんた

(たくさんいらっしゃる親、兄弟、子どもたち)

でい ていはん ういがしび うんどう き わり よ
(では、手足を動かして運動してください)

かな まいがら あき° てい ぬん き わり
(腕を前から上げて伸びをしてください)

‘とうち ‘たち みち どうち
(一つ 二つ 三つ 四つ)
‘とうち ‘たち みち どうち
(一つ 二つ 三つ 四つ)

ふーていんき くち ぬばしてい ていはん ういがし わり
(大きく腰を伸ばして手足を動かしてください)

‘とうち ‘たち みち どうち
(一つ 二つ 三つ 四つ)

かな みく° らし わり よ
(腕を回してください)

どうぬ ふがんき ないや うていんき
(体の外に、今度は内に)

いちち むち ななち だち
(五つ 六つ 七つ 八つ)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

はん びらぎてい ちむく° ていぬ うんどう
(足を開いて胸の運動)

かな ふいてい うやびんき あき° わり
(腕を振って上に上げてください)

いちち むち ななち だち
(五つ 六つ 七つ 八つ)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち

(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

どう だがたんき がんみ わり
体 横に 曲げ なされ

どう だがたんき がんみてい まー ‘とうむるち ないや にでいんき
(体を横に曲げてもう一回、今度は右に)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

まいんきん ついんきん がんみる うんどう
(前に後ろに曲げる運動)

どう まいんき がんみてい みむるち
(体を前後に曲げて、三回)

うぐしてい ついんき
(起こして後ろに)

ふーていんき ちむく° てい すらし わり
(大きく胸を反らせてください)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

かんな ふいだたな どう にでい わり
(腕を振りながら体をねじってください)

んだい にでい んだいんき ふーていんき ななち だち
(左, 右, 左に大きく, 七, 八)

にでい んだい にでい んだい
(左 右 左 右)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

はん むどうしてい かんなとう はんぬ うんどう
(足を戻して腕と足の運動)

ばりんでい んでい わんな よ
(疲れたとおっしゃるなよ)

いちち むち ななち だち
(五つ 六つ 七つ 八つ)

かた うい かた ‘たら いちち むち はん びらぎ わり
(肩, 上, 肩, 下, 五, 六, 足を開いてください)

だらんとう きてい ‘たむるち がんみてい まいんき ちむく° てい すらし わり
(だらんとして二回曲げて, 前に胸を反らせてください)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

どう ふーていんき みく° らし わり
(体を大きく回してください)

‘とうち ‘たち かぬ かた=んき
(一, 二, あちら側へ)

いちち むち ななち だち
(五つ 六つ 七つ 八つ)

‘とうち ‘たち みち どうち
(一つ 二つ 三つ 四つ)

はん むどうしてい ‘たちぬ はんし ぶどうんつあい わり
(足を戻して両足で飛んでください)

‘とうち ‘たち みち どうち はん びらぎてい しみてい びらぎてい しみてい
(一, 二, 三, 四, 開いて, 閉じて, 開いて, 閉じて)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

ていはん ういがし わり よ
(手足を動かしてください)

‘とうち ‘たち かな ふいだたな はん まき° ぬばし き わり
(一, 二, 腕を振りながら足の曲げ伸ばしをしてください)

‘とうち ‘たち みち どうち いちち むち
(一つ 二つ 三つ 四つ 五つ 六つ)

ぬびぬびとう うぶいてい き わり
(のびのびと深呼吸をしてください)

どうりーどうり いてい ぬみてい はてい んだし わり
(ゆっくり息を吸って吐き出してください)

いちち むち ななち だち
(五つ 六つ 七つ 八つ)

まー しまい ど。 す ひつとうい どうでいん がんどうに わり よ。
(これで終わりです。今日一日どうか元気でお過ごしください。)(拍手)

(司会) はい, ありがとうございます。ご協力いただいた皆さんも本当にありがとうございました。

(崎原) はい。アードーフガラッサ, カナデダランチダケハシタラスワリヨウ。どうぞぜひ与那国までお越しください。(拍手)

(司会) はい。これで与那国の発表は終わりです。

八重山（石垣島）

（茂手木） 次は与那国のお隣になります。お隣といっても相当離れているんですが、八重山という。石垣島が一番大きい島で、西表とかそのほかの離島はたくさんありますが、その発表に移りたいと思います。それではどうぞお入りください。

（石垣） 皆さん、クヨーナラ。ケーラナリガンジュウシオールネーラ。じゃあ、これから八重山むに、石垣での言葉で八重山むにを語っていきたいと思います。ではまず最初に八重山むにの解説を琉球大学の狩俣先生にお願いしたいと思います。先生、よろしく願いいたします。

（狩俣） 琉球大学の狩俣です。簡単に解説をするんですけども、専門家なものですからその前に少しでも全体の話をしていただきます。

今日来ているのは、ここの北海道から与那国、ここまでですね。縮尺を同じにして本州を、日本をヨーロッパに重ねた地図です。だからノルウェーからジブラルタルまでの距離から集まってきたということになると思います。ですから、聞いて話がさっぱり分からないとか、いろいろなものがあるということのもよくお分かりかと思います。

今回、琉球から6つ来ましたが、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語ですね。石垣、それから西表、たくさんの島がありますが、八重山語はここで話されている言葉です。実は方言差が非常に大きくて、竹富島は竹富島の言葉が、波照間は波照間の、西表は西表の、それぞれに非常に独特の方言が話されていて、まとめて解説するのがすごく難しいぐらいに大きな方言差があります。今回はその中の石垣島のシカというところから来ました。これで今回は八重山むにを代表します。

琉球といっても、これは縮尺を同じにして本州に重ねた地図ですけれども、喜界がここで仙台ぐらいのところにあって、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語で、実は仙台から島根県ぐらいまでの間に琉球があります。ですから実はお互いの方言はまったく通じません。おそらく与那国の方言を石垣の人が聞いて、半分も分からないんじゃないかと思います。宮古島の方言は那覇の人は聞いてもまったく分からないぐらい違います。そういうところから今来ています。

ざっと八重山の解説のところでしてしまいましたが、全体を理解するにはいいかなと思ってこういうのを用意しました。今回、お手元にもあると思いますが、八重山語の『桃太郎』の方言訳があります。これを使って八重山語の特徴を紹介させていただきます。

八重山語、八重山むにでは、花のことを「パナ」、骨のことを「プニ」、へらのことを「ピラ」というふうにして、ハヒフヘホがパピプペポになります。それからこの中にもありますが、フターヅカイ、バレー、と言うんですけど、割れて、というのが「バレー」になるんですけれども、わ行のワがバになるとか、旧仮名のヲがブになるとか、旧仮名のウィが

ビになるというふうにして、WがBになるという変化が八重山語にはあります。

実はこれは与那国語も八重山語も次の宮古語も同じ特徴を持っています。ですから、ワがバになる。さっきので濁音がいっぱいあるというのはそういうことになると思いますけれども、こういう方言です。それからここの方言では、オノもブーヌとか、ネ、ウシ、トラ、ウ、タツ、ミ、のイノシシはビイとなりますね。そういう特徴があります。

それから単語ですけれども、実は八重山むにでは、男はビギドゥン、女はミードゥン、おじいさんはウシューマイ、おばあさんをアブジ、などと言いますが、ここにも、これは石垣のシカの方言で、たぶんウシューマイとかミイというのが出てきています。このアブジというのは平民の語で、ミイというのは士族語で、実は平民語と士族語の区別がありました。そういう方言です。

それからここの方言は、ウミーヌドゥとか、マイマイのミイヌ、というようにして、これは日本語のヌという助詞に相当するものですが、ガと翻訳されるようなもので、ノという助詞がガになったりヌになったり、要するに全体修飾語になったり主語になったりという1つの意味を表す助詞で、日本語の古い特徴を残しているといわれています。

「カーラヌカンガラ」、どこでしたっけ。「カーラヌカンガラ」。これは川上というよりも、川の上の方から、カーラヌ、で、このヌは「ノ」と言うんですね。だからここではノになり、ここではガになるというふうにして、1つの助詞が2つの意味を持つという特徴があります。それからここに「ヤマカイ、タムントゥンナハルン」という人、トゥンナというのは、トリニという助詞がナになるというように、ほかの方言にはない特徴があります。

それからカイーオッタとか、オールンとかオータとか、カイルン、カイロウとか、ソーユーニツコウッタとかいうふうにして、実は尊敬を表す動詞があって、ここの方言は先ほどの与那国と同じように、目上の人を尊敬する敬語が発達しているという方言です。これの使い分けがなかなか難しいですし、独特の敬語の扱い方があります。今その使い方も若い人たちに対する継承が難しくなっているものの1つですが、そういう特徴があります。

それからさっきのハナをパナとか、ホネをプニとか言うような特徴は、実は日本語の古い特徴で、奈良時代以前の日本語はハヒフヘホがパピブペボだったといわれているんですが、そういう特徴を八重山の言葉は残しています。簡単にですけれども、私の方からは以上です。

（石垣） それではこれから『桃太郎』の話を石垣語で語ってもらいます。嵩本安意さんが『桃太郎』の島むにで語りますので、よろしくお願いいたします。

（嵩本） ケーラネラ、クヨムナラ。バナヤー、ヤイマイシガキシマ、アラカーヌ嵩本安意デ、イズムヌユー。ドウデンミッシトンナラ。ナマカラ桃太郎ヌ話バ、カイサルナラ。

ムカスムカス、アルカタンガ、ウシュマイトンミーヌドゥ、オッタヨウシュ。ウシュマイヤヤマカイトムトゥンナ、ンミーヤ、カーラカイ、キンカーアーライナ、オッタチヨ。ミイヌドキンカーアーライオールケンド、カーラヌカンカラ、ダボーン、ダボーンデ、ウフトームンヌ、ナガレキータチヨ。

ンミーヤ、ウフトームンユプサイテ、ヤーカイカエロットタチヨ。ンミーヤウヌトームン

ユ、キスンデショウレンケンド、トームンヤ、フターヅカイバレ、ナカカラマイマイヌビ
ブンファヌマレーキダチャ。

ウシュマイトンミーヤ、ウヌファーヌナーユ、トウムンタルデ、ナッツコッタチョ。コ
ウビユ。(拍手)

(石垣) はい。いかがだったでしょうか。私は石垣市文化協会の会長をしております石垣久雄と言います。ドオディン、ミッシトーテユ。どうかお見知りおきを、ということです。じゃあ、これからこれまでの我々の石垣市の文化協会をはじめ、石垣市の教育委員会、学校、それに公民館、PTA がどのようにしてこの危機言語を普及し、それから継承し発展させようとしているかというちょっとした状況をご説明したいと思っております。

先ほど来、与那国の方からもありました。「島むにをバスキッター、ウヤユバスキ。ウヤユバスキター、シマユバスキルン」。これを日本語に翻訳すると、島の言葉、方言を忘れたら親を忘れ、親を忘れたら島を忘れると。

これは先人たちが我々に伝えている方言の大事さ、方言が滅んだら文化も滅ぶよ、島も村もみんななくなるよと。どうかこれまで育ててくれた先人たちの言葉を大事にして、そして先人たちがつくり上げてきた自分たちの文化を守り、発展させてください、というような意味が含まれております。

先ほど来、伊奈かつぺい先生も、どうしてこのような方言が撲滅されていったかという背景についてはいろいろ講演の中でありましたので、石垣島にしても八重山にしても、やっぱり先人はこの皇国史観、それから同和政策の下において、方言札で方言狩りがされました。

これは戦後になって我々はやっと先祖が残してくれた文化、特にその文化の基底に当たるこの言葉を大事にしようじゃないかということで、文化協会も方言部会をつくって4年前から方言大会をやっております。

それから各学校でも、与那国の方でも20年前からちゃんと教材にも位置付けて方言を作ってやっているという教育長さんの報告もありましたけれども、石垣島もそのように、川平村では川平の方言大会をもって川平村の方言継承保存に努めております。それから竹富町の竹富島ではPTAを中心に公民館も応援して方言大会をもって、祖父母、親、子に島の言葉を継承しております。また方言カルタも作ってやっています。

このようにして我々も頑張っておりますが、やはり何ととっても課題は何かというと、言語は使わなければもう何もない、意味がないということです。どうか先人たちに残していただいたこの我々の文化を自分たちで守り発展させるために、今後も頑張って方言を生活の中に生かす運動を展開しなければと考えて取り組んでおります。

近ごろはもう沖縄県の文化振興課の平良真先生からもお話がありましたように、9月18日はしまくとうばの日と定めて、県を挙げて今取り組んでおります。それから各飛行会社でも、もうご存じだと思いますが、飛行機に乗って、きれいなスチュワーデスがいてその地域の言葉であいさつをしております。ああいう取り組みで少しずつ広がりつつありますけれども、でも子供たち、大人がこの言葉を使うかということ、これはもう使わない、あんまり浸透はしてないのが実情ですので、もっともっと我々が頑張っていかなきゃならない

など。伊奈かっぺい先生の今日のご講演の中にありましたように、楽しく、本当に楽しくして、やっぱり先祖に残していただいたこの文化を伝えていくと。そして自分たちの文化をつくっていくということに頑張っていきたいと思っています。

だいぶ過ぎました。じゃあ、次は石垣島の文化であります『とうばら一ま』というのがあります。嵩本安意さんに三味線で歌ってもらって、我々石垣島から来た応援団は囃子を入れますので、どうぞお聴きください。

（嵩本） 『とうばら一ま』という、曲は同じ曲ですが、歌詞を即興で、昔の方は思ったこと、悲しいこと、うれしいことを即興で歌詞を作って歌っていたんですね。そしてこちらで言うと向こうが返して囃子をやって、今度はこちらが言う、また返してあげるとか、昔の方は非常に素晴らしい詩人だったんだなと思います。

石垣市では昭和 22 年から毎年旧 8 月 13 日に『とうばら一ま』大会を設けております。これをずっと継承していると。その中で今、昔から歌われていたナカドウ道というところがあって、そこに絶世の美女がおったそうです。それで青年がもう毎夜何十回通ったけれどもひと目も会うことができなくて失恋をしたというトゥバラーの碑が建っております。

もう 1 つは、昨日この八丈島に来て私も大変感動いたしました。温かい心で迎えていただき、こういう素晴らしいサミットをしてもらったという感謝の意味で作ってみました。

「八丈島ヤ、シマクトゥバノ宝、バガケエラヤ、イツマデンカタリ、カタレオラ」。八丈島は島言葉の方言の宝である。バガケエラというと、私たち、皆様一緒になっていつまでもいつまでも語っていきましょうねという内容です。では演奏します。

<演奏中>

ナカドウ道カラ、ナナケラカーヨーケー。ナカスズカヌ、シャーマーソウダンヌー、ナーラーヌ。ンゾーシーヌ、トバニャーマーヨー。八丈島ヤー、シマクトゥバヌ宝。バガケエラヤ、イツマデンカタリョウラー。ムゾウスーヌーイツマデンカタリョウラー。どうもありがとうございました。

（石垣） どうもありがとうございました。（拍手）

（司会） 石垣の皆さん、本当にどうもありがとうございました。

宮古島

(茂手木) それでは石垣が終わりまして、今度はそのお隣の宮古島ですね。宮古島の発表に移ります。これでいうと『桃太郎』は3ページ目、それから宮古語の特徴で、同じく狩俣繁久先生が12ページに載っています。それでは宮古の人、よろしくお願いします。

(大城) ばやー、みゃーくから キたー 「大城裕子」ていーどう あイ。みゃーくぬ 文化協会ぬ すかまうどう しゅー。んなまからまい たかさー しー ふいーさまち。

宮古島からまいりました大城裕子と申します。あらためまして八丈町の皆様、町制施行60周年誠におめでとうございます。昨日八丈島に着きまして、島の豊かな自然や島の方々の温かいお心に触れ、居心地のよさを感じています。温かく迎えてくださって本当にありがとうございます。

宮古の発表、最初は長間三夫さんとケナン・セリックさんによる宮古島紹介です。お聴きください。キキふいーさまち。(拍手)

(長間) はい。宮古島から来た長間三夫というみゃーくずまから キったー 長間三夫ていーどう あイ。

(セリック) はい。ばやー、とー みーりゃー まい みゃーくピたー あらんそうがどう、ばやー、フランスぬ ぱりからどう くとうすぬ 5月ん みゃーくんかい きし、みゃーくふつつう ならい ゆー セリック・ケナン。はい。長間さん、フランスん うーきゃー、世界地図しー、みゃーくずもー みーるばどう んや、にゃーったーゆ! あんしーなーどう んみーぬ すま ぬが? はい。

私はフランスにいたときに、世界地図で宮古島を探したらなかったんですよ。こんなに小さな島なんじゃないか。

(長間) だいで、みゃーくん なにんぎんまい ふだ、5万5,000人、うりから、すまぬ うぷさまい、204キロへいメートルぬ あーどー。

(セリック) いやいや、宮古島は人口が5万5,000人で面積は204平方キロメートルもあるんだよ。

(セリック) ばが ぱりんな、あてい、いんぬどう ンちゅーそうが、みゃーくぬ ぱりんな のーぬが ンちゅーが?。

(セリック) 私のパリには犬が多いんですけども、宮古のパリ、つまり畑のことですね。そこには何が多いんでしょうか。

(長間) みゃーくんな ぶーぎ, たばく, うりから まんご, うやー, とうらい むなー, だいず, やまとう いつばん どー。

(セリック) はい。宮古島の畑には, サトウキビ, 葉タバコ, マンゴー, その生産量は日本一だよ。

(長間) くぬっズあ, やまとうぬ うまから, 自然災害ぬ ンちゅーそうがどう, みゃーかー のー しー やりゃー?。

(セリック) 最近では日本本土のあちこちに自然災害が続いているんですけども, 宮古はどうなんですか。

(長間) みゃーくまい, んきゃーんな, うぷかじぬ キす, うりから ぴゃーりぬ きしどう, みゃーくずまぬ ピとうーばー, うぬすく だまがいらし なー うーたー だら。

(セリック) 昔は大きな台風がよく来ていて, そして干ばつもあって, 宮古島の人々を苦勞させていました。

(長間) あんそうがどう, くぬっズあ うぷかじまい くーん。うりから, 平成10年度, 東洋一又地下ダムぬ でいき。

(セリック) しかし最近では大きな台風が来なくなって, そして平成10年に東洋一の地下ダムもできて。

(長間) ぱりんかいぬ みず, うりから ぬン みず, みず なー んにや, こまらだな, すぐむずふイまい うぬすく でいき, みゃーくピたー ぷからっさー しゅー。

(セリック) 畑の水, そして飲む水も心配がいらなくなって, 宮古島の作物が豊作が続いていて, みんなはうれしく生活しているんです。

(長間) はい。ばんたが ばなっそう キき ふいーさまい, ありがとうございます。たんでいがー たんでい。(拍手)

(大城) 次は琉球大学の狩俣繁久先生に宮古語の解説をお願いいたします。

(狩俣) ばやー, きゅーや, うきなーからどう きしゅーそうがどう, あさまい ンまい, あさまい あんなまい, みゃーくピとう やり, みゃーくにせー ぬ狩俣繁久ていー あい。琉球大学んキ琉球語ノ研究 しゅー。

今日私は実は沖縄から来たんですけれども、両親は宮古島出身で、私は宮古島2世の琉球大学で琉球語を研究している狩俣です。これから『桃太郎』の宮古語訳を見ながら、宮古語の解説をしたいと思います。

宮古語は、パナス、マードンキヤヌパナス、ンザンガランドゥ、となって、このパナスというのは、昔々の話、あるところに、というんですけど、このパナスというのはハヒフヘホがパピプペポになるという、先ほどの八重山語と同じように古い日本語の特徴を残している方言です。

そして畑のことをパリと言います。畑ですね。原っぱの「原」と書いて、宮古では畑の意味なんですけれども、パリと言います。あるとき本土から民話の調査に来た女子学生が教育委員会で紹介されたおじいちゃんの家に行ったら、おばあちゃんがいて、おじいちゃんいますかと言ったら、今日はパリに行ったよ。え、パリですか。いや、何で、毎日行くよ。毎日？ というね。そういう逸話があちこちに残っているんですけれども、先ほどの話なんですけれども、ケナンさんはフランスのパリから来て、時々宮古島のパリに行っているという活動をしています。そういうハヒフヘホがパピプペポになるという方言です。

それからここの方言も、シュートウンマガドゥ、おじいさんとおばあさんがと、「が」という助詞があるんですけど、この「が」という助詞があります。それからウマガという、これもおばあさんがという、「が」という助詞があるんですけど、この「が」という助詞は、主語の「が」だけではなくて、連体修飾語、バガムヌ、私のもの、カイガムヌ、あの人のもの、というふうにして、連体、誰々のもの、というときの「の」も「ガ」になります。

それからここは、ナガリーヌカヌ、流れている川の、というふうにして、川の、海から流れている、要するに連体修飾語のヌが使われるだけではなくて、「ウプムンヌ」、大きな桃、じゃないな。これですね。キサッティシールバドゥムンヌ、切ろうとしていると桃が、というふうにして、助詞の「が」、主語を表す「が」が「ヌ」になります。要するにこれは何かというと、私が食べたパン、とかの「が」は、ここの方言では主語の、私が食べたパン、にもなるし、私のもの、というときのバガムヌにもなります。

それから桃が流れてきた、ムムヌナガレキタの、桃が、の「が」も「ヌ」になります。それから桃の中から、ムムノナカカラ、というふうにして、ノは主語にもなるし、連体修飾語にもなる。ガも主語にもなるし連体修飾語になるという特徴を持った方言です。

それからもう1つ、その桃を拾ってうちへ帰りましたという、ウヌムンヌピスイーの、その桃を拾ってというときの「を」という助詞が「ヌ」になっています。ここの方言は「ン」で終わる単語に「を」という助詞を付けると、ムンヌとなります。

それからmで終わる、神様のことをカム、唇を閉じて終わるんですけれども、神様を、と言うときはカンム、というふうにして、唇を閉じる子音の後に「を」を付けるとカンム、nの子音で終わる、後ろに「を」という字を続けるとカンヌ、というふうにして、実は「を」という助詞がさまざまに形が変わるんです。

にもかかわらず宮古島の人、今何言っているかが分かるというのはすごいなと思うんですけれども、こういう特徴を持っています。これも日本語の古い特徴なのではないかなといわれています。

それから、フターツンカイバリーという。これは2つに割れてというようにして、わ行の「わ」, wの子音がbになるというのは先ほどの八重山語と同じ特徴です。ですから、宮古語、八重山語、与那国語は共通の特徴があります。

大きな桃というので、ウプーヌというのは、こういう、大きいというのは、今は「オー」という長音になるんですけれども、もともとは「オホ」と書くような特徴があったんですけれども、そのオホというのがそのままだごく自然にで残っています。そういう方言です。

ただこの方言は先ほどの八重山語とは違って、敬語はあるんですけれども丁寧語がない。何々します、行きます、という丁寧語がない。敬語、尊敬語はあるんですけれども丁寧語がない。そういう方言です。いろいろな意味で実は宮古語は面白い方言ですけれども、そういう特徴を持った方言です。私の解説は以上です。

(大城) 宮古2世の狩俣繁久先生による宮古語の解説でした。狩俣先生、ありがとうございました。

(拍手)

続きまして長間三夫さんが『桃太郎』を語ります。

(長間) まーだ んきやーんぬ ばなす。んざがらーんどう、しゅーとう ンまが うーていー、しゅーや やまんかい、たむぬー とうイが いき、ンまー、ながりーぬかー いき、キンぬ あろーがいきたー。あんそうがどう、ンまが、キンぬ あらいゆーつかー、かーぬ ンみから、うぼーぬ むんぬ、どうつふあが どうつふあ ていー ながり きしば、ンまー、うりやー ピそうい、やーんかいぴーたー。ンまが うぬ むんぬ キさつてい しーるばどう、ふた一つんかい むんぬ ばり、ういが なかから うぼーぬ びきつヴあぬ ンまり、しゅーとう ンまー、うぬ つふあん、桃太郎ていー つきたー つつあ。。(拍手)

ありがとうございます。

(大城) みやーくふつによる『桃太郎(むむたるー)』でした。次は長間さんとセリックさんお2人によります「ぱんまいぬばなす」です。キキふいーさまち。お聴きください。

(長間) はい。くぬ ぱなっさ、民話ー あらんそうが、50年前ぬ まーんていーぬ ばなす。

(セリック) これは民話ではありませんが、50年前に本当にあった話です。

(長間) うやー、学校ぬ しんしーゆ しゅーていーどう、ふたンつ あいきーぬ うやーが うーたー。

(セリック) お父さんが学校の先生で、バツ1のお父さんで。

(長間) 小学4年生ぬ びきつヴあ うーていー。

(セリック) 小学4年生の男の子がいて。

(長間) また うやー, みどうんむ とうみ, みつあーいしー くらすたー やーでいぬ ばなす。

(セリック) そしてお父さんが新しくお嫁さんを連れてきて, 3人で暮らしていた話です。

(長間) うんなぎやー, しーどうまい, しんしーまい, やーからどう, ばんまいや むち いきたー
とうきや だら やー。

(セリック) あのかきは先生も生徒も弁当を持って通っていた時代でした。

(長間) うやが, ばんまいや あき ふあつてい しーばどう, 。

(セリック) お父さんが食べようと弁当を開けたら。

(長間) あがんにや, くりやー んにや, ピとうん ふあーり ばんまいや あらんさー てい。

(セリック) あれ, これは人が食べられるような弁当ではない。

(長間) うやー, うどうるきつてい, あんしーまい ふあーだかー ならんには, ふあいゆいばど
う, 。

(セリック) お父さんが驚いて, ですけども食べないといけないので食べていたら。

(長間) んにや, うまんかい つふあぬ, あびきやー かいかい すぐんにや きし, 。

(セリック) そこに子供が息をはあはあしながら来て。

(長間) おとー, あがいんにや, きゅーや んにや, まつがいどう, おとーがばんまいゆ むち き
し にやーん, ていー ばんまいゆ とうらさつてい しーばどう, 。

(セリック) 子供が, お父さんごめんなさい, 今日はお父さんの弁当を間違えて持ってきてしまった,
と渡そうとしたら。

(長間) うやが, のーていーが, つヴあが ばんまい, ばが ばんまい ていー つヴあが っしゅ
ーが ていー。

(セリック) お父さんが、何でこれが私の弁当だと分かるのかと聞いたら。

(長間) つふあぬ、おとー、うぬ かーちゃんが きしーから、ピとうつキっちやーんどう、どうーたーや、ゆぬ ばんまい やたー。。

(セリック) おとう、この母ちゃんが来てから1カ月だけが同じ弁当だったんです。

(長間) うぬ あたー、ずーってい んにや、別々なー やたーどー。

(セリック) その後はお父さんの弁当と私の弁当はずっと別々だったんです。

(長間) あんっかー、うやが、とー あらん んにや、きゅーや やー いき、やでいゆんま してっい、うぬ みどうんむばー やーんかい ぴらし、ふたーイしー くらさ やー ていー。

(セリック) お父さんが、はいはい、もう分かったんだ。今日は家に行ってお嫁さんを怒鳴って追い出して2人で暮らそうじゃないか。

(長間) っかー、うまん つふあぬ、おとー、まいぬ かーちゃんとう やでいゆんむばー んにや、みーかまりゅーいば、おとーが、うぬ かーちゃんぬ、ならーすじょーつつあ しー いきっかー のーしーがていー。

(セリック) お父さん、前の母ちゃんとの夫婦げんかを見るのはこりごりですから、今回の嫁さんを教育していったらどうですかと。

(長間) っかー、うやー んにや、 きむ のーり、。

(セリック) お父さんが心が落ち着いて。

(長間) やー いきってい、みどうんかい、あまいがまー しー、あー、たまんな、あんしーぬ ばんまいまい じょーとーいら ていー。

(セリック) お父さんは家に行って自分の嫁さんに、ああ、たまにはそういう弁当もいいんだ、とほほ笑みながら言った。

(長間) みどうんま、みーとう ふつつう うぼーうぶ あきってい、とうぬばり うーたー つつあ。

(セリック) 嫁さんは目と口を大きく開けてぼうぜんとしていたそうだ。

(長間) んにゃ、うぬ ながつあ から、つふあぬ ぱんまい、うやが ぱんまい、ずーつてい、ゆぬくたー しー いきたー ていんだら。

(セリック) 次の日からは、子供の弁当とお父さんの弁当はずっと同じ弁当だった。

(長間) うぬ あんなー、うぬ つふおーばー んにゃ、うかーすき なり、 たかさー しー、 んにゃ、あまいとう ばろーぬ きないや しー いきたー つつあ。。

(セリック) そして嫁さんがその子供を大変かわいがって、その次は笑顔の絶えない楽しい家庭で暮らしたそうだ。

(長間) はい。ばんたが ばなっさ うすき、たんでい がー たんでい。

(セリック) 私の話は終わりです。(拍手)

(大城) 長間さんとセリックさんによるパンマイぬパナシでした。次は私の方から、宮古島における方言継承の取り組み、現状、課題などについてお話しさせていただきます。

宮古では1年を通してさまざまなイベントが開催されていますが、約900席を有する島で最も大きな会場で行われる催し物で、チケットが即完売になるという超人気イベントがあります。鳴りとうゆんみゃーく方言大会です。鳴りとうゆんとは、鳴り響くという意味です。鳴りとうゆんみゃーく方言大会。

このイベントは宮古島市文化協会が主催するイベントですが、発表者が各地域の島フツ、島言葉でそれぞれの思いを語ってくださいます。んまりずま（生まれた島）を大切にしたい、自分の根源を大切にしたいという地域の人々に愛されて、今年21回目を迎えました。ちなみに昨年の最優秀賞受賞者は、今回一緒にまいりました長間三夫さんです。(拍手)

そして今年の優良賞、文化協会長賞は、そのお隣のケナン・セリックさんが受賞しました。(拍手)

初の外国人による参加ということで、大変わきました。そして大変素晴らしい発表をしてくださいました。セリックさんは今、宮古語のフィールド調査を行っていて、長間さんとコンビを組んで島の各種イベントで方言漫談を披露し、島をわかせています。宮古島の方言継承活動に新たな火をともしているお2人です。

そのほかにミャークフツカラオケ大会。これは歌謡曲などを方言で歌う催しです。方言で思いを語るのは大変難しいことですが、すでにある歌詞を方言に変える作業はとても取り組みやすく、年々盛況を博しています。

また注目すべきは宮古地区中学校文化連盟が主催する方言お話パフォーマンス大会です。方言指導のできる国語科の教師が中心となって取り組んでいます。まず好きなCMを方言で言ってみようというところから始まり、地域の方をゲストティーチャーとして招いて方言指導を受けながら取り組む方言劇

まで、中学生が興味関心を持ちやすいよう間口を広げつつ、方言による豊かな表現、それと結び付くさまざまな文化継承にも取り組んでいて高く評価されています。

学校現場では宮古島市立下地中学校の謝敷勝美先生の活動が顕著です。ミャークフツのフツを取って、毎月22日をミャークフツの日として、国語の授業の冒頭の10分間、方言指導を行っています。またホームルームなどでも方言への興味関心を高めるためにさまざまな取り組みを行っております。謝敷先生の取り組みに影響を受けて授業で方言を取り上げる教師も少しずつ増えていると聞いています。

それから、宮古島といえば下地勇さんという有名な歌手がいます。下地勇さんが方言で歌を歌って、自分たちの島の言葉に誇りを持つことを若い世代に伝えてくれました。それから宮古方言のスピードラーニングとして各種CDが発売されております。これも若い方たちに大変人気で、若い世代への方言導入編として広く聴かれています。また方言辞典や方言集なども多く出版されておまして、記録として残されているだけではなく、今後の継承活動にも活用していくことと思っています。

それから沖縄県は昨年度から10年間、「広げよう！しまくとうば県民運動」で話せる人を88%まで増やすことを目標に掲げています。昨年7月から8月にかけて初の全県意識調査を実施し、その結果、宮古地区は「人と話すときしまくとうばを主に使う」が全体の22.6%とかなり高いことが分かりました。ちなみに県全体では10%です。島の人の気質、例えば地域ごとの団結力の強さ、愛郷心、そして日常のさまざまな事象を面白いという宮古の人たちの気質がこの数字を押し上げる要因になっているように思います。

しかし小中学校に関していえば、昨年、宮古方言を広める会が実施したアンケートによると「宮古方言をよく使う」が約10%とかなり低かったのですが、一方、「方言をなくさないようにしたいと思うか」という問いには約半分が「思う」と答えており、方言を話せなくても継承の大切さは認識しているようです。それは今後継承活動を進めていく上で大変希望が持てる数字になっています。

言葉はその言葉がシャワーのように降り注がれる環境にいなればなかなか身に付きません。方言の次世代への継承とよくいわれますが、方言継承を考えると、次世代は子供たちではなく、方言を話せない私たち親世代なのではないかと思います。私たちが方言を生きたコミュニケーションツールとして伝えるよう努めてこそ、継承という川幅は広がりを持ち、そして深みを増していくのだと思います。

方言を通して島の心をどう伝えていくのか。難しいことではありますが、私たちの祖先が使ってきた言葉の魅力や価値を正に評価することで、島を誇りに思え、そして自分自身にも誇りを持てるようになると思います。

またある特定の方言を基準にしてほかの方言の正誤を決めることはできません。「あなたの方言は間違っている」これは方言継承の障壁になります。寛容な心で方言を聴き、相手が話しやすい環境をつくってあげることがとても大切なのではないかと思います。そして何より、方言を使うことを楽しむことが大切だと思います。みんなでそれぞれの地域の言葉を、言霊が宿った言葉をお子孫に伝えないでいきましょ

う。

私も十分に話せるわけではないので、方言を話せる方に積極的にこの言葉を掛けていきたいです。「宮古の美しい言葉をどうか私に教えてください」。たんでいありやー、みゃーくぬ かぎふつつう、ばぬんかい、ならーし ふいーさまち。以上です。（拍手）

次は與那城美和さんに宮古の古謡を歌っていただきますが、その前に狩俣繁久先生にこの歌の解説をお願いしたいと思います。

(狩俣) これから『マツギガパーヤ』という歌、アーズを歌っていただきます。このタイトルは『松の木の葉っぱは』というタイトルですけれども、松の木の葉は2つくっついていきますね。それは枯れて落ちた後もずっと2つくっついたままですけれども、その様子を男女の夫婦の関係に歌っているものですね。

夫婦和合のシンボルとされる琉球松の双葉、その松の双葉はうらやましい限りだ。枯れて落ちるまでその向き合う形は変わらない。私たち夫婦もいつまでも睦まじく向き合って幸せに暮らしていこう、というものです。

歌詞の訳を言いますと、松木の双葉はうらやましいこと。枯れて落ちるまで向き合ったまま。私たちもこの世がある限り向き合って暮らしていこうよ、という歌詞です。宮古のアーズはアカペラで楽器なしで歌うことも多いですが、今日はそういう趣向でお願いいたします。

(大城) それでは與那城美和さんです。お聴きください。

(與那城) サーヨーイー、松木が^{まつぎ}葉や。^{ばー}羨^{そうんざ}ぎ むぬ よー、枯^かり^う落ていイきやまい、まウきやどう うりよーイー、私^{ぼんた}達ゆまい、まーん。みゃーくとう なぎ、まウきやどう そうーでい よー。ありがとうございました。(拍手)

(大城) 與那城美和さんでした。ちなみにちょっとだけご紹介させていただきます。與那城さんが今お召しのこの着物は宮古上布です。宮古島の誇れる伝統工芸品の宮古上布です。ありがとうございました。

(長間) はい。んにゃ、うすき しーどう、ぼんたが みゃーくぬ ぱなっさうわり。たんでい がー たんでい、とー。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。さまざまところでさまざまな言葉があるということがすごくよく分かりました。日本語の中でもいろいろあるということ、それで私たちも分からないんですけど、分からないからこそ多様な文化があるのかなと私は思いました。

沖縄本島

(茂手木) それでは今日の最後になりますが、沖縄にいきます。だんだん上がってきてまして、沖縄の方にいきますので。沖縄の3人、よろしいでしょうか。はい。それでは沖縄語の方の3人に登場してもらいます。よろしくお願いします。(拍手)

(仲原) はい。皆さん、こんにちは。沖縄本島中南部の言葉が沖縄語、あるいはその周辺の島々の言葉も含みますが、沖縄語でして、その代表として3人で来ました。よろしくお願いします。(拍手)

じゃあ、お2人はお座りいただいて、まず最初に私、仲原の方から、今からこの後ろに映し出す『桃太郎』の沖縄語バージョンの特徴について少しお話をします。

<スライド>

これは皆さんのページだと4ページにあると思うんですが、スライドを見ながら見ていただいて構いません。私が今からお話しすることは、13ページに書いてあることです。まず沖縄語の特徴は、先ほど与那国で母音が3つしかないというお話がありましたけれども、基本的に沖縄語も3つの母音、ア、イ、ウが非常に多いです。それはエ段がイ段になり、オ段がウ段になるという特徴があるからです。

ですから、ワラビが、これですね。ウヌワラビナカイの「ワラビ」というのは、ワラベの「ベ」が「ビ」になっているという状況です。それから、トコロ。アルトゥクルナカイ、というところに、トコロがトゥクルになっていますよね。これはオ段がウ段になるという特徴があるからです。エ段がイ段になり、オ段がウ段になる。ですから、アイウエオのエがイ、オがウになるので、アとイとウが非常に多くて、それがベースになっているということです。

ただしエとオがまったくないわけではなくて、長い母音のエー、長い母音のオー、というのは時々聞かれますし、それは母音が連続して2つくっついて、例えば、お前、が、オメーと変化する日本のあちこちの方言があるように、その変化が沖縄語にも起きて、エーという母音、オーという母音はあります。それから、ストズとツがシとジとチになる特徴があるので、最後の「名を付けました」の、付けました、付け、が「チキ」というふうに、ツがチになるという特徴もあります。

これが基本的な母音の特徴ですが、子音も少し変化が進んでおりまして、キがチになる、カキクケコの「キ」ですね。キが規則的にチに変化しますので、例えば、着物を洗っていましたが、というところで、チンアライガイチャビタンの「チン」というのは着物のことですが、キヌが変化してチンになっているんですね。キがチになっているという特徴があります。

それから沖縄語の音の特徴で、ほかの琉球語の中の、琉球全体の中でも沖縄語の最も顕著な特徴が、ヤ行とワ行、それから、ンの前にツに似た音のアーとか、ッアーとか、ウンのような音があることです。例えば家のことはヤーと言うんですが、お前のことは、ッヤ

一、のように、出だしがのどが詰まるような、のどを緊張させるような音があるのが特徴です。先ほど似た音が与那国語でも出てきましたけれども、この沖縄語では半母音とか、ンの後に出てくるのが特徴的ですね。それ以外にも、ンになりやすいという説明も書いてありますので後でお読みください。

次に文の特徴ですが、生まれました、が、ウマリヤビタンというふうに、生まれました、ウマリヤビタンの「ヤビタン」ですが、このヤビーンという言葉は「ます」に当たる言葉ですね。丁寧な言葉になるんですけど、このヤビーンという言葉は「はべり」から変化した言葉ですが、日本語の「はべり」は平安時代にたくさん使われているんですが、その後消えていく言葉ですね。それが変化した形で沖縄語では使われているということになります。

最後に単語の特徴についてお話しします。おじいさんのことをタンメー、おばあさんのことをツメーというふうに、ツメーの前に書いてある「ッ」ものどを詰める音で、ツメーのようになる音ですが、この、おじいさん、おばあさんを、タンメー、ツメーと言うのは士族の系統の、琉球王国時代に士族の一族だった人たちの使う単語でして、琉球王国時代に一般の平民の人々の言葉では、おじいさんはウスメ、おばあさんはハーメー、のように区別しています。

しかし現在はもう身分差がなくなりましたので、本来こういう差はなさそうですが、かつての出自というか、そういうものを意識して、今もそういう士族系統の家柄、その出自を持つ人々はこの単語を使うということで、タンメー、ツメーという言葉を使っております。

最後に表現ですが、桃が川を流れてくるというときに、ウンブイコウブイ、どんぶらこ、どんぶらこ、とあるんですが、これは、やや重いものがよたよた動くさまを表すもので、桃が浮いたり沈んだりしているという重みのある表現になります。こういう重ねる言葉を畳語と言うんですが、そういう重ね言葉が多いのも沖縄語の特徴です。

では実際にこれから『桃太郎』を聴いていただきますが、今日来たお2人はNPO法人うちなーぐちふいるみーるじんみんのくわいという、日本語風に言うと沖縄語を普及させる人々の集まり、みたいな形ですが、そこの中心メンバーのお2人に来ていただいています。『桃太郎』を披露してくださるのは国吉朝政さんです。よろしくお願いします。

(国吉) ナバ、ナカハラシンシカラフィチャーサツタル、国吉朝政ンディイシヤイビー
ン。ウチナーカラチャービタン。チューヤナマカラ、^{ムムタルー}『桃太郎』ンディルンカシムヌガタイ、ウンヌキャビーレー、ウンヌカティ、クイミソーリ。

ンカシンカシ、アルトゥクルナカイ、タンメートゥ、ツンメーガヲウイビータン。タンメーヤ、ヤマカイ、タムントウイガ。ツメーヤ、カーランカイ、チンアライガ、イチャビタ。ツンメーガ、チンアラトータクトゥ、カーラヌイームティカラ、イPPERマギサルムムヌ、ウンブイコーブイッシ、ナガリティ、チャービタン。

ツンメーヤ、ウヌムムフィッティ、ヤーンカイケーイビタン。ツンメーガ、ムムワランディサクトゥ、ムムヌターチンカイワリティ、ナーカカラダッテンヌイキグワンヌツンマリヤビタン。タンメートゥ、ツメーヤ、ウヌワラビナカイ、ムムタルーンディ、ナーチ

キヤビタン。トーワンハナシェーウッサヤイビーン。ニフェーデービル。(拍手)

(仲原) では続きまして、沖縄語の現状について善平朝信さんからお話しいただきます。

(善平) 沖縄語、うちなーぐち普及協会のメンバーの1人、善平朝信です。PowerPointで10項目ぐらい、私どもがやっている活動を簡単にご紹介させていただきます。

うちなーぐちの歴史ですが、1429年に琉球王国が成立します。いろいろありまして1919年ごろ、方言札のことが始まります。同化政策がスタートします。そこからうちなーぐちの歴史が少しゆがんでいきます。それから太平洋戦争を挟んで方言札が全県的に、普及したと言うとちょっと語弊があるんですが、広がります。

そのときに太平洋戦争に負けましてアメリカの統治下に入るわけですが、文献によると小学校で1953年まで、英語教育をしようじゃないかという話があったみたいです。諸般の都合で日本語教育の方向に向かいました。そして1972年に本土復帰を迎えます。その前後から、カタヤビラ、お話ししましょう大会、いろいろな地域の方言辞典の発行、うちなーぐちの運動が盛んになってきます。

それから2001年にNHKのテレビドラマ『ちゅらさん』が全国放映になりまして、沖縄が一躍有名になります。それから先ほども紹介があったんですが、2006年にしまくとうばの日が県条例に制定されます。

現在、しまくとうばの使用頻度ですが、ちょっと琉球新報社の意識調査は古いんですが、2001年が「話せる」が55%、それから2011年、10年後、「話せる」が44%。現在では仲原先生の話によると35%ぐらいじゃないかという状況です。これを年齢別に見ますと、当然若い人ほど話せなくなっているという年齢別の割合です。

それからしまくとうばの日。これは沖縄の言葉で「クトゥバ」をもじって9月18日をしまくとうばの日に決めました。これは実は私ども沖縄普及協議会が提唱しまして、その翌年に県議会で条例として制定されております。

そのせいだけでなく、そのしまくとうばの日の9月18日には県下で県民の大会とか市町村大会とか、いろいろな大会が今たくさん催されております。これは今日いらっしゃる国吉さんが指導している子供たちの発表場面です。城西小学校でしまくとうばを指導していますが、その発表状況です。それからマスコミにも最近非常に登載になりまして、しまくとうばの継承のシンポジウムとか、琉球諸語を第2公用語にしてくださいと県議会に訴えとか、いろいろな動きが出ております。

画期的なことは、沖縄タイムスがしまくとうばの9月18日におそらく初めて社説としてうちなーぐちで登載してくれたと。私は個人的には、それ以前は社説でうちなーぐちというのは聞いたことがありません。画期的なことだと思います。

いろいろな表記法とか、今いろいろな問題を抱えているんですが、ヒガさんという方がサンブン運動を個人的になさっております。しっかりしたうちなーぐちの文法、しっかりした表記法を残さないとうちなーぐちは残らないよという主張をされております。私も個人的には大賛成です。

それから私どもうちなーぐち普及協議会では、うちなーぐち新聞、もう本当にうちなーぐちで書いた新聞を年4回発行しております。4ページ構成ですが、最後の4ページには

子供向けのこういった、この号は「ハエとスズメ」という、これをうちな一ぐちに書き換えまして、子供たちにもそういった動機付けをしているつもりです。

今年の3月だったと思うんですが、大人の方が子供たちに教える教材として、この教材を使って子供たちに教えてくださいと。楽しいうちな一ぐちということで、子供たちに分かりやすく編集しているつもりです。

しまくとうばの課題と方向ですが、これはあくまでも私個人的な意見です。ご了承ください。いまさつき仲原先生から、日本語で表記できない「ツ」の音とか、そういったものがいろいろあるんですが、もともと琉球には文字がありませんでした。そして集落の数だけ言葉があります。全部継承するのは現実的に少し厳しいんじゃないかと思います。同じように、表記法がまだ固まってないと。いろいろな学者の先生がおられまして、1つにまとめられるかどうか分かりませんが、表記法で今少しこれをしております。独特の音韻は共通語で表記できません。そういうこともあります。

今後の解決策、あくまで個人的な意見ですが、漢字と平仮名を基本として沖縄語を表記していった方がいいんじゃないかと思います。そしてしまくとうばというのは集落の数だけありますので、物理的に継承はとても難しいと私は考えております。従って、今ユネスコが認めている沖縄語、国頭語、宮古、八重山、与那国、この言葉を中心に少し残していけたらと思っております。

まとめですが、生活の場で使わない言語は消滅する。皆さん、方言を使いましょう。ご清聴ありがとうございます。チチクインソーチ、イッペーニフェーデービル。

(茂手木) ドーモヨーイ。終わりました。ありがとうございました。(拍手)

(仲原) はい。非常に八丈語にもわかですが覚えて使っていましたね。いくつか個人的な見解も含まれていましたが、沖縄語以外の話もちょっと入っていましたが、一応今の現状です。

残りの時間に皆さんに、後ろの資料の25ページから30ページまで、資料として『北風と太陽』という有名なお話があります。そのお話を沖縄語に翻訳したものをちょっとご披露したいと思うんですけれども、すみません、ちょっと綴り方があまりよくなくて前後が間違っていたり、同じページが2枚入っていたりしておかしなところがあるんですけれども、私どもの手違いで、共通語の方の訳を見ていただければ分かると思いますので後でご覧ください。雰囲気、たぶん頭にかぶっているものでどちらが太陽でどちらが北風かが分かると思うのでそれをお願いします。

ちなみに先ほど説明するのを忘れましたが、先ほど善平さんのご発表の中で方言札というのが出てきていましたし、伊奈かっぺいさんのご講演の中にも方言札というのがありました。クラスの中でそういう伝統地域言語を話したら、あなたは方言を話したということで首に札を掛ける。その札に方言札と書いたり、地域によっては、私は方言を話したというようなことが書いてあるところがあるようですけれども、最後に持っている人が罰を受けるというようなことで、友達同士で要するに探偵のようにしゃべるやつを見つけて、お前しゃべっただろうと言って掛けていくのが方言札です。ですから、クラス内は少しぎすぎすした感じになっていたということです。

はい、じゃあ、これからちょうどいい時間ですから、ニシカジ、違う、『北風と太陽』。ニシカジと言ってしまいました。『北風と太陽』についてお話しします。ではタイトル『ニシカジトティーダ』。

ワッターヤ、ウチナーカラユシリヤビタル。ウチナーグチ、ミッチャイグミナトーイビーン。ナマカラ、ニシカジトゥ、ティーダンドイルムヌガタイ、ウヌキヤビーン。

(太陽) アイ、ニシカジヤアラニ。チャーガンジューソーティー、ナー、イチニンナイサヤー。フェームンヤッサヤー。

(北風) アイ、イヤーン、チャーガンジューヤティー。アンシ、チチヒヌタチュシェー、フェームンヤー。イエー、ワッターヤ、メーニン、イチャルカージ、ワーガルチューバーヤルンディチ。ジマンビケーンソーテクトゥ、ディー、チューヤ、ターガ、チューバーヤガ、スーブシンダナ。

(太陽) ヤッサーヤー。ナママディ、クチビケーンヌスーブッシチュエクトゥ、ジフィ、シンダナ。

(北風) ティーダートゥニシカジエー、スーブ、スルクトンカイ、ナイビタン。アンサクトー、チョードゥ、ウマンカイ、タビンチュガ、アッチッチャービタン。

(太陽) ディー、アマカラタビンチュガアッチチュエクトゥ、アリガ、チチョールフイター、ターガハジラシユースガ、スーブスミ。

(北風) ウレー、キーカンゲーヤサ。チューネー、ターガ、チューバーヤガ、ワカインテー、トー、ワーカラ、ハジミーンドー。

(太陽) アンシニシカジエーダテンイーチ、ワタンカイ、タミティカラ、チュバチナカイ、フチクワーサビタン。ニシカジヌ、チュージューク、フチクワースンシンデー、タビンチュヤ、フイター、チュージューク、フィチャーチンジ、ハジラスクトーナイビラン。

ウヌアタイグワーヤ、ンディ、ナーフィン、イジナティ、アルウッサヌ、チカラッシ、フチクワーサビタシガ、チャーン、ナイビランタン。

(北風) アイエーナー、ワッタトーッサー、ヌーガクヌタビンチュヤ、アンシ、チューバーヤル。ワーガーチャーンナラン、トー、ティダヨー、クンドー、イヤーバンヤサ。

(太陽) イエー、ナー、ワビドゥヤリー。チカラビケンシェー、カタランドー。カンシドゥスンドー、トーンチョーキヨー。

（北風） ティーダーアンイーガチ，ヤファヤファートゥ，ワレカントーティ。タビンチュンカインカティ，ティラシ，ハジミヤビタン。アンサクトゥ，ナママディ，チュージュークフィーター，フィチャーチョータル，タビンチュヤ，シデーニ，ヌクバーティ，チャービタン。

ユードゥサクトゥ，クンドー，アシカゼハジミティ，クヌアチサネーチャーナンラン，ナティ，チチョール，フィーター，ヌジャビタン。

（太陽） ヲッカサッサー，ワーガアンシチカライッティ，フチクワーチンハジランシガ，イヤーガワレーカンティ。フィチャタルウッサシ，ハジティネーランサ。

（北風） チカラビケンシェー，カタランドー，チカラサーニ，ウスランディシーネー。ユヌチカラナティ，ハンチゲーリティチュークトゥ。ナダヤシクシーネー，ムヌグトー，キーアンバー，イチュサ。

（太陽） トー，ワーガマキトサ。チューヤ，テーシチナクトゥ，ナラーチトゥラチ，ニフェーヤタンドー。

（北風） クリッシ，クヌ，ムヌガタエー，ウワイビーシガ，ムヌガタイニンアタル，トゥーイ，チカラシェー，ユヌナカー，マシェーナイビランクトゥ，シナサキ，ムッチ，キーユヌナカチュクティイチャビラ。

（太陽） ウワイマディ，ウチチクイミソーチ，イッペー，ニフェーデービル。（拍手）

（司会） ありがとうございます。沖縄語によるイソップの物語でした。初めて聞きました。それでは今日のプログラムはこれで一応終わりです。

国頭（与論島）

（茂手木） おはようございます。今日は寒いですね。島言葉で、けいは、さむきゃのう、凍えるわのうと言います。司会は引き続き教育委員会の茂手木が担当します。よろしくお願いします。（拍手）

今日の順番はですね、最初に国頭語、与論の方々がおみえになっています。国頭語の発表、その次が奄美、鹿児島県になりますが、奄美の発表。それから3番目が北海道の平取のアイヌの方々の発表があります。そして最後、わいらが八丈の発表ですので、よろしくお願いします。

そして休憩を挟んだ後、パネルディスカッションに移ります。若手のパネラー4人と司会の木部先生が、パネルディスカッションということで1時間ほどやります。その前に今日はスペシャルゲストで八戸から柗谷さんという方がおみえになって、東日本大震災の後の現状とか、それから宮沢賢治の『雨ニモマケズ』を南部弁で語ってもらいます。それから最後が閉会行事ということで、一応12時半を目標に頑張っていきたいと思いますので、今日は半日よろしくお願いします。（拍手）

それではトップバッターですが国頭語、沖縄本島の北部、それから与論島とか鹿児島県、もうあそこで県境があるんですけど、話しているのは国頭語というジャンルに入っています。それでいくつかの離島もありますが、そういうことで国頭語と。今日は先ほど言いましたように、与論の方々がおみえになっています。ユネスコでは国頭はやっぱり危険な状態、八丈島と同じようなランクに入っています。それではここで国頭語を話す与論の方々に、登場してもらいます。よろしくお願いします。（拍手）

（菊） 皆さま、おはようございます。与論がトップバッターを務めさせていただきます。私たちの今日の発表は、主に与論での継承活動報告を中心にさせていただきますが、まずは簡単に自己紹介を始めます。30秒ほど、まず共通語で言います。そしてその後、それを与論の言葉に直しますので、よくお聞きください。みんな集落も違いますので、イントネーションもたぶんちょっと違ってくると思います。じゃあ、私から始めます。

私は菊秀史と申します。与論の人は名前を2つ持っています。私の与論名は、トゥクと言います。こちら八丈島には3年前にも方言講座で来させていただいて、島の方に大変お世話になりましたが、また来ることができて大変うれしく思っています。これを与論の言葉で言ってみたいと思います。わなー、菊秀史ちゃーびゅん。ゆんぬぬびちゅは、なーたーちむちゅやびゅん。わーやーなーや、トゥクちゃーびゅん。ふまかてやー、ゆふあーなていん、方言講座ぬふとうし、ふーさちむろーてい、しっかいしまぬびちゅなん、みったんぐやっけーないびたしが、また、くーらりてい、いしよーしゃいびゅい。（拍手）

（町岡） 続きまして私は町岡光弘です。与論名では、マニユと言います。このサミットに来られて大変感動している1人であります。開催までご尽力された八丈島の皆様、文化

庁、国語国語研究所の方々など、すべての参加した方々に、心から感謝申し上げ、自己紹介とさせていただきます。またいつか与論にも来てください。わーなーや、町岡光弘えーびゅん。やーなーや、マニゅうどー、このサミットかていくーらりてい、しっかい感動しやーびたん。にやまんだーな、くんばていわーちやる八丈島ぬびちゅんちやー、うりから文化庁、国立国語研究所ぬびちゅんちやーなど、むーるかてい、しっかいくるから、とーとうがなしと言います。みっしーく、とーとうがなし。いっちいかまた、ゆんぬかてい、わーちたばーりょー。（拍手）

（岩下） 私の名前は岩下朝恵です。与論名は、マグです。私は28年ぶりにふるさとの与論に戻り、教員の仕事できてとてもうれしく思っています。今回私の大切なユンヌフトゥバが縁で、このすてきな八丈島に来ることができて、そして何より皆さんにお会いすることができて、本当にうれしく思っています。わーなーや、岩下朝恵ちやーびゅん。ユンヌなーや、マグちやーびゅん。わなー28年ぶりし、うまりじまユンヌかていむでいていきち、教員ぬしぐとうしらりていしっかいしよーしゃいどー。ふぬたびやーまた、わー、たからむぬぬのユンヌフトゥバぬ縁し、ふぬゆかしま、八丈島かていくーらりてい、またぬっちちゃんちん、うれーたーかてい、いちょーりてい、みったんいしよーしゃいどー。とーとうがなし。（拍手）

（中園） けそー、めっかりもーさん。鉄砲伝来とロケットの島、種子島で育った与論小学校校長の中園と申します。ちょっと流れが変わりますが、お許してください。昨夜の懇親会で、私がめっかりもーさんと言ったら、唯一1人だけめっかりもーさんという言葉返してくださった木部先生がいました。私の中でスイッチが入って、寝床の中に入ってから種子島弁が、これまで忘れていた種子島弁がですね、すっごく沸き上がってきたわけです。ふるさとを忘れていたのかなという反省もかねて、ちょっと「おはようございます。タベは布団の中に入ってから、種子島の言葉が泉のようにわいてきました」ということを、種子島弁でしゃべらせてください。

けそー、めっかりもーさん。タベはやあ、寝床の中に入っちから、種子島の言葉がめっぼうわいちきて、自分じゃ、たまがったや。終わります。（拍手）

（菊） 自己紹介が終わりました。それでは次は与論の言葉の特徴を言いたいと思うんですが、資料の5ページと14ページ、5ページが『桃太郎』です。14ページが解説の方になっていますが、先に14ページの方をお開きいただきたいと思います。この『桃太郎』の話にのっとなってということですので、関係ある言葉を抜き出してご説明したいと思うんですが、与論島の言葉も沖縄とほぼ一緒で、母音が「あいう」になります。「え」と「お」も、ないわけではありませんが、それはまた追ってご説明いたしますけれども、例えば「え」の段が「い」の段に変わる、「お」の段が「う」の段に変わるというのが、「川が流れて」というのがありますかね。真ん中あたりの右です。

「どんぶらこ、どんぶらこ、流れてきました」の「流れて」は、「れ」が「り」に変わると。「て」は「てい」に変わります。「え」の段が「い」の段に変わるということです。それから「桃が2つに割れて」も、「れ」が「り」になって、「て」が「てい」になりますか

ら、「桃が2つに割れて」は「割りてい」になりますよということです。そして「お」の段が「う」の段になるというのは、「あるところに」、「あるところ」は、「と」は「つ」じゃなくて「とう」になりますね。ですから「あるところ」は、「あるとうくる」というふうに変わりますよということです。

例えば「え」は昨日も沖縄本島の方で説明がありましたが、「まえ」(MAE)の、「AE(あえ)」のところは「えー」(E)になりますから、「前後ろ」の「前」は「めー」になりますし、それから稲の苗(NAE)なんかは、「ねー」になります。そういうふうに、一応「え」の段もあります。音変化した形です。それから「えお」(EO)、「あお」(AO)とかはまた「おー」(O)に変わりますので、そういう意味では「え」とか「お」もありますけど、基本的には「あいういう」になりますよということです。

それからもう1つは、上から4行でしょうか。右側に「洗濯に行きました」の「行きました」で、ご説明しますけれども、共通語だと自分が行ったことも人が行ったことを、また聞き手に説明することきに、みんな「行きました」で説明できますが、与論の場合は例えば「私は昨日、川に洗濯に行きました」だったら、「いきやーびたん」と言います。あるいはおばあさんが洗濯に行った事実だけを言うときも、「いきやーびたん」と言いますが、例えば先生が昨日川に洗濯に行ったことを、私がここにいる人に、「先生は昨日、川に行きましたよ」ということを報告するときの「行きました」は、「いきやーびゅーたん」と言います。「いきやーびたん」ではないんです。

報告をするときには、「いきやーびゅーたん」、この使い分けが必要です。この使い分けができないと、与論では話がかみ合いません。このあたりがちょっと特徴的なところですよ。それでは、そういうのを見ていただきながら、『桃太郎』の方を先生にユンヌフトゥバで言っていただきます。お願いします。

(町岡) それでは始めます。「むっかーしむっかーし あるとうくるない、うぷとうばーぱーが、ういやびたん。うぷあ、山かてい草はいんにゃ、ぱーぱーや川かてい洗濯しんにゃ、いきやーびたん。ぱーぱーが洗濯しちゅたくとー、川ぬういたんこうから、うっぴーかしゆるむむぬ、どんぶらこ、どんぶらこちち、ながりていきちゅうさ。ぱーぱーや、うぬむむんちゃびゅうてい、やーかていむでいていきちてゅーさ。ぱーぱーが、むむんちゃー、うしきちゃくとー、むむやたーちかていわりてい、なーからうっぴーしゃしゆる、ういがぬくわーが、生まれてきててゅーさ。うぷとうばーぱーや、うぬくわーないむむ太郎ちゆるなーちきていてゅーさ」。以上です。とーとうがなし(拍手)

(菊) それでは岩下先生に、今現在の与論小学校における与論の言葉の継承活動を報告していただきます。

(岩下) では与論島の大切な宝物、ユンヌフトゥバ学習ということで与論小学校の取り組みを紹介します。本校は創立139年を迎え、児童88人が毎日元気に学んでいます。本校のユンヌフトゥバ学習は、菊さんがきっかけを作ってください、平成17年度から始まりま

した。現在は総合的な学習や創意の時間を使い、各学年年間 10 時間の学習をしています。低学年は日常生活に身近な単語を中心に、中学年は 4 つの基本文型を中心に、高学年は学習発表会に向けてのユンヌフトゥバ劇を中心に学習しております。

毎時間の学習の最初には PTA 研修部が作成したユンヌフトゥバかるたと、町の教育委員会が作成したユンヌフトゥバことわざカレンダーを朗読しています。12 月と 1 月はユンヌフトゥバかるた大会の練習および、大会を実施しています。低学年の年間計画と 5 月の学習指導案です。中学年の年間計画と、6 月の学習指導案です。高学年の年間計画と学習指導案になります。授業の最初に朗読している、ことわざカレンダーです。各学年 5 つずつ抜き出して黒板に張り出して子供たちに読ませています。

学習の系統性として、こども園ではユンヌフトゥバを特色ある保育として、日常の中で使用したり、ことわざカレンダーの朗読などを行ったりしております。与論小以外の 2 つの小学校では、町で指定している毎月 18 日のユンヌフトゥバの日に、ことわざカレンダーの朗読を中心に取り組んでいます。また町唯一の与論中学校では、総合的な学習の中の、ユンヌ学という中にユンヌフトゥバを位置付けて、各学年ごとの取り組みを行っています。ユンヌフトゥバを学習する意義として、まず郷土に愛着と誇りを持つことです。戦後与論島では共通語の励行と方言禁止の教育が行われ、方言は悪いものという意識を植えつけることになったようです。そのことの意識の変換を図る意味もあります。

次にふるさと与論の文化の伝承を行うこと、そして与論小の校訓、至誠の中に込められている誠の心、島の心、与論島が大切にしている親、祖先への尊敬の気持ちを受け継ぐことです。また現在は多言語の時代といわれています。ユンヌフトゥバを 1 つの言語としてとらえ、共通語、英語、ユンヌフトゥバを話せるトリリンガルを目指すことが挙げられます。そしてふるさとの言語に誇りを持つことで、生きる力につながる自己の確立を目指します。

最後に学習を通して島に存在する話者の温存育成を目指します。与論小のユンヌフトゥバ学習を支える教材、教具などを紹介します。1 つ目に最初に紹介した年間 10 時間の学習計画です。これまでの職員たちが作り上げてきた、毎時間の学習計画です。現在も実施しながら見直し、改善を重ねています。赴任してきた、どの職員も使いやすい学習計画にすることが、大事なポイントだと考えています。学習の際は黒板に「目指せトリリンガル」と、「与論島の大切な宝物、ユンヌフトゥバ」という大きなカードを掲示し、学習の意欲づけをしています。

2 つ目に、低学年を中心に毎時間の学習で使用する、たくさんの単語カードがあります。これらのカード類は、これまでの職員たちが作成してこられたものです。感謝の気持ちを込めて大切に使いながら工夫、改善を行っています。3 つ目は廊下の掲示物です。低学年の子供たちが学習したことを、常に確かめられるようにしてあります。共通語の下にユンヌフトゥバのカードを重ねてめくって、答えを確かめられるように作ってあります。

4 つ目に毎月の学習日に実施している、ユンヌフトゥバ音読カードがあります。これは各家庭に持ち帰るのですが、学習と保護者をつなぐことと、集落ごとや各家庭ごとに微妙に違う発音や、言葉の違いを認識した上で、各家庭のユンヌフトゥバを習得することを目指しています。保護者も一緒に練習している様子などが、感想として記されています。5 つ目に PTA 研修部が作成したユンヌフトゥバかるたがあります。80 首の中には日常会話や

親、祖先の教え、だじゃれなど、ユンヌフトゥバを通して学びたいものや残したいものが、バランスよく盛り込まれています。

今年度はまた50首を選定し、上の句と下の句に分け、本格的なかるた遊びができるものにバージョンアップしています。作成委員会の会議の中でPTA役員たちを中心に、委員の保護者たちがユンヌフトゥバへの思いを深めていくことにも、私は大きな意義を感じております。このかるたはロビーに置いてあるので、ご覧ください。まだ、出来たてはやはやです。なお、各地域に1セットずつ差し上げたいと思っております。後ほどお配りしますので、どうぞお受け取りください。

6つ目に、先ほど紹介したユンヌフトゥバかるたの朗読CDです。これまでにあった朗読CDを、より使いやすく親しみやすくするために、今年度は作成し直しました。授業や給食時間に活用しています。「あつ、私のお父さんの声」だ、「誰々さんのお父さんの声だね」と、子供たちはうれしそうに聴いてくれています。7つ目に、学習を支える心強い存在の菊さんがいらっしゃいます。ユンヌフトゥバが話せない職員たちにとっては、なくてはならない存在です。

また常に子供たちを褒めて、温かく見守ってくださる存在です。今後は菊さん以外にも、人数を増やすことが課題です。8つ目に、学習発表会で披露している全校児童と職員による島唄や、伴奏の三味線、5年生のユンヌフトゥバ劇があります。保護者や地域の方々に、子供たちの学習の成果を披露することと、その子供たちの姿を通して、ユンヌフトゥバの大切さを共有し合う場だと考えています。

9つ目に、トートゥガナシのカードの掲示です。与論では「ありがとう」より、「トートゥガナシ」の方がなじみ深いです。そのため、子供たちにもしっかり身に付けさせたいと考え、校舎のあちこちに掲示をして、どんどん使うことを呼びかけています。10番目に、簡単な言葉を学校生活の中にも取り入れています。授業開始や終わりの際に、どの学年も号令として大きな声で教師とともに唱えています。11番目に、交通教室や避難訓練などの行事の際のあいさつも、全校でトートゥガナシを取り入れています。実際に地域社会の中で使っていくことで、当たり前言葉として子供たちの中に根付いてほしいと願っています。

12番目に、11月に行われている地域の高齢者の方々とふれあい交流会と、1月の授業参観時のユンヌフトゥバかるた大会があります。発音や言葉の違いを実感するとともに、子供たちと大事な話者である地域の大人とをつなぐ、大切な機会であると考えています。13番目に、今年度から使用している教育委員会作成の与論のことわざがあります。誠の心を学習の中で学ぶ、大切な資料となっております。

14番目に、デジタル教材があります。ユンヌフトゥバが話せない児童や、職員たちの授業を補助するために作成しました。写真をクリックすると音声が開けるようになっていて、グループ学習の中で、また授業外で子供たちが楽しく学べるようになっていました。15番目に、バイリンガル認定証というのがあります。全児童からユンヌフトゥバと共通語を見事に使いこなしているバイリンガルの人々を、家族や親戚、それから近所の大人たちの中から探して名前を挙げてもらい、全員に与論小学校からバイリンガル認定証を差し上げました。校長先生が作ってくださったんです。

現在約300名のリストが出来上がっています。子供たちがバイリンガルとして尊敬する

ことで、ユンヌフトゥバに対しての大人たちの意識が変わります。またリストアップを通して話者の実態把握ができるとともに、温存育成につながります。今後も随時リストアップは行っていきます。最後にこれまでの取り組みの成果と課題を述べます。1 つ、教育課程に位置付けたことにより、すべての子供にユンヌフトゥバ学習の時間が保証され、確実に話者が育っています。

2 つ、保護者や地域の方々のユンヌフトゥバに対する意識が高まり、かるたのバージョンアップをはじめとする、ユンヌフトゥバを残そうとする行動につながっています。3 つ、今後の大きな課題はゲストティーチャーを増やしていくことです。4 つ、学習を行う教師を支える教材の開発です。それから私が急遽勝手に 1 つ付け足します。昨日の伊奈かつぺいさんの講演でありました。面白おかしく、そして楽しく学べる工夫もしていきたいと思いました。まだまだ課題の多い与論小学校のユンヌフトゥバ学習ですが、「目指せトリリンガル」の合言葉のもと、地に足の着いた息の長い学習になるように、今後も楽しく学習に取り組んでいきたいと思います。以上で報告の方を終わります。ミッシークトートゥガナシ。

（菊） ありがとうございます。皆さん与論島は、本気で、40 年ほど前の与論島の状況は、子供から、幼稚園生ぐらいからお年寄りまでのほとんどの島民が、以前はバイリンガル状態でした。あの状態に本気で戻そうとしております。この言語の継承というのは時間との勝負があるものですから、ちんたらちんたらという、言葉は悪いですがけれども、これではなくなっていく方が早いです。活動して復興するのと、なくなるのとの勝負ですから、やっぱりここに集っていらっしゃる方々は方言継承の思いの強い方々ですので、全国 8 地域指定されましたけど、この 8 という数字、8 地域、そして八戸の方もおみえですね。

そしてこの八丈島の 60 周年記念というこの会場で、しかも昨日も言いましたけど、この 8 という照明の下でこうして同じ思いをする人たちが集まりましたので、このネットワークを今後も大事にして、この継承運動が全国でもっともっと広がって、各地の方言が残って日常生活で地域の人たちがバイリンガル生活できますように、今後とも手を携えていければと思っております。どうぞ皆さん、今後ともよろしくお願いします。ありがとうございました。（拍手）

（茂手木） どうもありがとうございました。与論小の先進的な活動の様子がよく分かりました。与論小は 10 時間とっているんですが、八丈島は今年から 3 時間です。その辺の違いはありますけれども、大いに学ぶところがあったように思います。

奄美大島

(茂手木) それでは次はお隣というか奄美大島、奄美語の方の発表に移らせてもらいます。やはりランクは危険というランクで八丈島と同じです。それでは奄美大島の方々をご紹介します。どうぞお入りください。それでは司会を変えます。

(保) はい、キュウヤ ウガミンショーラ。(拍手)

わきゃがり、くん八丈島ち、ゆでくんそし、ありがっさまありょーた。こんに。私たちが八丈島にお招きいただいて、ありがとうございます。くまや、むるひぐるさりょんばん、なきゃぬ、こうろぬ、いっちゃりょうてい、ひぐるさだか、とうでい、いきょうた。ここは大変寒く感じたんですが、皆さん方の温かいおもてなしで寒さも吹っ飛んでいきましたということでございます。それでは今から我々奄美大島のことについて発表いたしますが、まず木部先生に研究の発表をしてもらい、続いて我々は「シマユムタ伝える会」、ユムタとは言葉です。

島の言葉を伝える会ということで、後ほど会長の山田の方から経緯なんかの説明がありますが、そのメンバーの会計をしている鈴木るり子、この方から『桃太郎』の朗読、そして奄美の現状等々の説明を会長の山田と私が行います。よろしくお願いします。奄美大島といいますと、鹿児島から約350キロ、沖縄本島に300キロということで、ちょうどその中間にあります。言葉自体は、もう琉球圏に入ってきているんですが、与那国からすると、もうほとんど違っております。

広さは佐渡島に次いで2番目に大きなものが、奄美本島でございます。そういう中でちょうど温帯と亜熱帯の中間地ということでありまして、自然が豊です。希少動植物がたくさんおりまして、3年後には自然遺産登録に向けて今、準備中でございます。そういう中で産業といたしましたら、こちらは黄八丈がありますが、我々のところでは、奄美大島紬、今発表者の鈴木が着ている着物もそれですし、男性2人のネクタイも大島紬でできております。

黄八丈と違ってシャリンバイという木を染め、それから泥で染めていって、つやを出しているのが大島紬でございます。そういうのが我々島の特徴でございまして、今は産業としまして、ほかにはさとうきび等々がございます。それと観光業という形で生計を立てているのが現状でございます。そういうことをイメージしながら、今日は発表したいと思います。まず、木部先生の方からお願いします。

(木部) 木部です。それでは最初に簡単に奄美語の説明をいたします。奄美語といっても島がたくさんありますので、非常にバリエーションが多いんです。その話はまた後で山田先生の方からあると思いますが、私は『桃太郎』を使ってお話したいと思います。お手元の6ページのものは、山田先生の訳です。今日は、鈴木るり子さんに語っていただくので、ちょっとバージョンを変えました。山田さんと鈴木さんでもバリエーションがある

んです。今まで、与那国から始まって、先ほどの与論までは基本的には母音は3つというお話があったと思います。長く引き延ばす母音まで入れると5つ。だから日本語の「あいいうえお」とあまり変わりません。それが奄美に来ますと、突然、母音が増えます。これがとても難しくて、私にはとても発音できませんので鈴木さんに発音をしていただきます。『桃太郎』にも難しい母音がたくさんあるんですが、今はこの「流れてきました」というところを見ると、「ながりてい」と書いてあります。これは、私にはとても発音できませんので、後で鈴木さんに発音してもらいます。それから「拾って」というのを「ひらてい」と書いてあります。それからその下の「桃ぬ、た一ついちわりてい」というのがあります。ちょっと鈴木さん、この発音をお願いします。

(鈴木) ながりてい、ひらてい、た一ついちわりてい。

(木部) というような、つまり「い」でも「え」でもないような発音なんですね。これがとても難しくて、私もマネをするんですけど、なかなかオーケーが出ません。それからもう1つ、「おじいさん」をフッシュという、「おばあさん」をアンマというんですが、ちょっとその話は後に置いておいて、もう1つ母音が難しいというお話をします。

今、「ながりてい」という発音、これはだいたい共通語の「え」に対応します。日本語の「え」に対応するものなんですが、これはとても私には発音できません。「前」、それから南風のことを、「はえ」と言いますが、この発音はこういう発音です。ちょっと鈴木さん、発音してみてください。

(鈴木) むえ、むえ。ふえ、ふえ。

(木部) というような発音なんです。私は、日本で一番発音が難しい地域だと思います。この発音が同じ奄美でも、徳之島に行くと、また少し違ってきます。母音が多いという意味では徳之島も、やっぱり今のこの2つの難しい母音を持っています。

それからさっきお話しましたが、「おじいさん」のことはフッシュ、「おばあさん」のことはアンマと言います。「お父さん」はジュー、「お母さん」はアンマ。「お母さん」もアンマなんですね。アンマという言葉が「お母さん」を表したり、「おばあさん」を表したりするんです。私は、アンマというのは「お母さん」だと思っていましたら、ある地域に行くと「おばあさん」をアンマと言う。鈴木さんに後で読んでいただきますが、鈴木さんも「おばあさん」のことをアンマというとおっしゃっています。これが調べた結果の地図です。お母さんの意味でアンマを使うのは、この赤い丸の地域です。おばあさんの意味でアンマを使うのは、この黒の三角形の地域です。

どうしてこういうふうになるのか、非常に不思議です。「アンマ」と呼ばれたら、「はい」と返事をするのはどっちなのでしょうね。不思議に思うんですが、こういう特徴があります。それでは鈴木さんに読んでいただくということでよろしいですか。よろしく願いします。

(保) 資料の6ページをお願いします。

(鈴木) むかしむかし、あんとうろなんてい、フッシュとアンマがうりょーたんち。フッシュや、山かちけいーひれが、アンマやこうち、あれむんしがいきょうたんち。アンマがあれむんばしゅーたっとう、ほうがしらから、ふうさん桃のどんぶらこ、どんぶらこっち流れていちゃんち。アンマや、うん桃ばひろうてい、やーかち、むどうていもちゃんち。アンマが桃ば切ろうちすっぱや、うん桃の、た一ついち割れてい、なーらー、だいばんいんがぬくわあが生まれていちゃんち。フッシュとうアンマや、うんくわっち、桃太郎っちゅん名ば、ついったんち。(拍手)

(保) じゃあ、次は山田会長に、奄美の現状の報告をお願いします。

(山田) スカンマ、ウガミンショーラ。スカンマというのは朝です。ウガミンショーラは、こんにちはです。奄美は皆さん忘れないようにするために、黒と覚えてください、黒。奄美の黒ウサギ、奄美の黒豚、黒砂糖、黒ごま、黒づくめです。私も黒いです。だから島の顔といいます。私たちの島の自慢は、歌と踊りです。民謡日本一が、この 20 年で 5 人も出ました。鹿児島県から 5 人です。それが奄美から 5 人です。

北海道から沖縄まで 47 都道府県の中で、同じ都道府県から民謡日本一が 5 人も出ているのは、鹿児島だけなんです。それぐらい奄美の島唄は裏声が、裏声といっても後でちょっと披露しますけれども、変わっているんです。悲しい声なんです。いえ～いなんて、裏悲しいでしょう。これが評価をされて奄美の唄は素晴らしいということに、この 20 年でそうなっています。

今、小学生、中学生、高校生、民謡日本一の候補が、ずっと並んでいます。そのうちの 10 人、20 人になることは近い将来間違いないと思います。もう 1 つは踊りです。八月踊りといいますが、秋の実りの後、あるいは 9 月、集落をあげて輪になって踊りをします。これが八月踊りといいますが。その奄美の民謡、島唄と、八月踊りが私たちの奄美の誇りです。それはみんな方言でできているからです。

奄美の唄は 100 種ぐらい、3,000 曲ぐらいといわれていますけれども、その唄はもちろん教訓歌が多いんです。唄はみんな、うまく教えをしているんです。だから上の句に自然現象、下の句に人の道、これを子供たちに教えると、みんな道德教育につながるんです。そういう意味で奄美の民謡は宝だと、私たちは自慢をしているところです。

皆さん、昨日からの勉強の中で、琉球語といったら私たちの奄美も琉球語の仲間ですから、あいうえおの 5 母音のうちの、え母音と、お母音はないんです。だから外というのは、ストゥ、「お」は「う」に上がりますから、心はククルゥ、米はクムィ、雨はアムィと「え」は「い」に上がる、「お」は「う」に変化しますので、これは琉球語の特徴でもありますし、奄美もそのままでございます。だから奄美語をちょっと勉強なされると、漢字を当ててふりを付けますとすぐに分かります。外という字とストゥなんですから、心はククルですから、すぐ奄美語の上手な人になると思います。

後でちょっと紹介がありますが、私たちのこれから自然遺産登録の最も目玉は何だと思いますか。さっきの黒です。黒ウサギなんです。奄美の黒ウサギというのは、地球上で奄美大島にしかいないんです。耳の小さい黒ウサギは。それが不思議じゃありませんか。昔、大陸とつながっていたときのことなのか、考古学上も奄美が注目されているのは、

そのことです。方言では、民謡では北から、本土から流れてきたことも、あるいは南の方から沖縄を通じて上がってきたことも、奄美は真ん中ですから、その両方を持っているんです。特に万葉語、1000 年前、1200 年前の万葉語が奄美に残っているということで、木部先生なども大学でも奄美の方言は面白いと。

(保) 先生時間です。

(山田) 以上です。

(保) 話しだしたら長いんですから。残りも少なくなりましたが、我々の取り組み状況を簡単に説明します。我々は普及活動をしている中で、1 つは地域にある奄美 FM という放送局に、このメンバーを含めてシマユムタ会が週 1 回、当日 1 週間のニュースを要訳したものを方言で使って、後で 3 人でトークをするというのを毎週やっておりますので、まずその映像をお願いします。

<映像につきカット>

(保) これが日常というか、毎週ごとに取り組んでいる放送です。そのほかに、先ほどうちの会長が言われました島のゆしぐとう、俚言について毎日 1 個ずつ方言でしゃべっている、その解説もしております。時間もないようですので、先ほど会長から言った奄美の民謡をちょっと素人ですけど、披露させてもらうんですが、奄美の民謡は古い民謡と、最近はまだ新民謡という形で新しい民謡もありまして、これはもうだいたい標準語に近いもので歌っております。

そういうのをちょっと歌いたいと思いますが、まず私が今日は『桃太郎』の話が出ました。奄美には桃太郎伝説で喜界島があります。これは鬼ヶ島の喜界ということもいわれていまして、僧俊寛が流されたという話もあります。だから俊寛の墓もあります。その喜界島の歌を、ちょっと歌わせてもらいます。

「昔昔の、その大昔、桃太郎さんがイヌ、サル、キジを、ともに従え鬼征伐に渡った島によく似たような」というのがあります。拍手をありがとうございます。(拍手)

それでは本当の民謡を、鈴木の方から今日の雰囲気になさわしい内容のあれで、『ヨイスラ節』をご披露いたします。

<歌唱につきカット>

(保) 解説しますけれども、今日のあれです。今日のうれしさは、いつよりも勝っておりますと。いつも今日のようなことがあってほしいという、まさしくこの場の歌でございました。アリガサマリユータ。(拍手)

(茂手木) 奄美の方、本当にありがとうございました。(拍手)

どうもありがとうございました。奄美に行ったときに三線と裏声、ちゃんとここの耳に

残っています。三線がちょっと奄美は細いのかな。ばちが、ちょっと違うんですよね。高い音が出る、とても懐かしい響がありました。

アイヌ

(茂手木) 今度は一気に奄美から、ずっとずっとずっと北に行きます。北海道です。北海道のアイヌ語の発表になるんですが、アイヌ語は極めて危険というような、ユネスコの発表では、そういうランクになっています。アイヌの方から平取町というところから3人の方をお招きしておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。では、よろしくお願ひします。(拍手)

(萱野) 北海道の平取町からまいりました、萱野志朗と申します。この八丈島に来まして、本当はすごく暖かいのかなと思ひたんですけど、それほど暖かくないんだなと思ひました。それと実は昨日の懇親会で水野よし子さんという町議会議員(副議長)の方にちょっとお会ひしたんですけど、その方がなんと、今(客席の)正面にいらっしやいますけど、旦那さんが私の出身の町、平取町紫雲古津の出身の方だと聞きまして、同郷の方がいるということで、何かすごく親しみを覚えました。どうもありがとうございます。

Aynumosir Pipausikotan wa k=ek 萱野志朗(カヤノシロウ) sekor ku=rehe an。北海道の平取町二風谷(旧「ピパウシ村」)からまいりました、萱野志朗と申します。それでは関根さんに代わります。

(関根) irankarpte. yaunmosir Sisirmuka hontomo ta an kotan Nibutani wa k=ek 関根健司(セキネケンジ) sekor a=yep ku=ne uamkir=an na。北海道の沙流川というところがあるんです。日高地方なんですけど、そこの二風谷というコタン、コタンじゃないですね、二風谷という村からまいりました、関根健司と申します。よろしくお願ひします。(拍手)

うちの方はもうマイナスの世界なんですけど、とても風が強いのに僕はびっくりしてはいますが、でもとてもいい島だなと思ひています。よろしくお願ひします。

(萱野) それでは関根さんに『桃太郎』のアイヌ語訳をやっていただく前に、私がアイヌ語の特徴ということ、ちょっと書いておりますので、そちらをちょっと読ませていただきます。16 ページです。資料の 16 ページをちょっとお開きください。資料をそのまま読ませていただきます。アイヌ語の特徴ということで、私、萱野志朗、二風谷アイヌ資料館の館長、そして平取町二風谷アイヌ語教室の事務局長をやっております、萱野志朗と申します。動詞や名詞には、人称接辞を必ず付けなければならない。ただし3人称には付かない。

この人称接辞は、日本語と決定的に異なるものです。例えば私は水を飲むというのを表現すると、ワッカ ククとなります。「ク」は私という人称接辞であり、「ク」は何々を飲むという他動詞です。従って目的語プラス、人称接辞プラス、他動詞という構造になっています。君が水を飲むは、ワッカ エク。「エ」は君、お前という人称接辞ということにな

ります。仮にワッカ クという文章がある場合は、1 人称でも 2 人称でもなく、主語は 3 人称となります。私でも君でもない誰か、3 人称、彼、彼女が飲んでいるということになります。これがアイヌ語の特徴です。

もう 1 つ、手です。この手はアイヌ語でテケ、またはテケヘといいますが、私の手の場合はクテケヘと言います。話し相手の君の手という場合は、エテケヘと言います。私の手が痛い、クテケヘ アラカと言います。アイヌ語は口語として発達してきた結果、話し手が誰であるか、話し手が誰かはっきりしていないと文脈が分かりづらいということから、このような人称接辞が必要になったと思われます。

次、2 番目に行きますが、否定と禁止の語順が日本語とは異なる。例えばお酒、アルコール飲料一般を指す。飲んでではだめという言い方ですが、イテキ イクと言います。これはイテキというのは禁止です。イクというのは、アルコール類を飲むということです。これはもう日本語とは語順が逆になっています。だめ、飲むというふうになっています。次に私は食事を取りたくないという例文ですが、ソモ クイペルスイとなります。ソモは否定、クイペは人称接辞プラス自動詞、ルスイは助動詞というふうになっています。否定の語が最初に来て全体を否定しているので、これも日本語の語順とは異なっております。

3 番目になりますが、動詞は変化しない。英語のように現在形、過去形、過去分詞という変化は、アイヌ語にはありません。従って動詞の原形を 1 つ覚えておけば簡単です。さて、どのように時制を表すかといいますかと、明日であれば未来であり、昨日であれば過去となるということです。例文として、明日私は札幌に行きます。ニサッタ サッポロ ウン カラパ。これは明日私は札幌に行きます。カラパというのはローマ字を見ていただければ分かるんですが、クアラパ (ku=arpa) がちょっと縮まってカラパ (k=arpa) と発音されるんですけども、「私が行く」ということです。

2 番目。タント サッポロ ウン カラパ。今日私は札幌へ行くということですから、現在形と。ヌマン サッポロ ウン カラパ。昨日私は札幌へ行きましたということで、過去を表すということです。このアイヌ語というのは日本語とまったく異なる言語であります。ですから、日本の方言ではないんです。アイヌ語というのは、まったく違った言語です。一応アルタイ語圏ということで朝鮮語とか、そういう言葉に非常に近いと。また日本語にも近いと言われていますが、違った言語であるということは言えます。以上で特徴を解説させていただきました。それでは『桃太郎』の方をちょっと映写していただいて、いくつかの単語だけちょっと説明させていただきます。

7 ページをお開きください。ここでちょっと動詞だけ皆さんに説明します。この「アン」というやつですが、これは「いる」ということです。ですから、もし私がいると、クアン (ku=an) でカン (k=an) となるんですが、これがおばあさんとか、おじいさんが出ているので第 3 人称です。第 3 人称というのは、人称接辞が付きません。従って、アンという形になっております。あとエキムネ (ekimne) というのは、これは「山へ行く」ということです。

それとあと、これですね。このトゥイというのは、これは「切る」という単語です。これもおばあさんが切っているので人称接辞は付いていないと、このイキというのも「する」ということです。あとは、このアンというのも動詞です。これは『桃太郎』という名前を付けたという、何々であると。「ネ ルウェ ネ」となっていますが、ほかにもあるんです。

けれども、だいたい動詞というのは普通であれば1人称であれば「ク」、2人称であれば「エ」、第3人称は付かないということです。今回の『桃太郎』の場合は、人称接辞が付いていない状態のアイヌ語ということである言えます。それでは朗読をお願いします。

(関根) すみません、ローマ字表記しか書いていません。実際はカタカナ表記もよく使われるんです。でもアイヌ語の場合、日本語にない子音がわりとあって、そういうのを始めの「toop」という言葉ですね。あれの「p」を小文字で書くとか、そういう工夫をしてカタカナ表記もされています。じゃあ、読んでみます。

「toop teeta sine an kotan or ta ekasi an huci ruwe ne. ekasi kaykumata kusu ekimne huci ihuraye kusu pet or ta san. huci ihuraye kor an akusu pet penake wano poro momo pet kurka ta momnatara huci nea momo uk wa unit a hosipi. huci momo tuye noyne iki hi kusu momo yaykata tup ne perke wa onnay wa poro okkayo poyson an. ekasi huci nea poyson reko 桃太郎 ne ruwe ne. パクノネ」。(拍手)

(萱野) ちょっとお待ちください。今、PowerPointのデータを出します。それではちょっとアイヌ語の現状ということでお話をしたいんですけれども、この写真は私が館長を務めております、萱野茂二風谷アイヌ語資料館という建物であります。実はこの館は、1992年に開館いたしました。私の父・萱野茂という一人の人間が集めたアイヌ民具資料を収蔵している施設であります。これは2002年の2月に国の重要有形文化財に202点が指定されております。そして平取町立アイヌ文化博物館にも（指定を受けた）919点の資料がございまして、合わせて1,121点という資料が、国の重要有形文化財になっております。それでは次をお願いします。

これはタイトルですね。次をお願いします。この二風谷保育所がなぜ写っているかといいますと、実は私の父・萱野茂がアイヌ語を教えるために保育所を建てたいということで、地域の人たちと協力をして建てたんですね。次の写真をお願いします。これは1982年、昭和57年1月1日に建てられた保育所なんですけど、これは現在もきちんと保育所として運営されています。しかしこれを造ってアイヌ語をいざ教えようとする、当時の厚生省からアイヌ語を教えるはいかんということになりまして、近くに二風谷子ども図書館という私立の建物を建てて、そこでアイヌ語教育を始めたのが、実は（アイヌ語教育を始めたのが）初めてなんです。

これは二風谷の、私の住んでいる二風谷というところに造られた二風谷ダムというのがありますが、これもいろいろ事情はあるんですけど、現在もあるんですけども、当時は苫小牧の工業地帯に工業用水を送るために造ったということなんですけれども、実際は苫小牧地域にはそれほど工業用水を必要ではなくて、途中で建設目的を地水とか水力発電とか農業用水とか、あとは洪水調整ということで、現在も使われております。1993年から実際に動いています。すみません、次をお願いします。

これが実は二風谷小学校ということで、私の卒業した学校でもあります。次、お願いします。これはもう現在の学校ですが、私の父方と母方のおじいちゃん、そして私の父母、そして私、そして私の息子、娘と4代にわたって卒業した学校なんです。ですから130年ぐらい歴史がある学校です。実はこの学校が昭和52年ぐらいからなんですけれども統合し

て、この統合した跡の校舎を使って保育所にするというようなことを時の町長が言っていたんです。

先ほどお見せした保育所というのは、実はこの二風谷小学校を統合させまいということで、町長が約束した学校統合をすれば、その学校を再利用して保育所にするということを逆手に取って、じゃあ、保育所を先に造れば統合されないだろうということで、結果的に学校は統合されなかったんです。その結果、このようにすごくきれいな学校になったわけです。私が卒業したときは、もうちょっと小さかったんですけども、現在でも25人ぐらい小学生がいます。1年生から6年生までですけど。

少子化ということになってはいますが、比較的二風谷地域は子どもたちが多くて、保育所も小学校もあるということになっています。それでは次、お願いします。これが1983年、昭和58年に建てられた私立の子ども図書館です。この子ども図書館を建てたことによって、私の父・萱野茂が地元の小中学生を対象に、二風谷アイヌ語塾というのを始めたんです。それが昭和58年です。それから5年たった昭和62年に、当時の横路北海道知事が政策予算として予算付けをしたことによって、公費によってアイヌ語教室というのが始まりました。その結果、昭和62年、1987年からアイヌ語教室というのが始まりまして、現在もこの平取町というところでは、成人の部と子どもの部が行われております。次の写真をお願いします。

これが全景なんですけれども、こういう木造の建物です。しかし結構広いですから、人は30人以上、机といすを置いて入れる大きな建物なんですけど、そこでやっております。成人の部は月2回して、子どもの部は週1回アイヌ語を現在でも行っています。子どもの部の方は町の施設で生活館というのがあるんですけど、公民館のようなものなんですけれども、そこで関根健司さんが週1回、1時間半指導しています。大人の部の方は月2回、1回2時間、ですから月4時間だけやっているということです。

このアイヌ語ということについては、日本の方言ではないと、違った言語であると。そしてアイヌの場合は、日本の先住民族ということもきちんと国は認めていますので、先住民族という形で我々がどうやっていくかというのも、今後の課題であろうと思います。しかし沖縄の人たちも、私は先住民族であると実は思っているんです。近代国家が成立する時点において同意なく一方的に統合されて、人権が尊重されていない人々というのが、実は先住民族の定義なんです。

ですから、それを考えますと北海道のアイヌ、そして南の沖縄の人たちも私は先住民族であると思っています。一部の人は、もちろん先住民族だと主張しているんですけども、そういう意味で、この方言というくくりと、先住民族というのもちょっとリンクする部分がありますので、この八丈島で皆さんにお会いして、その先住民族というキーワードで、また連携できればよろしいかなということを考えています。それでは子どもの部の方の関根さんに、現状のお話をさせていただきたいと思います。

（関根） それでは現在の活動について、説明させていただきたいと思います。子どものアイヌ語教室というのは週に1回、夕方の6時から7時半、平日行っております。来ているのは、だいたい二風谷という地区なんですけど、その子どもたちで10人前後とか、それこそ来るのは別に月謝とかないですから、僕たちは萱野茂さんの時代から町の事業とい

うことで、講師料を1回6,000円ぐらいですか、いただいているんです。子どもたちは自由に来れるんですけど、楽しみながら来ている感じだと思います。

やっていることは昨日も余興でやらせていただいたんですけど、僕がギターを弾いてアイヌ語の歌を2~3曲まず歌って、あとは紙芝居みたいなやつがあるんです。紙芝居なんだけど、本当に昔のおばあちゃんが語った短い物語をアイヌ語だけで言うと。何回も言っていたら3カ月ぐらいで覚えちゃうんですよね。3分、4分とかのお話ならアイヌ語で全部言えるし、その都度意味も日本語で言ったりしていますし、あとはほかの地域の方とも同じだと思います。

かるたをやったりとか、あとはカードを使って動詞のかるたですとか、これをしながらこれをするとか、そういうことをやったりして、1時間半しかないんで、わりとあっという間に過ぎて、でも僕のやりようで毎週ありますから、もっともっとアイヌ語の力が付くかもしれないし、1週間に1回1時間半やってアイヌ語をしゃべれるようにはならないです。ならないですけど、ゆくゆくアイヌ語をずっと続けていきたいと思ってもらえるようになっているんです。

僕が今、一番力を入れてやっているのは大人対象というか、平取アイヌ協会の青年部というのがありまして、30代、40代を対象に去年ですか、マオリの言語復興についてニュージーランドの方にも研修に行ったんです。そこで教えていただいたテアタランギ法というのがありまして、それは何というか僕にとって画期的で、なんせ言葉で説明しないです。向こうの人は英語で説明しない、始めからマオリ語しか使わないんです。使うものといったらブロック、色の違う10種類のブロックだけを使って、それでもう始めから全部言葉を先生がマオリ語だけ、マオリ語というか、始めは本当に少ない言葉から始めるんですけど、それを毎回続けると。

向こうの人たちが言うには、全然しゃべれない人も2~3年すればしゃべれるようになるんだみたいな感じなんですよね。それをグループでやっていると、地域でやっているんです。そういう方によく言われるのは、コミュニティーから復興しなければいけないと。アイヌ語は実際、年配の方とかもしゃべれないんです。本当に資料はたくさん残っています。でも、それをどういうふうに日常生活で復活させていくかというのが僕たちの課題でして、そのテアタランギ法なら楽しんで1時間ぐらいですけど、まったくアイヌ語しか使わないと。

だから僕がタンペ ヘマンタ アンと言うんですね。「これは何だ」って、分からないことを一生懸命して、タンペ フレ ニラシ ネ、これは赤い棒ですという、1人2役をずっとやったりして、タンペ ヘマンタ アンというのが、「これは何ですか」という意味だと分かってもらおうと。1レッスンには7つぐらいしか言葉は進められない、教えられないんですけど、紙に書いたりしたら書いたことで安心しちゃうみたいなものがあると思うんですけど、それなら本当分からなきゃいけないと。1回分かったかいとやって、分かったとなったら、みんなでロールプレイをするんです。だから自分でもしゃべると。

しゃべることに重点を置いているんです。しゃべれるようになると、それを目指して比較的若いグループでやっているんです。その輪を広げていきたいと、僕は思っています。ほかにもたくさん興味を持っていただいている人はいますし、ほかのグループも作って、いずれは僕の生徒役でやっている人にも先生になってもらってみたい、草の根運動的な

感じでそれをやっていこうと思っています。

あとは何をしゃべればいいのでしょうか。アイヌ文化振興法というのができまして、それによって我々がやっている大人のアイヌ語、子どものアイヌ語以外にも親子のアイヌ語とか、上級者のアイヌ語とか、事業的にはいろいろあるんですけど、やっぱりコミュニティーからというか、家の中からもなるべく使うようにすると。生きたアイヌ語を復活させるために、やっぱりすごいオタクっぽいというか、アイヌ語がすごいできる人はいるんです。突出してできる人は、ぱらぱらといいますけど、その人たちがいなくなったらやっぱりおしまいだと。

そうしたら、みんながしゃべれるようになるという、二風谷に行ったら取りあえずアイヌ語をしゃべっているよと、そういうふうになるようにというのを目標にしてやっております。そんなもんですかね。ありがとうございます。(拍手)

(茂手木) どうもありがとうございました。普段私たちが聞いたことがないアイヌ語、それとともに貴重なお話だったと思っております。向こうはまだまだというか、これから本格的な雪が降って、僕もお電話をしたときに今、雪が降っていますよと言っていました。こちらはそのとき 17～18 度ありました。相当違う環境のところから来ていただいて、本当にありがとうございました。(拍手)

八丈島

(茂手木) それでは今日の発表の最後になります、わいら(我等)が八丈島です。よろしくお願いします。八丈はちょっとお招きじゃなくて、たくさんの方が出演しますので、楽しんでください。よろしくお願いします。それでは司会を代わりまして、めならべ(女童)がやります。元女童かもしれません。(拍手)

(川上) 元女童のミス八丈と言えればいいかのう。おとといにひっ変わって、また我等が司会しいたそわ。川上絢子でおじゃろわ。(拍手)

(吉森) 同じく、吉森豊美です。けーは、こげえいたそわの一、体ん気を付けてよー。

(拍手)

(川上) そいじゃあ、早速始めいたそかのう。用意はいいだろうか。最初は八丈語の特徴を、おなじみの千葉大の金田章宏先生に、おねげえしいたそわ。金田先生、優一しくみじーかく話してたもうれよ。そうしんないと、ひっかつぶろんて。

(金田) 千葉大学の金田です。よろしくお願いします。(拍手)

黄八丈のネクタイです。今朝教育課長に借りまして、今年2度目のネクタイです。教育課長のお母さんが後で『桃太郎』をやっていたかく方で、その方のだんなさんの弟さんのところの工房で織ったものです。昨日、伊奈かっぺいさんがおっしゃっていましたけれども、東京都の八丈が入っていたからうんぬんというお話、あれはたぶんかなりその可能性がありまして、発表のときの新聞、朝日の夕刊に載ったんですが、1面のあれを覚えていらっしゃるでしょうか。夕刊のトップです、八丈語。八丈語だけじゃなくて、その後にクエスチョンマークが付いていました。「八丈語？」という。何で八丈なのみたいな、そこで注目されて、その後いろいろな活動が盛んになる元になったと思います。それで、かっぺいさんは？

(茂手木) 今、ここにいないんですよ。

(金田) そうですか。非常に残念ですね。私の妹が仙台にいますけど、「週末八丈にかっぺいさんがいらっしゃいますよ」と言ったら、「えー、サインをもらっておいて」と言われていたんですが、非常に残念です。

八丈語の特徴について、簡単にご説明したいと思うんですが、17ページをご覧ください。八丈語が注目されている一番の理由は、万葉集の東歌、防人歌というのがありますけれども、そこに見られる方言的な特徴を非常に色濃く伝えている。奈良時代の奈良と奈良時代

の関東周辺とを比べたら、もちろん関東周辺の方というのは、奈良中央に対する田舎、田舎も田舎、ど田舎なわけですね。

中央よりも周辺の方が古い特徴を残している可能性があるわけですが、そうした場合、奈良よりも当時の関東の方が、より古い言葉が残っている可能性がある。つまり日本語の中で一番古い、奈良時代の奈良よりも古い、日本語の中で一番古い特徴が残っている可能性があるわけです。そういうところが評価されて八丈語ということになっているんだと思います。どういうところかと言いますと、特にこの3番目の文法の特徴というところですよ。

後で『桃太郎』のところでも出てくるんですが、8ページの『桃太郎』のところの1行目の、「あるところ」というところが、「あるところ」になっています。あと、一番下の行の「桃太郎という」というところが「桃太郎てよ」となっています。この2つがいわゆる動詞の連体形というんですが、万葉集では降る雪というのが、ふろよき（雪）になっていますが、「ふろ」なんですね。そういう特徴が共通しています。「という」のところが「よ」になっていますけれども、これは「いう」が「いお」になって、「いお」が「いよ」に変化したものです。

あともう1つ、『桃太郎』の真ん中あたりに「大きな桃」というのがありますが、この「大きな」というところが、「ぼうけ」。これは「大き」というのが「大け」に変わって、「ぼうけ」になっているんですが、この形容詞の連体形です。赤い花だったら古代語では「赤き花」となるところが、「赤け花」になる。そういうふうな特徴が、まさに万葉集の東歌、防人歌の特徴と同じなんですね。

あと琉球語もそうですけれども、係り結びがあるとか、そういうところが非常に古い特徴です。あと、八丈は5地区ありますけれども、青ヶ島を入れて6地区といってもいいんですが、ほとんど文法的には同じなんです。違うのは長い母音、長母音とか二重母音とか、そういうところが地区ごとに違いまして、そういう発音を聞くと、あー、この人はだいたいあのあたりの人だなというのが分かります。ですけれども、文法的には非常に共通しているものですから、琉球の方みたいに道が1本違えばとか、もちろん島が違えば文法も違うというようなことはありませんので、そういう意味では保存継承のやりやすいところかなという気はします。

2番目の語彙の特徴ですけれども、八丈では人も物も「いる」を使わずに、「ある」だけです。これは西の方では和歌山の一部あたりがそうなんですけれども、人も物も「ある」だけというのは、非常に古い特徴だと思います。あとはお読みください。ありがとうございました。（拍手）

それでは『桃太郎』を読んでいただきます。私がいつも泊まっている民宿のおかみです。25年間お世話になっています。

（川上） それでは、先生の話に出とうことを、つぶりに浮かべながら『桃太郎』八丈語版を聞いてたもうれよ。そして、語り手は中之郷のガーデン荘のおばちゃんこと、福田榮子さんです。榮子ばあ、よろしく願いしいたそわよ。

（福田） ちんごけ孫に読んで聞かせるように話します。

むかしむかし、あろところん、おうさまとばっぱがあらっていや。おうさまは、やみゃあ、くそわあかりい、ばっぱは、かやあ、洗濯しに行かっていや。ばっぱが洗濯して洗っていにゃあやあ、こわーのうえんだから、ぼうけ桃がどんぶらこ、どんぶらこって流れてきとあだら。ばっぱは、その桃を拾って、いーきやーらっていや、ばっぱが桃を切ろうがんしゃーすと、桃が2つにぶっちゃかれて、なかじからぼうけおのこごの子が生まれとあどあーじゃ。おうさまとばっぱは、その子ん、桃太郎ってよ、なみゃーえを付けたっていや（拍手）

（吉森） 榮子さんどうもありがとうございます。榮子さんの話は分かりやったかの一、面白こおじやらの一。では次は加茂川会の民謡です。説明は、沖山操さんをお願いいたします。よろしくお願いします。

（沖山） イモメとテガメ。テガ（手鋏）とけんこーしと一サトイモが、テガンほってくりけえされ、負けて人にかまれ、やがて世に出てふんとなる昔話を、てーこの音にさそおうれて、うたに合わせて踊ろどうが、皆さんもどうしん楽しんでたもうーりやれよー。（拍手）

<演奏につきカット>

（川上） おかげさまでした。次はの、島のロベ切り職人の喜田さんでおじゃりいたそわ。毎日の、つぶりにはちまきをしとって一、ロベの葉っぱをの、チョキンチョキン、貯金貯金って切っとな金もうけしておじゃりいたそわ。そうしとっての、ロベを切りながらの一、八丈方言ばかり毎日しゃべったろうで、国言葉を話すことができいたしずん。喜田さんは自分が話すと、長一くなろーんて、「時間が来た一ばおしえと一よー」っておっしゃったろわ。じゃあ、喜田さん、早く、ごらごら出ておじゃれ。

（喜田） どうも。大勢来ておじゃってたもうりいたして、本当にありがとうございます。ただいま紹介を受けました喜田孝と申します。さっきも言いましたが、名前が2つあります。本名は喜田孝です。ロベが安いもんで、昼間の演芸、夜の演芸に稼ぐので、芸名を付けてきました。芸名は、ロベキリカマタロウといいます。カマキリじゃないですよ。聞き違いないように、カマキリと、カマタロウの聞き違い。あんでこけえ（ここへ）、あれ、先生が呼ぼうたかというのと、何年か前に30代ぐらいのときに大島先生、教授であれ、今はまるんだそうですが、あの人八丈の方言はとても古いと、離島では一番古いと言われ、何でお前は島言葉をしょけどうと。それは、わけえのばんまが、3人もいました。またとしより（年寄）じいが1人いました。それで、ばんまがほとこで育って、その自然に覚えたみいがく（耳学）ちゅうのか、体が覚えた現地語でございます。それで共通語はとても難しくて、僕はしゃべれません。現地語でないと。そういうことで、けーは、時間もちょっと短すぎて、しゃべって明日の朝までも止まりませんが、この辺で八丈の言葉のつづいた民謡とショメ節と、うなってみます。喜田節でございます。十人十色でございますが、何かと。

<歌唱・・・ててんくんくん>

ててんくんくん ててんくーんくーん しただみーつぶつぷーい
わがなーいほーがなー うしょくみー出とーがなーい
しん流れかーしたんのーなーい
ほらー によこめー出てみろい なかめー出てみろなー
てごめー出てみろよーい
なっけじゃー あだんしょどーなー ととー なっけじゃのー
うしょがなっけじゃのー によこーい
しただみつぶつぷ ててんくんくん

(喜田) またショメ節も、ショメショメでございますが、喜田節のショメショメで、ショメ節というのは一節に歌え、ながめないで歌えという昔のいうことですが、ショメ節のショメショメという囃子詞は、昔調味料がないときに塩と梅とあんばい（塩梅）をつけたのが非常によかったという話でもあるが、また海水の潮、潮と潮の戦いのしょめ（潮目）の中。潮目と言っても分かるかなー。それでショメ節がショメショメと。またそれでは 1 つ、喜田節で歌います。

<歌唱・・・ショメ節>

・嫁ーとるだらな ぼうけ人をとりやれとーえ 二百十日のかざよけになーい
・わがなばんまは とんめてーに起きて 囲炉裏端でな
おやりひねりだーらー

(喜田) まだしゃべる時間があるかのう。あるっていか、あんまりしゃべってもものう、どんごしゃべりばかりで、まあ、しょうがなっけがさー。まあ、けー、こぜい（小勢）どうじゃあ。やっぱり宣伝が悪かったかのう。タイムス、喜田孝って付ければ結構来たかも分かりならんねえど、やっぱりこー宣伝が悪かったかのう。まあ、そういうことで、遠くからおじゃってたもうて、本当にありがとうございました。喜田節でございますが、この辺で終わりにします。どうも。（拍手）

(吉森) 喜田さん、おかげさまでした。次は今回の若手、八丈高校の1年生に話してもらわよ。トンネルを抜けるとそこは檜立、という地域の出身だろうが、この若さでふるさとの思いを語るということは素晴らしいことだと思います。では笹本拓也君、お願いします。（拍手）

(笹本) 皆さん、こんにち。私は八丈高等学校1年の笹本拓也です。今日は八丈島にお集まりいただき、ありがとうございます。私は檜立という地区に住んでいます。方言サミットということで島言葉、また八丈島にかかわる話をしていきたいと思います。

本当はさ、茂手木先生から頼まれてさ、何かしゃべれって言われたんだけど、わいより方言のうまけ人はいっぱいいるだろうが、頼まれたからには頑張っってしゃべってみろわのう。

私は八丈島で生まれ育ちました。檜立のおじいちゃん、おばあちゃんは島言葉を使うので、島言葉を聞く機会がありました。例えばある朝の、おばあさん A、B の方の会話を檜立の方言で話すと、「どきーおじゃりやろー、ひいちい、みんなかろうじゃあ（どこへお出掛けですか、久しく見なかったですね）。そがんだらう（そうですね）。おみゃーは、まん あにしておじゃろー（あなたは、今、何してるんですか）。わらまにや、くすうがこもりをしたあろじゃあ（私は今は、4 女の子守をしていますよ）。そがんだっしやで、よくおじゃろじゃ（それは元気でいいですね）。ちごおわ、そがんじゃおじゃりんなきや、あんまりうれしくなっけだら ひざかぶらはやめるし あったもかったもだら（違いますよ、それがあまり元気ではないんですよ。ひざは痛いし、どうにもこうにもならないんですよ）」というような会話が話されています。

話は変わって、私は毎年檜立地区で行われる演芸会で、みつもり劇団という島言葉を使った劇をやる演目があり、見たり演者として出たりしているので、島言葉で話されても、あまり違和感はありません。ただ自分自身、いきなり島言葉で話してくださいと言われても、話せるわけでもありません。私が通っていた三原中学校では、昨年度島言葉に関する取り組みをしました。例えば八丈の民話を島言葉で読んだり、島ことばかるたで遊んだりしました。また意見発表会という行事があり、発表の内容を地域の人に聞きながら方言に直して、発表も行いました。

このように八丈では島言葉を継承する取り組みがなされています。ただ方言だと、その言葉を言うときのイントネーションや、言葉の区切り方がよく分からなくて、難しく感じました。

私は生まれ育った八丈島が、とても好きです。特にずっと住んでいる檜立地区が大好きです。八丈島にはいろいろな文化が残っていて、檜立踊りや、シヨメ節などの踊りがあり、盆踊りのときには自分も地域の人と踊ったりして、とても楽しいです。

私は島言葉が話されても、あまり違和感はないと言いましたが、それは日ごろ自分の地区や島で行うイベントで、地域の人と交流をしているからだと思います。あくまで島言葉を覚えるために参加するのではなく、地域の人たちとの触れ合いの中で自然と言葉が継承されていくのが一番だと思っています。八丈島には地域の人と触れ合ういろいろなイベントや行事があり、それをこれからも大事にしていきたいと思っています。きいは遠くから、えらあおじゃってたもうて、おかげさま。これで発表を終わります。ありがとうございます。（拍手）

（川上） 笹本君、おかげさまよー。それでは最後にの、教育委員会の林先生に八丈語の継承の取り組みと、課題を話してもらいたいそわ。よろしくおねげえします。

（林） 八丈町教育委員会の林です。時間があまりありませんので、かいつまんで報告をしたいと思います。先ほど金田先生も言われたんですが、八丈島で方言の普及、継承をやっていくということで始まった原因というのは、ユネスコが 2009 年 2 月 19 日に発表しまして、それを朝日新聞の夕刊に載せた、そこが発端だったわけです。八丈方言については先ほどからありましたけども、昔から着目されていた言語でありまして、研究者の方もたくさん明治ぐらいから、例えば江戸時代から着目された面があったと思うんですけれども、

そういうことでかなり研究者の方も来島されておりました。

島の中でもそれなりに意識を持っていたらっしゃる方がいて、本を出されたり辞典みたいなものを作られたり、そういうことが行われてきた。つまり大学の研究者とか、それから地元の有志の方で一定の関心があったと思っていますが、島民全体のものにはなかなかないなと思っていました。それが新聞に出たことによりまして、町議会でも取り上げられましたし、町としてもそれを契機に継承、普及の活動を始めたということになります。

ちょうど私と茂手木さんは教員を退職しまして、その次の4月から取り組みが始まったということになるわけです。具体的な活動につきましては、お配りしています資料集の一番最後のところにページが振っていないのがあると思うんですが、そこに載っております。主な点を言いますと、学校その他における方言劇の活動です。学校でもやっていますし、かぶつというシニア劇団もあります。それからかるたや紙芝居などを作りまして、かるた大会を実施したりしております。

それから年1回以上島民向けの方言の講演会等を、国研さんのご協力も得ながら行ったりしてきました。さらに平成24年度から学校でカリキュラムの中に取り入れてやっていこうということで、取り組みを始めております。これはやっぱり一番問題になっているのは、50代以下ぐらいの方たちがほとんど使わないし、あるいは使えないし、関心もあまりないという実態にありますので、逆に学校を起爆剤にして取り組みを広げていった方がいいのではないかという発想から始めたわけです。

今年度、平成26年度は小中学校の全学年で、年間3時間以上取り組みをしてほしいということで、カリキュラム化を進めております。たぶん教育委員会が主導で学校現場で組織的に取り組んでいるというのは、全国的には珍しいのではないと思っています。それが単純にいいというわけにいかない面もあると思うんですが、そのように思っております。ただ学校現場はやっぱり離島ですので、大東京の中の離島ですので、教員の転勤が激しい、若い教員が多いということがあって、なかなか取り組むのが難しいという実態があります。ただ、お年寄りなんかの協力を得ながら取り組んでできています。

課題に移りますけれども、やはりあちらこちらで言われていると思うんですが、やっぱり方言を日常的に使う、そういう場を多くしていくことが必要だと思っています。今、今週の島ことばという、紙に印刷したものを学校とか保育園とか出張所とか温泉とかに張っているんですけども、そういったものを印刷して週1回張り出したりしています。いろんなところに、ふんだんに島言葉があふれるような状況を作り出していきたいと思っていますし、高齢者の演芸大会みたいなものがあるんですが、できればショメ節を使った創作発表みたいなものをやったらどうかと考えている面もあります。

それから学校の取り組みなんですけれども、学芸会で方言劇を協力いただいてやっているんですが、これは大変にいいことだと思っているんですね。やっぱり口でただしゃべるだけじゃなくて、体全体を使って行いますので。それからお年寄りの話を聞かないと、方言に直したりできないということもありますし、しゃべることもできないということで、これはかなりいいかなと思っています。ただやっぱり年間何時間かやるとなると、そのためのグッズとか、文法のテキストみたいなものを作っていないと無理かなと。そこはまだ完全にできていないと思っています。

最後にですけれども、八丈は小さな島なんですが5地域ありまして微妙に違います。やっぱり地域の方は自分たちの方言にすごく愛着を持っているので、いいことなんですけど、それが逆に「それは違う」とか、そういうことを言う面があるんですね。学芸会で方言劇をやると、「そのせりふは違うだろう」ということがあったりするので、おおらかな心で、みんなで助け合って広げていくような運動にしていかなきゃならないじゃないかと思っています。

やっぱり地道に一步一步積み上げていくしかないので、そういう意味で頑張っていきたいと思っています。以上で報告を終わります。(拍手)

(川上) 以上で八丈島の発表を終わりいたそわ。あだんでおじゃっただろ。あだんでしたかー。最後まで聞いてたもって、おかげさまー。わーらの、めんなに会えて、うれーしからー。めんなー、おもうんてよー。あばよーい。

(茂手木) どうもありがとうございました。思いは伝わりましたか。以上で昨日からの地域の発表を終了します。ここで10分間休憩をいたします。開始は11時05分です。最初に八戸の榎谷さんのお話があります。よろしくお願いします。それからこのホールの入り口のホワイエに各地域のグッズ、チラシとか、そういうのがありますので、ぜひご覧になってください。それでは11時5分ですので、またこの会場にお座りください。よろしくお願いします。終了いたします。

八戸

(司会) それでは再開します。昨年南部弁の日というのが決まりまして、今年2回目ですが、この間、12月6日に終わったばかりですが、八戸の榎谷伸夫さんがいらしております。

榎谷さんは、その中心になった方です。それでは、榎谷さんをご紹介します。どうぞ。

(榎谷) 宮沢賢治『雨ニモマケズ』「雨^{なづ}っこさも負けねで、風^{かじエ}っこさも負けねで、雪^{ゆぎ}さも、夏^{なつ}のぬぐみさも負けね、じょんぶだもがらよ持ち、欲^{よぐ}アなぐ、どっただごどアあってもえへっこつけねで、いつもすずがっこに笑っている、1日に玄米4号ど、みそどわん つかの青菜よ喰^なって、何もかも自分のごどよ勘定さ入れねで、よぐ見で、聞いで、分がって、して、忘れねで、のっばらの松^{まつ}の林の陰のちゃっこいかやぶぎの小屋さいで、東さ、病気の童子^{わらし}アいだら、行ってみでやって、西さ、ぐなっとなったあやいだら、行ッてその稲の束よしょって、南さ、死にそった人アいだら、行ッておっかながらなくてもいいどへって、北さ、けんかだの訴訟だのがあれば、ギアねえすけやめなせエどへってやる、日照りの時^{とき}アめつろよ流して、しばれだ夏^{なづ}はおろがろおろがろ歩いで、みんながらほんつけなすど呼ばれ、ほめられもしねエす、苦にもされねエ、そったらものさ、おらアなりてエなあ。」(拍手)

教育委員会の林さん、茂手木さん、そして僕とテェゴ、テェゴなんですよ。分かりますか。分かるんですか。3人とも昭和23年生まれ。メールでやりとりしていて、僕は、実際のところ30歳ぐらいかなと思ったんですけどね。会ってびっくりしちゃいました。まず最初に、桃太郎くずれのへんてこりんな南部昔コを聞いてください。

よくたがりばさまがへをたれだ。むが〜し、むがし、あるどごさ、ままちゃどばさまアいだったず。ままちゃ山さ柴刈りに行きあんした。ばさまア川^{せんたぐ}さ洗濯^{せんたく}に行きあんした。ばさまア川で洗濯してらっきやなす、上の方がらどんぶらこっこどんぶらこど流れできたものアありあんすんだ。何^{なに}ア流れできたと思ひあんす？モモ^{はちのへ}？八戸^{はちのへ}アモモア流れでこねんだ。

いや、瓜ア流れでくれば瓜こ姫、白い犬っこア流れでくれば、ひしこ汁の話。鳥かごさ、スズメっこア入っていれば舌きりスズメ。今、流れでききたのアなす、で～ったらだイモア流れできた。いやア、うまそったイモだ。ばさまア、「ん、これよ家^えさ持っていって蒸かして、ままちゃど半分こして喰^くウびや」と思った。さ、家^えさ持っていって蒸かしてエ～。いややや、いいかまりっこアしてきてえ、ばさまの腹の虫アグ～と鳴った。「や、ままちゃア何時^{いつ}戻ってくるんだが。いや～、したら半分にして自分の分だけ喰^くうびや」って、流し^{ほいじよ}さ行^いって包丁よ持^もってきて、半分にして、さ、自分の分よバグバグバグバグ喰^くった。そ^けごで止めでおげばえがった。まんだ腹ア減^けってらったもえ。「ヘッヘヘヘ……、ままちゃアまんだ戻^{わげ}って来ねえ。よ～し、ままちゃの分まで喰^くエ」これよよくたがりどへる訳だ。さあ、ままちゃの分まで食^くったもんだすけバヂア当^あだったんだ。腹^{はら}アバ～ンと張^はってえ、とうとうで～ったらだ屁^はよ、バ～ン!! とぶっ放^{はな}した。いや、そのかまりのひどいごどひどいごど。鼻^{はな}ア曲^まがりそったあんばいだ。そのばさまのたれだ屁^はのかまりっこアえ、風^{かじえ}さ乗^のさって、山で柴刈^{しばかり}りよしていだままちゃのどごろまで届^といだんでエ。したすけ、ほれ、ままちゃ、柴刈^{しばかり}らないで、くさかったずもえ。って、分^{ぶん}がりあんしたがなア～? (拍手)

7年前に林家木久扇さんがNHKの取材で八戸に来ました。60年前、小学校1年の時に、疎開で八戸市内の中心街にある柏崎小学校へ来たそうです。ところが半年しかいれなかった。もう南部弁がひどくて、何を言っているのか全然分からない。僕はもうこんな所になんかいられないと、東京へ逃げて、空襲に遭った訳なんです。その懐かしい南部弁・八戸弁をもう一度聞きたいということで、その柏崎小学校を訪ねたんですけど、誰一人、誰一人ですよ、南部弁を話せる子どもがいなかったんです。これじゃア番組にならないということで、あわてて湊の市場に行^いってイサバのカッチャに、それから農村部へ行^いって農作業中のおばあさんたちに取材し、教員をやっていた僕の所へも来て、「枉谷先生、なまって授業をしてください」ということで、源頼朝の単元を南部弁で変な雰囲気^{ふんいき}でやったんですよ。

その夜、木久扇さんが、「これはもう八戸のアイデンティティーがないですよ。ただそこに存在しているだけで、八戸らしさが何もないです。これは大変なことですよ」と言われたことをきっかけに、いろいろなことを少しずつやり始めた訳です。僕は八戸童話会という口演・語りの会に入っています。今年で91年目、すごいですね。主な活動は、中心街の新羅神社の境内で、朝5時半から7時まで、夏休みの最初の1週間やる「森のおとぎ会」というお話会です。40年前は500～600人集まったんですが、少子化の最近^{さいきん}は200人弱といたところでしょうか。普通の童話もありますが、会員の何人かは南部昔^{むかし}コを語り続けています。会員の中で南部昔^{むかし}コを語るのは5割ぐらいいでしょうか。とにかく、今の子どもたちに南部弁で語られる南部昔^{むかし}コを語り続けようと思っています。

また、木久扇さんの話じゃなんですが、大人も含めて、もう少し南部弁を盛り上げていかなければということで、「母^かっちゃ、腹^じア減った。爺^じっちゃの仏壇が？」で始まる、お母さんと子供さんの会話を中心にした『おもしろ南部講座』という番組を八戸のコミュニティーFMに持っています。今年15年目、4000回を越えました。あと、青森県全体には、エフエム青森で『腹いっぱい笑うびや南部の昔コ』という番組などで、南部弁発信をどんどんやっています。

南部昔コは100個あると98個は楽しいです。というのは、ご存知だと思いますが、夏の季節風やませの所為で八戸は飢饉に襲われました。江戸時代は毎年のように、5年に一度は大飢饉でした。貧しかったんですね。ですから、大人たちは、子供たちに温かい・楽しいお話をしてあげたんだと思います。勿論、中には悲しいお話もあるんですよ。

昔コの語り手を増やそうということで、昨年から「南部昔コ語り部養成講座」というのをやっています。毎年、100人ぐらいが受講しています。その中から、先程の「南部弁の日」のイベントに出演してもらっています。

あと、津波のことも話したかったんですが、もう時間がないですね。八戸もひどかったです。現在、被災地の1つ、南部弁の南限である釜石の語り部の方々と交流を計っています。「南部弁の日」に八戸に来てもらいました。で、2月1日には僕たちが釜石に行って、南部昔コを語ることにしています。青森、岩手、宮城、福島と、津波の被災地の方々と、こういう形で絆が築けていければいいですね。

方言も昔コもどんどん消えつつあります。文化庁さんは、それを残そうと、一生懸命を手を差し伸べてくれています。僕らは助かっています。難しいとは思いますが。沖縄の方々の自分たちの言語に対する取り組みに感銘を受けました。僕らは方言ですが、言語の危機、同じように方言の危機も意識しつつ、頑張っていきたいと思います。どうもありがとうございました。

(拍手)

雨にも負けず 宮沢賢治

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも
夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだをもち
慾はなく
決して怒らず
いつも静かに笑っている
一日に玄米四合と
味噌と少しの野菜を食べ
あらゆることを
自分を勘定に入れずに
よく見聞きし分かり
そして忘れず
野原の松の林の陰の
小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気の子供あれば
行って看病してやり
西に疲れた母あれば
行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば
行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば
行ってつまらないからやめろといい
日照りの時は涙を流し
寒さの夏はおろおろ歩き
みんなにでくのぼーと呼ばれ
褒められもせず
苦にもされず
そういうものに
わたしはなりたい

雨っこさも負けねで
かじえ
風 っこさも負けねで
ゆぎ
雪さも
なづ
夏のぬぐみさも負けねえ
じょんぶ
丈夫だもがらよ持ち
よぐ
欲アなく
どったらだごどアあってもえへこつけねで
いっつもすずがっこに笑っている
いちにち
一日に玄米四合ど
味噌どわんつかのあおなよ喰って
なんもかも
自分のごどよ勘定さ入れねで
よぐ見で 聞いで 分がって
して 忘れねで
のつばら まづ
野原の松の林の陰の
ちや
小っこい萱ぶぎの小屋さいで
わらし
東さ病気の童子アいだら
行って看病してやって
西さぐな〜となったあやいだら
行ってその稲の束しよよ背負ってやり
南さ死にそった人アいだら
行っておっかながなくてもいいどへって
北さ喧嘩だの訴訟だのがあれば
行って、ぎやねエすけやめなせどへってやり
とぎ
日照りの時アメツロよ流して
なづ
しばれだ夏はおろがろおろがろ歩いで
みんながらほんつけなしど呼ばれ
褒められもしねえし
苦にもされねえ
そったらものさ
オラ（ワ）アなりてエ（なア）

日本民話 『桃太郎』南部弁バージョン

むかし むかし あるところに
おじいさんと おばあさんが ありました。
おじいさんは 山へ しばかりに
おばあさんは 川へ せんたくにいきました。
た。
おばあさんが せんたくを していると
川上から おおきなももが
どんぶらこ どんぶらこと
ながれて きました。
おあばさんは そのももを ひろって
うちへ かえりました。
おばあさんが ももを きろうとすると
ももが ふたつに われて
中から 大きな 男の子が
うまれました。
おじいさんと おばあさんは その子に
ももたろうという 名をつけました。

(以下 略)

むが〜し むがし あるどごさ
じさまど ばさまァ いたったず〜。
じさまァ 山さ しばかりに
ばさまァ 川さ せんたぐにいったずおん。
ばさまァ せんたぐよ していだっきや
^{かみ}上の方がら で〜ったらだももァ
どんぶらこっこ どんぶらこど
ながれで きたずもな。
ばさまァ そのももよ ひろって
^え家さ もどったずおん。
ばさまが ももよ きるびやどしたっきや
ナ
ももァ ふたつに われで
^{なが}中がら ^お大っきだしねエ ^{おどご}男わらしァ
うまれだずもえ〜。
じさまど ばさまァ そのわらしさ
ももたろうず ^{なめえ}名前っこよつけだずおな。

(以下 略)

パネルディスカッション

(司会) それでは、今日のイベントの最後になりますが、パネルディスカッションに入りたいと思います。今日この会場にも高齢者の方がたくさんおられるんですが、このパネルディスカッションはあえて 40 歳代、若いですね、40 歳代の人に登壇してもらってお話を伺います。若い人がどのようにこれから継承していこうと、そういう考えや話を中心になるかと思います。よろしくお願いします。それでは司会が替わりまして、国立国語研究所の木部暢子さんをお願いいたします。よろしくお願いします。それからパネラーの方、どうぞお入りください。(拍手)

(木部) じゃあ、よろしくお願いします。(拍手) それでは、全員 40 代ということで司会も 40 代ということに、今日だけさせていただきたいと思います(笑)。ここまで 8 地域のかた、それから、東北の八戸のかたにお話を伺いました。これからの大きなテーマはどうやって地域の言葉を伝承するか、どうやって子供たちに伝え、子供たちだけでなく、地域に広げるかということですが、最初に、このシンポジウムから壇に立つ新顔のかたもいらっしゃると思いますので、自己紹介と今やっている活動を、簡単にお話しいただければと思います。じゃあ、こちらからいきますか。渡辺さん。

(渡辺) こんにちは。私は八丈島で生まれて高校生まで八丈におりました。7 年前に横浜からユーターンをして住んでいます。2 年前に息子の三原小学校が方言の研究指定校になりまして、そこで保護者として島言葉の取り組みにかかわってきたのがきっかけで、たぶん今日声を掛けていただいたと思います。最初はちょっと荷が重いのでとお断りしたんですけども、私の同世代ですとか先輩方がいろいろなサッカーとかバレーボール、いろいろな地域のことで頑張っている同世代の仲間もいますし、あと、さっき高校生の拓ちゃんも発表していましたけど、同じ地域で中高生もやっぱりすごく、地域のためにとって頑張っているの、私もできることがあればと思って今日参加することにいたしました。

最初消極的な気持ちで、2 年間島の学校と一緒にやってきたときに、島言葉は残らないんじゃないかというちょっと消極的な気持ちが正直あって、頑張っ取り組みはしてきたんですけど、前向きになりきれないところが正直ありましたが、伊奈かつぺいさんの楽しくという話とか、昨日今日各地域の取り組みを聞いて、歌や踊りや誇りを持ってやっていらっしゃるのを見て、私も恥ずかしいじゃなくて頑張っやってみたいなという気持ちに、この 2 日間でだけでも気持ちが変わったので、このつながりを閉ざさないようにして、力を合わせていきたいなと思いました。今日はよろしくお願いします。(拍手)

(岩下) あらためましてこんにちは。与論小学校で1年生を担当しています岩下です。先ほども報告させていただいたんですが、私は28年ぶりに帰ってきてうれしかったんですが、1年目はものすごいショックでした。担任する目の前の子供たちが、与論の言葉をしゃべれないんですよ。うわあと思って、本当にめげました。そこから何とか立ち上がって、幸いなことに学習の計画などがありましたので、より所として今そこに心血を注いでいる状況です。先ほどもいろいろやっていることも報告したのですが、皆さんの報告とかを聞きながら、頑張ろうという気になりました。「目指せ、トリリンガル」、そこをもう大事に。あとまた、とにかく使う環境づくりですね。シャワーを降らせるということに、今一生懸命活動をしております。

また、実際調べて先ほども言いました、バイリンガル認定者をリストアップしたときに、30代でばっちり話せるという人が2桁にのぼったんですよ。10人以上いるかな。ゼロじゃないかな？ と思ったら、30代でも10人以上上がってきましたので、これからもっと発掘すれば与論島は本当は話せるバイリンガルが、いっぱいいるんじゃないかと思って、これからは頑張ろうかなと思っています。今日のこのパネルディスカッションでいろいろ学んで、持ち帰りたいなと思っています。よろしくお願いします。(拍手)

(関根) イランカラプテ。先ほどもお話しさせていただきました。北海道は広いんですけど、唯一私が住んでいます二風谷というところだけ、アイヌの人口がマジョリティーだと。ほかのところはやっぱり日本人、和人の方の方が多いんですけど、そういう地域からやってまいりました。アイヌ語講師と言っていますけど、もちろんそれで飯は食べませんから、普段は山に行ってチェーンソーを持って木を切っているんですよ。それ以外の時間でアイヌ語の活動をしております。実は僕はアイヌではなくて、嫁がアイヌで僕の父親が奄美大島出身でして、奄美の方にもお会いしたりできて、今回大変うれしく思っております。よろしくお願いします。(拍手)

(平良) はいさい、ぐすーよー ちゅー うがなびら。わんねー 沖縄県ぬ平良真やいびーん。ゆたさるぐとう うにげー さびら。今、沖縄本島の中南部の代表的な言葉で、「皆さんこんにちは、沖縄県の平良真です。よろしくお願いします」、自己紹介させていただきました。

まず、沖縄県の言葉は、方言とか琉球諸語とかウチナーグチとか色々な言い方があります。沖縄県のスタンスとしては、しまくとぅばとは、方言等の総称として使っております。なぜかという、ユネスコでは、昔から使われてきた言葉で地域を区切ったため、琉球諸語とか方言とかの表現で分類されているからです。

南北大東島も、沖縄県です。ユネスコでは、南北大東島は、八丈語の分類で区切られています。

また、ウチナーグチとかいった場合には、宮古島や石垣島の方々は、「みやーく うつとか

やえやまむに一と言ひ、ウチナーグチとは言わないよ」と言われます。そういった理由で、しまくとうばで統一しています。その中で、なぜ今しまくとうばの普及継承なのかということですが、9月18日、く(9)とうば(18)で、ごろ合わせではあるんですけど、平成18年の3月にしまくとうばの日の条例を制定しております。

ただ、その当時、表記をどうするかとかで、なかなか普及継承が進みませんでした。しかし、昨年からは、まずは話すことから始めるべきだよねと。もし、しまくとうばを使わないで、諸先輩方、話者の方々がいなくなった時には、しまくとうば自体が無くなっているかもしれないと。

沖縄県では、沖縄芝居とか組踊等、琉球文化の基層となるものがしまくとうばと考えています。先輩方がいなくなった時に、話者の記録等も無く、しまくとうばが消滅してしまうと琉球文化も衰退するのではと危惧しています。

今、普及継承しなければいつやるのということ形で、取り組んでいるところです。昨日も伊奈かつぺいさんのお話でもあったように、県としても楽しく面白く普及継承をしようと思っております。

お笑い芸人の方々、沖縄芝居等のイベント開催など、老若男女、みんなで楽しめるような普及継承の取組を行っているところです。

しかし、県だけで普及継承しても、普及継承は出来ません。各地域の皆さんの力が必要であり企業や県民が、一体となってやらないと普及継承はできないのです。県は黒子でいいと思います。県も県民と一体となって頑張っていけないといけないし、横の連携も強くしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。(拍手)

(木部) はい。皆さんそれぞれの立場で、渡辺さんは保護者の立場、岩下さんは教諭、関根さんはアイヌ語講師、平良さんは文化振興課という、いろいろな立場で参加しています。昔だったら、生まれて家庭でまず聞くのは方言だった、それで方言を知らず知らずのうちに覚えたんだと思いますが、今はなかなか、子供さんが家庭で方言を自然に覚えていくということが少ない環境になってきました。そうしたときに、じゃあ、家庭以外のところで教えよう、どうにかして方言を子供たちに伝えようという活動をなさっている方の代表がここにいます。

大きくはとも2つ、家庭でできないとすると、学校教育でやろうよという立場ですね。それが岩下さんと、平良さん。それと学校以外のところで、例えば、学校が終わったあとに、子供たちを集めて教えようとか、あるいは保護者の立場で子供たちの方言の習得のために何かをやろうというのが関根さんと渡辺さん。大きく2つ分けられると思うんですね。最初に、学校の方からいきますかね。

じゃあ、岩下さん、報告にもありましたけれども、与論小学校はとても取り組みが進んでいると思うんですが、そのときに苦勞なされた点と、でも今やっぱこれ困っているよねとか、そういうことも含めて学校現場の話を、もう少ししていただけるとありがたいん

ですが、どうでしょう。

(岩下) はい。じゃあ、いっぱいあるんですけど挙げればきりがないので、特に私がこの部分が大きいなと思ったところをお話しします。3つお話します。まず、やっぱり言葉が地域によって違うということですね。私は隣の茶花小出身なんです。保護者の中には、もう1つの那間小学校出身者もいます。だから、いろいろな地域の人が保護者として入っているので、いろいろな言葉があって、学校で教えるときに、「ちょっと違う」、「いやあ、その発音は。」とか、そういう抵抗が保護者の中にありました。そこを1つに束ねていく部分というのは、やっぱり難しいなと、今回のかるた作りを通して思いました。

2つ目が、やっぱり島外からの移住者ですね。うちは教員住宅とかもありますので教員の子供たちもいます。「バイリンガルを探せ」のときも「1人もいません」という回答をする子供たちがいるので、その子供たちにユンヌフトゥバを学習する意義、やっぱりそこをきちんと持っておかないと、広げられないなと思いました。

3つ目に、一番大きいのは子供たちに話し掛けていない大人たち。3世代のところでもじいちゃんばあちゃんとお父さんお母さんは、お互いにユンヌフトゥバをしゃべるんですけど、この2つが子供に面したときには、共通語でしか話し掛けられないんですよ。ああ、そこが大きいなって思いました。

(木部) じゃあ、平良さん。教育で何か感じていることを。

(平良) まず、教育で感じていることをお話しする前に、沖縄県の取組についてお話しします。現在、県では、しまくとうば普及推進事業を行っています。事業を推進する前に、しまくとうばの普及状況を把握しようと、県が初めて意識調査を行いました。その中で、意外だったことが、10代の若者たちが5割以上、20代も7割以上、全体的には8割以上の方々が、しまくとうばに親しみを持っているという結果が出ました。

一方で、話せる程度を聞いたところ、話せるという人が、全体の5割程度の58%という数値が形~~で~~出ました。その内訳を見ると70、60代以上がほとんどを占めていて、10代以上が5%以下と、数字的にも若年層ほど話せないという結果が浮き彫りになりました。また、普及継承の方法を訪ねると学校の総合学習などでの実施が望ましいという声が多々ありました。

学校現場もしかりですが、やはり家庭の中でも、しまくとうばを使うことが必要かと思っています。先ほど岩下さんがおっしゃったように、家庭の中で親御さんが話し掛けて、子供たちからの発信など、その中で受け答えができる形ができれば、学校も含めて、普及継承するには一番いい形~~の~~かと個人的には思っております。

(木部) ありがとうございます。今、学校の持っている役割が大きいという話がありま

した。でも、学校でも、今おっしゃったように、その地域の出身でない子もいるんですね。その子たちにどの方言を教えるかという問題が、1 つありました。それについて何か、岩下さんでも、それから平良さんでも。

(平良) その点に関して、ここに登壇している皆さんで話し合ったんですが、沖縄本島でいえば東西 1,000 キロ、南北に 400 キロある中で、文化も違うし言葉も違う。両親が、それぞれ異なる地域の出身で、両親の出身地とは異なる地域に移住や生まれ育った子供たちにとっては、両親の出身地ではないしまくとうばを学ぶ。自分たちが普及継承している立場ではありますが、何かエゴがあるなど。思いませんか。子供に押し付けている感というか、子供たちは、このしまくとうばを学ぶべきだとか親たちの、大人たちのエゴが出てきているんじゃないかと、ふと考える自分がいます。

子供たち目線に立って、そこは親がどこの出身であろうが、例えば親が、北部、宮古であろうが、子供が好きな地域のしまくとうばを選ぶのであれば、その地域のしまくとうばでいいんだよ。子供たちに選択肢を与えてもいいのかなと、思っているところです。

(木部) 私たちがよかれと思っていることが、本当に子供たちにとっていいのか、ということ、私たち自身、ちょっと反省してみなきゃいけないですね。岩下さんは、例えばクラスにいろいろな地域の子がいたときに、どういうふうに教えてらっしゃいますか。

(岩下) 子供たち以前に私の問題でした。学習する中で、その学習指導案や単語カードがありますが、私は隣の校区なので、教えるときにやっぱり発音が微妙に違うんですよ。だからもう、いろいろあるんだよと教えています。「みんな違って当たり前」がうちの学級のスローガンなので(笑)。「みんな違ってみんないいよ」をモットーに、カードで教えて菊さんに発音してもらってます。その後に「でもね、私はこう言うの。こういうユヌフトゥバもあるんだよ。」という感じで教えています。ですから、そこの対策としてやっぱり各家庭、そこで引き継ぐ、そこが一番大事じゃないかなって思いました。去年から音読カードというのを実施しています。そのカードに付けているプリントには、ことわざとか、あとユヌフトゥバかるたの文言も全部付けているんですけど、学校では基本この形で学びますが、各家庭の言葉に直して、そこで練習してくださいとお願いしています。

親も必死になるんですよ、そうしたら。しゃべれないと教えられないので。そういうところで保護者の方から、あの音読カードがよかったって言ってもらっています。そんなふうに各家庭で学ぶというふうに帰しています。あとまた、さっきもちょっと出ましたけど移住者、つながりがない子たちも実態調査で上がってききましたので、地域の大人たちとつながることで、ごく身近なところのユヌフトゥバを学んでいくというスタンスに、もうばっ

(木部) 授業で方言を取り上げて、今度は子供に家庭に帰って考えてもらう。例えば関根さんは、アイヌ語を子供たちに教えてらっしゃるんだけど、アイヌ語学習の場から、

家庭に帰ってその子たちはやっぱり、こんなことを習ったよとか、親たちとコミュニケーションをすることはあるんでしょうか。

(関根) そうですね、聞く話ではやっぱり家でアイヌ語をしゃべるんだ、アイヌ語の歌を歌うんだというのはあるんですよね。実際状況はといたら、親が分からないんですよね。そういう状況の中で僕なりの課題だなと思っているのは、いかに親たちもこの運動に巻き込むか。いつでも誰に対してもオープンなんですよ、僕がやっているアイヌ語教室というのは。だから、やっている間の時間、保護者の方は送ってきて迎えに来るという方がほとんどなんですけど、その人たちにもできれば同じ時間を共有していただいて、同じようにやるとか。さらに、さっき言ったようなテ・アタアランギ法という、アイヌ語だけの学習とかを親もやってもらってとか。いかに普段の生活でアイヌ語を使ってもらうか、分かる言葉はアイヌ語でというのを、家庭の中からやってもらうということが、普及につながる鍵だと思っています。

(木部) とってもいいことを伺いました。学校はやっぱりきっかけであって、それは子供が家に帰って、今度は子供が下から上に、親とのコミュニケーションの中でこんなことを習ったよ、だけど、先生が言ったのとどうも違うかもしれないから、自分で考えてみよう。という循環が生まれるかもしれないという可能性があるかなと思います。保護者として渡辺さん、実際、今、お子さんが学校で方言を習ってきて、家庭でそんな話で盛り上がるというようなことはあるんでしょうかね。

(渡辺) 2年前に小学校で取り組みを始めて、しゃべらなかった言葉をしゃべるということがあります。例えば、この前ニット帽をかぶったら、夫はおばさんみたいだよと言ったけど、息子は◇かやしきやって◇言ってくれて(笑)。そう。それでふと出るつもりがないところで、島言葉が出てきたりするというのがあるので。あとは自分から、地域の人に声を掛けられることはたくさんあっても、子供の方からおじいちゃんおばあちゃんに話し掛けるということが少なかったけれども、学校で取り組みでかかわったおかげで交流が増えているので、島言葉に触れる機会が増えているというのはあるんですが、家庭で取り組めるかという、私は聞いて分かるけれども話せないの、話してと言われれば片言、変な島言葉になってしまうけど、話せるかもしれないですが。

どう取り組んでいけばいいのか、しなければならぬみたいな、今。島言葉を覚えなきゃいけないという感じが、ちょっと今のところあるような感じがするので。

(木部) それはお子さんが？

(渡辺) 何となく雰囲気、八丈島で。残さなきゃいけない、しゃべらなきゃいけないみ

たいなところがあるので、与論島の楽しくというところを、どういうふうに八丈島でヒントにして、家庭で話しにくい 40 代 30 代のお母さんが、しゃべれないのをどうしゃべったらいいのかというところは、やっぱり八丈島がそういう島言葉ムーブメントが起きないと、盛り上がっていかないと、お母さん方もちょっとやりづらいかなという感じがします。

(木部) そうですね、子供たちは小学校で地域の言葉に触れても、今度はお父さんお母さん、30 代ですか。40 代？ その年代の人たちは学校に来なさいというわけにはいかないので (笑)。そこのところは岩下さん、与論の場合はまだ 40 代でも方言は大丈夫ですか。

(岩下) そうですね。わりと大丈夫です。私の世代は中学校時代に、「ユンヌフトゥバは大事だよ」って、世の流れにちょっと逆行した形で、「大事だよ、じいちゃんばあちゃんの生きざまを聞きなさい」と言う先生がいらっしゃったので、私を挟んで上下 2 つ 3 つの世代はやっぱり、意識がちょっと変わって、同窓会をすればみんなユンヌフトゥバでしゃべっています。私は半分ぐらいしかしゃべれないので、劣等感を持つぐらいになっていますね。30 代の後半の人たちも、ある程度はしゃべれているので、そこをどう掘り起こすか。だから、音読カードを使うとやっぱり一生懸命親たちが習うので、そんな感じでちょっとでも。

また、子供たちが「トートゥガナシ」とか、いただきますを「タバーラリュンドー」と言うと、やっぱりうれしい気持ちになるんですよ。私も学級でもうにこっとなります。その雰囲気では子供たちは、「ああ、ユンヌフトゥバをしゃべるっていいんだな」って。その空気をやっぱりつくりたい。今おっしゃったように覚えなきゃいけないじゃなくて、そこを楽しむというところ、そこがすごくポイントかなというのをまた、志保さんの言葉を聞きながら思い直しました。

(木部) 昨日の伊奈かっぺいさんの講演は本当に楽しくて、やっぱり楽しんでやるというのは大事だなと思いました。その辺は、例えば関根さんは、昨日のレセプションでも非常に楽しい、ああ、こういうやり方をしたら子供たちは楽しいだろうなというような、とってもお上手な教え方をしてらっしゃるなと思ったんですが、何か工夫はありますか。

(関根) そうですね、僕自体毎日が試行錯誤ですからね。でも、やっぱり初めは板書してノートに書いてとか、そういうことを試したりしたんですよ。でも、子供ってすごく正直なんですね、すごい眠たい顔になっちゃうんですよ、すぐに (笑)。だから、これはだめだなとなりまして、でも、ギターを弾いてとか、楽しくそれを心掛けています。

(木部) 例えば教育側で、平良さんの場合、教材はとっても立派な教材を作っておられますが、楽しく子供たちに地域の言葉に接してもらうという、工夫みたいなのは何か？

(平良) 参考資料という形で副読本を、全県の小学校 5 年生と中学校 2 年生に作成し配布予定です。しまくとうばは、文字で書いていてもアクセントとかそれぞれ地域で異なるので、耳でも聞けるように CD 付きで、5 地域の北部、中・南部、宮古、八重山、与那国地域の代表的なしまくとうばで掲載する予定です。児童生徒にも、耳で聞けてこういうことなんだ、アクセントもこういうことなんだと音で理解してもらえよう、工夫しています。

ただ、先ほどから「楽しく」というキーワードが出ていますが、子供達にも楽しく学んでいけるように普及できればと思っています。

また、メディアも有効活用したいなと個人的に思っていて、新聞、今日はマスコミさんも沖縄から駆けつけて来ていますが、毎週日曜日にもうちなあタイムスというタイトルで、しまくとうばの特集をしています。

先程も話題に出ていましたが、メディアで全国的にしまくとうばを広めたきっかけがNHKの『ちゅらさん』でした。

昔は流行ったと思いますがその当時、本土の方々はゴーヤーを、ニガウリだったんですね。覚えていますかね。『ちゅらさん』のゴーヤーマンが流行ることで、本土の方々も、ニガウリをゴーヤーと呼ぶようになったり、あと、沖縄では、ご当地キャラでマブヤーというのがあります。映画版も出ていますが、小さい子から、メーゴーサーとかクーバーとか言っていて遊んでいます。メーゴーサーは、げんこつ、クーバーというのはクモのことなんですけどね。最初は、意味は分からなくていいと思います。

そのしまくとうばが、耳に残り後々、意味を分かってもらえればと、と思っています。

(木部) そうですね、メディアももう今は本当に、いろいろ活用できる、いい時代になりましたね。それで、渡辺さんはやっぱりちょっとプレッシャーがまだありますか (笑)。それを払拭する方法を皆さん、渡辺さんにアドバイスしてあげてください。渡辺さんは、方言は聞けば分かるけれども、自分ではすらすら出てこないという状態ですね。そういう方は多いと思います。たぶん日本全国。与論は特別だと思いますね、親の世代でもすらすら出てくるというのは。アイヌ語は 40 代の方はまったく知らないし話せない。そういう方は、アイヌ語をしゃべりましょうよとか、八丈語を話しましょうよといっても、プレッシャーを感じる。子供から、「お母さん、これ習ったけど、どうなの？」と聞かれたら、プレッシャーを感じる。40 代の、方言が、地域の言葉が話せないお母さんのプレッシャーをどうやったら取り除いてあげられるか。何かいいアドバイスはありませんか。

(平良) 自分も 40 代ですけど、先輩方が話す内容は、何となく文脈では分かっている、話すことができないというのが現実です。個人的に思うことは、今と、昔のしまくとうばを話したら罰する方言札とかがあった先輩たちの時代とは、区別すべきだと思います。現

在は、しまくとうばを使うのがかっこいいとか、三線を弾いたり文化を習うことがかっこいいと思う、時代になってきたのかなと。

そういう時代であるからこそ、自分自身がしまくとうば等を習おうと思うきっかけづくりにもなるし、子供たちにも積極的に地域の文化にも触れさせてあげたいと、親としては思うところですね。

(木部) かっこいいんですね、方言、地域の言葉、あるいはアイヌ語をしゃべることが。昔は本当にだめだって、そんな言葉をしゃべったらだめだと言われたんだけど、それが話せることがかっこいいというのは、時代が変わったなという気がします。アイヌ語もやっぱり、子供たちは自分が話せるようになったら、ほかの子よりもかっこいいと思っているという部分はあるんでしょうかね。

(関根) そうですね、そういう状況に来ていると思いますね。だんだん、アイヌ語をしゃべることがかっこいいってなるように。やっぱり、それこそできたころはアイヌ語教室に行きますと、こそこそ行くという感じがあったらしいんですけど、今は全然そんなことはないですし、しゃべれることがかっこいいという状況になっていると思いますね。

(木部) 岩下さんは何か、渡辺さんのプレッシャーを取り除いてあげるにはどうすればいいか、ありませんか。

(岩下) やっぱり私がすごく心掛けてるのは、私は半分ぐらいしかしゃべれないんですよ。だけど、やっぱり使ってみる。使わないと次の課題とか見えてこないし。やっぱり与論でも敬語が難しいからということで二の足を踏んじゃう。これはどこでも同じだと思うんですよ。ですよ。だけど、今、菊さんもおっしゃるんですけど、そこを使ったときに「間違っているよ」じゃなくて、まず、「使えたね、使ってくれてありがとう。ここはこういうふうに言うといいよ」という感じで、そういう受け止める側のところも、ちょっとつくりたいねというのを言っているんです。私もそこを信じて、もう共通語と半分半分なんですけど、使って、分からないときは共通語にして。でも、そんな中でも、「あら？ 私は共通語とユンヌフトゥバと2つ使い分けてかっこいいわ」と、まず自分をほめる(笑)。

まず自分がと思いながら、やっぱり使っていくことでしかできないのかなって思います。知っている単語をつなぎつなぎ、間に共通語を入れながらも、確実に私自身も使えるユンヌフトゥバというのが、域が広がってきたように感じています。母としゃべるときに母が本当にほころんだ顔をするんですよ、私がユンヌフトゥバで話し掛けると。やっぱりそこは話さないと得られない部分なので、やっぱりまず自分自身かなと思っているところですね。

(関根) 例えば島言葉だけで、友達同士で今から島言葉でしゃべろうってなったらどうなるんですか。無口になっちゃうんですか。

(渡辺) 自分のことを我というんですけど、メールでも我しか使ってないです(笑)。だから、会話でもたぶんしゃべろうとしてくれる友達だったら、しゃべれるかもしれませんが、混ざっていると思います。

(関根) 何かやっぱりお互いが優しくというか、取りあえずしゃべることが素晴らしいという空気をつくってね、しゃべるとするのがいいですね。

(渡辺) でも、ちょっと自宅は島言葉がいっぱいあるので、両親もそうなので、地域の人も島言葉なので、じゃあ、私もしゃべります。まずそこから。

(関根) いいですね、お願いします。

(渡辺) しゃべってみます。

(木部) 少し晴れましたか。

(渡辺) 晴れました(笑)。

(木部) 大事なのは使って間違ふこと。子供たちもそうだし、若いお母さんも間違ふた使い方をするというのは当たり前ですね。言葉を学ぶときは間違いを繰り返しながら習得していくわけだから。外国語習得もそうですよね。重要なのは、これまでの発表でも何人かおっしゃいましたけれども、間違ふたのをこれは違うよとか、これ間違っているよ、うちの地域はこんなふうには言わないよとかいうふうに批判することはやめなきゃいけないということ、私たち自身も、という気がしますね。

でも、どうしても人って自分の価値観が、言葉って価値観が染み付いているので、違ったら違うよって言いたくなるんだけど、違ふと思ったら、違ふよ、私のところはこうだよって、自分で自分の言葉を書く。それを教えてあげれば、いいんじゃないかなと思うんですけどね。

あと、子供たちに楽しくやってもらう方法、メディアを使うとかギターを使うとか、試行錯誤の段階ですけど、ほかに何か工夫してらっしゃることはありますか。

(平良) 先ほども、若者がしまくとうばをしゃべれないという結果が出てきたということをお話しさせていただきましたが、沖縄県では、若者を主にターゲットにした、しま

くとうば検定というアプリを作成しました。アトランダムに問題が出てきて、楽しくしまくとうばが学べる仕組みとなっています。

(関根) 僕たちも何でもやるんですよ、それこそ節操なしというんですかね。お手本はやっぱり英語教材とか何でも。キクタンとかってあるんですよ、そのアイヌ語版をつくってみたりとか、僕たちもラジオ体操をアイヌ語でやってみたりとか。これはいいかもしれないってなったら、何でもやるという姿勢でやっているの、楽しい教材はいろいろできていると思います。

(岩下) やっぱり楽しさの中に基本をしっかり押さえとくということも、大事なかなと思います。より所となるもの。昨日、八丈中学校の先生から言われました。与論は与論語大辞典、菊千代さんが作ってくださった、大きな辞典があるんですよ。私たちが分からないとき、かるたを作るときも、うちの校長先生が一生懸命めくってあの言葉はここにあるって言いながら使いました。もうそれがすごく楽しかったんですけども、やっぱり本当により所となるもの1つあれば、また教育活動も広がるということです。2つ目、教育活動なんです、総合的な学習で今うちでしていることがあります。ユヌフトゥバ学習ということに絞らずに、小学3年生が昔の暮らしを振り返る、社会科の学習がそうになっているんですけども、そこに祖父母の生き方を調べて、生き方物語という絵本を作るんですよ。

するとやはり、そこで子供たちがおばあちゃんおじいちゃんに聞き取りをしますから、その中で必然的に歴史や生き方、文化、そしてユヌフトゥバが入ってくるんですよ。そこでやっぱり間接的に学んで、そこでまた調べ学習をして、まとめるときに分からなければ、与論町史とか辞典とか、そこで教師も、私もなんですけど、調べつつしっかり固めていくということも大事です。あとまた、今おっしゃったんですけど、やっぱり最先端のものも利用する、スマホとかあいう子供目線でいくと、飛びつきやすいものってありますよ。あんなのもやっぱり活用するということで、今度できたユヌフトゥバかるたも裏に皆さん、QRコードというのが付いています。そこをスマホで検索すると、保護者の吹き込んだ音声流れますので、そこでまた子供たちは飛びついて、当ててみようかな、みたいな感じで楽しくできるんじゃないかなと思います。ですから、最先端も利用しつつというところ、とってもいいんじゃないかなと思いました。

(木部) 渡辺さんのところも、おじいちゃんおばあちゃんはいらっしゃるんですよ？ そうしたら、何か言葉だけじゃなくて、さっきの生活全体、それをお子さんと一緒におじいちゃんおばあちゃんに聞く。そうするといいかもしれませんね。ご家庭でおじいちゃんおばあちゃんとの会話とかいうのは、それは方言が出てくるんでしょうかね。どうですか。

(渡辺) 今実際に息子と父と母と島言葉というのは、子供からは出ないですが父たちは島言葉で話し掛けているので、やっぱり理解はもしかしたらしているかもしれないですね。

(本部) やっぱりできるだけたくさん耳で聞く、それから目で見るということは重要ですね。それから方言辞書。これは本当に大切です。辞書が作られている地域と作られていない地域とあって、これは私たち研究する者がきちんと取り組まなきゃいけないことだと思っていますので、協力関係をつくって、できるだけいろいろな地域のいろいろな辞書を作っていきたいと思います。

もう最後、そろそろまとめなんですが、やっぱり子供たちは理屈じゃなくて、楽しければ学んでくれますね。私はよく、どうして消滅しそうな言葉を残さなきゃいけないんですか、なんて聞かれるんです。いろいろところで。方言は温かいからとか、いろいろ言いますけれども、子供たちはそんな、なぜ覚えなきゃいけないかなんて、考えてないのかもしれないですね。

でも、私たち大人は、一步立ち止まって、なぜ子供たちに地域の言葉を使ってほしいと思うのか、そして子供たちが使うことによってずっと後世まで、消滅しないで残したいと思っているのか。そこは子供ではない 40 代の私たちは、今日私は 40 代ですので (笑)、ちょっと考えとかなきゃいけないなと思っているんです。さっき平良さんが言ったように、押し付けであってはいけないとは思うんですけどね。

それについて、もし皆さん方が「どうしてそんな消えそうな言語を？ これはしょうがないじゃないですか。どうしてそんな一生懸命残すんですか」って言われたら、どういうふうにお答えになりますか。

(平良) 確かに大変難しい課題だとは思いますが、各地域では色々な伝統、文化があると思います。先ほども言ったように、しまくとぅばは、字ごとに異なるため生まれ育ってきた地域の言葉を大切にしましょうというスタンスで、沖縄県では普及継承をしています。

しまというの島というイメージじゃなくて、字とか部落ということで考えています。しまごとで、エイサーも全然違うし旗頭も全然違うし、そういった中で、青年会とかが頑張って地域を盛り上げています。だから、子供たちが青年会のお兄ちゃんたちがかっこいいと思うことができる。文化自体を継承するのが大切だし、その結果、地域のコミュニティーの形成に繋がると思うのです。

今、なぜしまくとぅばが話されなくなってきたのかはメディアも原因の一つであったかと思っています。もあります。テレビでは、標準語を使用しており、子供たちは標準語が当たり前となった。また、核家族化が進んだのも原因の一つではないかと。現在では、おじいちゃんおばあちゃんが、一緒に住んでいない家族が多くなった。

その状況で、子供たちが青年会とかを面白そうだな、楽しそうだな、かっこいいなとか思って、その地域の文化に触れる機会となる。きっかけですね。その中で、コミュニティ

ーが形成されていく。あの子はどこの子？ とか、今は、大人たちは、地域の子供たちをあまり分らない。昔はなかったじゃないですか。あの子はあっちの子だよねとか。奄美とかもそうですし、八丈でも子供たちを知っていると思うんですが、現在の沖縄では、コミュニティが失われつつあります。隣の家の子供たちだったら分かるんですけど、マンションだったら誰の子なのかも分らない。そういったコミュニティが、青年会みたいな所から形成されるのではとったりしています。

(岩下) 本当にコミュニティつながりで、私も何で自分がすごく一生懸命なのかなって思ったときに、楽しいことが一番いいんですけども、やっぱり自分を大事に生きてほしいと思っています。私は中学校のときに祖父母の生きざまをずっと調べて、こんなふうに、こんな大変な中私に命を受け継いでくれたんだな、この命むだに生きられないぞと、恥じる生き方もできないぞという思いになりました。私の同級生の中でも、自殺している人たちがやっぱりいるんですよ。いろいろなことが今からの子供たち、社会が厳しいと思うんですよ。そんな中で自分なりにたくましく生きていってほしいなという思い、そこを支えるのが本当にコミュニティ、自分のより所です。私は 1 人じゃないんだって思える、それが自分はやっぱりユンヌフトゥバでした。

島外でずっと 28 年勤務したときに、いろいろな目に遭いました。島差別にも遭ったんですけども、そんなときにも、ああ負けられないって。やっぱりそこがより所ですので、そこを大事に。本当にこれから生きる社会の在り方にも、関係するんじゃないかなと思いますね。

(渡辺) そのより所というのは、まさに私もその通りで。向こうに 16 年ぐらいいましたけど、親だけじゃなくおじさんおばさんがいて、地域の人っていて、やっぱりそれで島言葉もそこにはあったんですけど、自分が生きていく力になった島だった。たぶん皆さんそうだったと思うんですけど、それをコミュニティがないと、そう思えない子供たちが育ってしまうということで、やっぱり本当に、最初にも言ったんですけど、今大人たちが頑張ってる子供のためにいろいろ、教えたりそれぞれのところでそれぞれ活躍しているんですけど、島言葉というのはどこの、サッカーでもバレーでも太鼓でも踊りでも共通で、島に住んでいるというところで、やっぱり 1 つにつながれる、コミュニティをつくれるものなのかもしれないなって、ちょっと今思ってる。

宮古でしたっけ。面白がる気質があるというお話があって、ちょっと島の人には恥がましがりで、恥ずかしいといっちゃちょっと遠慮したり、いいよいいよ、やって、みたいなところがあるので、その気質を変えるのは難しいんですけども。やっぱり子供たちや、また大人もそうなんですが、そのかわることによって子供たちに元気をもらったり、子供たちに力を与えていったりというつながりを、つくっていく島言葉、方言を残すという取り組みができるといいかなと思います。あと、島言葉ばかり八丈にいると思っているんだ

けど、今回 8 地域のさまざまな言葉を聞いて、ここにいる人たちだけが聞いたのではもったいないから、ぜひ日本にこんな言葉があるよというのを、子供たちにも、今回来られなかった人たちにも紹介したいなという。日本の面白さの 1 つだなというふうに感じたので、ちょっと僻地の言葉ではなくって、面白い言葉があるということを伝えたいと思いました。

（関根） アイヌの場合は少数民族ということで、やっぱり外国の少数民族の方たちとの交流とかも、わりとやる機会があるんですよね。そういうので見ていたらやっぱり北欧の方とかニュージーランドの方とか、言語が消滅しかけていたのを復活して、しゃべっている人たちが実際にいるんですよね。その人たちを見ていたら、生き生きと生きています。誇りを持っている。アイヌの人たちもそういう状況になるように、僕は尽力したいと思っていますし、やっぱりアイヌ文化で刺繍をすとか踊りをすとか、そういうのはわりとみんなとつきやすいんですよね。でも、言語はやっぱりまったく知らない言語を 1 つマスターするってなったら、気後れしちゃうというかそういう部分があると思うんですけど、僕は文化の伝承の核心は言語だと思うんですよね。

そういう中で、言語を取り戻せばアイヌとしてのアイデンティティーを持って、誇りを持って生きられると。みんな、ニュージーランドならマオリであることを、楽しんでいる人たちがたくさんいると。そういう状況にアイヌの社会をしていきたいと思って、僕はそういうことを、アイヌ語を残していかなきゃいけない理由として、言ったりします。

（木部） 生き生きするというのはいいですね。標準語、共通語だけでなく、それ以外の言葉をしゃべることで自分が生き生きする。コミュニティも作れて、コミュニティも元気になるというのは、それはとってもいいですね。そういう意識にみんななればいいわけですね。これから少しずつ、そういう人たちを増やしていくということが必要なわけですかね。とってもいいお話を聞けたと思います。

もうあと一言ずつ、何かしゃべっていただきたいんですが。最後に、今回の全体、昨日の発表会と今日の発表会と、それから 1 時間くらいディスカッションをしましたけれども、そこから自分が何を感じたか、そして人に何を伝えたいか。そういうことを一言ずつ、最後にお話しただけだと思います。思いついた人から（笑）。あんまり順番というのもあるんですから。話しやすい方から。じゃあ、関根さん。

（関根） 僕が思うのは、やっぱりしゃべりましょうと。僕自身も自信ないですからね、アイヌ語をもっとできる人はたくさんいますから、その人の前でしゃべるのは気後れするところもありますけど、とにかくしゃべろうと。しゃべることによって、向こうもしゃべりやすくなるという状況が、あると思うんですよね。アイヌ語でしゃべること、島言葉でしゃべることはいいことだということを、自分が身を持って宣伝していけば、いいんじゃないかと思っています。

(岩下) 私は 2 つ思いました。やっぱり自分を大事に思うと、相手も大事にするなど。私はユンヌフトゥバが大事です。ほかの地域の皆さんのお話を聞いたら、やっぱり自分と重ねます。こんな思いで生きてこられたんだなと思って、昨日も歌を聞きながら涙が出ました。だから、やっぱりまず自分を大事にできる人は、絶対ほかの人を大事にするし、コミュニティが成立します。すぐ排除するところもあるんですけど、そこはやっぱり取り込めると思います。あと 1 つは、何といっても目の前の 1 年生がもう、ユンヌフトゥバをしゃべるとかかわいいです。もうそこかなと。大事に思えるんです。やっぱり話すことって大事です。

(平良) この 3 日間、色々な地域の言葉が飛び交ってましたね。理解できなかった会話がほとんどでした (笑)。ただ、実感として、地域の言葉の中に秘められた、温かさとか言葉では言い表せない思いとかが、伝わってきて、すごく感動しました。

でも、帰ってどうやるかという具体的なことは言えませんが、日頃から、自分たち子供たちにも、ごちそうさまとかありがとうございます、しまくとうばで使わせようと思います。身近なところからやっていきたいなと。自分たち親世代が、しまくとうばを使っていくことで、子供たちにも、波及していければと思っているところです。ありがとうございました。

(渡辺) 私も、皆さんが頑張るという気持ちになっているので、私も頑張りたいなって思って。あと、同級生とかに今日ここに出るよって言ったら、やっぱり頑張ってってみんな言ってくれたので、私がしゃべればきっとしゃべってくれると信じて、やっていきたいと思っています。

(木部) どうもありがとうございました。やっぱり、まずはしゃべることですね。しゃべっている私たちが楽しいなと思ってしゃべる、それで生き生きするというのが大事だなということが分かりました。今日は短い時間、1 時間ぐらいでしたけれども、ありがとうございました。この 4 人で、今の思うところをディスカッションしました。お聞きになった方もこれを何かのご参考にいただければ有難いです。また、皆さん方それぞれの思いで、これからまた言葉を大事にしていってください。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。パネラーの皆さん、どうも本当にありがとうございました。それから司会の木部先生、どうもありがとうございました。それでは、皆さん、大きな拍手をもう一度お願いします。(拍手)

私は 60 代なんですけど、やっぱり 40 代の人にはいろいろなアイデアがあって、こうした

らいいんじゃないか、ああしたらいいんじゃないかって、非常に参考になるお話でした。後ろで聞いていて、ああ、そうか、とか何回もうなずいたりしました。一応ここでパネルディスカッションは終わりになりますが、言葉には大切な温かさがあるんじゃないかなって、私は実感しました。3日間、遠くから八丈島にいらして、本当はもっと暖かいと思ったんでしょう？ でも、こんなふうに寒いんです。特に冬は西風が吹くと寒いんです。でも、今、会場の皆さん、このパネラーの話を聞いたりすると、心の中にちょっと温かさがともったんじゃないかなと私は思いました。今日は本当にどうもありがとうございました。

閉会挨拶

(大城) 皆様、あらためましてこんにちは。宮古島市文化協会の大城裕子と申します。茂手木さんに、閉会式でのまとめの感想を述べてくださいと言われました。茂手木さん、それは人選を誤っていますと(笑)。言ったんですけど、あまりお断りするのとも思いました。もともと宮古島の人の気質で、頼まれたことを断れないという遺伝子を持っていますので、今日この場に立っています。そして、ここに立ったときの素直な感想を述べさせていただきます。何の準備もしないで参りました。

12日からスタートした日本の危機言語・方言サミット in 八丈島、8地域の皆さんの発表、そして伊奈かっぺいさんの講演、そして先ほどのパネルディスカッションを聞き、そして、さらに前夜祭や交流会にも参加させていただいて、本当に心が満たされました。

各地域の言葉に宿る言霊が、今もこの会場に充満しているような気がします。本当に各地域の皆さんの、それぞれの言葉に対する熱い思いというのが、ひしひしと伝わってきました。茂手木さんは先ほど、思ったより寒かったでしょうって言いましたが、私は寒さなどを感じず、皆さんの熱い思いが伝わってきて、心がぽかぽかして、本当に心地よい気持ちで過ごさせていただいておりました。

与論島の中園さんがおっしゃっておられました。久しぶりに種子島の言葉を聞いて、心に火がついた。私も似たような心境であります。皆さんの地域の言葉を聞いて、そして、さらに、みゃーくふつ(宮古言葉)を大切にしたいという思いが深まりました。こちらで皆さんが発表された取り組み、本当に参考になりました。島に持ち帰って、島のみんなと今後の継承活動に生かしていきたいという思いを、強くしております。

話はちょっと変わりますが、宮古島の離島に伊良部島というところがあります。10月ごろになりますと、サシバやアカハラダカの渡りが見られます。昔からサシバを重要なタンパク源としていたという食の文化がありまして、大人たち、特に60代以上は、そのサシバを捕獲することに対して、何の罪の意識もないんですね。ただ、環境保護区として指定されて、愛鳥思想をこれから育てようということで、学校ではサシバの保護を訴えて、サシバは捕獲してはいけないということを教えています。でも大人たちは、お父さん、おじいちゃん、夜中にそっと捕獲の道具を持って、家を出ていこうとするんですね(笑)。それを子供が「お父さん、出ていけないで」って止めるんです。「いや、サシバはおいしいんだよ」と言ったら、「食べちゃいけないんだよ」って子供が止める。

そうすると、お父さんもおじいちゃんもなかなか行けないものです。そして、だんだんと、それが浸透して、今ではあまり密漁が行われなくなりました。そういう子供たちのきっかけをつくるという意味では、学校現場は本当に大きな役割を果たしてくれると思います。きっかけを学校につくっていただいて、家庭でそれを育てていく。家庭では方言を話せない両親もおりますので、そこは地域にカバーしていただく。そうやって、家庭と学校と地域でそれを支えるのが、行政の力だと思います。まさしく家庭、学校、地域、行政の四輪駆動でこれから、方言継承に力を注いでいかなければならない時期なのかなと思います。

す。この方言継承がしっかり力強く、未来に向かって走っていくためには、四輪駆動で走っていく必要があるなど、今ここで感じています。

自分の言葉を知るということは、自分を知ることにつながると思います。今のような混沌とした社会の中で、自分を知るということは、心豊かに生きるための大切なキーワードになると思います。心豊かに生きるために自分を知る、自分を知るために自分たちが使ってきた言葉を知る、これはとても重要なことだと思います。これからの 21 世紀を心豊かに生きていくためにも、みんなで自分たちの言葉をそれぞれ大切にしていきましょう。

私は、方言継承に以前から携わっていたわけではありません。3 年前に文化協会の会長を務めさせていただくことになって、文化協会がこれまでずっと開催してきた、「鳴りとうゆん みゃ〜く方言大会」を運営するに当たって、自分たちの言葉というものに注目するようになりました。

そこから少しずつ、今気持ちが高まってきているわけなんですけど、各地域の規模によっても、取り組みの方法は異なってくると思います。それぞれの地域のやり方、沖縄本島などは本当に、どこからどういうふうに進めていけばいいのかというの、分りにくい、統率を取りにくい規模に沖縄はなるわけですが、その辺のところも地域によって違うとは思いますが、それぞれのやり方でまたしっかり継承に努めていければ、いいかなと思います。

ニーチェの言葉で沖縄学の祖、伊波普猷もよく使っていたといわれる言葉、「汝の足元を掘れ、そこに泉あり」。宮古に帰ったらその泉を掘り起こす活動を、しっかり続けていきたいと思っています。今回このようなサミットを開催してくださいました、八丈町の皆さん、そして、それを支えてくださいました文化庁と国立国語研究所の皆さん、そして関係機関の皆さん、そして各地域から参加して下さった皆さんに、心よりお礼を申し上げます。たんでいが一たんでい（ありがとうございました）。（拍手）

（司会） どうもありがとうございました。それではもう一方、狩俣繁久先生です。よろしくをお願いします。

（狩俣） 短く、私もしゃべり始めると長くなりますので。後ろでパネルディスカッションを聞きながら、昨日、おととい、そして今日の 3 日間の感想を書きました。読み上げて終わりたいと思います。

今回の 8 つの地域の報告やパフォーマンスに触れて、多様な言語や文化があることを再確認しました。ああ、すごいなということですね。踊りも歌も、そのイントネーションも言葉の分からなさも、本当に再認識しました。同時に日本全体、今回は 8 つの地域でしたが、日本全体の文化的多様性とか言語的多様性は、たぶん想像することもできないくらい豊かなんだろうなということも、あらためて感じました。それから、消滅危機言語とか消滅危機方言といいますが、その危機度は地域によってさまざまなんだなというの分かりました。

人口が 5 万人とか、あるいはもしかすると 1,000 人とかいうような、そういうようなことも地域でさまざまなんだなということも、今回の 8 つの地域の報告を聞いて、理解する

ことができました。

危機的な状況を好転させるには、有効な活動が必要だろうと思います。例えば、病人に当てはめるとします。健康でない人ですね、私もかなりメタボだと言われるんですが、その処方箋が必要です。その処方箋を作る前に、まず的確な診断書が必要です。体重何キロとか、血圧どれだけとか、的確な処方箋を作るためにはその前に状況判断、診断書が必要です。人口が何人ぐらいで何歳ぐらいの人が話せて、学校ではどうなっていて、辞典があるかとかないかとか、どのようなものが利用できるかといったことを考える、そういうことが必要なだろうと思います。それが的確にできているところとまだ十分ではないところとで、その診断書に応じた処方箋がちゃんとできているところとまだ十分でないところがあるのかなと思います。与論はよくできているとか、ここの地域はちょっとまだかなとか、いろいろあると思います。

人間ドックに行ったときに、去年のあるいはおととしの体重とかが出てくるんですけれども、そういうのと比較して現在の健康の状況を考える。あるいは50年前の、方言の状況というのを考える。これから5年後10年後、例えば、私だと来年、再来年、定年退職になったときに、どうなっているんだろうということを考えるのと同じように、50年後100年後の状況というのを考える。そういうことを想像してみて、現状維持をするのか、それとももっとより健康状態をよくしていったって、100年後にもこの言葉が使われるようにするためには、どうしたらいいんだろうかなということを考える。今回の8つの各地域の取り組みを参考にして、その処方箋を考えるというのがこの2日間の催しだったのかなと思います。

アイヌの取り組みは面白そうだなとか、こういうふうにするといいかなとか、与論小学校のこういうのはためになるかなと、パフォーマンスに目を奪われないで、そういうような活動にも、もう少し目を向けるといいかなと感じました。

今日のパネルディスカッションもそうでしたり、伊奈かつぺいさんの記念講演にもありましたけれども、地域を元気にするには、地域の言葉や無形の伝統文化を元気にするには、楽しく、あるいは喜びを感じる。喜びを感じながら楽しくやることが、継続する力を支えるんだろうなと感じました。若い人、子供たちの参加を促すにも、楽しくそして喜びが感じられる処方箋、行動指針が必要なんだろうなと思いました。

8つの地域の状況がある程度理解することはできたんですけども、翻って日本全国はどうなんだと。この8つの地域は分かったけど、日本中はどうなっているんだろうというようなことが、少し話を聞きながら気になりました。

最後に、このような会は絶対に次回も必要だよねということ。こういうような取り組みを来年、再来年……と続けていくことによって、このネットワークを広げていき、その中で他地域の活動を学ぶことによって、それぞれの地域がまたよりよい活動をしていくことにつながるんだろうなということを感じました。以上です。(拍手)

(司会) どうもありがとうございました。本当に最後になりました。最後は今回このサミットの実行委員長であります、佐藤誠教育長より最後のあいさつがあります。では、よろしくをお願いします。

(佐藤) 「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」を閉会するに当たり、本サミットにご参加いただきました皆様に、お礼と感謝の言葉を申し上げます。12日から3日間行いました。少々お疲れのことかと思いますが、いよいよ閉会でございます。有意義で楽しい集まりは、時間があっという間に過ぎてしまいます。この3日間のサミットは、とても内容の濃いものとなったと思いますが、いかがでしたでしょうか。(拍手) ありがとうございます。今回八丈町でこのサミットを開催した目的は、危機言語とされた言語の保存継承活動に取り組んでいる地域の皆様と、情報交換、また連携を図ることにありました。私たちの継承活動は互いに、これまで点の状態と推測できましたので、この点と点の活動を結び合い、各地域と互いに連携を深めながら、消滅危機言語、方言の衰退に歯止めを掛けたいと考えたからです。

言語は文化の代弁者です。地域の言葉がなくなるということは、昔から地域に脈々と伝えられてきた分化が途絶え、地域固有の文化がなくなるといことです。2009年にユネスコが世界の消滅危機言語を発表いたしました。八丈町では消滅危機言語に八情報源が報告されたことに、非常にショックを受けました。その後は消滅の危機感を募らせて、継承活動を真剣に開始いたしました。日本の消滅危機言語では八丈島以外にも7つの言語、方言が報告されています。本日お集まりの皆様の地域でも、この発表が保存継承活動を後押ししたことと思います。八丈町の今回のサミットを契機として、各地域における言語方言の保存継承活動が、今まで以上に進められたら幸いでございます。

結びになりますが、本サミットの開催に絶大なるご理解、またご支援をいただきました文化庁、また国語教育研究所を始めとした関係者の皆様、そして、八丈島にご参集いただきました各地域の皆様、ご来賓の皆様に心より感謝申し上げます。また、本サミットのご講演をお引き受けくださいました伊奈かっぺい様には、地域の言語の継承活動に取り組んでいる私たちに、言葉は生活のツールですと、言葉というものに対する原点を、温かくご指摘していただきました。楽しいお話にかっぺいさんのお人柄があふれ、青森、弘前がとても身近に感じられました。きっとこの先、弘前の訪問者は増えることでしょう。皆様のこれからますますのご活躍と再会をご祈念申し上げまして、閉会の言葉といたします。ありがとうございました。(拍手)

(司会) 以上をもちまして、「日本の危機言語・方言サミット in 八丈島」を閉会といたします。本当にどうもありがとうございました。(拍手)

連絡をいたします。ユヌフトゥバかるた(与論言葉のかるた)が各地域に1部ずつ献呈されるそうですので、後でお取りください。それから、感想用紙がありますので、今日感じたこと、思ったことがありましたら、そこに書いてアンケート箱に出してください。

最後になりますが、八丈町の60周年ということもあり、地域のボランティアの人にたくさん参加していただきました。本当にありがとうございました。重ねてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

執筆者・講演者紹介

第1部 (50音順)

研究代表

木部 暢子 (大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所・教授)

研究分担者

石原 昌英 (琉球大学法文学部・国際沖縄研究所・教授)

荻野 千砂子 (大分大学教育福祉学部・准教授)

乙武 香里 (大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所・非常勤研究員)

かりまた しげひさ (琉球大学法文学部・国際沖縄研究所・教授)

仲原 穰 (琉球大学法文学部・非常勤講師)

中本 謙 (琉球大学教育学部・准教授)

研究協力者

當山 奈那 (琉球大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程)

茂手木 清 (八丈町教育委員会)

第2部

伊奈かつぺい

青森県弘前市生まれの異色マルチタレント (ラジオ・パーソナリティー、ラジオ・CMディレクター、詩人、イラストレーター、役者、シンガーソングライター、エッセイスト他)。

文化庁委託事業報告書

危機的な状況にある言語。方言の保存。継承に係る取組等の実態に関する
調査研究 (八丈方言。国頭方言。沖縄方言。八重山方言)

2015(平成 27)年 3 月 30 日発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

Tel.042-540-4300 (代)

